

仮面ライダーディケイド&リリカルなのは 九つの世界を歩む破壊  
神 劇場版編

風人II

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ご無沙汰しております皆様、風人IIです

こちらは九月末に完全閉鎖となる某サイト様にて他作家様の皆様とコラボさせて頂きました劇場版小説集となります。

もし仮にまたコラボの機会などございましたら、こちらの方で書かせて頂けたらと思います

## 目次

闘	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	1
闘①	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	14
闘②	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	20
闘③	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	36
闘④	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	53
闘⑤	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	62
闘⑥	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	74
闘⑦	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	82
闘⑧	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	95
闘⑨	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	114
闘⑩	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	121
闘⑪	劇場版小説／仮面ライダーテイケイド&クロノス	過去と未来の激	132

劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス 過去と未来の激

闘⑫（完）

146

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート

160

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート①

179

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート②

200

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート③

219

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート④

239

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート⑤

257

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート⑥

275

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート⑦

298

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile デイケイドパート⑧

311

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile①

324

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile②

339

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイケイド&ツヴァイ

NOVEL大戦Evoile③	—————	362
劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー	—————	
NOVEL大戦Evoile④	—————	372
劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー	—————	
NOVEL大戦Evoile⑤	—————	394
劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー	—————	
NOVEL大戦Evoile⑥	—————	416
劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー	—————	
NOVEL大戦Evoile⑦	—————	433
劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー	—————	
NOVEL大戦Evoile⑧	—————	456
劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー	—————	
NOVEL大戦Evoile⑨	—————	472
劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー	—————	
NOVEL大戦Evoile⑩(完)	—————	496

## 劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス 過去と未来の激闘

とある平行世界の謎の建造内・玉座の間……

零達一行が順調にライダーの世界を巡って滅びの現象を阻止し続けてるその頃。とある平行世界の謎の建造物内の玉座の間では、一人の男と異形が向き合い対談する姿があった。

終夜「——成る程……それが貴様の意見か」

零の持つ破壊の因子と彼の娘であるヴィヴィオを狙い暗躍する組織のNo.1、玉座に座る男……闇無 終夜は目の前に立つ深紅の異形の意見を聞き、何かを納得し目を細めた。

終夜「確かに、我々にとってあの神共は邪魔な存在……しかし、元大シヨツカーの残党である貴様が我々に力を貸すとは……何を企んでいる？」

『決まっている。私はかつて、我らの組織の大首領であったオリジナルディケイド……門矢 士の手により潰された。あの忌々しい破壊者の手により、私自身も殺された……だが、我らのよく知る鳴滝とよく似た存在によって再び蘇る事が出来た！私の目的は一つ……全てのライダーを抹殺することだ！』

訝しげな終夜からの問いに、深紅の怪人……嘗て正史世界のディケイドによって倒されたアポロガイストは内なる憎悪の炎を燃やし、握り拳を掲げ力強く叫んだ。

終夜「ほう……で、我らに何のメリットがある?」

『鳴滝の情報では、黒月零……外史世界のデイケイドは断罪の神の過去の世界、クロノスの世界に行くように仕向けたそうだ』

終夜「?零の世界の行き先を指定できるのか?」

『キバーラとか言う蝙蝠を上手く使ったそうだ』

終夜「……ふむ」

自分達組織の目的は、零の因子とその娘のヴィヴィオだ。利害は確かに、自分達へのメリットはある。

終夜「……良いだろう……裕司?」

アポロガイストと手を組む事を承諾し、終夜が暗闇に向けて名を呼ぶと、暗闇の向こうから裕司が姿を現し玉座の隣に立った。

裕司「如何しましたか?」

終夜「真也に伝えろ……アポロガイストと共に「人間時代の天満幸助を抹殺し、時と断罪の因子を手に入れろ」とな……今までの失態をココで取り戻せとも伝えておけ」

裕司「御意」

終夜からの指示に一礼してそう応えると、祐司はゆっくりと闇に溶け込むように消え玉座の間から出て行き、終夜はそれを見届けた後にアポロガイストの背後に目を向けて軽く嘆息した。

終夜「……ところで、一つ聞こう、アポロガイストよ」

『何だ?』

終夜「さつきから貴様の後ろで、我らの食糧を淡々と食い続けている男は誰だ? いい加減食うのを止めさせろ……食糧は無限ではないんだぞ」

『……それはすまないな。彼は【ガオウ】、私の同士でもあり、最強のライダーだ』

何処か呆れるような視線を向ける終夜に一言謝りアポロガイストが背後へと振り返ると、其処にはむしやむしやとありつただけの食糧を喰らう男……かつて、神の電車と路線を操り、時間を消そうとし電王達によって倒され時間に消えたハズのガオウの姿があった。

ガオウ「むしやむしや……美味しいな、この飯」

……話を全く聞いていないが。



―パンデモニウム・訓練室―

そしてその一方、断罪の神を始めとした神々が住まうパンデモニウムの訓練室では、二人の青年が模擬戦を繰り広げる光景があった。

幸助「遅い!!もつと周りを見る大輝!!相手の動きを何十通りと予測し、誘導しろ!!」



大輝「グッ！はい!!」

断罪の神としてあらゆる世界から恐れられている天満幸助と、その弟子海道大輝。今回は珍しく幸助に弄られず真面目に修行を受けていた大輝だが、次第に幸助に押され始め、最終的には首に手刀を当てられ今回の模擬戦は終了したのだった。

大輝「ふう……背中は遠いなあ」

幸助「当たり前だ。年季が違う」

休憩に入り、汗だく塗れの大輝は首にタオルを掛けてスポーツドリンクを飲み、一息ついていて……。幸助は全く疲れていないので汗一つ出していなかったが。

4

そして、そんな大輝の隣で先程模擬戦で使用した愛剣を磨いていた幸助は綺麗に磨かれた刀身を眺めると、剣を鞘に納めて次の修行を何にするか考えようとした。その時……

——シユウウウウウウウウウウウツ……—

幸助「ん……？なんだ？」

大輝「……えっ？幸助さん!？」

幸助が地面から腰を上げ様としたその時、突然幸助の身体から無数の粒子が立ち上り始めたのだ。それを目にした大輝も思わず疲れを忘れて立ち上がり、幸助の全身から立ち上る粒子を見て目を見開い

た。

大輝「ちょ!?何ですかそれ!」

幸助「……ああ、大体理解した。誰か知らんが、俺の過去を変えたようだな」

大輝「って、何であわててないんですか!」

そう、一大事の筈なのに、全く慌ててなく、寧ろ落ち着いてすらいる幸助にツツコミを入れてしまう大輝。

幸助「んにや、いずれこうなるとは分かっていたしな……まさか今頃とは」

大輝「いや、分かるように説明して下さいよ……」

余りに冷静な調子で返され、大輝も落ち着きを取り戻して状況の説明を求めるが……

幸助「すまん、話している時間はないようだ」

そう言う様に幸助の粒子化のスピードが徐々に上がり始め、その姿もだんだんと透明になって見えなくなってきた。

大輝「幸助さん?!」

幸助「大輝!零の写真館に向かえ!!そこから過去の——クロノスの世界に行け!!敵は恐らく、力がまだ未熟だった時代の俺を狙う筈だ!!」

その言葉を最後に、幸助の身体は無数の粒子となって宙に拡散し消えてしまった。

否、幸助だけではなかった。

大輝は確認しなかったが、シズクやなのは、レイにナナに雷に刹那も既に消滅していたのだ。

そして、幸助に助けられた並行世界の人物にも影響は出始めていた。

### 幸助の消滅

それは、彼と関わった世界の消滅に繋がる出来事でもあったのだ。

大輝「不味いな……幸助さんが消えれば、過去にあの人に助けられた人達は……いや、それは俺や零にも影響することだ……時間が無いっ！」

先程まで幸助が立っていた場所を見つめ、これまでにない危機を感じた大輝は、急いでその場から駆け出し光写真館に向かっていった。



### —光写真館—

そして、パンデモニウムでそんな大事件が起きているとも露知らず、Wの世界を後にした零達一行は次に現れた背景ロールの絵を見て揃って首を傾げていた。

はやて「今度の世界……何やらコレ？宇宙の真ん中に、消え掛かっている時計？」

零「……クロノスの世界か」

なのは「え？クロノスって、幸助さん達の世界って事？」

背景ロールの絵を見て次はどんなライダーの世界かとなのは達が考えていた中、鋭い目付きでクロノス……幸助達の世界であることを呟いた零に一同の視線が集まる。だが……

スバル「あれ？でも待つて、何でまたクロノスなの？私達は前にクロノスの世界に行って修行したりしたし、確か幸助さんが一回死んで断罪の神（メモリー）になったから、もうクロノスじゃなくなったはずでしょ？」

ティアナ「そうよね……あの時はもうホント、なのはさんたちの訓練の方がマシだって思えるくらいヒドイ修行をさせられたし、もう関わる事もないって思ってたのに……」

ノーヴェ「ま、まさかつ、またあんな地獄みてえな修行を受けさせられたりとかするんじゃないやねえだろうなあ……」

前回訪れたクロノスの世界で幸助達に受けさせられた地獄のような特訓を思い出したのか、スバルにティアナ、ヴィータやナンバーズは顔を青ざめあからさまにテンションダウンして落ち込んでいき、その特訓を受けていないメンバーは頭上に疑問符を浮かべて不思議そうに彼女達を見ていくが、それを否定するように零が首を振って口を振った。

零「いや、どうやら今回は前回とは少し違うようだ。ほら、見てみろ」

なのは「え…?」

そう告げて零が指差したのは、自分が座るテーブルの上に置かれた一枚の新聞紙。それを見た一同は怪訝な顔を浮かべながらテーブルの周りへと集まると、フェイトが新聞紙を手にとって記事を読み上げていく。

フェイト「えつと……【時渡り町の都内某所にて怪人再び、仮面の戦士達は正義の味方か?】これって……」

なのは「この写真に写ってるのって、クロノスだよね? ちょっとピンぼけしててわかりにくいけど」

零「それだけじゃない、その新聞に書いてあるだろ? 此処は時渡り町……前はミッドチルダに跳ばされたのに今回は全く別の町で、しかも町の人間にクロノス達の事がまだ知れ渡っていない。つまり――」

ヴィータ「……まさか、幸助達の過去の世界だったのか?! 此処が?!」

零が言わんとしている事が伝わったのか、背景ロールの方に振り返って驚愕の声を上げるヴィータ。それを聞いたなのは達もこの世界がああのだらう過去の世界と知って驚愕していくが、零は何処か複雑な表情で頭を掻いていた。

零「まあ、雷達の件もあるから有り得ない話ではないだろうが、アイツ等の人間時代の世界ってのはな……未来であんなチートになる

経緯を見る事になるんじゃないかと恐ろしくも思うが……」

姫「そうか？私は筆ろ興味があるぞ？あの断罪の神達の人間時代というのも滅多に見られないだろうしな。なあ、ウオミー？」

「そうですね。彼等がどんな人間時代を過ごしていたかは、彼の七柱神ぐらいしか知り得ないですし。私も非常に興味が沸きます」

余り乗り気ではない様子の零とは対称に同じ神として有名な幸助達の人間時代が気になるのか、姫と彼女の友神である水ノ神……市杵宍姫ノ命（いつきししひめのみこと・戸籍上は宍戸 魚見）は好奇に満ちた目を浮かべ、そんな彼女を横目に映紀が零へと近付き口を開いた。

映紀「ま、この世界がなんであれ取りあえず外に出てみるしかねえだろ。此処でウダウダ言っついても仕方ねえんだし」

零「ああ、分かってる。何だか嫌な予感もしなくもないが、とにかく外に出てみるか……」

映紀にも促され、とにかく外に出て此処がどんな世界か自分の目で確かめようと、零は椅子から立ち上がりなのは達と共に外に出た。



そして……

零「——んで、最早恒例の衣更えな訳だが……」

なのは「にやはは……また学生服、みたいだね……」

写真館の外に出れば、例に洩れず零となのはの服装が変化していた。今回は以前にもあつた何処かの学校の学生服のようだが、やはり実年齢からして少々無理があるように見える。特に、なのはなんかは出てる所が出っ張っており、それに気付いた零はジト目でなのはの胸の辺りを見つめながら口を開いた。

零「なのは、お前……また増えたんじゃないのかっ?」

なのは「え?…う、嘘っ!そんな筈ないよっ!だって最近はやちゃんと調整したりして気をつけたりしてるんだからっ?!」

零「あ?…ああ、いやそつちじゃなくて、その無駄にデカイち―ドグオオツ!―ゴハアツ?!」

アリサ「余計なことを口にせんでいいっ!」

どうやら体重のことを指摘されたと思ひ込んで激しく動揺するなのはに訂正して何かを言おうとする零だが、それを阻むようにアリサの肘が横っ腹に打ち込まれその場に蹲まってしまい、他の一同はそんな三人を無視して外の町並みを興味深そうに見回していく。

セツテ「此処……ほんとにミッドチルダではないようですね」

セイン「時渡り町、だっけ?此処が幸助さん達が人間時代に住んだ町なのかね?」

デイド「さあ……ですが、この時代の幸助さん達がまだ人間だとも限らない気がしますけど。もう人間を辞めているか、或いは神とし

て目覚めてる可能性もありますし」

オットー「後者はともかく、前者は普通にありそうで怖いけどね……」

未来であんな理不尽窮まりない存在になってるぐらいなのだから、この頃から既に人間を辞めてたとしても何ら不思議でもないような気がする。そんな事を考えながらセツテ達が苦笑いを浮かべてると、零がアリサに殴られた横っ腹を抑えながらユラリと立ち上がった。

零「うぐう……まあ、何れにしろこの世界の幸助達に会わないと何も始まらないしな……取りあえず、この制服の学校に行ってみるしかないだろうっ」

なのは「うん、えつと……あつ、あつたあつた」

零の提案に頷きながら自分の制服のポケットを漁って調べると、胸ポケットから生徒手帳らしき物を見付け、なのはは中身を開き手帳の中を一同にも見えるように見せていく。其処には……

優矢「……TIME学園？」

すずか「この学園に通う事が、この世界での零君となのはちゃんの役目ってこと？」

なのは「うん、多分。でも前回が前回だったし、どうせ今回もそんな大した事件なんて起きないと思うよ？」

零「甘いな。前回があんなだったからこそ余計に油断出来ないんだろ？もしかしたら、実はその学園自体が既に幸助達に支配されていて、またあんな地獄のような特訓を無理矢理受けさせられたりとか



……」

なのは「そ、そうとは限らないでしょっ。だってほら、カードだってあるんだし、もう修行させられる必要は……えっ？」

最悪のビジョンを想像する零に苦笑いを向けながら、彼を安心させようと事前にKウオッチで出しておいた自分のライドブツカーからジエネシツクと冥王の二枚を取り出すが、なのはは二枚のカードを目にした途端何故か突然固まってしまう。

零「……？なのは？」

なのは「……え……嘘っ、何で……？」

突然様子が変わったなのはが気になり問い返してみるが、なのはは信じられないものを見るかのように二枚のカードを見比べ何も答えがない。そんななのはの様子から何かあったのかと余計に気になり、一同はなのはの下に集まって彼女が持つカードを覗き込んでいく。其処には……

優矢「——っ！え、なんだこれ？」

アズサ「カードの能力が、消えてる……？」

そう、魔界城の世界や前回クロノスの世界を巡った際に手に入れたジエネシツクと冥王のカードの絵柄がシルエツトだけになり、二枚のカードに宿っていた能力が何故かいつの間にか消滅してしまっていたのである。能力が消えてシルエツトのみとなった二枚のカードを見てなのは達も動揺を隠せない中、その様子を見ていた零も険しげに眉を寄せながら懐からライドブツカーを取り出してクロノスのカードを確認すると、クロノスのカードも同じように絵柄が消えシルエツ

トだけとなっていた。

零「クロノスのカードも、力が消えてる……?」

なのは「ど、どうしてっ?だって、今まではちゃんと使えてた筈なのに……」

零「……単純に此処が過去の世界だからとかじゃないか?ま、何にせよこの世界での役目を果たせばカードだって力を取り戻すだろう。多分」

カードが力を失った原因を適当にそう考えながらクロノスのカードを仕舞うと、零は地面に置かれた学校の鞆を掴んで背中に背負いながらなのはを置いてとっと歩き出した。

零「とにかく、今はそのTIME学園とやらに行ってみるしかないだろ。急ぐぞ」

なのは「え、ちよ、ちよっと待ってっ?!」

せつせと歩き出す零を見て地面に置かれた鞆を掴み、慌てて零の後を追いつけるなのは。そんな二人の後ろ姿を見送りながら優矢達も苦笑いを浮かべてしまうが、この時誰も気が付いてなかった。

彼等の知らないところで、世界の命運をかけた死闘が始まろうとしていると言うことに……

過去と未来を掛けた決戦の幕が開き始めた……

# 劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス 過去と未来の激闘①

—TIME学園—

「ったく……何とか終わったな」

「うん……本当にね」

「にやはは……本当にゴメン」

9月1日の朝。夏休み明けの生徒達が久々の学園に登校する中、生徒達に混じって校舎内の廊下を眠たげに欠伸びながら歩く三人の男女の姿があった。

彼等の名は、天満 幸助、中島 スバル、不破 なのは……。

零達も良く知る断罪の神、破壊の神、究極と狂気の神の人間時代の彼等である。

昨日はなのは（不破）が溜め込んでいた夏休みの宿題を徹夜で手伝った為にかなり寝不足になっていたが、何とか宿題を終わらせられた三人は欠伸びを何度か繰り返しながら自分達の教室に入り、三人がそれぞれ別の席に座ると、ちょうど良く授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「ほら、席に座れー」

チャイムが鳴ると共に幸助達の担任の教師が教室へと入って教壇

に立っていき、教室で騒いでいた生徒達もそれぞれの席に着いていく。そして席に着いた生徒達を見回すと、担任の教師は軽く咳ばらいをし話を切り出した。

「えー、おはよう諸君。早速で悪いんだが……うちのクラスに転校生だ。黒月！高町！入って来い」

教師が教室の扉に向かって呼ぶと、ガラツと音を立てながら扉が開かれ、二人の男女が教室に入ってきた。そして、クラス全員が教室に入ってきた二人の男女……というか、片方の女を見て驚愕した。何故なら……

幸助「何イ!？」

スバル（中島）「嘘オ!？」

なのは（不破）「へ?……私?」

そう、教室に現れた転校生の一人が、なのは（不破）と外見が瓜二つだったからだ。そして生徒達の間でざわめきが広がる中、教壇の上に立った二人の転校生……零となのはは自己紹介を始めた。

零「黒月零だ。よろしく」

なのは「高町なのはです。よろしく♪」

零は若干無愛想に必要な最低限の挨拶を、それとは対称になのはは人当たりの良い笑顔を浮かべながら生徒達に向けて自己紹介するが、生徒達からの反応は……

「なん……だど!？」

「鬼神が……冥王様が二人だと!？」

「……………この世の終わりだああああああ!!」

……生徒達から返ってきたのは、幸助と並んで学園で悪名高い不破なのはがもう一人現れたと絶望し、頭を抱えながら恐怖で泣き叫び絶望する光景だった。

零「……大体分かった」

なのは「うん……これは酷いね……」

そんな光景を目の当たりにした当の本人達はなんとも言えぬ顔を浮かべ、此処に来るまでに見たなのには対する生徒達の反応や噂などを思い出し、思わず苦笑いを浮かべてしまうのだった。



——市街地——

零となのはがTIME学園で授業を受けているその一方、二人と別れた優矢達もこの世界の情報収集の為に別行動を取り、チームを別けて街中を散策していた。

優矢「——タイムオーガ、か……それがこの世界での怪人の名前なんだよな？」

アズサ「うん……私の中にある記録だと、断罪の神が時の神だった

時代に各世界のライダー達を呼び寄せ、タイムオーガを生み出していた元凶を倒した事で全部消滅したらしいの……その時に、零となのも戦いに参加してたんだって」

姫「時喰らいの鬼なあ……私やウオミーが神格に至った時には既に封印された後だったし、今度は私が封印されている間にいつの間にか消えてしまっていたらしいから一度も見ることが出来なかったが、実際どんな感じなんだ？その時喰らいの鬼とは」

アズサ「ん……実際の姿は他の怪人みたいに色々あるけど、一番多いのは、ゴキカブリを素体にしたタイムオーガみたい……」

姫「……ああ、つまり雷の世界のローチと同じという訳か……」

優矢「？……なあ、ゴキカブリってなに？」

魚見「今で言う、ゴキブリの昔の呼び名ですよ。昔は『茶碗をかじる』ことから、明治時代までゴキカブリっていう名で呼ばれてたんですが、文献の誤りが原因で今の『ゴキブリ』という名前で呼ばれるようになったそうです」

優矢「へえ、そうなのかあ」

シロ『ニヤ〜』

映紀「……お前らなあ、人が食ってる時にゴキブリの話なんか持ち出すんじゃないよ！折角の野菜がまずくなんだろ！」

優矢「いや……それ以前に野菜を食いながら歩きなさんなよ……」

映紀「馬鹿、栄次郎の爺さんが丹精込めて作って今朝採った野菜だ

ぞ?!新鮮な内に食わなきやもったいねえだろ!」

姫「だからと言って、歩きながら食べるのはさすがに行儀が悪すぎるぞ?子供が見て真似したらどうする気なのだ」

町を散策しながらワイワイ騒ぐ一団……フェイト達とは別行動で情報収集を行う優矢、映紀、アズサ、シロ、姫、魚見の五人と一匹。

中身はともかく外見はイケメンと美少女の集団という余りにも目立つ風貌をしている為に、すれ違う人達が好奇の目を向けて振り返るのだが、優矢達はそれに気付かずタイムオーガの話やトマトなどの野菜を食べながら歩く映紀を注意したりしながら先を進んでいた。そんな時だった……

—ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ—

優矢「……っ?!えっ?!」

アズサ「!これは……!」

町を歩いてた中、突然優矢、映紀、アズサ、姫、魚見の四人の周りに歪みが生じたのであった。それを見た優矢達はいきなり発生した歪みに驚いて辺りを見回し、なにが起きているのか分からず戸惑ってしまう。

魚見「これは、まさか滅びの現象……?!」

姫「まずい……!皆!引き返すんだ!急げ!」

—ドオンツ!ドオンツ!—

映紀「クソツ……ダメだ！びくともしねえぞ！」

急いでこの場を離れようと映紀が歪みに全力で体当たりして脱出を試みるがビクともせず、その間にも歪みの壁は徐々に濃くなってい  
き、そして……何事もなかったかのように優矢達ごと何処かへと消え  
てしまったのであった。

鳴滝「——申し訳ないが、この世界では君達の存在は少々邪魔にな  
る。時が来るまで大人しくしていたまえ。この世界のクロノスが、  
デイケイドを倒すまで……」

歪みと共に優矢達が消えた場所を見つめながら、路地裏からゆつく  
りと姿を露わにした男……鳴滝は不敵な笑みを浮かべてそう呟き、踵  
を翻して何処かへと歩き出していくのだった。



劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス  
過去と未来の激闘②

—TIME学園・保健室—

零「——ほら、終わった…ぞっ！」

—ペチイツ！—

なのは「イタっ?!うう…も、もうちょっと丁寧に扱ってよっ……」

零「知らん。全く、なんで何もない教壇の前でいきなりスッコロンだりするか、お前は……」

TIME学園の保健室。午前中の授業がまだ続いてる中、其処では零が授業中にドジをして怪我をしたなのはの赤くなつた額にシップを貼って軽く平手で叩き、痛みで涙目になりながらジト目で睨むなのはの視線を受け流し救急箱を片付ける姿があつた。

なのは「だ、だってほら、高校の授業ってどんな感じなのかなあつて思つてたら、以外と結構知ってる問題ばかりだったから……」

零「……で、調子に乗つて自分から当てに行きまくつてたら、何もないところでいきなり転んだと?」

なのは「うっ……はい……」

呆れるような視線を向けて来る零から逃げるように、シップを貼つた額を押さえながら気まずげに顔を逸らすなのは。そんななのはの

反応に溜め息を吐くと、零は救急箱を元のあった場所に戻していく。

零「まあ、お前のおつちよこちよいは今に始まった話じゃないしな……それより今は、幸助達の事だろ」

なのは「あ、うん。授業中にも気になって何度か顔を見たけど、見た感じは……うん、昔からあんな感じだったんだなーって思ったねっ」

零「今に比べたら、幾分かマシなように見えるが……ただならぬ気配が滲み出ている辺り、やっぱり普通の高校生じゃなかったみたいだな」

なのは「冥王と同じ顔してるってだけで、生徒に話しかけただけで怯えられるし……アレはアレでショックだったなあ……」

生徒達の反応がそんな感じなのだから、多分学校でもそれだけの事を色々とやらかしたりしてるのだろう。授業の合間に幸助達の顔を何度か盗み見たりしたが、あの三人から猛者のような恐ろしい気配が漂っていたのは一目瞭然だったと、零はやれやれといった感じに頭を振りながらなのはの下に戻っていく。

零「まあ何にせよ、この世界のライダーが誰なのかはハッキリしてるんだ。授業が終わったら、早速アイツ等に会ってみるか」

なのは「だね。えつと……確か今日は始業式で授業も午前中しかないから、次の授業で終わりなんだっけ？」

零「そのハズだな、今日が始業式で助かったぞ。またファイズの世界の時みたいに長々と授業を受けさせられるんじゃないかと面倒に思っただし」

なのは「そう？私は結構楽しみにしてたんだけどなあ……」

高校に行けるだなんて思いもしなかったしと、なのはとそんな何気  
にない会話を交わしながら保健室を後にして教室に戻ろうとする零。  
そんな時……

「――幸助……」

零（……？あれは……）

教室に戻ろうと長い廊下を歩いていた中、零の視界の端に人影……  
窓の外の校庭の真ん中に佇む一人の少女の姿が目映ったのである。  
黒い髪に黒い瞳……それだけなら何でもないただの日本人の女性と  
しか思わなかっただろうが、そうではない。その女性の顔は何故か、  
零が良く知る幸助の顔と瓜二つだったのだ。

零（幸、助……？いや……幸助と同じ顔をした女……？）

なのは「……？零君？どうしたのー！」

零「っ！は？あ、いや……」

目を剥いて幸助と同じ全く顔をした女性を呆然と見ていた中、廊下  
の向こうからなのはと呼ばれ正気に戻り、もう一度校庭の方に振り返  
ると、其処には最初から何もなかったように女性の姿が消え去って  
いた。

零（いない？……俺の気のせいだったのか……？）

念のために消えた女性の姿を探して校庭を見回すが、やはり女性の姿は何処にも見当たらない。やはり自分の気のせいだったのか？と若干腑に落ちないように首を傾げると、なのはの下に向かって再び歩みを進めていくのだった。



―時渡り町・某喫茶店―

幸助「――にしても驚いたな……なのはと瓜二つとは」

スバル（中島）「うんうん！名字は違うけど、名前も同じだったね」

なのは（不破）「あそこまで似てると逆に気持ち悪いの……」

始業式の為、午前中の授業で下校した三人。下校途中に寄った喫茶店で幸助達が話題にしていたのは、今回の転校生……零となのはのとだった。

幸助「しかし……性格は間逆だな」

スバル（中島）「確かに……後、何も無い所で転んでる所とか」

なのは（不破）「私は運動神経【だけ】は悪くないの……」

そうやって幸助達の脳裏に過ぎるのは、黒板の問題に答えようとし

て教室の前でなのはが転ぶ光景。そんな彼女と違い運動神経”だけは悪くないと無い胸を張るなのは（不破）だが、なのはもそんな彼女とは対照的に理数が得意だった。それはもう天才的に。

なのは（不破）「うう……見た目が同じなのに」

幸助「先生の質問に即答だから……黒月もそうだが」

自分と同じ顔でありながら自分が分からない問題を当てまくるなのはの姿を思い出し、頬を膨らませて不満を口にするなのは（不滅）。そんな彼女を横目に幸助も零の顔を思い出すが、すぐに思考を切り替えて真剣な表情になった。

幸助「ま、んなことより、大事なことはあるだろ？」

幸助のその台詞で、なのは（不破）とスバル（中島）も表情を引き締め幸助と顔を見合わせた。

スバル（中島）「アルファちゃんの……ことだね」

幸助「ああ……既にタイムオーガはアイツの支配下から逃れ、街に放たれている……が、一向に姿を現さない」

なのは（不破）「前みたいな上級タイムオーガが現れて、組織を作ってる可能性があるの」

幸助「……だな」

三人の話題に出て来た名前……アルファという人物の行方について眉を潜めながら話し合い、三人は一旦話を切りアイステイーを飲んでいく。其処へ……

「――失礼……少し良いかな？」

アルファについて話し合っていた三人の席に、帽子と眼鏡が特徴の  
コートを身に纏った男が歩み寄り声を掛けた。

幸助「……何者だ？」

幸助はそれが普通の人間ではない事にすぐに気が付き警戒を込め  
て問い掛けると、コートを着た男……鳴滝は幸助達三人の顔を見回し  
ながら言葉を紡いだ。

鳴滝「私は預言者、鳴滝……この世界はもうすぐ破壊者の手により  
破壊される」

なのは（不破）「破壊者？」

鳴滝「奴の名はデイケイド……急げ、もう時間はない」

半信半疑で聞き返すなのは（不破）にそう言うと、鳴滝は背後から  
現れた歪みの壁に吞まれ何処かへと消えていった。そしてその場に  
残された幸助達はその光景に特に驚く事なく、真剣な顔で互いに顔を  
見合わせた。

スバル（中島）「……幸助、どう思う？」

幸助「胡散臭いな……だが、無視できる話でもない」

幸助にとっての敵は、大切な人を傷つける物。デイケイドがそうな  
のかどうかは分からないが、もし鳴滝の言う通りなら……

幸助「もしそうだったら、倒すだけだ」

力強い眼差しでそう答えながら拳を握り締め、デイケイドを倒す決意を口にした。その時だった……

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

『っ?!』

店の外から突然女の悲鳴が響き渡り、それを耳にした三人が驚愕しながら慌てて外を見ると、其処には店の向こうで5体の怪人が人々に襲い掛かる光景があった。

幸助「またゴキブリのタイムオーガか!？」

なのは（不破）「しづといの……」

スバル（中島）「人類の敵、また出たね」

人々を襲う怪人達の正体を知ってうんざりとした様子で溜め息を漏らす、それでも無視する訳には行かず、お金をテーブルの置いて嫌々店の外に出ていった。



『ゴキゴキゴキ……』

店を出た幸助達三人が現場に到着すると、其処には黒光りする気持ち悪いボディの怪人……ゴキブリを素体にしたGタイムオーガ達が、獲物を探してウロウロとき迷う姿があり、その足元にはGタイムオーガに喰われた人間達の服だけが散乱していた。

幸助「くっ、避難が遅れた人は手遅れか……」

スバル（中島）「幸助！行くぞ！！」

幸助「……ああ、行くぞ！スバル！なのは！」

スバル（中島）「うん！」

なのは（不破）「なのは！！」

救助が遅れて民間人を救えなかった悔しさを胸の内に宿しながら、幸助はスバルと共に腰にベルトを召喚し、なのは（不破）は何処から取り出したベルトを腰に巻いてピンクのパスケースを出し、幸助とスバルも変身の構えを取る。そして……

『変身ッ！』

『GATE UP！』

『GATE UP！』

『Mei-O Form！』

三つの電子音声と共に三人の身体が淡い光に包まれていき、光が晴れて消え去ると、其処には全く別の姿の幸助達……嘗て時の神時代に幸助が変身していたクロノス、そしてスバル（中島）となのは（不破）が変身したジェネシックと冥王の姿があったのだった。



クロノス『さあ、纏めて弄り倒すぜ！』

ジエネシツク『貴方達を破壊します！』

冥王『さあ、恐怖の悲鳴と断末魔の殺戮オーケストラを奏でるの』

それぞれ決め台詞を決めたと同時に、三人は剣と拳と薙刀を構え五体のタイムオーガに向かって走り出していくのだった。

◇◇◇

そして、Gタイムオーガ達とクロノス達が戦闘を開始したその影で、二人の男女……幸助達を追い掛けてきた零となのはが傍観する姿があり、零はGタイムオーガと戦うクロノス達の写真を撮影しながら三人の姿をカメラで追い掛けていた。

零「仮面ライダークロノスにジエネシツク、冥王……やはり過去の世界でも変身するライダーは変わらずか」

なのは「うん……でもあのタイムオーガ、気持ち悪いね（汗）」

零「ゴキブリが素体だからだろ？雷のどこのローチよりまたリアルだから、生理的に受け付けないのは同感だな」

そんな軽口を叩きながらGタイムオーガや冥王、ジエネシツク、クロノスの写真を何枚かカメラで撮影すると、零はカメラから手を離して制服の内ポケットからデイクイドライバーを取り出し、それを見たなのはも同じ様にトランスドライブバーを出した。

零「んじゃ、そろそろ行くとするか」

なのは「うん」

そう言つて互いに顔を見合わせて頷き合うと、二人はそれぞれの腰にドライバーを装着し、左腰に出現したライドブックからカードを一枚ずつ取り出して変身の構えを取った。そして……

『変身ッ！』

『KAMENRIDE：DECADE！』

『KAMENRIDE：TRANS！』

電子音声が鳴り響くと共に零となのはは、デイケイドとトランスに変身し、変身を完了すると同時に戦場に向かって駆け出していくのであった。



クロノス『ふっ！てりやあっ!!』

—キインツ！キイイツ！ガキイインツ—！

一方場所は戻り、クロノスが振るうクロノスブレイドの剣技がGタ イムオーガを斬り裂いていくが、装甲が高いためか中々ダメージを与えられなかった。

クロノス『ちっ、以前より装甲が上がってるのか……なら、力任せで行くか！来い、ノーム!!』

『オツケー！オイラの出番だな！』

『GNOME FORM！』

何処からかの声と共に電子音声が鳴り響き、クロノスの姿が黒から茶に変化していき、クロノスブレイドもノームフォーム専用武器のノームスコップに変化していった。そして……

クロノスG 『はあっ!!』

—ガアアンツ！ガアンツ！バキヤアアツ!!—

『ゴキイ!?!』

クロノスはGタイムオーガに一瞬で接近してスコップを振り上げ、渾身を込めた一撃をGタイムオーガの頭に叩き込みその身体を地面に沈ませた。そして畳み掛けるかのようにクロノスは地に倒れたGタイムオーガを踏みつけ、そのまま上空に蹴り上げた。

クロノスG 『タイムクラッシュ』

『TIME CRASH！』

上空に投げ出されたタイムオーガを見上げながらクロノスの眩きに応じるようにベルトから時破壊の膨大なエネルギーが放たれ、クロノスの手に握られたスコップに集束されていき、そして……

クロノスG 『アースステイングツ!!』

—バシユウウツ!!!—



『ッ?!』

逃走しようとしたGタイムオーガ達を突如マゼンタとオレンジの斬撃が斬り裂き、Gタイムオーガ達は爆散し断末魔と共に跡形もなく散っていったのであった。その光景を見たクロノス達も驚愕し思わず足を止めると、爆発で発生した爆煙が徐々に晴れ、黒煙の向こうから二人の戦士……ライドブツカーSモードをそれぞれ振り下ろしたデイケイドとトランスが姿を現した。

クロノス『……何者だ?』

突如現れタイムオーガ達を撃退したデイケイドとトランスに警戒心を強めてそう問い掛けるクロノス。それに対しデイケイドは左腰にライドブツカーを戻しながら、クロノス達を一瞥して口を開いた。

デイケイド『デイケイド……通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ』

トランス『トランス。同じく通りすがりのライダーだよ』

クロノス『デイケイド……?』

敵ではないことを証明するかののように空手でそれぞれ自己紹介するデイケイドとトランスだが、クロノスはデイケイドの名を聞き先程の鳴滝の警告を思い出した。

クロノス『——そうか……お前が世界の破壊者か』

そう呟き、クロノスは突然剣の切っ先をデイケイドに向けて突き付けた。

デイケイド『っ?!何の真似だ!?!』

クロノス『あの胡散くさい預言者が言っていた事を信じるつもりはない。……俺は俺の眼で見た物を信じるだけだ』

クロノスに予想外の行動を取られ驚愕するデイケイドにそう告げると共に、クロノスは地を蹴って駆け出しデイケイドに目掛けて迷いなく斬り掛かった。それを目にしたデイケイドも咄嗟に地面を転がってクロノスの斬撃を避けながら距離を離し、クロノスが口にした預言者というワードを聞き舌打ちした。

デイケイド『チツ……!また鳴滝の仕業かよっ!』

クロノス『言った筈だ……奴は関係ない。俺は俺のやり方で、お前が破壊者が確かめるだけだ!!』

そう言つて剣を構え直し、問答無用と言わんばかりに再びデイケイドへと斬り掛かるクロノス。そしてデイケイドも左腰に戻したライドブツカーを再びSモードに切り替えてクロノスが振りかざした剣を防ぎ何とか距離を離すが、クロノスはそれを逃すまいとして俊敏な動きでデイケイドに何度も斬撃を繰り返していく。

デイケイド(クツ!流石は幸助っ……人間時代でこの実力かっ……)

クロノス(ん?……かなり分かりづらいが、この剣技は流水か?何故俺の剣技が混じってる?)

反撃してライドブツカーを振るうデイケイドの剣技が、自分しか使わないハズの剣技……流水剣の形が何故か混じっている事に気付き

内心疑問を抱くクロノス。だが……

『デイケイド 『ゼエアアアツ!!』』

— シュバアアツ!! —

クロノス 『!』』

クロノスと戦うとなって既に気持ち的にも余裕がないデイケイドが突き出してきたライドブツカーの切っ先が迫る光景を見て、瞬時に顔を僅かに動かして切っ先を避け、疑問は残るが今は戦闘に集中しようとしてデイケイドの繰り出す斬撃を弾きながら反撃していくのだった。

ジエネシツク 『ちよつと幸助!?!』』

冥王 『デイケイド……アレが預言者の言ってたライダーなの?』』

トランス 『そんな……またこの世界でも……破壊者として拒絶されるの?……あの幸助さんにも』』

突然始まった二人の戦いを見て、ジエネシツクと冥王はクロノスの突然の行動に戸惑い、トランスはこの世界でまで零が世界の破壊者として拒絶されるのかと絶望してしまい、そして……

「ガオウ「ムシャムシャ……アイツらで良いんだな?アポロガイスト?」」

『ああ……行くぞガオウ、荒井真也』

ガオウ「良いぜ？皆纏めて俺が食ってやる」

真也「……ちっ」

三人の人影が二人の戦いを遠くから眺め、クロノスとデイケイドが戦う戦場に向かって静かに歩き出し始めていたのだった。



## 劇場版小説／仮面ライダーデイケイド&クロノス 過去と未来の激闘③

クロノス『はああっ!!』

―ガキイイツ!!キイインツ!!グガアンツ!!―

デイケイド『ハツ!!チイツ!!』

戦闘を開始してから数分が経ち、依然クロノスとデイケイドはクロノスブレイドとライドブツカーの刃を激しく打ち合わせ互角の斬り合い……否、少しずつクロノスの方が押し始めていた。雷光のような鋭い斬撃を様々な角度から素早く繰り出すクロノスの猛攻に徐々に防戦一方となっていく、このままでは押し切られてしまうと悟ったデイケイドはクロノスの振りかぶった斬撃を紙一重で避けながら一旦離れ、距離を保った。

デイケイド（くっ……やはり過去とは言え幸助か……強過ぎるっ）

ビリビリと痺れる手を軽く振りながらクロノスの次の動きを警戒し、仮面の下で荒い呼吸を何度も繰り返すデイケイド。幸助が相手となれば苦戦は強いられると予想は付いていたが、剣の打ち合いだけで此処まで押されるとは思いもなかった。以前修行の一環で【完全な時の神である幸助】と【断罪の神である幸助】に鍛えられたとはいえ、【人間時代の幸助】に勝てないのは流石に悔しい。

デイケイド（……随分前に幸助から聞いたが、「幼い頃から生死の境を行き来する修行を毎日していた」と言っていたのはマジみたいだな……）

あの時は冗談かと思ったが、こうして刃を交えてみてそれが事実だと悟った。現に今の幸助は、後の彼の弟子に当たる三人……大輝、裕己、翔ですら最終奥義以外を習得するのに何十年と掛ったという【四大奥義】を既に極めてると、戦ってみて分かったからだ。

デイケイド（一体どんな鍛えた方をすればこうなるのか……。しかし、どうやら幸助は俺を倒す気ではいるが、【破壊者】として殺す気はないみたいだ）

だが、それでも相手はあの幸助だ。油断をすれば一瞬で倒されるかもしれないが、デイケイドも負ける気はない。この戦況を覆す為、デイケイドはライドブッカーから二枚のカードを取り出してカメンライドしようとした。だが……

デイケイド『……はあ!?!』

クロノスの攻撃を無効化するため、クロノスと同じく時を加速出来るキャンセラーのカード、もしくは剣技に特化したエデンのカードを使おうとしたが……デイケイドはその二枚のカードを見て驚愕してしまった。何故なら、二枚のカードは黒く塗り潰され、イラストが消えていたからだ。

デイケイド『な、何でだ？なら他は……!』

動揺を隠せぬまま、キャンセラーとエデンのカードを仕舞い再びライドブッカーを開いて別のカードを探す、それも無意味だった。ライドブッカーからカードを全て取り出しても、デイケイドが今まで関わった外史のライダーのカード全てが、キャンセラーとエデンのカードと同じように絵柄が消えてしまっていたのだから。

デイケイド（な……何故だ？ココが過去だからか？）

何故か力を失ってしまった外史のライダーのカードを見て、その理由が分からず慌てふためくデイケイド。だがその隙を逃すほどクロノスも甘くなく、クロノスは左腕を空に掲げ高らかに叫んだ。

クロノス『来い！ヴォルト！』

『\$%?・%!\$◇○♪※』

クロノスの呼び掛けに応えるように謎の言葉が空から響くと、上空から飛来した雷に打たれながらクロノスの姿が雷の中で変化した。そして雷を払うように左腕を払うと、クロノスは紫のボディに雷を纏った長槍を手にした姿……クロノス・ヴォルトフォームにフォームチェンジし、デイケイドに向けて構えを取っていった。

デイケイド『！チツ……！正史のライダーは使えるな！なら、電気には電気だ！』

『KAMENRIDE：BLADE！』

『FORMRIDE：BLADE！JACK！』

疑問を拭えぬままとにかく戦闘に集中しようと、力を失った外史のライダー達のカードをライドブッカーに仕舞い、無事だった正史のライダーのブレイドのカードをバックルに投げ入れてブレイドへと変身し、すかさずカードをもう一枚装填しブレイドの強化フォームであるジャックフォームに姿を変えた。

クロノスV『来い、デイケイド！タイムクラッシュユツ！』

DブレイドJ『ああ……クロノスツ！』

『TIME CRASH!』

『FINAL ATTACK RIDE：B・B・B・BLADE!』

長槍に電気を纏わせながら、天満流・疾風の章の奥義【疾風槍・連殺刃】の構えを取るクロノスにそう応え、バツクルにカードを装填するDブレイド。そして、Dブレイドは電子音声と共に背中の羽根を展開し上空へと勢いよく飛翔すると、カメンライドと共に右手に出現したブレイラウザーに雷を纏わせながらクロノスに目掛けて急降下していく。

クロノスV 『天満流奥義、疾風の章……疾風槍・連殺刃っ!!』

ー ビュ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!  
ー  
!!!!!!  
ー  
!!!!!!

DブレイドJ 『グッ!!!ウエエエエエエエエアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!』

クロノスは超光速で回転して自身が竜巻となり、頭上から飛来するDブレイドを取り囲み、嵐の如く無数に斬り刻んでいく。更に竜巻が雷を纏っている為に威力と速度が倍増しているにも関わらず、Dブレイドは目を見開き、竜巻に全身を切り刻まれながら咆哮と共にクロノスに目掛けて急降下し雷を纏ったブレイラウザーを振りかざしていた。そして……

DブレイドJ 『ゼエエエリヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!』

クロノスV 『ッ!!はあああああああああああ

あああああああ—————ツツツ!!!』

—ガキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
ンツツ!!!—

DブレイドJ『ぐあああっ?!』

—ズバアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアア—————ツツツ!!!—

クロノスV『があっ?!』

降下して来るDブレイドに目掛けて咄嗟にクロノスが振り上げた  
渾身の長槍がDブレイドの脇腹に直撃するが、負けじとDブレイドが  
振り下ろしたライトニングスラッシュがクロノスの胴体を頭上から  
一文字に斬り裂き、互いの一撃を受けた二人はそのままバランスを崩  
して吹っ飛び、滑るように何度も地面を転がりながら倒れ込み強制的  
に変身が解除されてしまった。

トランス『っ?!?零君っ!』

ジェネシック『幸助っ!』

変身が強制解除されたボロボロの姿の零と幸助を見て、一目散に二  
人の下へ駆け出そうとするトランスと冥王とジェネシック。しかし  
……

『来るなっ!!』

『ッ?!』

零と幸助の下に駆け寄ろうとした三人を制止するように、ボロボロの姿になって倒れる二人が怒号を上げて止めた。それを聞いた三人は驚いて思わず立ち止まると、先に幸助がふらふらと斬られた胸を押さえながら立ち上がり、地面に倒れる零を見つめていく。まさかあの状態でまだ戦うつもりなのか？そんな不安を胸に三人が見守る中、幸助は……

幸助「——ふっ……まさか俺を強制変身解除まで追い詰めるとはな……やるじゃねえか、デイケイド」

微笑と共に幸助が呟いたのは、零を認めたという賞賛の言葉だった。幸助に敵うのは、不破家と中島家現党首である士郎とゲンヤ……そして幼馴染である二人、最後にアルファだけだったのだ。それが別の世界のライダーとは言え自分を此処まで追い詰めた零に関心し、それを聞いた零も激痛の走る脇腹を押さえながら幸助に顔を向け苦笑した。

零「っ……まあ、欲を言えば、アンタから一本取りたかったんだがなっ……」

幸助「……ん？お前……転校生の黒月か？」

そんな軽口を叩く零を見て改めてデイケイドの正体を知り、驚きを露わにして目を見開く幸助だが、すぐに納得した。だから黒月零の情報が一切自分の下に来なかったのだと。そんな幸助の心境を他所に零もふらつきながら立ち上がろうとするが、脇腹に走った激痛で顔を歪めて再び膝を付いてしまう。

零「痛てて……流石は幸助か……やっぱり簡単には勝たせてもらえんようだっ」

幸助「ん？どういう事だ？」流石”とか、”やっぱり”とか」

赤い血まで滲み出した脇腹の傷を見て顔をしかめる零の言葉……  
まるで、幸助を良く知っているかののような口ぶりに疑問を抱いて零に話を聞こうとする幸助。だが……

『——お遊戯はそこまでだ』

——バシユウウツ!!——

『……っ?!——ドツガアアアアアアアアアアアアアアアアアアンツ  
!!!——ぐあああああああああああああああっっ!!!』

不意に何処からか聞こえたその言葉と共に、零と幸助に向けて一発のエネルギー弾が放たれ二人に直撃してしまったのであった。突然の不意打ちに、先程の戦いで負ったダメージのせいで反応と回避が遅れた二人は爆発に吞まれて空高く吹っ飛び、そのまま地面に叩き付けられて再び地に倒れてしまった。

ジエネシツク&冥王『幸助（くん）っ?!』

トランス『零君っ?!』

その光景を目にした冥王、ジエネシツク、トランスは二人の下に急いで駆け付け、今の攻撃が放たれた方を睨みつけた。其処には……

『ふっ……流石の時の神と破壊者も、不意打ちは避けられなかったよ  
うだな』

『ちっ、んなことしなくても俺が食ったんだがなあ』

オーガ『……不愉快だぜ』

三人が睨み付け身構えた先に立っていたのは、右手に持つ銃を零と  
幸助に向けながら不敵に笑う深紅の怪人、アポロガイスト……否、零  
の世界の鳴滝の手によりパワーアップして生まれ変わったネオアポ  
ロガイスト、ガオウが変身した銅色のオーラアーマーとワニの顔を摸  
した形状のデンカメンを持つライダー『牙王』、そして彼等の背後で不  
快げに舌打ちする真也が変身したオーガの姿があつたのだ。そんな  
ネオアポロガイスト達の登場に、三人も咄嗟に零と幸助を庇うように  
身構え戦闘態勢に入った。

ジエネシツク『貴方達……何者?』

『我が名はネオ・アポロガイスト!大シヨツカーに所属する、この世で  
最も迷惑な男だ!』

牙王『俺か?俺は牙王だ』

オーガ『……オーガ』

トランス(!あのライダー……まさか今までにも私達を襲ってきた  
……?)

ネオアポロガイストと牙王と共に名乗るオーガの声を聞いて、今ま  
での世界でも何度も自分達を襲った謎のライダー達の一員であると  
気付き、より一層警戒を強めるトランスだが……



幸助「くっ……ダメージが……」

零「がっ……クソツ……傷がア……」

トランス達の背後から呻き声が聞こえ、三人がそちらに視線だけ向けると、其処には先程の不意打ちによる予想以上のダメージで幸助が体中血塗れになり、零も傷が更に開いて地面に真つ赤な血溜まりを作っていた。

致命傷なのは一目瞭然であり、早く治療しなければ危険な状態だ。

そんな二人の姿にトランスも内心焦りを覚え、ジエネシツクと冥王も努め冷静を装ってネオアポロガイストたちと向き直った。

冥王『スバルちゃんはその赤い怪人を、私は牙王とか言う奴を殺るの』

ジエネシツク『……字、違くない?』

冥王『問題ないの。どうせ殺すから構わないで、しよっ!』

—バツ!!—

強気な態度を崩さず薙刀を構え、一息で牙王との距離を詰め脳天目掛けて薙刀を振り下ろす冥王。だが……

—ガキイイイイイイイイイイイイッ!!!—

冥王『っ!』

牙王『——ほお……お前は中々喰い甲斐がありそうだ』

牙王はその場から動かず、右手に握るガオウガツシャーのみで冥王の放った一撃を受け止めてしまったのであった。そして牙王はそのまま薙刀を払い退けながら右足に炎を纏い、前蹴りを放って冥王を蹴り飛ばしてしまった。

冥王『あぐうつ！』

ジエネシツク『なのはちやんっ?!——ズガガガガガガガガガガガアツ!!——ぐうつ?!』

『何処を見ている？貴様の相手は私なのだろうか？』

牙王に蹴り飛ばされた冥王を視界の端に捉えて思わずそちらへと振り向くジエネシツクに、銃弾の雨が降り注いだ。見れば、其処にはネオアポロシヨットを構え不気味に笑うネオアポロガイストの姿があり、ジエネシツクはネオアポロガイストに撃たれた身体を押さえながら険しげな顔を浮かべ、今は目の前の相手に集中しようと拳を構えてネオアポロガイストへと突っ込んでいくのだった。

——ガキイイツ!!ガキイインツ!!ギイインツ!!——

トランス『クツ！ハアアアアアアアアツ!!』

そしてその一方、トランスはオーガが振りかざす大剣をライドブツカーSモードとぶつけ合わせて赤い火花を散らせるが、状況はトランスの方が劣勢なのは目に見えて誰でも分かる。そもそも剣術というジャンルではトランスは半人前以下の実力しかない為に、剣術に心得があるディケイドをも圧倒した事があるオーガに正面から近接戦闘で敵う筈がないのだ。それでも剣で戦うしかないのは、どんな強力な

魔法や砲撃を放つてもオーガがそれを掻い潜りながら接近して来るために剣で応戦するしかないからだ。しかし……

オーガ『ちっ……こつちはお前とのお遊戯に付き合ってる暇なんてねえんだ……どいてろっ!』

—ドグオオツ!!—

トランス『きゃあっ?!』

オーガからしてみればトランスとの斬り合いもただのチャンバラごっこにしか過ぎず、いつまでも小賢しく邪魔をするトランスに押さえていた苛立ちを露わにしトランスを蹴り飛ばした。それによってトランスは地を滑りながら零と幸助の下まで吹っ飛ばされてしまい、オーガはそんなトランスへと歩み寄りながら大剣を突き付けた。

オーガ『……死にたくないなら其処を退け……俺らが用があるのはその二人だけなんだからよ』

トランス『っ……! そんなことは……!』

そうは言いながら、本当は殺す気などなく脅迫だけでトランスを退けようと殺気を放って警告するオーガ。しかし、トランスも後ろに庇う零と幸助を彼等の好きにさせるつもりなどないし逃げるつもりもない。どうにか形勢逆転を狙おうと、トランスはライドブツカーからカードを取り出し反撃に出ようとする。が……

『——此処は引くべきだと俺は思うよ』

『ATTACKRIDE：BLAST!』

—ズガガガガガガガガガアツ!!!—

『ツ?!又オオツ!』

牙王『っ?!』

オーガ『何っ?!』

不意に何処からか声と電子音声が響き、それと同時に上空から無数の銃弾が降り注ぎネオアポロガイスト達に命中して怯ませたのだ。

ジエネシツク『え?誰?』

冥王『今のは何なの?』

トランス『……まさか……』

突然ネオアポロガイスト達に飛来した無数の銃弾と謎の声。聞き慣れぬその声にジエネシツクと冥王が困惑した表情で辺りを見渡す中、トランスは見覚えのあるその攻撃と聞き覚えのある先程の声に驚愕していると、一人のライダーがその場にゆっくりと姿を現した。

デイエンド『やあ、随分と盛り上がってるようだね』

緊迫とした空気が漂う戦場に似合わぬ飄々とした声でその場に現れたのは、黒とシアンのボディを持つ銃を持ったライダー……未来の”幸助の弟子”にして、泥棒……もとい、怪盗の大輝が変身したデイエンドだった。

トランス 『デイエンド！やっぱり大輝くん!？』

デイエンド 『話は後でね？【バジルーラ】！』

オーガ 『ツ！待てツ！』

突然姿を現したデイエンドを見て驚くトランスにそう言いながら、【未来の幸助】から教わった強制転移術を使い、零と幸助とジエネシツク達を強制転移させるデイエンド。それを目にしたオーガは慌てて零と幸助を捕らえようと駆け出すが、伸ばした手は宙を切っただけで二人も転移されてしまい、自分の手を見つめて舌打ちしながらデイエンドを睨みつけた。

『ほう、舐められたものだ。我々相手に一人で戦う気とは……強力な力を持つ外史のライダーは使えないのではないのかね？』

デイエンド 『そっちこそ舐めないで貰いたいね？俺はこれでも【断罪の神】の弟子だよ？……俺が使えるのが何もライダーのカードだけだと思ったら大間違いさ』

見下すように鼻を鳴らすネオアポロガイストに軽口を叩きながら、デイエンドは左腰のカードホルダーから二枚のカードを取り出してデイエンドライダーへ装填しスライドさせていった。

『TOUHOURLIDE：ADVENT CHILNO！』

『TOUHOURLIDE：WING UTSUHO ZEROCUS  
TOM！』

『TOUHOURLIDE：EX RUMIA！』

デイエンド 『行きたまえ、バカルテット諸君』

そうやって引き金を引くと共に辺りに無数のビジョンが駆け巡り、三ヶ所にそれぞれビジョンが重なる、それらは三人(?)の少女となつてディエンドの目の前に召喚された。

青色の髪に青いワンピース、背中に氷の羽、左半身が黒の衣装に包まれ、右手にスイカに似たバカでかい剣……エクスイカバーを手にした妖精『チルノ(アドベントver)』

黒髪の長髪に両腕に長くデカイ棒……ツイン制御棒を装備し、メカメカしい青と白の鎧を纏った大きな黒い翼を持つ少女『霊鳥路 空(MS少女の空。ウイングガンダムゼロカスタムver)』

金髪のショートカット、黒いドレスを纏い、バカでかい剣を持つ少女『ルーミア(EX大人ver)』となつて姿を現した三人は、それぞれが持つ武器を手に前に踏み出した。

チルノAD「後はアタイ達に任せな青黒の泥棒。最強のアタイに敵は無い」

お空ZERO CUS「ターゲット確認……目標、敵機殲滅……排除開始」

EXルーミア「貴方達は食べられる人間かしら？」

カリスマ全開で⑨さを微塵も出さないチルノや、普段の馬鹿さを出さずクールにそう呟くお空、いつもの「そーなのかー」という感じの馬鹿さがなく、チルノと同じくカリスマ全開なルーミア。そんな彼女達の性格を見て、ディエンドは顔の下で冷や汗を流した。

ディエンド『アレ……バカルテット……だよな？幻想郷にいた時は

正に⑨だったのに、何で……?』

てつきり全能力だけが強化されただけで人格まで変化しているとは思ってもせず、彼女達の様子に流石に動揺を浮かべるデイエンドだが……

牙王『ハア……いい加減待たせんなっ!』

そんな光景を見ていい加減痺れを切らした牙王が怒号と共にガオウガツシャーを振り上げながら飛び出し、デイエンドに目掛けて斬り掛かった。だが……

チルノAD「させない」

—ガキイイイイイツ!!—

牙王『?!何!?!』

デイエンドを庇うように、チルノが前に飛び出しその手に持つ大剣で牙王が振り下ろしたガオウガツシャーを受け止めたのであった。まさか小さい少女に自分の剣を止められるとは思ってなかった牙王だが、チルノはそんな牙王の心境を他所にデイエンドから離れさせようと、ガオウガツシャーごと牙王を信じられない力で押し出していく。

牙王『クツ……その身体のどこにこんな力がっ!』

デイエンド『……どうやら心配はなさそうだ、後は頼んだよ?』

『ATTACKRIDE:INVISIBLE!』

牙王を驚愕させる程の力で押ししていくチルノの後ろ姿を見て多分大丈夫だろうと判断し、デイエンドは左腰のカードホルダーからもう一枚カードを取り出しドライバーに装填すると、無数の残像と化してその場から離脱していった。

『ちっ、逃がしたかつ』

インビジブルで逃げたデイエンドを見て忌ま忌ましげに舌打ちし、憤慨するネオアポロガイスト。その直後……

―バシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
!!!|

『っ?!なっ?!』

上空から突如巨大な砲撃がネオアポロガイストに迫り、それに気付いたネオアポロガイストは咄嗟に左手の盾を使い受け止める。だが、次第に押され始めて受け止め切れなくなり、ネオアポロガイストは盾を反らし砲撃を受け流した。

『ッ……今の攻撃、貴様か!』

肩で息をしながらネオアポロガイストが上空を睥むと、其処には二つの制御棒の一つに合わせ、銃口をネオアポロガイストに向けながら上空で静止するお空の姿があった。

お空 ZERO CUS「……やるな。だが、次は盾ごと消し飛ばす。  
ツインギガフレア……排除開始」

―ギユイイイツ……ドバアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ツツツツツツツツ



!!!!!!  
|

感情のない声でそう呟いた直後、先程とは比べものにならない巨大な砲撃がネオアポロガイストに目掛けて撃ち出された。

『くっ?!:私は一旦引くぞっ!』

迫り来る巨大な砲撃を見て凌ぐのは無理と判断したのか、ネオアポロガイストは牙王とオーガにそう告げて背後から呼び出した歪みの壁に吞まれ、間一髪の所で避難していった。そして……

——チュドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオンツツツツツツツツツ  
!!!!!!  
——

『ウオオオオツ?!!』

ネオアポロガイストに命中しなかった砲撃はそのまま地表に直撃し、まるで台風のような強風を巻き起こしながら巨大な爆発が発生し、近くで戦うオーガや牙王達を吹っ飛ばし掛けながら跡形も残さずに消滅したのであった。

お空ZERO CUS 「……私はもう、誰も殺さない……」

木っ端微塵に吹き飛び巨大なクレーターが形成された地表を見て何処か夢げにそう呟き、役目を終えた彼女は幻影のように何処かへと消えていったのだった。

## 劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス 過去と未来の激闘④

—ガキイイイイイイイイイインツ!!!—

牙王『やるじゃねえか、氷精！前に戦った特異点なんかよりもやりがいがあるぜ！』

チルノAD「アಂತもね？最強であるアタイとココまで斬り合う奴はそうはいないよ」

お空が役目を終えて消えたその頃、最早人外の領域といっても過言ではない斬り合い……もとい、殺し合いが離れた場所で周囲を巻き込みながら繰り広げられていた。無数の斬撃の余波が地面や近くの建物を斬り刻み、ベンチや銅像などが意図も安易く真つ二つに斬り裂かれていく中、牙王はそんなものにも目もくれず、ただ目の前の相手を斬る為に剣を振るう事が楽しいと言わんばかりに笑みを受かべていく。

チルノAD「リミットブレイク発動……ブレイバー！」

牙王『そんな技、効くかッ!!』

闘気を纏わせながら一気に振り下したチルノの合体剣が襲い掛かる。だが、牙王もガオウガツシャで簡単にそれを受け止めてチルノを蹴り飛ばし、ガオウガツシャを構え直して一気にチルノ目掛けて獣のように飛び出していった。そして、オーガとルーミアは……

—ガジガジガジ……—

オーガ『……ヘルプ』

ルーミア「うまうま」

開始からたったの数秒で、ルーミアはEXから普段の姿へと戻ってしまい、何故かそのままオーガの頭にしがみ付いてガジガジと噛みついていたのであった。

オーガ『いい加減に離れろよ……』

ルーミア「離れるのかー？それは嫌なのだー」

オーガ『んでだよ!?!』

ルーミア「足止めなのだー」

オーガ『……何で俺ばかり貧乏くじなんだよ』

ルーミア「そーなのかー」

もしもコレが見た目通りの化け物とかなら、まだ容赦無く地面に叩き付けてそのまま息の根を止めるとか出来たのだが、外見がまんま生身の女の子であるために邪険にも出来ず、ただ彼女にされるがまま立っていることしか出来ないオーガ。そしてそんなオーガを他所に、チルノと牙王は……

チルノAD「終わりだっ!!リミットフルブレイク!!超⑨武神覇斬ツツ!!」





— 光写真館 —

一方その頃……

スバル（中島）「——つまり、貴方達は別の世界から来たと？」

なのは「はい、そうです」

デイエンドの助力もあって光写真館の前に飛ばされたなのは達はすぐに館内へと入り、零と幸助を部屋まで運んでシャマル達に二人の治療をしてもらった。だが、二人の傷はどちらも深く、治療を終えてもベッドで気絶したままであり、その間にリビングではなのはがなのは（不破）とスバル（中島）に事情を説明していた。

なのは（不破）「ってことは、貴方は別世界の私って事なの？」

なのは「えくと、そうなるかな？」

スバル（中島）「成る程……でも、同一の存在でも歴史はまるつきり違うみたいだね？【不破】と【高町】、か……確かなのはちゃんのお母さんの桃子さんの旧姓がそうだった気がするけど……もしかして、分岐点の法則に何かそれとも……」

なのはから一通り話を聞き、顎に手を添え並行世界の理論を考えるスバル（中島）。ひとり思考に浸りながらブツブツと聞き慣れぬ単語ばかりを呟くスバル（中島）を見て、スバルとギンガ、ティアナ、ナンバーズ、ヴォルケンリッター、ヴィヴィオ、フェイト、アリサ、すずか、子狸は呆然とした。

スバル「…………え？何語アレ？この世界の私って本当に何者？」

ティアナ「シズクさんの過去…………人間時代っていうのは分かるけど、その頃から天才的な頭脳だったのね…………こっちのスバルと大違い（デスクワーク苦手だし）」

ギンガ「そつ、そうね…………髪の毛の長さ以外ならスバルと同じなのに…………お姉ちゃんびつくりよ（この世界ではお母さん生きてるのよね…………別の歴史のお母さんでも…………会ってみたいな）」

ノーヴェ「…………アレ、本当に別世界のスバルなのか？つか、ドクターより頭良くね？」

ヴィヴィオ「シズクお姉ちゃんの過去なら納得できるけど、あそこまで違うと凄いね（冥王お姉ちゃんってクールでかつこいいなく。薙刀の技、教えて欲しいかも）」

シグナム「アレが別世界のナカジマか…………試合してみたい」

ヴィータ「シグナム…………あの過去のシズクは〔多分〕比較的温厚で常識人だが、アイツもチートだぞ？あの人の訓練を受けたアタシだから言える（見た目で判断したら死ねるぜ）」

フェイト「で、アレが冥王の過去なんだよね？雰囲気は恭也さんに似てるし…………ね、はやて？（目付きも違うし…………優しくて温かいなのはとは…………違う）」

はやて「そやね…………ってか、何で私だけ子狸やねん!?!おかしいやろ!?!」

「さすが「はやてちゃん……大丈夫？」

アリサ「あんた、変な電波受信してない？手遅れ？」

はやて「ちよ、すずかちゃんとアリサちゃん、酷かない!？」

それぞれの面子がこの時代でのスバル（中島）やなのは（不破）を見てざわめいたり興味を示したりする中、幼馴染に弄られてガーンツ！とショックを受けるはやて。そんな時……

——…ガチャツ——

大輝「やあ諸君、さつきぶりだね」

『大輝（くん・さん）!!?』

スバル（中島） & a m p ;なのは（不破）『……誰?』

一同が集まるリビングに、先程なのは達を逃がすためにネオアポロガイスト達と対峙した大輝が入ってきたのである。なのは（不破）とスバル（中島）は変身を解除した大輝とは初対面の為に首を傾げていたが、なのははそれよりも先程から気になってたある疑問を大輝に投げ掛けた。

なのは「ねえ大輝君、いきなりで悪いんだけど、一つ聞いてもいい？なんで外史のライダーのカードが突然使えなくなったの？」

そうやってなのはが背後に振り返ると、其処にはテーブルの上に数十枚のカード……零のカードと同じく、絵柄が黒く塗り潰され使えなくなってしまうたなのはの外史ライダー達のカードが並べられていた。

大輝「……良いだろう。俺も元々そのつもりで来たしね」

そして大輝はなのは達に、全てを話し出した。

既に並行世界の外史のライダー……特に幸助に命を救われた者が消えていると。

原因は、この世界に現れたネオアポロガイスト。

過去の幸助が死ねば、未来の……断罪の神である幸助は存在が消える。

それだけでなく、幸助に命を救われた人や世界は数多く存在する。

祐輔、滝、稟などの苦労人同盟もそうだ。

苦労人同盟を鍛え強くしたのは幸助。

祐輔と稟、翔、裕己、幸村達にライダーシステムを託したのも幸助。

その幸助が消えれば？

零達が出会った彼らは消滅する。

それは零達も例外ではなく、魔界城で彼に助けられ、ブレイドの世界で使用したクライマックスフォーム、NXカブトの世界で重傷を負った零の治療、桜ノ神の世界での幸助を筆頭とした増援に助けられた零達の存在も危うくなっているのだ。

なのは「……そんな」



大輝「事態は一大事を要するよ……今回はお宝とか言ってる余裕はないしね」

なのは(不破)「つまり結論として……あのアポロガイストをぶつ殺せばいいの」

スバル(中島)「……言い方考えようよなのはちゃん」

なのは(不破)「スバルちゃんは甘い。敵……特に男は容赦なく殲滅せよ。お父さんとゲンヤおじさんの口癖なの」

スバル(中島)「(お父さん……: 太郎おじさん……: ギン姉とお母さんと桃子さんを交えて今度OHANASHIですね)」

なのは(不破)の台詞を頭に痛めながら、この件が片付いた後の父親と叔父の処遇について内心そう決心するスバル(中島)。そしてなのは(不破)のそのセリフを聞いて、スバルとギンガは「お父さんも別の存在なんだ……:」と力なく呟き複雑げに苦笑いを浮かべていくのだった。



一方同じ頃、とある世界のミッドチルダ……

優矢「……(こ)……何処よ?」

アズサ「さあ……」

シロ『にやあ……』

魚見「見たところ、ミッドチルダかと思われませんが……」

姫「クロノスの世界の……ではなさそうだな……一体何処の世界のミッドチルダだ？」

映紀「おいおい……なんでいきなり違う世界になんて飛ばされるんだよ」

鳴滝の手によって、何処かに転移させられてしまった四人と一匹。そんな彼等が飛ばされた先はクロノスの世界とは全く違う別世界のミッドチルダであり、一同は突然の出来事に困惑した様子でミッドの町並みを見回していた。其処へ……

「時空の乱れを観測したから来てみれば……何者だ、お前ら」

優矢達の前に突如現れた、一人の青年。

彼は未来にて、【七柱神】と恐れられる1柱。

今の段階では【三柱神】と呼ばれる存在。

【想像神】東海竜也が不審げな顔で四人と一匹の前に転移してきたのであった。

劇場版小説／仮面ライダーセイド&クロノス  
過去と未来の激闘⑤

―時渡り町・廃工場―

真也「牙王は死んだぜ」

『……それは分かった……が、お前は頭に幼女を噛みつかせるのが趣味なのか?』

真也「んなわけねえだろうがゴルアアアアアアアアアアアアアアアア!!!  
(#. #.)」

ルーミア「そーなのかー」

それから数分後。隠れ家である廃工場で合流した直也とネオアポロガイスト……と、まだ真也の頭に噛み付いたまま消えていなかったルーミア。結局戦いのあとも消えなかったルーミアを連れてきたせいか、何処か冷たい目を向けて来るネオアポロガイストにマジギレして叫ぶ真也だが、すぐにハツと我に返り一度咳払いをした。

真也「ンンツ……で、どうすんだ? 貴重な戦力。幾ら零と断罪の神に怪我負わせたからって、あの程度で引つ込むような奴らじゃねえぞ?」

『それには考えがある……死者の世界からスカウトするのは大変だったが』

ネオアポロガイストがそう言ってゆっくりと背後へと振り向くと、

それと同時にネオアポロガイストの目前に歪みの壁が出現し、其処から五人組の男女が姿を現した。

「――報酬は分かってるな、アポロガイスト？」

真ん中の五人組のリーダーと思われる茶髪に青いメツシユが入った青年が睨みつけるようにそう問い掛けると、ネオアポロガイストは口端を吊り上げながら何処からか銀のアタツシユケースを取り出した。

『もちろん、お前達を再び「ダブル」の世界に送る事であろう？』

そう答えてネオアポロガイストがアタツシユケースを茶髪の青年に渡すと、茶髪の青年……【大道克己】はアタツシユケースを開き、ケースの中に入った五本のメモリと五基のドライバーを確認してニヤリと笑みを浮かべた。

克己【T2メモリ】と【ロストドライバー】……人数分、確かに受け取った」

「ふふ……これでまた熱くなれるわ」

「……確認完了」

「いいわいいわね、ゾクゾクしてきたわあ、くん」

「相変わらず気持ち悪いいな京水……俺としては速く戦ってえぜ」

克己と共にケースからそれぞれメモリとドライバーを手にして、四人のメンバー……【羽原レイカ】、【芦原賢】、【泉京水】、【堂本剛三】は腰にドライバーを巻いていき、克己も空になったケースを投げ

捨てドライバーを腰に装着すると、五人は手にしたメモリをそれぞれのドライバーのスロットへと装填していく。

『ETERNAL!』

『HEAT!』

『TRIGGER!』

『LUNA!』

『METAL!』

五つの電子音声が重なって鳴り響くと共に、五人の姿が吹き抜ける風と共に装甲に覆われて徐々に変化していく。

真つ赤なボディに全身が炎に包まれた仮面ライダー……『ヒート』

青い体にトリガーマグナムを持つ仮面ライダー……『トリガー』

黄色い体で全身クネクネさせている伸縮自在の仮面ライダー……

『ルナ』

銀色の鋼鉄のボディにメタルシャフトを装備した仮面ライダー

……『メタル』

そして、『永遠の記憶』を内包した白いボディに全身に26個のマキシマムスロットを装備した地獄の仮面ライダー……『エターナル』

彼らはかつて【NEVER】に所属していた特殊部隊のメンバーで、死者蘇生技術により不死の殺し屋だった。

とある計画でダブルの世界でひと悶着を起こすが、ダブルにより計画を壊され、全員死亡した彼等だったが……ネオアポロガイストの手によって再びこの世へと蘇ったのであった。

エターナル『行くぞ。風都に戻る前に、先ずはこの町を地獄に染め上げてやる』

宣言するようにそう告げてエターナルが親指を立てた右手を下に向けると、背後から現れた歪みの壁が五人のライダーを呑み込み何処かへと消えていく。恐らくひと足先に町に向かったのだらうと予想すると、ネオアポロガイストは真也の方に視線を向けて口を開いた。

『では、我らも行くとしよう』

真也「そだな……っていい加減、噛むの止めろ!!」

ルーミア「嫌なのか」

真也「……はあっ」

残念そうにシュンツと落ち込むルーミアを見て仕方がないといった感じに嘆息し、結局真也は頭にルーミアを噛みつかせたままネオアポロガイストと共に歪みの壁を潜って町へと向かっていくのであった。



一方その頃……

なのは（不破）「——もう一度聞くけど、本気なの？」

なのは「うん……もちろん」

なのは（不破）「なら……私も手加減は一切しないの」

不破家の道場にて、胴着を着て薙刀型の竹刀を持った不破なのはと、同じく胴着を着て竹刀を構える高町なのはが睨み合って対峙する光景があった。

何故こんな状況になってるのか？事の発端は数十分前、なのは（不破）がなのはの欠点……接近戦を指摘したのだ。

彼女はさっきの戦いで足手まといだったと思いそう告げた。現にトランスに変身したとはいえ、本来の身体能力に変化はない。

トランスはデイケイドと同じく他のライダーに変身し強化する。

だがトランスが持つライダーのカードは、全て外史のカード。

故に今回は、トランスの力だけで戦闘しなければいけないのだ。

自身とフェイト達の魔法と同じ力を使えるとはいえ、そればかりに頼っているのはオーガのような各上の相手には決して勝てない。

例え付け焼き刃であろうとも、少しでも剣の腕を上げトランスのライドブツカーSモードを使いこなす為、同じ自分であるなのは（不破）に協力を求めたのだ。

そして実を言うと……パンデモニウムの冥王より実力は劣ってるのだから、あの地獄のような修業よりかはマシかもという本音もあったのだが、現実はそんなに甘くはなかった。

剣の指導の開始と同時に、相手の動きを良く見て警戒していればな

のは（不破）に勝つ為の勝機もきつと見付けられると、咄嗟に距離を取った瞬間……

なのは「にやあ……きゆうううう……」

なのは（不破）「情けない……本当に別世界の私なの？」

たったの一息で一瞬で距離を詰められ、驚く隙もなく脳天に薙刀型の竹刀を叩き込まれ床にダウンしていたのだった……。

そこからはなのは（不破）に頭から水を掛けられて意識を取り戻し、再び剣の指導を再開するも、やはり終始なのは（不破）にボコボコにされまくっていた。

もちろん、ただフルモッコにされた訳ではなく、剣術の指導はちやんとされていた。

別世界とはいえ、なのはにも御神と不破の血が流れている。それを抜きにしても、これでも訓練学校で運動音痴を地道に改善してきたのだ。

昔よりかは大分マシになっているが、やはりそれでもまだなのは（不破）の足元に及ばない。

連敗続きでなのは（不破）に打たれた個所に激痛が走り、体力も削られるばかりで肩で息をしながらも竹刀を杖代わりにし、呼吸を整えようとするなのは。

なのは（不破）「はあ……まともに戦わせるのに時間がかかりそうな



の

なのは「っ……も……もう一本、お願いっ！」

それでも諦めず、再び立ち上がって竹刀を両手で構え直す。

彼女が此処まで必死なもの、なのは（不破）に指摘される前から先程の戦いで自分が足手まといだったことを自覚してるからだ。

実際先程のオーガとの戦闘で自分は手も足も出させず、もしも彼処で大輝が来てくれなければ、自分は零と幸助を守り切れなかった。

あんな重傷を負った二人を守る立場でありながら、それが分かってしまったから悔しかったし、勝てないと思ってしまった自分が情けなく思えた。

だから彼女に協力を求め、少しでも剣術を自分の物にする為に自ら志願したのだ。

なのは（今までの戦いじゃ、その場凌ぎでずっと剣を扱ってきたけど、これからはちゃんと剣も扱える様に訓練メニューを組まなきゃね……フェイトちゃんシグナムさんにもお願いして、ご教示願おうかな？）

なんてね、と内心苦笑いしながら深く息を吸い込むと、なのはは真つすぐなのは（不破）を見据えながら竹刀を両手で構え、勢いよく床を蹴り自ら間合いへと踏み込んでいくのだった。



大輝「——まだ、零と幸助さんは目を覚まさないのかい？」

スバル（中島）「うん、幸助の傷はそんな深くないハズんだけど……」

なのはがなのは（不破）から剣の教授を受けているその頃、写真館では未だに零と幸助が意識を取り戻さず、大輝が二人を看病するフェイト達やスバル（中島）と二人の容態について話し合っていた。

シヤマル「零君も、何時もみたいにももの凄い回復力でもうすぐ完治しそうなんだけど……一向に意識を取り戻す気配がないの」

フェイト「いつもだつたら、もう目を覚ましても可笑しくない筈なんだけど……なんでだろう……」

未だに目覚める気配がない零と幸助を案じるように、フェイト達とスバル（中島）の視線が二人の眠るベッドに向けられていく。そんな彼女達の視線を追うように大輝も二人を見つめると、アリサが零の眠るベッドに近寄り零の掛け布団を直していく。

アリサ「まったく、懲りずにまたみんなに心配掛けて……さつさと起きなさいよ……このバカ」

口ではそう言いつつも、実際は彼女も心配しているのだろう。アリサは不安げな顔で死んだように眠る零を見つめ、フェイトはそんなアリサへと近付いて励ますように彼女の肩に手を置いていく。そんな時……

零「……………つ……………う……………」

アリサ「?!零?!」

フェイト「零っ!」

ベッドで眠る零が突然呻き声を漏らし、苦しげに顔をしかめたのだ。それを見たアリサとフェイトは慌ててベッドに眠る零に近づき、シヤマルも零のベッドに近づいて零の身体を揺らしていく。

シヤマル「零君!聞こえる?!私達の声分かる?!」

零「……………ツ……………シヤマ、ル……………アリサ……………フェイト……………?」

フェイト「零…!良かった!」

アリサ「大丈夫よね?私達の事、分かる?!」

漸く目覚め、朧げな意識の零に自分達の事が分かるか必死に呼び掛けるアリサ。すると零は、ゆっくりと目を動かしてシヤマルの顔を見た後、アリサとフェイトに視線を向けて……

零「109……………118……………ああ……………その有り得ないサイズは間違いなくお前ら—バキヤアアアツ!!—ごばああツ?!」

零がぼんやりと何かの数字を口にしながらそう告げた瞬間、目にも留まらぬ速さのアリサの鉄拳が零の顔面に、フェイトのボディーブ

ローが零の腹にほぼ同時に振り込まれ、零は再び意識を刈り取られてベッドに力無く沈んでいったのだった。

アリサ「うん、意識はしっかりしてるみたいね」

フェイト「みたいだね」

シャマル「い、いえ、あの……零君、今のでまた気を失っちゃってるんだけど……」

大輝「おいおい……やつと目を覚ましたのにまた気絶させてどうするんだい？もう一度起こしてくれたまえよ、こっちは彼とこの後の戦いについて話があるんだから」

先程までの心配そうな表情から一変して全くの無表情になったアリサとフェイトに苦笑いするシャマルと、漸く目覚めた零をまた気絶させられ二人を睨む大輝。するとアリサは何か考えるように思索した後……

アリサ「フェイト。確か、前に私達が零に内緒で使ったナマコ料理が、まだ台所に残ってた筈よね？アレ、ちよつと持ってきて来てくれる？」

フェイト「？どうするの？」

アリサ「ナマコをこいつの口に挿込んで無理矢理にでも叩き起こすのよ。ついでにいつまでもナマコ嫌いを克服しないコイツを、私達で後押ししようってわけ」

フェイト「ああ、成る程」

シャマル「……それ、下手したらまた零君が気絶するかもしれない

気が……」

大輝（中々容赦ないね……まあ止める気は全然ないけど）

ポンツと掌に拳を下ろして納得するフェイトに苦笑いを深めて冷や汗を流すシャマル。その会話を聞いてた大輝は零が目を覚ますなら何でもいいのか傍観に徹し、スバル（中島）はなんとも言えぬ顔で苦笑を浮かべながらその光景を見ていたのだった。

そして、フェイトが台所にナマコ料理を取りに行つてから数十分後、館内中に零の大絶叫が響き渡つたのは言うまでもなかった……。



―町外れの洞窟―

鳴滝「――アポロガイストめ。もつと上手く立ち回りさえすれば、デイケイドを始末出来たものを……」

時渡り町から遠く離れた地に位置する山の山頂の洞窟。その奥に、コートを身に纏った男……ネオアポロガイストを蘇らせたこの事件の元凶のひとりである鳴滝が、洞窟の奥で眠る巨大な“何か”を見つめていた。

鳴滝「ガオウの為にコレも蘇らせたというのにまんまと倒されるとは……まあいい。先程回収したこれさえあれば、ガオウも必要ないだろう」

そう眩きながら鳴滝が懐から取り出したのは、冥王のパスと同じ形状をした金色のパスケース……ガオウが牙王への変身に用いていたマスターパスであり、鳴滝はマスターパスから目の前に存在する巨大な何か……列車の様な姿をした物体に目を向けて口端を不気味に吊り上げた。

鳴滝「今度こそ、このクロノスの世界が貴様の墓場だ……デイケイド」

確信に満ちた様な声で鳴滝がそう告げたと同時に、今まで沈黙していた列車の姿をした何かの瞳の部分が怪しげに輝き、徐々に起動し始めていたのだった。

劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス  
過去と未来の激闘⑥

―時渡り町・市街地―

平穏な生活の光景が広がる時渡り町の市街地。そんなビル街の中心に突如歪みの壁が出現し、其処からゆつくりと五人のライダー達が姿を現した。

エターナル『まずは、この街の住人を絶望に落とさないと…  
芦原』

トリガー『了解』

エターナルの命令に事務的に答えながら、トリガーは腰のバックルからトリガーメモリーを抜き取って右手のトリガーマグナムに装填し、銃口をマキシマムモードに切り替えた。そして……

『TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!』

トリガー『ライダーシユードイング……』

―バ シュ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ  
ウウウウウウウウウウウー………ツツツ!!!  
ドッ ガ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ンツツツツ!!!―





ダー達までっ……どうして此処に?!

そう、燃え盛る街の中心に悠然と佇む白いライダー……その正体は、自分達が前の世界で戦って倒したハズの仮面ライダーエターナルだったのだ。他にも翔一のジョーカーと同じ姿をした四人のライダー達もおり、色彩からしておそらく他のNEVERの一員なのだろうとすぐに理解でき、何故一度は倒したハズの彼等が此処にいるのか分からず激しく動揺するのだが、スバル（中島）は構わずにマツハキヤリバーから降りエターナル達を睨みつけた。

スバル（中島）「何をしているの……貴方達!」

この惨状が彼等の手による犯行なのは明確だ。慣れ親しんだ自分達の街を焼かれスバル（中島）は怒りの表情でエターナル達を睨みつけ、なのは（不破）も既に憎悪と嫌悪の域の感情で五人を睨んでいるが、エターナルはどこ吹く風と言うように鼻を鳴らしていく。

エターナル『見て分からないか?この街を地獄に変えるんだよ……俺達の目的の為に』

スバル（中島）「そんな……どうしてそんな!」

エターナル『そんなことを聞いてどうする?お前たちもどうせ死体の仲間入りになるんだ、関係ないだろう?』

馬鹿馬鹿しげに笑いながら、話し合う余地などないと切り捨てるエターナル。それを聞いた三人も話し合いは無駄だと悟り、それぞれドライバーとベルトを装着しながら並び立って変身の構えを取っていく。そして……

『変身っ!』

『GATE UP!』

『Mei-O Form!』

『KAMENRIDER:TRANS!』

バックルにカードとパスをセット&セタッチし電子音声で鳴り響くと同時に二人のなのはトランスと冥王に変身し、スバル(中島)も光りに包まれジエネシツクへと変身しエターナル達に向けて構えていく。

ヒート『克己……あの青髪が変身した仮面ライダーと戦わせて?ムカつくから』

メタル『俺はあのスゲエー殺気を放つ白いライダーとやりてえ!』

トリガー『俺は……トランスを』

エターナル『……良いだろう。京水、俺達は別の場所に向かう』

ルナ『良いわよお。貴方のそういうの、嫌いじゃないわ』

一歩前に踏み出してこの場を引き受けるヒート達に後を任せると、ルナは手短なビルに極限まで手を伸ばし、エターナルを抱えてその場から離れていった。

ジエネシツク『待てっ!ーブザアアツ!!ーッ?!』

ヒート『行かせないよ?』

エターナルとルナを追おう慌てて駆け出すジエネシツクだが、それを阻むようにヒートが真横から上段蹴りを放って妨害し進行方向に

立ちふさがった。

ヒート『私より熱い情熱を持つなんて、気に入らない……灰にしてあげるっ!』

ジエネシツク『くっ!』

忌ま忌ましげにそう告げると共に、両手に炎を纏ってジエネシツクに目掛け突っ込み、宙にオレンジの線を描きながら腕を振るい殴り掛かるヒート。それに対しジエネシツクも迫り来る拳を上手く弾きながら拳底をヒートの腹に打ち込んで後退りさせ、ヒートに飛び掛かり反撃を開始していくのだった。

冥王『……私の相手は貴方なの?』

メタル『ああ、似たような得物同士、仲良くやろうやアツ!』

冥王『暑苦しいの……まあいいの。さあ、恐怖の悲鳴と断末魔の殺戮オーケストラを奏でるの!』

メタルシャフトを手にして吠えるメタルに向けて殺気を全開し、両腰のメイウオガツシャを薙刀に変えて斬りかかっていく冥王。そしてその端では……

―ズガガガガガガガガガガガガガガガガガアアツ!!!―

トランス『クツ!どうしてまた貴方達がつ?!』

トリガー『……………』

ライドブッカーGモードとトリガーマグナムから撃ち出される互

いの銃弾が相殺し合い、ライドブツカーの引き金を引きながら疑問を投げ掛けるトランスだが、トリガーは一向に口を開こうとせずトランスの急所に目掛けてトリガーマグナムを乱射させていくのだった。



そして、ジエネシツク達とヒート達が戦闘を開始したのと同じ頃。六人が戦う戦場から遠く離れた高層ビル屋上に逃走したエターナルとルナはビル群を見回し、追っ手が来てないのを確認して再び別の場所に移動しようとするが、その時二人に銃弾が命中して怯ませた。

エターナル『くっ!』

ルナ『アイタアツ?!何よ今の!』

突然の攻撃に驚愕しながら二人が銃弾が放たれてきた方に振り向くと、其処には緑の服を着た黒髪の少年と幸助と瓜二つの顔の少女が、二人を待ち受けていたかのように立っていた。

「やあ、久しぶりだね……大道克己」

エターナル『?!貴様……フィリップか?!』

エターナルは緑の服を着た黒髪の少年……それが嘗て自分を倒した宿敵のダブルの片割れであるフィリップだと知り驚愕を隠せぬ様子で身じろぎ、フィリップはそんなエターナルと対峙するように前に踏み出した。

フィリップ「風都だけでは飽きたらず、この街にも死の風を吹かす

「気かい？」

ルナ『何よアンタ……どうしてこの世界に!?!』

フィリップ「ある人の頼みで来たまでさ……まだ僕の本体は修復中なんだけど、マリアさんの為にも、大道克己……僕はもう一度、君を止めないといけない」

「……幸助の好きな街……壊させない」

力強い眼差しでエターナルを見据えながらフィリップは懐から取り出したロストドライバーを、フィリップの隣に並び立つ様に幸助と瓜二つの少女……アルファはアルファギアを何処からか取り出して腰に装着し、フィリップは更に緑色のガイアメモリを、アルファは右手に持つ携帯を開き1の番号を三回押してエンターキーを押した。

『CYCLONE!』

『Standing by……』

『変身っ!』

『CYCLONE!』

『Complete!』

ドライバーとアルファギアのバックルにガイアメモリと携帯をセットすると共に電子音声で鳴り響き、フィリップの姿が黄色のライオンが走る緑のボディの仮面ライダー……サイクロン、アルファはファイズに酷似した外見のαをモチーフにした仮面ライダー……アルファへと変身しエターナルとルナと対峙した。

サイクロン『もう一度君に言うよ、大道克己……さあ、お前の罪を

数えろ！』

アルファ 『ミッション……スタート』

劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス  
過去と未来の激闘⑦

—TIME学園—

『キシヤアアアツ……!!』

『グルアアアアツ……』

ジエネシツク達が市街地で戦ってるその頃。TIME学園に様々な世界の怪人が大群で続々と迫りつつあり、その先頭にはネオアポロガイストとオーガ（肩車されながら噛みつかれてるルーミア付き）の姿があった。

『ククク……奴らが死者共に気を取られている隙に、学園の生徒を人質に取るのだ!』

オーガ『……ちっ』

ルーミア「……そーなのかー」

ネオアポロガイストがこれから行おうとする作戦が気に入らず、不快げに舌打ちするオーガとあからさまに不愉快そうなルーミア。それでも私情を押さえようと沸き上がる感情を押し止め、怪人達が学園の門を潜ろうとする光景を黙って見届けようとした。その時……

—ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツ!!バキヤアアツ

!!—





ネオアポロガイストの命令にショツカー戦闘員やクライシスの怪人、グロンギやファントム達が雄たけびを上げながらジリジリと二人に迫り、零はデイケイドライバーを片手に目の前から迫り来る怪人達を見て溜め息を吐いた。

零「これはまた数が多いな……」

幸助「ビビってるのか、破壊者？」

零「いいや……こんな数、未来のアンタの修行に比べれば屁でもないさ」

幸助「……（未来の俺……どんだけスパルタなんだよ）」

薄く息を吐いて首を振る零の言動に流石に未来の自分が不安になったのか、冷や汗を流す幸助。だが、そうこうしてる間にも眼前から怪人達が迫り、零と幸助は真剣な表情へと変わって腰にドライバーとベルトを巻き、変身の構えを取った。そして……

零&幸助『変身っ！』

『KAMENRIIDE：DECADE！』

『GATE UP！』

二つの電子音声が鳴り響くと同時に零はデイケイド、幸助はクロノスに変身して複眼を輝かせ、デイケイドはライドブツカーをソードモードに、クロノスはクロノスブレイドを取り出してスツと刃を撫でていく。

デイケイド『よし、ケリを付けるぞっ！』



「よし、幸助の世界に到着だな」

「だな……まったく、面倒なことになったな幸助？」

映紀「やっと戻って来れたぜ……」

姫「むぐむぐっ……流石は後の七柱神が想像した時の列車だ。中々に快適だったし料理も贅沢な逸品ばかりだな」

魚見「珈琲も中々の珍味でしたしね。しかし、珈琲を飲むときに付いたミルクが完全に取れませんでした……母乳が出てると思われたらどうしましょう？」

優矢「人は其処まで妄想豊かじゃありません……」

アズサ「あ、零、ただいま」

シロ『にやあ!』

デンライナーの扉から降りてきたのは、幸助の親友であり戦友の【始まりの三柱神】と後に呼ばれるようになった二柱の神のライダー……想像と英雄の神『ベルクロス』の東海竜也と狩人の神『テストメント』の工藤京介。

そして鳴滝の手によって別世界のミッドに飛ばされていた優矢、映紀、アズサ、シロ、姫、魚見の七人と一匹だったのだ。

クロノス『竜也!京介!』

デイケイド『アズサに映紀?!木ノ花と魚見……あ、優矢もか』

優矢「つて待てや零！何だその『お前も居たのか？』みたいな言い方っ!!」

デイケイド『いや、そんな濃い面子の中に混じられたら分からんよ。お前ただでさえ影薄いの……』

優矢「ぐっ……お、俺だつて……俺だつて……もつと出番が欲しいんだよオオオオオおおおおお!!」

なんとも言えぬ顔のデイケイドにそう言われてなにも言い返す事が出来ず、優矢はそのまま悲劇のヒロインのように涙しながら何処かへと走り去ってしまった。

クロノス『……何しに来たんだあいつは』

姫「こら零、あんまり優矢を虐めてやるんじゃない。あれでも傷付き易いんだぞ彼は」

デイケイド『虐めるも何も、事実なんだから仕方ないだろう』

魚見「それでも言葉には気をつけた方がいいですよ？言葉のちよつとした違いで、今の様に人を傷付けるんですから」

姫「ウオミーの言う通りだ。君もマグロ野郎と言われるより不動明王と呼ばれた方がまだ気分がいいだろう？」

デイケイド『それ根本的な部分からもう意味違うからな……?』

何処かへと走り去っていく優矢に呆気を取られるクロノスの横で、得意げな姫に無表情でツッコミを入れるデイケイド。そんな彼等を尻目にクロノスは気を取り直すように咳ばらいすると、竜也と京介と

向き合っていく。

クロノス『で、よく来てくれたな竜也、京介』

竜也「当然だろ親友？前に俺の世界で助けてもらったしな」

京介「俺もだ……借りは返さないとな」

アズサ「零……私達も戦うよ」

デイケイド『アズサ……いや、だが——』

映紀「良いからとつと片して来い。考えてもみろ？この面子で、こんな雑魚共に遅れを取ると思うか？」

姫「それに、断罪の神に消えられたら私達の出会いも消えてなくなってしまうんだ……それだけは、絶対に許す訳にはいかない」

魚見「右に同じく、です」

デイケイド『……分かった、気をつけろよ？』

アズサ「うん……！」

デイケイドとクロノスに向けて力強く頷くと、竜也、京介、アズサ、映紀、姫、魚見は二人の前に出てそれぞれ変身ツールを取り出し、変身の構えを取った。そして……

『変身っ！』

『CHANGE UP！SYUROGA！』

『KAMENRIDE：DISPAR!』  
『F・I・S・T・O・N!』

電子音声と共に六人の姿がベルクロス、テストメント、シュロウガ、デイスパー、イクサF、ファムに酷似した仮面と胴体にブレイドの両腕を合わせた様な桃色と純白のツートンカラーのライダー……『聖桜（セイオウ）』へと変身し、六人は一斉に怪人達に向け身構えた。

ベルクロス『突破口は俺達が開く……アポロガイストとオーガは任せるぞ幸助！デイケイド!』

テストメント『ここは竜也と俺達に任せろ!』

シュロウガ『だから行って、零!』

デイケイド『ああ、幸助!』

クロノス『よし、行くぞ!』

ベルクロスとテストメントが突き出した片手の手の平から巨大な砲撃が放たれ、大群の敵を蹴散らして中央に道を作った。それを見たデイケイドとクロノスも顔を見合わせて互いに頷くと、怪人達に目もくれず二人が作った道を疾走してネオアポロガイストとオーガの下に向かっていくのだった。

イクサF『二人も行った様だな……さて、ならこちらもやるか!』

デイスパー『ああ、纏めて片付けてやるぜっ!』

聖桜『本当なら桜井さんの力もお借りしたかったんですが……まあないものを値だっても仕方ないですね』

未だに目眩を覚えてしまい、そんな数の怪人達の大群にやれやれと溜め息を吐いてしまう聖桜だが、それでも闘志は萎えず背中のマントを翻して構えを取り、他のメンバーも気と魔力を全開にし残りの群れに構えた。その時……

『——流石に数が多いみたいだから、援軍を貸してあげるよ』

『ッ?!』

何処からか不意に聞き覚えのある声が響き渡り、それと共に六人の目の前に突如歪みの壁が現れ、其処からゆっくりと一人のライダー……大輝が変身したデイエンドが姿が現した。

シユロウガ『大輝?』

デイエンド『やあ諸君。前の世界ぶりだね?』

デイスパー『お前つ、一体何しに来やがった?!』

デイエンド『今言っただろ?今回はかなりやばいから、手を貸しに来たのさ』

また何か横槍を入りに来たのかとデイスパーランサーで怪人を纏めて斬り払い突然現れたデイエンドに食ってかかるデイスパーだが、それに対しデイエンドは軽い調子でそう返しながら何処からかケータッチを取り出し、コンプリートカードを装填して画面をタッチしていく。

『CLONOS! CANCELA! FIRST! TOUGA & a  
p: SIVA! EDEN! HOTARU! MA—O! EXE! STR  
IKE!』  
『FINAL KAMENRIDE: DI—END!』

最後にデイエンドの紋章をタッチすると共に電子音声が響き渡り、  
デイエンドの姿がコンプリートフォーム（外史のライダー版）に強化  
変身していく。そしてデイエンドは強化変身完了と共にバックルか  
らケータッチを取り外し、画面に浮かび上がる紋章を順番にタッチし  
ていく。

デイエンドCP 『さあ、出血大サービスだ』

『CLONOS! KAMENRIDE: FINAL!』  
『CANCELA! KAMENRIDE: ALPHA!』  
『FIRST! KAMENRIDE: ZERO DRIVE!』  
『TOUGA & a m p: SIVA! KAMENRIDE: DESPER  
ADO—!』  
『EDEN! KAMENRIDE: QUANTA!』  
『HOTARU! KAMENRIDE: MASTER!』  
『MEI—O! KAMENRIDE: OMEGA!』  
『EXE! KAMENRIDE: EXTRA!』  
『STRIKE! KAMENRIDE: MATERIAL!』

画面に浮かび上がる紋章の全てをタッチして電子音声が響き渡り、  
デイエンドが腰のバックルにケータッチを戻したと共にデイエンド  
の左右に九つの人型の残像が現れて徐々に実体化していき、九人の外  
史ライダーの最終フォームが現れた。

デイエンド 『さらけに!』



再び腰のバックルからケータッチを取り外し、左腰のホルダーからまた別のコンプリートカードを取り出してカードを入れ替え、新たにタッチし始めた。

『FRANCDOLL! YUKARI! SUICA! MOKOU! EI  
IKI! SUWAKO! TENSHI! KOISHI! NUUE!』  
『FINALTOUHOURLIDE: DIE-END!』

再度電子音声が響くと共にケータッチをバックルへと装填すると、デイエンド・コンプリートフォームの胸のカードが九人の少女達の絵柄のカードへと変化していき、デイエンドは更にもう一枚カードを取り出してデイエンドドライバーに装填しスライドさせていった。

『ATTACKRIDE: EX BOSS!』

ドライバーからの電子音声と共に銃口を頭上に向けて引き金を引くと、銃口から放たれた九つの弾丸がデイエンドの目の前に降り注ぎ、それらは全て少女(?)達の姿となってデイエンドの前に立ち並んだ。

ありとあらゆるものを破壊する程度の能力を持つ狂気の吸血鬼……フランドー・スカーレット。

境界を操る程度の能力を持つ、もともと古くから生きている一妖一種の妖怪……八雲 紫。

密と疎を操る程度の能力を持つ鬼……伊吹 萃香。

老いる事も死ぬ事も無い程度の能力を持ち、炎を自在に操る蓬萊の少女……藤原 妹紅。

白黒はつきりつける程度の能力を持つ地獄の裁判官の閻魔（ロリ）  
……四季映姫・ヤマザナドゥ。

坤を創造する程度の能力を持つ蛙の姿をした神……洩矢 諏訪子。

大地を操る程度の能力を持つ自己中の天人……比那名居 天子。

心を読む能力のせいで皆に嫌われることを知ったため、心を読む第三の眼を封印した無意識を操る程度の能力を持つ妖怪の少女……古明地 こいし。

正体を判らなくする程度の能力を持ち、人前に姿を現さず、人間が自分のことを怯えて姿を想像する様子を楽しんでいる鶴の妖怪……封獣 ぬえ。

デイエンドCP 『んじゃ、俺は零に用があるから後は頼むね』

怪人の群れに指鉄砲を向けながらそう告げたと同時に、ライダーと東方キャラ達は一斉に怪人達に目掛けて走り出して攻撃を開始していき、デイエンドはその間にデイケイドとクロノスの後を追い走り去っていくのだった。

ベルクロス 『……超豪華なゲストだな』

テストメント 『ああ……負けてられないな』

デイスパー 『アイツにだけいいところりなんてさせるかよ、行くぞっ！』

シユロウガ 『うん、頑張る……！』

怪人達に猛攻撃を仕掛ける外史ライダーと東方キヤラ達の姿を見て呆気にとられたが、六人はすぐに気合を入れ直し、それぞれの武器を構えて怪人の群れの中に飛び込んでいった。

## 劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス 過去と未来の激闘⑧

―時渡り町・市街地―

ヒート『ハアツ！フンツ！ハツ!!』

ジエネシツク『くうツ?!うあうっ!』

そして場所は戻り、市街地でエターナルとルナを除くNEVERと三者三様の戦いを繰り広げるトランス達だが、その中でジエネシツクは、ヒートの猛攻に押されて徐々に後退し始めていた。最初こそはヒートと一進一退の格闘戦を繰り広げていたものの、ヒートの鋭い戦術に圧倒されて次第に防戦一方となっていたのである。

ジエネシツク（はあ…はあ…この赤い仮面ライダー…強いつ…）

ヒートが素早く振り抜いた炎の拳を上手く払いながら、ジエネシツクは心の中で素直にそう思った。純粹な強さなら互角の筈なのに、此処まで圧されるのはやはり経験の差なのかもしれない。

幼い頃から裏の世界で幾つもの修羅場を潜り抜けてきた幸助やなのは（不破）とは違い、自分はただ修行だけ……。

其処に大きな差があるのかもしれないが、恐らくそれだけではない。



ヒートの顔面を殴り付けたのだった。

ジエネシツク『ゲム！ギル！』

ヒート『くっ?!カハッ！』

更に続けて右手でヒートの顔を殴り、左手で肩を掴み空へと投げ飛ばす。

ジエネシツク『ガン！ゴー！』

投げで空中に浮いたヒートに右足で腹部を蹴り、左足で頭部に踵落としを繰り返す、

ジエネシツク『グフォ!!!』

—ズガアアアアツ!!!—

ヒート『あああああっ?!』

右ストレートでぶん殴って吹っ飛ばすと同時に、莫大なエネルギーが蓄積された右手と左手を合わせヒートに向けて突き出した。

ジエネシツク『はああああああああああ!!!』

—ガキイイイイイイイイイイインツ!!—

ヒート『?!か、体が?!』

両手から放出された衝撃波がヒートの動きを捕らえ、全く身動きが取れなくなった自分の身体に驚愕し動揺するヒート。そして……

ジエネシツク『ウイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
タアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アツツツ!!!』

ーズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアンツツツ!!!ー

ヒート『がっ……!!!?!!!キャアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!』

地面を破壊しながらヒートに目掛けて突進したジエネシツクの両  
手が腹部を貫通し、ヒートの腹から夥しいどす黒い何か……最早生き  
てる人間の物ではない黒い血を噴き出しながら吹っ飛ばされたの  
だった。完全に技が決まり、出血の量からしてもう戦いを続ける事は  
出来ない筈だ。だが……

ヒート『——がっ……う……まけ……負けられないのよ……克己  
の……私達の目的の為に……生きてる人間を死人に変えるために  
も……私を裏切った克己をもう一度信じる為にもっ!』

大量の血が溢れ出る腹部を押さえながら、ガクガクと震える足で尚  
も立ち上がり戦おうとするヒート。ジエネシツクはそんなヒートを  
見て悲しげに眉を潜めると、瞼を伏せて心の中で彼女に謝り、無言の  
まま片腕を空に掲げた。

ジエネシツク『……マツハキヤリバアアアアアアアアアアアアア  
アアっ!!』

ーブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ





ジエネシツク『……私は中島スバル。貴女は、名前はなんていうんですか？』

ヒート『羽原、レイカ……これから殺す人間の名前を聞くなんて、変な女ね』

ジエネシツク『私は殺した人を背負って生きていく気はないよ……でも、殺した人の名前は覚えていくつもりです。それが私の罪だから』

ヒート『そう……勝手にしなさい』

そう言つて、ヒートはまるで眠るように瞼を閉じ顔を俯かせていく。それを合図と受け取ったジエネシツクはゆっくりと右手のハンマーを振り上げ、そして……

ジエネシツク『羽原さん……光にいいいい！なああああああああ  
れええええええええええええええええええええええええええええ！！！！』

咆哮と共にジエネシツクが全力で振り下ろした黄金のハンマーが迷いなくヒートに叩き付けられ、ヒートの身体は徐々に光の粒子と化して空へと昇華していく。その間際……

ヒート『先に逝ってるわ……地獄で会いましょう……克己……』

完全に光となって消滅する寸前、何処か穏やかな声でそう呟き、その言葉を最期に光となって空へと消えていったのだった……。

ジエネシツク『……勝った』

そして、ヒートのその最期をしつかりと見届けた後、ジエネシツク

はゆつくりとハンマーを上げながら変身を解き、そのままその場に仰向けで倒れ込んだ。

もう気も体力も使い切った。

体中が痛くて、今にも気絶しそうだった。

スバル（中島）「…………強かったな」

そんなボロボロの状態なのに、脳裏に思い浮かぶのは先程まで戦ってた相手…………羽原レイカの事だった。

彼女は確かに強かった。だが…………彼女は道を間違えた。

自分は…………間違えたりしない。

その為にも、もっと、彼女よりも強くならないといけない。

心の中でそう強く決心し、スバル（中島）はマツハキヤリバーに運んでもらうよう頼んでそのまま気絶した。

後のことを、親友の彼女に任せて…………



メタル『ウオオオオラアアアアアアアアアアッ!!』

—ブオオンッ!!ブオオッ!!—

冥王『……はあ』

スバル（中島）がヒートを倒したのと同じ頃、メタルが振りかざすメタルシャフトを身を僅かに動かして避けながら、冥王はあからさまに落胆していた。

この銀色のライダーは確かに攻撃力は高いが……それだけだ。

動きは単調、非常に読みやすいし避けやすい。

これでは自分が望む心躍る戦いなど求められそうにはないと分かり、既に冥王はやる気なく攻撃をかわすばかりだった。

メタル『んの野郎っ……！ちよこまかちよこまかと、やる気ねえのかテメエ!!』

冥王『煩いの』

全く戦う素振りを見せない冥王のやる気のない態度が癪に障ったのか、怒号と共にメタルシャフトを振り上げ叩き付けようとするも、冥王は一瞬でメタルの背後に回り込み、背中を薙刀で斬り付けた。

メタル『グアツ!!このっ……アマああああ!!』

冥王『はあ……この程度の攻撃も避けられないなんて……もういいの』

—ドガアアッ!—

メタル『グアアツ?!』



非常につまらなかつたと、薙刀を肩に乗せガツカリといった感じに溜め息を吐く冥王。やり足りないの、今もトランスとやり合っているであろう残ったトリガーを狩る為に、トランスに加勢に行くことにした。



—ズガガガガガガガガガガアンツ!!—

トランス『くっ……!!』

そしてその一方、トランスはトリガーの素早く正確で精密な射撃に翻弄され、何とか近づこうとするが中々それが出来ずにいた。

トランス（流石は狙撃手、かな……弾が全部こっちの急所を正確かつ精密に狙って来るし、撃ち落とすのも精一杯で近付くのも難しいけど……）

だが、絶対出来ないというわけではない。トリガーが放つ銃弾をライドブツカーGモードで撃ち落として出来るだけ数を減らし、落とし損ねた弾はギリギリ避けながらライドブツカーからカードを取り出しバツクルへと投げ入れスライドさせていった。

『ATTACK RIDE : WING LOAD!』

—ギユイイイイイイイイイイインツ!!—

トリガー『……っ?!』

電子音声と共に、トランスとトリガーの周囲に無数の蒼白の光の道……スバルが空を駆けるために使用するウイングロードが展開されたのだ。突然周りに現れたそれにトリガーも驚きを露わにして辺りを見渡すが、トランスが何かをしようとしている事だけは分かり、すぐにトリガーマグナムでトランスを狙い撃っていく。だが、それより速くトランスは既に一枚のカードをバツクルに装填しスライドさせていた。

『ATTACK RIDE : SONIC MOVE!』

— シュンツ! —

トリガー『ツ! 何……?!』

再度電子音声がり響くと共に、トランスは超高速で動きトリガーの放った銃弾を回避しながら姿を消したのだった。突如有り得ない速さで動き出したトランスにトリガーも驚愕しながらトランスを探し周囲を見回すが、トランスの姿は地上の何処にも見当たらず一向に姿を見付けられない。その時……

— …… シュンツ!! —

トリガー『ツ!』

— ズガガガガガガガガガガアツ!! —

トリガーの真上に展開されたウイングロードを超高速で金色の閃光が駆け抜け、トリガーはそれに反応してすぐにトリガーマグナムを頭上に向けて連射するが、其処には既に何もなかった。だがトランスがウイングロードを使って自分を翻弄しようとしていることに気付

き、トリガーも迷わずにウイングロードに乗って空に戦場を変えていく。

トランス（——確かに、私はこの世界の私みたいに強いわけじゃないし、お父さん達みたいに凄いわけでもない……でもっ！）

一方で、ソニックムーブの効力で閃光と化しウイングロードを超速ピードで駆け抜けるトランスがふと下を見れば、地上にいたトリガーが光の道を跳び移りながら上へ上へと昇って来る姿が目に入り、それを確認したトランスはライドブツカーをSモードに切り替えた。

トランス（皆を守りたいっていうこの気持ちだけは、私だって負けたりはしないっ！私は私なりのやり方でっ、戦ってっ、守りたい人を守るんだっ……！魔法が使えなくなって、空を飛べなくなっても……！）

トリガー『……………!!』

—ズガガガガガガガガガガアンツ!!!—

ウイングロードを光の速さで駆け抜けて接近しようとしてるトランスに気付き、咄嗟にトリガーマグナムの銃口を向けて近付けまいと射撃を試みるトリガー。

しかし、トランスも負けじとウイングロードを目にも止まらぬ速さで駆けながらトリガーを放浪していくと、トリガーが立つ光の道へと跳び移り、そのまま怯む事なく銃弾の中を潜り抜けながらトリガーに真っすぐ突っ込み、銃弾が肩や仮面を掠るのを感じながらあらかじめライドブツカーから取り出しておいた二枚のカードの内の一枚を、バツクルに投げ入れスライドさせていった。

『ATTACKRIDE：SLASH!』

—ガキイイイイイイイイイイインツツツ!!!—

トリガー『グツ：?!』

トランス『——皆のこの力と一緒に、今度こそ守り抜いてみせるんだっ!!!』

閃光の速さですれ違い様に振るわれたトランスの剣がトリガーの身体を横一閃に斬り付けて怯ませ、トリガーの背後にトランスが姿を現した。それを視界の端に捉えたトリガーは、身体をふらつかせながらトリガーマグナムを背後のトランスに向けて引き金を引こうとし、トランスも振り向き様に手に持った最後のカードをバツクルに装填してスライドさせた。

『ATTACKRIDE：KARYUU ISSSEN!』

トランス『火竜……つつ!!!』

— バ アア ンツ! バ リ  
イイイイイイイイイイイイイイイイインツツ!!!—

鳴り響く電子音声と共に、トリガーマグナムから撃ち出された銃弾がトランスの仮面の右側に直撃し、音を立てて砕け散った。そして砕かれた仮面の隙間から血が飛び散るが、仮面の奥に隠されたトランスの瞳はトリガーを見据えたまま離さず、火炎に包まれるライドブツカーの柄を両手で強く握り締め、そして……

トランス『一閃つつ!!!』





そんなに苦戦したの?』

トランス『あつ……うん、あのライダーの射撃が早くて正確だから、中々近づけなくて……』

冥王『……一つ尋ねるの。貴女の家族に不破御神流はいるの?』

トランス『え?お父さんとお兄ちゃんとお姉ちゃんがそうだけど?』

冥王『貴女自身は学ばなかったの?』

トランス『……その……幼い頃から想像を絶する程の運動音痴だったからっ』

冥王『(同じ私なのに世界が違うだけでこうも差があるの……情けないの)……ってことは神速も使えないの?』

トランス『神速?……む、無理だよ!あんなクロックアップに対抗できそうなチート体術は無理っ!』

冥王『……はあ……貴女みたいなのに倒されるぐらいだし、あの青いライダーもそんな大した奴じゃなかったって事か……』

トランス『酷くないっ?!私、一応貴女の教えも生かして戦ったんだよっ?!』

ちゃんと彼女の教えも生かしながら勝ったというのに何故か落胆されガーン!とショックを受けるトランスだが、もっと戦いたかった冥王からすればそんな事は余り重要じゃないのでどうでもよろしいらしい。

冥王『まあいいの……それよりも早くさつき逃がした白いのと、ク  
ネクネして気持ち悪い金色を追い掛けるの。金色はどうか知らない  
けど、白い方はそれなりに楽しめそうだし』

トランス『……なんだろ、この勝ったのに全然釈然としない感じ  
……』

何か納得いかないが、とにかく冥王の言う通りさつき逃がしたエ  
ターナルとルナをこのままにしておく訳にはいかない。額から流れ  
る血を拭いながら何とか立ち上がると、トランスは冥王と共にエター  
ナル達を追い掛けようとする。が、その時……

ーバ シユ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ

ウウウウウウウウウウウー………ツツツ  
!!!!  
ー

『……?!ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ンッ!!! ー う あ あ あ  
あああああああー………っっ!!?』

突如上空から、無数のミサイルや砲撃が飛来してトランスと冥王に  
直撃し吹っ飛ばしてしまったのだった。更にウイングロードや周囲  
の建物までもが破壊されていき、二人は足場を失って地上に目掛けて  
落下し地面に叩き付けられてしまう。

トランス『あ……くっ……今のはっ……?!』

ーグギャアアアアアアアアアアアアアアアア



だが、あれほどのサイズの相手となるとまともに戦うのは難しい。一体どうすればいいかとトランスが頭を悩ませると……

―ガチャツ……ブオンツ！―

トランス『……へ？』

不意に、トランスの左腰にあるライドブツカーが勝手に開いてカードが三枚飛び出し、トランスの手の中に収まっていったのである。トランスも突然飛び出してきたカードに驚きながらも手の中に握られたカードを見ると、それは絵柄を取り戻した冥王のカードとファイルアタックライドカード、そしてまだ未使用だった冥王のファイナルフォームライドのカードだった。

冥王『？そのカードはなんなの？』

トランス（な、なんでよりもよってこのカードが出てくるの!?!）

トランスはこのカードを渡した未来の幸助からどんなカードなのか詳しく聞いていた。

ぶつちやけ、対軍殲滅兵器である（イメージで例えるなら、ガンダムSEEDのミーティアのハイマツトフルバースト）

そんな強力過ぎるファイルフォームライドの為に正直目茶苦茶使いたくないのだが、ガオウライナーを止めるにはこの力でなければ不可能に近いだろう。

トランス『……他に手がなから仕方ないか』

断念をするように溜め息を吐いてそう呟き、トランスは他の二枚を

ライドブツカーに仕舞って『しぶしぶ』(ここ強調)カードをバツクルに装填しスライドさせていった。

『FINALFORMRIDE:M・M・M・MEI-O!』

トランス『ちよつとくすぐったいよ?』

冥王『え?何をするのードンツー!ーにや!?!』

戸惑う冥王の背後へと回り込みトランスが背中を開く動作をする  
と、冥王は宙に浮きながら徐々に変形していき、巨大な大軍殲滅兵器  
……メイオウジェノサイド(冥王カラーのミーティア)へと超絶変形  
し、トランスの背中と両手に装備されていたのだった。

冥王(G)『凄いの……力が溢れるの!今、私は究極の力を手にした  
のっ!!』

トランス『……本当に今も昔も冥王は変わらないんだね(汗)まあ、  
とにかく行くよっ!!』

『グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!』

冥王の台詞に冷や汗を掻きながらも、メイオウジェノサイドのバー  
ニアを全開にし一気に空へと飛び上がるトランス。そして地上から  
接近して来るトランスに気付いたガオウライナーもトランスに標的  
を変え、後続車のミサイルと砲撃の照準をトランスに定め迎撃してい  
くのだった。

劇場版小説／仮面ライダーディケイド&クロノス  
過去と未来の激闘⑨

―高層ビル・屋上―

エターナル 『ウオオオオツ!!』

―ザアアツ!!ギイインツ!!ズシャアアツ!!―

サイクロン 『クツ…!!』

とあるビルの屋上にて、白と緑のライダーが凄まじい格闘戦を繰り広げていた。

ナイフの形状をした武器、エターナルエツジで攻めるエターナルの猛攻に対し、メモリの特性を利用し疾風の如く動き回り、鋭い打撃を繰り出すサイクロンだが、総合的な能力ではエターナルの方が遙か上だった。

そもそもダブルの時……特にエクストリームの状態でも苦戦した強敵を相手に、その片割れである本体ではないサイクロン……フィリップの勝ち目は殆どないに等しかった。

―ガキイイイイイイイイイイイイイイイイインツ!!―

サイクロン 『ツ!不味いね……このままではっ………』

負ける……そう悟って半ば諦め掛けた、その時だった……

「おろ？何処や此処？」

いつの間にか一人の青年が、エターナルとサイクロンが戦っている屋上に現れたのだ。

サイクロン『?!君は……速く逃げるんだ！』

市街地の騒動から避難していた一般人が迷い込んだと思い、サイクロンが少年に向けて叫ぶ。しかし少年は……

「んー……たしかにワイは関係あらへんけど……」

目前で繰り広げられる戦いに臆せずそう呟くと、少年の腰に南京錠の様なベルトと右手に変わった形状の鍵が現れた。

「その白いライダーの心の闇は見逃せへん！」

不敵な笑みと共に、少年は右手の鍵を前に突き出して「変身！」と叫び、ベルトの中央部にある鍵穴に差し込んで180度に回していった。

『Change!unlock!』

ベルトから電子音声が響くと共に、少年はベルトから出現した鎖に包まれていき、鎖が消えると、少年の姿は全く別の姿へと変わっていく。

鍵穴だらけの体。



背中には巨大な鍵の剣。

エターナル 『何だ……貴様は!?!』

サイクロン 『仮面、ライダー……?』

『ワイは……心の力を解き放つ者、キーロック!仮面ライダーキーロックや!!』

高らかにそう名乗ると共に、ライダーに変身した少年……『キーロック』は鍵を摸した剣を背中から抜き、エターナルに目掛けて走り出し剣を振り下ろした。

エターナル 『食らうか!』

—ガギイイツ!!—

しかしエターナルはそれを難無くエターナルエッジで受け止めて弾き、距離を離すように後方へと跳んだ。だが……

キーロック 『ワイの剣からは逃げられへんでっ!』

それを目にしたキーロックは直ぐさま左腰に掛けてある複数の鍵のうちの一つを取り、剣の鍵穴へと差し込んだ。

『POWER!unlock!』

再び電子音声が鳴り響き、キーロックは剣を握り直しエターナル目掛けて一気に飛び出すと、剣の刀身が淡く輝き光りを纏った。そうして……



キーロツクの放った必殺技……スパイラルブレイクが見事に炸裂し、エターナルは悲痛な悲鳴と共に爆発を起こしたのだった。そして爆発を背にキーロツクが悠然と着地すると、その背後で変身が解除された克己が膝を着きながらゆっくりと地面に沈んでいき、克己の腰から外れたドライバーとエターナルメモリが地面に落下して砕け散っていった。

サイクロン『す……凄い！ファングジョーカーの……いや、それ以上の回転でのキック……凄まじい攻撃力だ』

サイクロンも、自分達があればほど苦勞して倒したエターナルを一瞬で撃退したキーロツクに呆気にとられる中、キーロツクは変身を解いて少年に戻り大きく伸びをした。

「んー……ふう……さてと、ワイの役目はお終いや。帰ろっ」

驚愕するサイクロンを尻目にそう呟くと、少年はそのまま背後から現れた歪みの壁に呑まれ何処かへと消えてしまった。

サイクロン『消えた……彼は一体？』

サイクロンは変身を解除しフィリップに戻りながら、突然現れてライダーに変身し、エターナルを撃退して消えてしまった少年に疑問を抱くが、其処で何かを思い出したようにハッと顔を上げた。

フィリップ「そうだ……大道克己は?!」

キーロツクに倒された克己のことを思い出して克己の姿を探し辺りを見渡すと、彼は地面を這い蹲りながら逃走しようとしており、彼の先には何かのスイッチのようなものが転がっていた。

克己（あれさえ……あのスイッチさえ押せば俺達の……勝ちだ！街一つ吹き飛ばす爆弾の、スイッチを！）

フィリップ「大道克己……！何をやる気だっ?!」

その光景を見て克己が手にしようとしてるスイッチが直感で危険なものだと悟り、克己を止めようと慌てて走り出すフィリップ。だが……

『SKL! MAXIMUM DRIVE!』

ーバ シュウ ウウウウウウウウウウウウ  
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

克己「ぐああああああああああっ?!?!」

突如、何処からか前触れもなく紫色の閃光が放たれ、克己の腹を貫いたのだった。そして、閃光を貫かれた克己は断末魔を上げながら全身から無数の粒子を放ち完全に消滅してしまった。

フィリップ「なっ……今のは!?!」

克己を襲った閃光に驚愕しながらフィリップは慌てて周りを見渡していくが、誰かの姿を視界に捉える事はなかった。

それどころか、ここは街で一番高いビルの屋上。他のビルからこの場所を狙撃するのは不可能なのだ。

フィリップ「……ゴメン、マリアさん……また彼を救えなかった……」

何れにせよ、克己を救えなかったことに後悔しながら、フィリップは何処からか飛んできたエクストリームメモリの中に吸い込まれ、そのまま歪みの壁に吞まれ消えてしまった。



そして、彼等が戦っていた高層ビルから少し離れた遙か上空で浮遊する黒いハードタービュラーに乗り、黒い銃を手に白い帽子を頭部に被った骸骨のような外見のライダーの姿があった。

『……まだ甘いな、フィリップ』

フィリップが消えたビルを見下ろしながら静かにそう呟き、骸骨のライダーは頭の帽子を被り直し背後から現れた歪みの壁に飲み込まれ何処かに消えたのだった。



Dブレイドに変身したデイケイドがたぶん泣きながら叫び、地面に拳を打ち付け崩れ落ちていた。

何故こんな事になっているのか？それはDブレイドに変身したデイケイドが使用したカードに問題があった。

そのカードと言うのが……

【アタックライド——オンドウルルラギツタンディスクー!!】

【アタックライド——ウゾダドンドコードー!!】

【アタックライド——ウエエエエエエエイ!!】

……爆笑でした。

!!!  
Dブレイド『おのれええつ……刹那あああああああああつ  
!!!』

またしても台詞叫ぶだけで何の役にも立たないカードを使わされ、此処にはいないブレイドの世界の刹那に怒りを覚える（とぼつちり）Dブレイドなのだった。

『……ん、んんっ！デイケイド、クロノスよ！……ここが貴様らの墓場だ！』

オーガ『んっ！……その通りだ』

ルーミア「そーなのだー」

取りあえず空気を戻そうとわざとらしく咳ばらいしながら、ネオアポロガイストは背後から巨大な魔化魍……正史の響鬼が倒したモノより更に数倍巨大化させたオロチを呼び出した。

クロノス『うわ……コイツはまたでけーな』

Dブレイド『……敵にまで気を遣わせるとか……何だこの言葉にし難い屈辱的な感情つ……』

クロノス『おい黒月、いつまでも凹んでねえで、何かアレに対抗できるカードとかないのか?』

Dブレイド『は?あー……あるにはあるが……使ってから暴走とかするなよ?』

クロノス『は?』

あまり乗り気ではなさそうにそう告げるDブレイドの言葉に頭上に疑問符を浮かべるクロノスだが、Dブレイドはデイケイドへと戻りながら立ち上がって左腰のライドブツカーから絵柄が消えた三枚のクロノスの力を秘めたカードを取り出すと、三枚のカードの絵柄が蘇り、その中から一枚抜き取ってドライバ―に装填しスライドさせていった。

『FINALFORMRIDE:C・C・C・CLONOS!』

デイケイド『ちよつとくすぐったいぞ』

クロノス『うん?おい何をードンツ!ーおわっ!?!』



電子音声と共にデイケイドがクロノスの背後に回って背中を開く動作をすると、クロノスは空中に浮かびながら体中を変形させていき、黄金に輝く巨体の龍……嘗て魔界城の世界でも使用したクロノススペリオルに超絶変形していったのだった。

クロノス(S)『グルルルツ……(スゲえ……力が湧いてくる……が、気を抜くと理性が飛びそうだ)』

デイケイド『そのまま理性を留めておいてくれよ?……アンタまで暴走されたらこの街が消え兼ねんし……』

以前ホルスとシリウス達にファイナルフォームライドを使用した際、巨大過ぎる力を制御出来ずに暴走した例がある為に、この時代の幸助にファイナルフォームライドを使うことに若干躊躇ったのだが、クロノススペリアルの様子を見る限り暴走の心配はなさそうだ。内心ホツと一息吐きながらクロノススペリアルにそう告げると、デイケイドは更にカードを一枚取り出した。

デイケイド『よし、行くぞクロノス!これが俺とお前の力だ!』

クロノス(S)『ガアアアアアアアアアアアツ!!(理性が消える前にケリを付けてやる!)』

クロノススペリアルが翼を羽ばたかせながら咆哮を上げるその横で、デイケイドは取り出したカードをデイケイドライバーに投げ入れスライドさせた。

『FINAL ATTACK RIDE: C・C・C・CLONOS!』

バックルから響き渡る電子音声と共にデイケイドがクロノスの頭部へと飛び移ると、ライドブツカーをガンモードに切り替え、オロチ



どうやら今倒されたオロチが切り札だったと思われるネオアポロガイストの反応から、オーガは今の戦況が不利と悟りどうしようかと迷っていた。

自分にはもう後がないので失敗は許されない、戻ればどんな処罰が待っているかも分からない。

かといって、此処で逃げれば裏切り者扱い。

オーガ……真也は自分の目的の為に、まだ死ぬわけにはいかない。

その時だった……

ルーミア「わはー！逃げるのだー！夜符『ナイトバード』!!」

オーガの頭に噛みついていたルーミアがスペルカードを発動させ、オーガごと自分を闇で包み込んだのだった。

オーガ『お、お前?!っっておわああああああああっつ!!?』

その直後にオーガの足元にスキマが出現してルーミア共々その中へと落下してしまい、闇が晴れた後にはオーガとルーミアの姿は何処にもなかった。

幸助「……何だったんだ一体?」

デイケイド『逃げたのか?……ま、この状況じゃ無理もないか』

突然のことだった為に反応出来なかった幸助（FFRが解けた時に変身も解除された）の隣で溜め息と共にそう呟き、デイケイドはゆっ

くりと一人残されたネオアポロガイストに目を向けた。

『……はっ!?置いてかれた!?!』

漸く今の自分の置かれてる状況に気付き、ネオアポロガイストは流石に不味いと判断してその場から慌てて逃走しようとするが……

—ズギヤアアンツ!!—

『ヌオオツ?!』

何処から放たれた銃弾がネオアポロガイストの足元に撃ち込まれ、逃げようとしたネオアポロガイストの動きを止めたのであった。そしてそれが放たれた方に一同が振り返ると、其処には、デイエンドライバーを構えながらゆっくりと歩み寄って来るデイエンドの姿があった。

『デイエンド?! 貴様あ!』

デイエンド『おいおい……此処までの騒ぎを起こしておいて、今更逃げられると思ってるのかい?』

幸助「そつちの青いのの言う通りだな。この俺に不意打ちなんてしたんだ、ただで帰すハズねえだろ? うん?」

『ぬ、ぬううつ……!』

デイケイド『……最早、どつちが悪役かも分からんな、この状況……!—ブオオンツ!—……うん?』

幸助とその未来の弟子に挟まれて追い詰められるネオアポロガイ

ストを見てそんな事を考えていた中、デイケイドの左腰のライドブックから何も描かれていない一枚のカードが飛び出し、デイケイドの手の中に収まったと同時に何も描かれていなかったカードに一人のライダー……未来の幸助が変身するメモリーの絵が浮かび上がった。

デイケイド『このカードは……?』

突然飛び出したメモリーのカードに驚きながら、取りあえず使ってみようとデイケイドがバツクルにカードをセットしようとした直後、デイケイドの前を何かが横切りカードを奪われてしまった。その何かとは……

デイエンド『止めたまえ零、君にはまだそのカードは使えない』

デイケイド『海道?!』

デイケイドからメモリーのカードを奪った何か……デイエンドはデイケイドに奪ったメモリーのカードを見せながらそう言うと、そのままカードをドライバーに装填しスライドさせた。

『KAMENRIDE・MEMORY!』

デイエンド『ふっ!』

ーバシユンツーー

デイエンドがドライバーの引き金を引くと、銃口から撃ち出された銃弾が幸助の隣で無数のビジョンと化し辺りを駆け巡り、一カ所に集まって一人のライダー……ではなく、一人の青年となって姿を現した。

幸助と瓜二つで、黒髪黒瞳の青年……。

その見覚えがあり過ぎる顔に、デイケイドは思わず後退りしながら驚愕を露わにした。

デイケイド『まさか……幸助っ!』

幸助「え？俺……なのか？」

そう、彼等の前に現れたのは未来の……断罪の神時代の天満幸助だったのである。ライダーではなくその本人を呼び出されて驚愕してしまうデイケイドと、自分と同じ顔をした人間の登場に呆気に取られる幸助だが、デイエンドに召喚された未来の幸助はそんな反応を気にも止めず過去の自分と向き合った。

幸助（未来）「……過去の俺、夢で話したことを覚えているな？」

幸助「夢……？あ……お前あの時の……？」

夢……。

それは幸助が気絶しているときに見た夢の事。

もう一人の自分が闇の中に現れ、自分にある事を伝えて消えた。

それは……

幸助「『自分を信じろ』……だろ？」

幸助（未来）「そうだ……ならもう言葉は必要ないな」

幸助「ああ……そうだな！」

力強く幸助が未来の自分に頷けば、幸助（未来）もまた無言のまま過去の自分に向けて頷き返し、二人は肩を並べながらそれぞれの腰にベルトを召喚し別々に構えを取った。そして……

幸助 & a m p ; 幸助（未来）『変身っ!!』

『CHANGE UP! MEMORY!』

『GATE UP!』

高らかに叫ぶと共に、二人の身体を光が包み込みそれぞれ別々のライダーに変身していったのだった。過去の幸助はクロノスに、未来の幸助はメモリーに。変身を終え肩を並べた過去と未来の幸助を前に、ネオアポロガイストも思わず後退りして怯んでしまう。

クロノス『さあ！テメエを弄り倒すぜ！』

メモリー『断罪の時間だ！その命貰うぞ!!』

『お、おのれえっ……!!いでよ我が同士達っ!!』

それぞれの愛剣を手に決め台詞を叫ぶ二人のライダーを忌ま忌ましげに睨みながら、ネオアポロガイストはマントを翻して背後に歪みの壁を出現させ、数十体の怪人を出現させた。しかし先程の大群に比べその数と質は明らかに格段に落ちており、この最悪タッグを相手にするには弱小過ぎると、デイケイドとデイエンドは揃って溜め息を吐きながらクロノスとメモリーの両脇に立った。

デイエンド『大事な場面でまた致命的なミスをしたね？この人達を相手にするのならもつと強力な怪人……いや、どうせ結果は変わらないか』

デイケイド『同情はせん……が、骨ぐらいなら拾ってやるから、安心して逝け』

『え、ええい！黙れっ!!』

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

最早向こうに勝ち目は薄いと悟っているデイケイドとデイエンドの言葉に怒鳴り声を荒げ、自暴自棄気味に怪人達を差し向けるネオアポロガイスト。それを見たメモリーとクロノスも同時に駆け出し、デイケイドとデイエンドもそれに続く様に怪人の大群へと突っ込んでいくのだった。







トランスの振るったビームサーベルがすれ違い様にガオウライナーの車両の二つを纏めて斬り裂き、粉々に爆散させたのだった。そしてガオウライナーが爆発の余波でバランスを崩しよろめいている隙に、トランスは空高く飛翔しながら左腰のライドブッカーから一枚のカードを取り出してドライバーに装填しスライドさせた。

『FINAL ATTACK RIDE：M・M・M・M E I O！』

トランス『コレで、トドメツ！』

電子音声と共にトランスが太陽を背にガオウライナーへと振り返ると、メイオウジエノサイドの全砲門が開きガオウライナーに狙いを定めていく。そして、どうにかバランスを立て直したガオウライナーが咆哮と共にトランスに目掛けて再び突進して来る中、トランスはガオウライナーをマルチロックして両手のウエポンアームを構え、そして……

トランス『でやああああああああっっ!!!』

冥王（G）『微塵に碎けるのオオオオオオオおおおおおおっっ!!!』

——バシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ——  
!!!?!  
『!!!?!』

トリガーを引くと共にメイオウジエノサイドの全砲門から一斉に撃ち出された、無数のビーム砲とミサイルがガオウライナーを貫いたのだった。そしてその一斉射撃から逃れられなかったガオウライナーは、悲鳴を上げることも出来ないまま大小の爆発を起こしながら

砲撃に飲まれ跡形も残さず完全に消滅したのであった。

冥王（G）『粉碎！玉砕！大喝采なのっ!!』

トランス『……うん……やっぱり、街中でコレを使わないで正解だったかも……』

身体が元に戻っていれば腕を突き上げんばかりの台詞を叫ぶ冥王に苦笑しながらそう呟くと、トランスは空に浮遊したまま眼下の密林……ガオウライナーに直撃し損ねて地上に着弾してしまったビームとミサイルの被害で作られたクレーターの数々を見下ろし、深々と疲れたように溜め息を漏らしていくのだった。



—ガギイイツ！ギインツ！ズガアアツ!!—

『ヌウアアツ?!』

『グギヤアアツ!』

デイケイド『ハツ!!デエアアツ!!』

同じ頃。メモリーの参戦によって完全に流れを掴み、デイケイドは迫り来る怪人達をライドブツカーで斬り捨てながら背後から不意を突こうとした怪人の一体を振り向き様に蹴り飛ばし、ライドブツカーから一枚のカードを取り出してデイケイドライバーにセットした。

デイケイド『新しい力を試してやる、変身ッ!』

『KAMENRIDE：DOUBLE!』

電子音声が響くと共にデイケイドの周りを突風が吹き荒れ、デイケイドの身体を装甲が纏い緑と黒のアンシンメトリーのライダー……前の世界で翔一とアイリスの二人が変身したダブルにカメンライドし、両手を素早く払いながら再び怪人達に切り込んでいった。

―ズガガガガガアツ!!―

『ガハアツ!』

『ヌオオオオオオツ!!』

デイエンド 『チツ、数だけのクセしてしつこいな……』

一方で、後方からの射撃で向かって来る怪人達を狙い撃つデイエンドだが、しつこく迫り来る怪人達に痺れを切らして左腰のホルダーからカードを一枚取り出し、ドライバーへと装填してスライドさせた。

『ATTACKRIDE：BLAST!』

―ズガガガガガガアツ!!―

『ツ?!ヌグアアアアアアアアアツ?!』

Dダブル 『?!危なツ?!』

電子音声と共にデイエンドがドライバーの銃口を頭上に向けて引き金を引くと、放たれた銃弾がDダブルと怪人達の頭上から雨のように降り注ぎ怪人達に直撃していったのだった。そして危うくソレに

巻き込まれ掛けたDダブルは慌ててその場から離れるように地面を転がってギリギリ銃弾を避けると、銃弾が掠った背中を摩りながらデイエンドを睨みつけた。

Dダブル『クツ、おいコラ海道ッ！お前今俺ごと当てようとしてたなッ?!』

デイエンド『そんなところに君がいるのが悪いんだろ？文句を言う暇があるなら、さっさと動いてソイツ等を片付けたまえ』

Dダブル『喧しい！お前が指図するなっ！』

詫びれた様子もなく指鉄砲を向けるデイエンドに苛立ちを露わにそう叫びながら、Dダブルは腕を振り上げ襲い掛かってきた怪人達を纏めて蹴り飛ばし、ライドブツカーから一枚のカードを取り出してバツクルへと投げ入れた。

『FORMRIDE：DOUBLE！HEAT JOKER！』

再度電子音声で鳴り響くと共に、Dダブルの右半身が黒から緑に変化してヒートジョーカーへと HALF チェンジし、右拳に炎を纏いながら怪人達に殴り掛かっていく。そしてデイエンドも怪人達の攻撃を避けながら得意のボクシングスタイルで拳を打ち込んでいき、Dダブルは更にライドブツカーからカードを取り出してバツクルに装填した。

『FORMRIDE：HEAT METAL！』

電子音声と共に、今度はDダブルの左半身が黒から銀へと変化してヒートメタルに HALF チェンジすると、背中から抜き取ったメタルシャフトを展開して怪人達に棒術を叩き込んでいく。そしてデイエ



滅していったのだった。そしてクロノスとメモリーは……

メモリー『おらおらおら！遅せエぞ！』

クロノス『動きは全部みえてるんだよボケが！もつと速く避けないと首が飛ぶぜ！』

——時の神と断罪の神の二人の幸助が揃った時点で勝機があるハズもなく、一方的にジワジワと苦しめながらネオアポロガイストを追い詰めていたのだった。因みに強きはメモリーの方が規格外に上だが、同一人物な所為か息はぴったりで見事なコンビネーションでネオアポロガイストを斬りつけていく。それに加えて……

メモリー『はっ！その程度で大ショッカーを名乗ってんのかよこの（ピー）が!!所詮テメーは（ピー）以下の（ピー）なんだよ!!』

クロノス『（ピー）臭せエ息吐くな！移るんだよ（ピー）野郎！一回死んで（ピー）からやり直して（ピー）して来い!』

……根源が同じドSな所も変わらない為に暴言も酷く、二人に斬り刻まれながらネオアポロガイストも涙目になっていたのだった。

デイエンド『うわあ……えげつないなあ……』

デイケイド『やっぱり過去も未来もドSなのは変わらないんだな、幸助は……』

その光景にDダブルから元の姿に戻ったデイケイドもデイエンドも冷や汗を掻きながらドン引きし、そんな二人を尻目に今までネオアポロガイストを一方的に痛め付けていた二人の幸助は……





デイエンド『俺も一番相手にしたくないね、幸助さん二人なんて悪夢以外何物でもないよ……』

結局のところはネオアポロガイストの自業自得な為に同情はしないが、少なくとも二人の幸助の両方を相手にするとどんな目に遭うかは分かった為、その辺りに関しては反面教師になってくれたネオアポロガイストを密かに讃えるデイケイドとデイエンドなのであった。

クロノス『——終わったか……』

メモリー『ああ』

そんな事を考えてる二人の心境を露知らず、ネオアポロガイストを撃破して一息吐きながらクロノスが静かに剣を下ろすと、メモリーはそんなクロノスの前に立ち、クロノスに剣の切っ先を向けた。

メモリー『ここから先は、お前の物語だ……時間の改変の影響で【この出来事の記憶】は消えるだろうがな。ま、今の俺になれば思い出すだろうが』

クロノス『だろうな……未来が過去に影響を与えたらまずいしな』

メモリーの言葉に驚く様子を見せず、寧ろ自分の予想通りだったと頷いて見せるクロノス。やはり自分同士、言いたいことはわかっていくようだ。そんな過去の自分を見てメモリーも仮面の下で微笑すると、メモリーの身体が突然透け出して徐々に消え始めていく。

メモリー『時間か……じゃあな……次はお前の番だ』

過去の自分にそう言い残すと、メモリーはまるで周りの景色に溶け

込みように消えていき、最後には風と共に完全に消えていったのであった。そしてクロノスはメモリーが消えた場所から視線を上げ青空を見上げていくと、仮面の下で微かに笑みを受かべた。

クロノス『歴史は繰り返されるか……ま、どうせ記憶は消されるから関係ないか。その時はその時だ』

ならば、今は未来の自分が言っていた通り自分の物語を進むだけだと、クロノスは変身を解いて幸助へと戻り、そんな幸助の下に同じく変身を解除した零と大輝が歩み寄っていく。

零「どうにか終わったな、これで一件落着って訳だ」

幸助「ああ………そういや、竜也達は大丈夫なのか？」

自分達を先へ促す為に多くの怪人達と戦うため残った親友達が気になり、幸助は一旦彼らの下に戻ろうと零と大輝と共にTIME学園の校門前に向かって走り出していった。



一方、竜也達は……

竜也「——はあ………お茶が美味しい」

京介「だな………なごむ」

アズサ「そうだねー………」

零と幸助を先に行かせる為に残った筈の竜也達一同は、ビニールシートを敷いてお茶会を開き呑気にお茶を啜っていた。何故なら……

フランドール「行くよ！禁忌「フォーオブアカインド」!!その状態でー！」

「「禁忌「レーヴァテイン」!!」「」

四人に増え、炎の魔剣で怪人の群れをなぎ払うフランドール。

こいし「無意識の力、見せてあげるね！深層「無意識の遺伝子」!!!」

紫「うふふ♪スキマの真髄を見せてあげるわ♪」

萃香「にやっははははは！ミッシングパワー全開ーっっ!!!」

妹紅「ふははははは!!燃える燃えるオっ!!」

敵を撃ち殺していくこいしに、怪人をスキマに吸い込んでいく紫。巨大化して敵を吹き飛ばしたり踏みつぶしたりする萃香、炎の翼を生やして怪人を燃やしていく妹紅。

キャンセラーα『ああもう!!なんで僕がこんな目にーっっ!!!体が消えたと思ったらいきなりこれだよ!!!』↑泣き叫びながら敵を切り裂いていくキャンセラー。

エクスEX『あはは……この戦いが終わったら董と一緒に遊園地に行くんだアアアアアツ!!!』↑死亡フラグ全開のエクス。

その他のEXボスに最強フォームの外史のライダー達（一部、本人の意識があるが）が次々と怪人を無双していく為に、竜也達の出番はなく、怪人達は数分もしない内に全滅し、デイエンドに召喚された者達も消えていったのだった。

姫「ズズウー……お？向こうも終わったようだな」

魚見「みたいですですね、はむ……あ、このお団子美味しい」

映紀「はあ……楽だなあ」

怪人達が全て倒されたのを見ても特に気にせず、結局幸助達が合流して来るまでお茶会をしていた一同なのであった。

因みに優矢は……

—ズザザザザザザザザザザザザザザザザアツザザザザアツザザザアツ!!!—

優矢「うぎやああああああああ!!!熱い熱い熱い!!!摩擦で燃えるうううう!!!」

なのは（不破）「やかましいの!」

なのは「あはは……南無」

泣きながら走っていると、ところを町まで戻ってきたなのはコンビに見  
つかり、なのは（不破）がお仕置きとしてみの虫状態にされバイクで  
引きずられており、なのははそんな光景に普段零にしていること（G  
YAKUSATUという名のOSHIOKI）を棚に上げ、優矢に手  
を合わせ合掌していたのだった。



アルファ『消えろ……』

ルナ『ぐ、ふっ……地獄でまってるわよ……』

仮面の下から血を吐き出しながらアルファにそう告げると、ルナはそのまま灰と化して消滅していったのであった。

アルファ『……私は……化け物じゃない……』

そしてその場に一人残されたアルファは、灰となったルナだった物を見下ろして何処か寂しげにそう呟き、変身を解除してその場から静かに去っていくのだった。



―天満家―

幸助「いや、本当に助かったぞ竜也、京介」

竜也「俺の世界を救ってくれた礼だぜ？それにライダーは助け合いだろ？」

京介「だな……まあ、あの青いライダーの所為で全然噛み殺してないが」

ネオアポロガイスト達との戦いから数十分後。竜也達の無事を確認した幸助は零と大輝を連れて彼らを家に招き、竜也と京介に救援に来てくれた礼を改めて口にし、その光景をアズサ達と合流した零が力



メラに収めていた。

零「昔の幸助に後の七柱神と呼ばれた二人の過去か……貴重な一枚が取れたな！」

姫「おおつ、それはかなりレアな写真じゃないか？」

大輝「ふむ……確かにそれはお宝だ。俺にも後で焼き回しをくれたまえ零」

零「まだいたのか海道……」

大輝「まあね。この時代のシズクさん……もとい、スバルさんに風麵を評価してもらおうのさ！より美味しい風麵を作る為にね」

零「……ホントに泥棒よりラーメン作りの方が生き生きしてないかお前……」

得意げに笑いながら告げる大輝に零も顔を引き攣り、姫達もそんな零の隣で苦笑を隠し切れずにいた。

その後、実際にラーメンを食べて貰ったスバル（中島）にアドバイスを貰った大輝は試行錯誤を繰り返し、また一段と風麵がおいしくなったのかなんとか……

零「——あ……そういえば優矢はどうした？」

大輝「ああ、彼かい？彼なら……」



―天満家道場―

なのは（不破）「うふふ〜♪避けないと逝っちゃうの〜♪」

優矢「いやあああああああ!?!過去も未来も冥王は冥王なのね〜〜〜!?!」

今回役立たずだった優矢はOSHIOKIと称し、なのは（不破）との訓練を受けさせられていたのだった。

と言っても、薙刀（真剣）で攻撃し、それをひたすら避けるだけだが……

そしてそれから数分後に、何処からか話を聞いたなのはの父と兄がやってきて訓練に混ざったとか……

零「……無事には帰って来れんなアイツ……冥王に父さんと恭兄が相手とか……」

大輝「まったく、もう少しメンタル面を鍛えられないものか。オリジナルクウガの五代雄介を見習ってほしいね」

零「誰だそれ？」

大輝から話を聞いて道場にやって来た零と大輝もその訓練の風景を陰から眺め、あの三人に見付かって巻き込まれない内に逃げようと静かにその場から離れていくのだった……。



— 光写真館 —

優矢「痛い……体中が痛いよ……」

それから数時間後。夕方になって漸くなのは（不破）達の訓練から解放された優矢は、全身包帯だらけの姿で写真館に戻ってきて直ぐにソファーに倒れ込み呻き声を上げていた。

ヴィータ「アイツ、冥王の訓練受けてよく生きてたな……」

スバル「あははは……ま、まあでも、これで優矢さんもかなりレベルアップしたんじゃないですかね？私達もそうでしたし！」

ノーヴェ「ああ……初めてクロノスの世界で訓練を受けた後、アタシ等もあんな感じだったしな……」

思い出すように瞳を伏せてノーヴェの瞼の裏に蘇るのは、今の優矢のように未来の幸助達の訓練を受け全身包帯だらけになった自分達の姿。同じようにその時の記憶を思い出していくティアナ達も額から冷や汗を流しつつ遠くを見つめ、他のメンバーもそんな彼女達と優矢を見て苦笑していた。

映紀「大輝の奴も、もう他の世界に行っちゃったみたいだしな」

零「ああ、結局はまた借りを作るハメになったし……良いところ取りが上手い奴だよ、本当に」

栄次郎が容れてくれた珈琲を手に大輝の事を口にする映紀の言葉

に頷きながら、焼き回しの写真を受け取りさつさと別世界に向かった大輝の顔を思い出し溜め息を吐く零。すると、そんな零の下になのが歩み寄り、零がこの世界で撮影した写真の為にスペースを空けるアルバムを見つめながら口を開いた。

なのは「ねえ、零君。これでこの世界は救われたのかな？」

零「ん？……ああ、多分な」

何処か穏やかげに微笑んでなのはにそう言うと、零は天井を見上げながら先程別れてきた幸助の事を脳裏に思い出していく――。



数十分前、天満家前……

幸助「――行くのか？」

竜也と京介が自分達の世界でやることを成す為に元の世界に帰り、姫達もなのは（不破）との訓練で動けない優矢を運ぶために一足先に写真館に戻った後、幸助は天満家の玄関から表に停めてあるデイケイダーに誇る零とアズサに話し掛けていた。

零「ああ……俺の役目も、これで終わりだと思う」

幸助「そうか……色々助かった」

零「いいさ。未来のアンタにはデカイ借りが山ほどあるんだ……これでもまだ返し切れてない借りがな」

思えば、未来の幸助達には助けられてばかりである。NXカブトの世界でも命を救われ、桜ノ神の世界でも彼が筆頭に駆け付けられれば姫を救い出す事など出来なかったのだから。

幸助「お前たちがこの世界から去れば、俺たちの記憶から今回の出来事が消えるだろう……まあ、未来の俺は思い出すだろうが」

零「……未来のアンタならあり得るな」

幸助「別れは言わん……いつか、未来で」

そう言つて、幸助は玄関から外へと出てデイケイダーに歩み寄り零に右手を差し延べる。それを目にした零は一瞬呆気に取りられるようにキョトンとなるも、直ぐに笑みを浮かべ頷き返した。

零「ああ……また、未来で会おう」

今此処にいる幸助にとつては遙か未来になるが、必ず会えることに違いはない。未来で必ず再会することを誓い、零は幸助の手を握り返し、過去の世界の幸助と別れてデイケイダーを走らせるのだった。



—光写真館—

零「——幸助は変わらないな……過去も未来も」

この世界の幸助との最後の会話を思い出しながら零は彼と握手し

た右手を見つめギュツと握っていると、包帯だらけの優矢を部屋にまで運ぶザフィーラとすれ違いに写真を現像していた栄次郎が室内に入ってきた。

栄次郎「零君、頼まれた写真の現像終わったよ。今回もかなりの傑作揃いだね♪」

零「お、待ってました」

なのは「あ、私達にも出来た写真見せて!」

栄次郎からこの世界で撮った写真を受け取る零の下になのは達も集まると、零はテールに現像した写真を並べていく。その中には、大輝も絶賛した幸助と竜也と京介の三人が写る写真もあり、彼等の背後には写真でも凄みを感じさせるオーラと三人が変身するライダーの姿が浮き上がっていた。

なのは「竜也さんに京介さんに幸助さんかあ……三人の背後に変身したライダーが映ってるね(汗)」

フェイト「しかも、何かオーラみたいな物が湧き出てるような……(汗)」

零「ああ、海道の奴が欲しがるのも頷けるな……」

アズサ「零、その写真も飾ろうか?」

その凄まじい写真になのはとフェイトも冷や汗を掻き、零もそんな二人の反応に頷いてると、アズサもその写真を気に入ったのか額に入れようと提案する。









幸助「——なあ、昨日までのこと、覚えてるか？」

スバル「うーん……ゴメン、思い出せないや」

幸助「だよなあー……何か忘れてる気がするんだよな？」

なのは「私も何か引つかかる気がしてイライラするの……」

それから翌日の朝。いつも通りの日常に戻った幸助、スバル、なのはの三人だったが、歴史の修正のためにやはり昨日までの出来事が記憶からすつぽりと消えていた。思い出せそうなのに思い出せないという感覚に気持ち悪そうに首を傾げる三人だったが、それもすぐに溜め息を吐いて考えるのを止めた。

幸助「まあいいか。タイムオーガの件も早く解決し、気にしてる場合じゃねーよな……」

「だよね……」

そう、彼らの戦い（物語）はまだ終わっていない。

本当の戦い……試練はこれから始まるのである。

幸助「うしつ、一刻も早くタイムオーガを倒すぞ！」

スバル「うん！」

なのは「なの！」



零と幸助達との戦いの中でルーミアによつて幻想郷に飛ばされてしまった真也は、未だにルーミアを肩に担いだまま次から次へと襲い掛かる妖怪達を薙ぎ倒し、帰る方法も分からずに森の中を長らくさまざまに迷っていたのだった……。

「

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolve デイ  
ケイドパート

—○○○の世界・雑木林—

——とある町の郊外に存在する寂れた雑木林。其処は昼夜問わず幽鬼の類が出て来ても可笑しくないような不気味な雰囲気漂う場所な故、付近の住民の誰もがその森に足を踏み入れる事は皆無に等しい。だが……

—ザザザザアツ!!—

「はぁ、はぁ、はぁっ……!!」

「早くっ！早くっ!!」

そんな人気のない筈の場所で、必死に木々の間を駆け抜ける数人の少年少女達の姿があった。

彼等が背中に背負っているリュック、その服装や頭に被ってるキャンピング用の帽子などの格好から、恐らく学校行事の遠足かキャンプの為にこんな場所に来ていたのだろう。

だが、彼等のその表情はまるで幽鬼でも目にしたかのような恐怖に染まった顔を浮かべており、その彼等が逃げてきた方向からは……

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!』

『シャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!』

有象無象の幽鬼達……否、グロンギやオルフェノク、アンデッドやゾディアーツなどの多種多様の怪人達が奇声や雄叫びを上げながら彼等を追って来る姿があり、少年少女達はその怪人達に追われて逃げていたのである。しかし……

—ガッ!—

「あっ?!」

—ドシャアッ!—

「ッ?!かおりっ!」

少女の一人が雑木の根に足を引っ掛けてしまい、そのまま転んで倒れてしまったのだった。それを見た他の少年少女が慌てて少女へと駆け寄って彼女を抱き起こしていくが、これを機にと怪人達が一気に子供達へと迫って飛び掛かり、もうダメだと子供達が思わず顔を背けた。次の瞬間……

—ブウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ンッ!!!!—

『?!—ドグオオッ!!—ヌエアッ?!』

『ギャツ?!』

「……………え?」

「な、なに……………?」

一体の怪人の爪が子供達に目掛けて振り下ろされようとしたその時、突如轟音のようなバイク音と共に一台のマシンが子供達の頭上を飛び越えて現れ、怪人達に突撃し跳ね飛ばしていったのだった。そして怪人達を跳ね飛ばしたマシンはそのまま呆然と固まる子供達の前で停止すると、マシンに乗った青年……………黒月零はヘルメットをかなぐり捨てて子供達に叫んだ。

零「おい、何してるツ?!とつとと逃げろツ!」

「ツ……………は、はいっ!」

「あ、ありがとうございますっ!」

零に呼び掛けられ漸く正気に返り、子供達は零にお礼を言いながら倒れた仲間を支えて森の外へと逃げていく。そして零もそれを最後まで見送ることなく自分のマシン……………デイケイダーから降りて怪人達と対峙していくと、森の奥から続々と現れる怪人達の数に思わず舌打ちしながら、コートの下にあらかじめ巻いていたデイケイドライバーを露出させ左腰のライドブツカーからカードを取り出した。

零「此処もかつ。クソツ、どうなってるんだこの世界はつ……………変身ツ!」

『KAMENRIDE:DECADE!』

そう毒づきながらバックルにカードをセットしてスライドさせると電子音が鳴り響き、零はディケイドへと変身して両手を叩くように払いながら怪人の大群へと勢いよく駆け出していくのであった。

『仮面ライダーディケイド&リリカルなのは 九つの世界を歩む破壊神』

戦国バトルロワイヤル!』



——どうしてこんな事態になってしまっているのか、その経緯は数時間前にまで遡る。

自分達の世界を救う為に、様々な仮面ライダーの世界を巡ってその世界で起きる滅びの現象を阻止し解決してきた零達一行が次に辿り着いたのは、学校の歴史の教科書に載っているような大昔の日本の城や武士達、そしてマシンに乗った様々な仮面ライダー達が戦場を駆け抜けるという謎の絵が描かれた背景ロールの世界だったのだ。

そんな不可解な絵に零達も最初は困惑しながらも、とにかくこの世界を調べれば何か分かるだろうと何時も通りに探索を開始しようと写真館の外に出て、零達は真っ先に視界に飛び込んできた光景に絶句して言葉を失ってしまった。何故なら……

——写真館の外に広がっていたのは、阿鼻叫喚が絶え間なく響き渡る地獄絵図の光景……。



数えるのも馬鹿らしくなるほど無数の怪人達が無差別に人々を襲い、町を焼き、無慈悲に命という命を食い散らかす地獄のような世界だったのだ。

そんな光景を不意打ちで見せられ呆気に取られるのも束の間、人々を襲っていた怪人達は驚愕する零達を次の標的にして襲い掛かり、零達もすぐさま応戦し人々を救う為に駆り出した。

写真館の防衛をヴィヴィオとナンバーズが勤め、それ以外のライダーである零、なのは、優矢、姫、アズサ、魚見、映紀の七人はそれぞれ街中に散らばって怪人達を撃退し、逃げ惑う人々をスバル達が安全な場所にまで誘導して避難させる。

そうしてスバル達が避難させた住民から話を聞いた所、どうやらあの無数の怪人達は突然前触れもなく何処からか現れ町を襲ってきたらしく、その原因は誰にも分からないらしい。

故に謎ばかりが深まるが、それでもみすみすこの世界の住民達が見殺しにされるのを見過ごす訳にはいかないと、零達は住民の救出を続けながら怪人大量発生の原因究明に動いていたのだが……

—ガギイイイツ!!—

『グウアアツ?!』

『ガアアアアアアツ!!』

ディケイド『ツ！次から次へと……！一体何処から沸いて来るんだコイツ等っ?!』

原因究明に動いてから休む間もなく戦い続けて、既に数時間が経と



泣き言を言ってる隙はないと、デイケイドは別の場所に向かう為に雑木から背中を離れた。その時……

—ズガガガガガガガガアアンツ!!!—

デイケイド『?!グツ?!何だツ?!』

突如デイケイドに目掛けて何処からか無数の銃弾が放たれて襲い掛かり、それに反応したデイケイドは咄嗟にライドブツカーで銃弾を防ぎながら身を屈めて残りの銃弾を回避したのだった。そしてデイケイドも突然の不意打ちに困惑しながらも銃弾が放たれてきた方に視線を向けると、其処には……

—ザツ、ザツ、ザツ、ザツ……—

『……………』

雑木林の奥から、草を踏み鳴らして静かに歩み寄って来る一人の人物……。灰色のマントを纏って全身を隠し、赤い銃のような武器の銃口をデイケイドに向けながら近づいてくる謎の戦士の姿が其処にあったのだった。

デイケイド『ツ……!お前は……?』

『……………フン……………』

—ギユイイイイイイイイイイツ……………!—



の武器とは、デイケイドのと同じライドブッカーSモードを全体的に赤く染め上げたような剣だったのだ。デイケイドも自身の武器と酷似した武器に驚愕を隠せないでいるが、謎の戦士は構わずにデイケイドのライドブッカーを切り払いながら素早く斬撃を叩き込み、後ろ回し蹴りを放つてデイケイドを吹っ飛ばしてしまう。

デイケイド『クッ！クソッ……！思うように身体が動かんっ……！』

此処に来るまで連戦続きで体力を消耗している上に、疲労で満足に身体が動かせない。しかしそんな事は向こうからすれば好機でしかなく、謎の戦士が左腕を掲げると共に無数の怪人達が一斉に動き出し、ダメージと疲労で動きが鈍くなっているデイケイドに向かって一気に飛び掛かっていく。が、その時……

『ATTACK RIDE : BLAST!』

—ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガアアア  
ンッ!!!—

『ッ?!ギヤアアッ!!』

『ヌウアアッ?!』

『……!』

デイケイド『ッ!今の攻撃は……!』

デイケイドに飛び掛かろうとした怪人達の真横から、何処からか響

き渡った電子音声と共に無数の銃弾が飛来して怪人達に直撃し吹き飛ばしていったのだ。その光景を目にしたデイケイドが目を見開いて呆然となりながら銃弾が放たれてきた方に振り返ると、其処にはライドブツカーGモードとウイザーソードガンGモードの銃口を謎の戦士達に向けながらデイケイドの下に駆け寄って来る二人の仮面ライダー……なのはが変身したトランスと、魚見が変身した聖桜の姿があった。

トランス『零君、大丈夫ツ?!』

デイケイド『なのは、市杵宍……!お前ら、町の方はどうした?!』

聖桜『桜井さん達が代わりに引き受けてくれています。貴方が郊外の森に行ったきり戻って来ないから、何かあったのではと追い掛けてきたのですが……これは、どういう状況ですか?』

トランスと共にデイケイドを守るように前に出て、謎の戦士と怪人の大群に銃口を向けたまま状況の説明を要求する聖桜。

トランスと聖桜からすれば、いつまで経っても戻って来ない零を追いかけて来てみれば、いきなり見知らぬ戦士と怪人達がデイケイドを襲っている場面に出くわした訳なのだからこの状況に困惑するのも当然だが、生憎デイケイドもあの謎の戦士の正体についてはまだ何も分かっていない。だが……

デイケイド『詳しいことはまだ分からん、俺も今さっき奴らに襲われたところだからな。ただどうやら、町を襲った怪人共を呼び出しているのは、あのマントを身に付けてる奴のようだ……』

トランス『?あの人……?』

ふらつきながら身体を起こしてそう答えるデイケイドの言葉を聞いて二人が謎の戦士に目を向けると、確かに謎の戦士の足元の影から未だ大量の怪人達が湯水のように出現しており、それを見て聖桜も納得したように頷いた。

聖桜『成る程……つまりあの人物が、この世界で暴れている怪人達を呼び出して、操っている元凶という事ですか』

トランス『でも、どうして……ううん、ならどうして、あんな酷い事をつ！貴方は一体、何が目的なんですか?!』

『……………』

何の罪もない子供から老人までの人々の命を無慈悲に奪い取り、町を焼いて破壊と殺戮の限りを尽くす蛮行。それらの行為が怪人達を生み出した元凶である謎の戦士による指示なら、何故あんな残酷な真似をしたのか。その光景を実際に目の当たりにしたからこそ、怒りを露わに謎の戦士に問い詰めるトランスだが、謎の戦士は無言のまま何も答えずに右手に持つ赤いライドブツカーを構え直し三人に再び斬り掛かろうとする。だが……

……………シユウウウウツ……………

『ツ……………時間切れか……………』

デイケイド『……………?何?』

デイケイド達に斬り掛かろうとした動きを何故か突然止めて、謎の戦士は自分の左手を見下ろしながらそう呟いたのだ。その僅かな声を聞き取ったデイケイド達もどういいう意味だと訝しげな反応を浮か

べるが、よく見ると謎の戦士の左手から粒子のようなものが立ち上り始めており、謎の戦士はそんな自分の左手を見ても気に留めた様子もなく軽く鼻を鳴らした。

『まあいい……コイツ等を制御する実験は済んだ……後は——』

— …… ピシツ …… ビシツ、ビシイツ …… ガシヤ  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンツ!!!—

デイケイド 『ツ?!何だツ?!』

聖桜 『空が……割れた?!』

謎の戦士がそう呟いた次の瞬間、突如謎の戦士の上空に巨大な亀裂が走り、硝子細工のように砕けて時空の裂け目を作り上げたのだ。そして前触れもなく上空に突然出現した時空の裂け目から巨大な突風が放たれた後、裂け目は周囲の木々や怪人達を吸い込んでいってしまい、更には謎の戦士もそれに身を委ねて裂け目の中へと飲み込まれていってしまった。

— ビユウ ウウウ ゴオ オオオ オオオ オオオ オオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオ——  
オオオツツツ!!!—

トランス『ううつ……!!な、何なのあれっ?!吸い込まれるっ……!!』

デイケイド『クソツ……!!市杵宍ッ!お前の魔法の力でどうにか出  
来ないのかッ?!』



聖桜『無理ですッ！こんな状況では指輪を取り替える余裕もつ……！』

三人とも裂け目に吸い込まれまいと雑木にしがみつただけで精一杯で、カードや魔法の力を使う余裕なんてない。そうして三人が必死に雑木にしがみつく間にも、裂け目は徐々にその勢いを増して周りの木々を根っこごと吸い込んでいってしまい、そして……

——…バキッ、バキアアアッ!!——

トランス『っ?!う、嘘っ?!キアアアッ!!』

デイケイド『ッ!なのはッ!!』

—ガシッ!—

トランスがしがみつく雑木が遂に耐え切れなくなってバキバキッと嫌な音を立てながらへし折れてしまい、折れた雑木と共に吸い込まれようとしたトランスの手をデイケイドが慌てて掴んで助ける。しかしその次の瞬間、デイケイドが反対の手で掴む木の枝が軋む音を立って折れ始めていた。

トランス『は、離して零君ッ!!このままじゃ二人共……!!』

デイケイド『出来るかそんな事っ!!ぐっ、くうっ……!!』

—ミシッ、ミシミシミシッ……!!—

トランスを見捨てる事など出来る筈がない。どうにかして彼女だけでも助けようと、必死にトランスを自分が掴まっている木に近づけさせようとする。が……









あの武士達や、あの二人の恰好は一体何だ？

何故、シリウスとデイジヨブドが互いに武器を向けて戦い合っている？

そもそも、何故連中はこんな大昔の合戦みたいな真似をしているんだ？

目の前の光景を眺めながらそんな疑問ばかりが次々と思いつかぶ中、今度はまた別々の場所から爆発音と雄叫びが響き渡り、その音に釣られるように零が周囲を見渡すと、其処には……

ブウ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ンツ!!!—

f i r s t 『ハアアツ!!!』

ロード『ハツ!!!』

——此処とは別の戦場で、f i r s tのエンブレムが描かれた旗と、ロードのエンブレムが描かれた旗を背中に掲げた武士達が刀をぶつけ合わせて激突し、その中でそれぞれのマシンで戦場を駆け抜けて激しいカーチェイスを繰り広げるf i r s tとロードの姿があり……

—ズガガガガガアアンツ!!—

エグザム『ゼエアアツ!!ハツ!!』

エクス『グッ、ウアアアッ?!』

また別の戦場では、武士達と入り乱れエグザムがエグザムカリバーによる攻撃で怯んだエク스에飛び掛かって土砂を転げ落ちていったり……

『ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!』

デイルイト『グッ!このっ!』

雷牙『ダアアアアアアアアッ!!!』

他の戦場では、素早い動きで襲い掛かって来るサンダーレオンの爪を必死に避けながら応戦するデイルイトに、雷牙が両腕のクローを振り上げて奇襲を仕掛ける姿もあったのだった。

零「———そうか……そういう事か……此処は……」

三者三様……様々な場所で見知ったライダー達が合戦を繰り広げるその光景を前に、幾分か冷静さを取り戻した零は何かを理解したように目を細めて呟く。

零「——『戦国世界』……『武者ライダー』の世界か……」

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evoile デイ  
ケイドパート①

——戦国バトルロワイヤル。

それは、この”戦国世界”において『天下』という名の夢に取り憑かれた武将達がそれぞれの国々の守護者である『武者ライダー』を使役し、他の武者ライダーを全て倒して最後の一人になるまで戦い続けるという天下取りの大合戦の事だ。

そして全ての武者ライダーを倒し、最後の一人として勝ち残った瞬間にその覇者には天下と、天下を支配した証である”力”が与えられると言ひ伝えられているらしい。

179

零「——ほほう……で？そんな嘘か誠かも分からん与太話を信じて、こんなド派手なドンパチが毎日日常茶飯事で起きてるって事か？」

ドツ  
ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアンツ!!!!  
——

『『ウウウ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!』』



若干呆れを含んだ様な口調でそう言いながら零が目を向けた先には、無数の爆発と銃弾が飛び交う戦場を駆け抜けながら敵軍に目掛けて進軍する武士の軍勢の姿があつた。

そしてその様子を岩影からモグラのように顔を出して観戦していた零だったが、突然真横から誰かに引つ張られて岩影に引きずり込まれてしまい、零を岩影に引つ張つた人物……全身や甲冑もボロボロの恰好になつている武士は、涼しい顔を浮かべる零に大声で怒鳴つた。

「ちよ、なにやってんスカ旦那ツ?!危ねえーでしょツ!流れ弾が飛び交つてんのに頭出すとか死にてえんですかいツ?!」

零「悪い悪い、分かつたからそう怒鳴るな……んで?それよりさっきの続きだが、その武将達つてのはその天下と”力”とやらを手に入れる為に、あつちこつちでライダーを従えて戦つてるのか?」

先程適当に選んだこの戦場に密かに侵入した時に取っ捕まえ、戦国バトルロワイヤルの事を初めとしたこの世界での様々な出来事を教えてくれたボロボロの武士に再びそう問い掛けると、武士は岩影からこつそり外の戦況を盗み見ながら話の続きを語り出した。

「さあ……皆が皆そうなのか分かりやせんが、少なくともこの天下取りに挑んでいる殆どの武将さん方は、そのつもりじゃあないスカねえ?武者ライダーが一体ありや、国を一つ焼くなり奪うなり簡単に出来るわけですからあ、遊びでやってんじゃねえのは確かですし」

零「……それがこの世界の現状、か……何となく察しは付いてたが、これはあの二人を探し出すのも骨が折れそうだ……」

「……………何か言いやしたか？」

零「……………いや、なんでも」

そう答えつつも、零は頭痛を覚えて思わずこめかみを抑えてしまう。恐らく自分と同様にあの裂け目に吸い込まれこの世界に飛ばされたであろうなのはと魚見を早く見つけ出し、写真真館が滞在する世界に戻ろうと考えていたのだが、こんな戦国時代真つ只中な世界であるの二人を見つけ出そうなど至難の業だ。

そう考えて溜息を吐きつつも、それでも諦める訳にはいかないかと、零は重い腰を上げて服に付いた汚れを払っていく。

「あ、もう行くんですかい旦那？」

零「ああ、早く探さなきゃならない奴らがいるんでな……………いきなり踏ん捕まえて悪かった、世話になったよ。……………そういえば、お前は一体何処の軍に仕えてるんだ？」

一応この男にはこの世界の現状を教えてもらった恩もあるし、仮にもしこの世界の武者ライダーと戦わなければならない事態になったとしても、彼が仕えてる軍とは出来るだけ戦わないにしようと考え、何となしにそう質問すると……………

「あっしですか？あつしや、武者ツヴァイ軍の武将、”信長”様に仕えてるんですわ」

零「……………は……………？」

ピタッと、武士が口にした予想外の名前を聞いた途端に服の汚れを払っていた零の手が不自然に止まり、険しげな顔で武士の方に目を向

けていく。

零 「信長つて……まさか、あの織田信長の事か……?」

「……?どの信長様かは知りやせんが、あつしが仕えている主君は織田信長様で間違いないですぜ。……それが、どうかしましたかい?」

零 「……いや、別に何でも……」

天下統一を目指す戦国世界と言うぐらいだからもしやと思ったが、まさか本当に有名な武将、それも凶らずもあの織田信長が率いる軍の武士と話をしていたとは思わず内心驚いてしまう零だが、努めて冷静さを装いながらポケットからコインを取り出し、指で弾き武士に渡した。

「うおつ、おおおつ?な、何すかこりや?」

零 「色々と教えてもらった礼だ。ついでにアンタと、アンタの大将の無事をせいぜい祈らせてもらおうよ……」

「お、おお。へへッ、そんなん流れ者の旦那に祈られるまでもねえですよ。何せあつし達の武者ツヴァイは最強ですからね!そんじよこちらの武者ライダーにや遅れは取らな——」

「う、う ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ

あああああああああ——  
!!!!!!」

『……ッ?!』



達を見て思わず驚愕する零だが、その間に岩影に隠れる武士の下にもオルフェノクとイマジンが現れ彼に襲い掛かっていき、すぐさま我に返って武士に組み付くオルフェノクとイマジンを蹴り飛ばし、腰にドライバーを装着した。

「だ、旦那あ……！」

零「下がってろッ！変身ッ！」

『KAMENRIDE：DECADE！』

そう言つて立ち上がるオルフェノクとイマジンを睨み据えながらバックルにデイケイドのカードを装填してスライドさせデイケイドへと変身していき、それを目にしたオルフェノクとイマジン、そして武士も驚愕を露わに動揺していた。

「だ、旦那ッ?!アンタッ?!」

デイケイド『驚いてる暇があつたら早く隠れてろッ！ハアアッ！』

そう言いつつ正気に戻って飛び掛かってきたイマジンの攻撃を払い退けながら拳を打ち込んで後退りさせ、デイケイドは左腰のライドブッカーをソードモードに切り替えてオルフェノクに斬り掛かっていく。

デイケイド（いきなり前触れもなく現れた怪人……間違いない、恐らく奴が……！）

オルフェノクと戦いながらデイケイドの脳裏を過ぎるのは、この戦国世界に飛ばされる要因となったマントを纏ったあの謎の戦士との戦い。あの裂け目の中へと消えた奴がこちらの世界に来ていたとし

ても可笑しくない。ならば恐らくはこの怪人達もと、オルフェノクとイマジンを纏めて斬り裂いて爆散させ、デイケイドは戦場で武士達に襲い掛かる怪人達に目掛けて疾走しライドブツカーを振るって怪人達に斬り掛かっていくのであった。



そしてその一方、デイケイド達がいる戦場から離れた場所に位置するとある戦場でもまた、突如現れた無数の怪人の大群がやはり無差別に両陣営の兵達を襲う姿があった。だが……

―ズシヤアアツ！ガギイインツ！―

『ウエアアツ?!』

『グボアツ!』

武者ツヴァイC P 『ハアツ！フツ!』

武者リノベーション 『ハツ！ヤアアツ!』

其処は、まともな抵抗も出来ぬまま武士達が怪人達に襲われる他の戦場とは明らかに違い、兵達に襲い掛かる怪人達を次々と撃退していく二人の武者ライダー……武者ツヴァイ軍の守護者の武者ツヴァイ・クラスターパンドラと、武者リノベーション軍の守護者である武者リノベーションが、自分達の陣営の兵達と総大将を守る為に戦う姿があったのだった。

「クツ！何なのだよやつらはツ?!いきなり現れたかと思えば、いきな

り襲い掛かって来るとは……!」

「家康様ツ!このままでは危険ですツ!一度本陣まで退却を……!」

「馬鹿を言うなツ!敵軍の大將を前に、こんなところで引けるものかッ!」

家康と呼ばれた馬に跨がる白髪の女性はそう言うと、怪人達が現れるまで今まで対峙していた敵陣営である武者ツヴァイ軍の武將……家康と同じく馬に跨がって武者ツヴァイの戦いを静かに見守る、背中から真紅のマントを靡かせる流麗な黒の甲冑を纏った長い黒髪の女性を睨み付けていく。が、その時……

—ズガガガガガガガガガガガガアアンツ!!!—

武者ツヴァイCP 『ツ?!グ、ウグアアツ!!』

武者リノベーション 『ウアアアツ!!』

「ツ?!ツヴァイツ!」

家康「な、何だ、今度はツ?!」

足軽達を守りながら怪人達を蹴散らす武者ツヴァイと武者リノベーションに突如無数の銃弾が撃ち込まれ、二人は装甲から無数の火花を散らして吹っ飛ばされてしまったのだ。そしてそれを見た家康と黒髪の女性が銃弾が放たれてきた方へと振り返ると、其処には……

—ザッ、ザッ、ザッ……—

『――先ずは二人……見付けた……』

赤いライドブツカーの銃口を突き付け、背後に無数の怪人達を従えて静かに歩み寄って来るマントを纏った人物……零達がこの世界に飛ばされる前に戦った、謎の戦士の姿が其処にあったのだった。

「奴は……」

家康「また新手かつ……！リノベーションツ！早くあやつを仕留めて、敵の武者ライダーも倒してしまえツ！」

「ツ！待て家康ツ！迂闊に手を出すなツ！」

武者リノベーションに謎の戦士の討伐を命じる家康を黒髪の女性がすぐさま呼び止めようとするが、時既に遅く、武者リノベーションは周囲のグロンギとヤミーを斬り捨てながら謎の戦士に目掛けて一気に駆け出し斬り掛かっていく。しかし……

―ガギイイツ!!―

武者リノベーション『ツ?!―ズバアアツ！ガギイイインツ！グガアアンツ！―ウアアツ?!』

『ヌウアアツ！ハアアツ！』

武者リノベーションが振りかざしたアmanoハバキリを払い退け、謎の戦士が瞬時に剣形態に切り替えた赤いライドブツカーによる凄まじいまでの速さの斬撃が武者リノベーションに叩き込まれていき、武者リノベーションの首を掴み上げた。次の瞬間……







うとした瞬間、謎の戦士が武者ツヴァイのパンドラソードを弾き返し  
ながら赤いライドブツカーの刃に莫大なエネルギーを溜めて横一閃  
に薙ぎ払い、それと共にライドブツカーの刃から無数の真紅のエネル  
ギー刃が縦横無尽な軌道で武者ツヴァイとデイケイド、そして二つの  
陣営……武者ツヴァイ軍と武者リノベーション軍に襲い掛かって無  
数の爆発を巻き起こしていき、両陣営の多くの兵達が次々と事切れて  
倒れていってしまう。

「ぐうッ！い、家康様ッ！リノベーションも失い、我が軍も甚大な被害  
を受けていますッ！これ以上は……！」

家康 「クツ……おのれええええっ……退却だっ！退却しろおっ！」

武者ライダーを失った以上、これ以上この場に留まっても自分の軍  
が余計な被害を受けるだけだと悟ったのか、家康は馬を操って自軍の  
兵達に退却指示を送りながら撤退を開始していく。そして家康達の  
後を追って逃げる武士達を怪人達が背後から追い撃ちを掛けようと  
するが、それを阻むように敵軍の大将であるハズの黒髪の女性が馬を  
操って怪人達を刀で切り払い、武者リノベーション軍の兵達の撤退を  
何故か手助けしつつ自軍の兵達に叫ぶ。

「我々も陣形を立て直しつつ、本陣にまで後退するぞッ！余力がある  
者は負傷している兵を守りながら避難させるのだッ！」

『……あの女……』

武者ツヴァイ軍と武者リノベーション軍の兵達の撤退を手伝いつ  
つ、的確な指示を飛ばして馬を巧みに操りながら怪人達を次々と蹴散  
らしていく黒髪の女性。だが、謎の戦士は武者ツヴァイと戦いながら  
そんな黒髪の女性を無言のままジッと見つめ、何を思ったのか、いき  
なり武者ツヴァイの腹を蹴り飛ばし黒髪の女性に目掛けて赤いライ



黒髪の女性に目を向けてゆつくりと彼女に歩み寄っていき、それを見た黒髪の女性も険しげに顔を歪めて刀を持つ手に力を込めた。その時……

—バシユウウンツ！—

『……ッ！チツ！』

謎の戦士の真横から、突然一発の銃弾が放たれて謎の戦士に襲い掛かった。完全に頭部を捉えたその弾は謎の戦士に直撃し掛けたが、謎の戦士は咄嗟に身を傾けてソレを回避しながらその場から跳び退くと、今まで怪人達と戦っていたデイケイドがライドブッカーガンモードの銃口を謎の戦士に突き付けながら女性の前に立った。

「ッ……！お主は……」

デイケイド『怪人達を生み出すだけでなく、武者ライダーを吸収する能力か……いよいよ持ってきな臭さが増してきたな、お前の正体も』

『……貴様……何故此处に……』

デイケイド『お前のせいでこっち側に飛ばされてきたんだよ、お陰で大迷惑している……で、お前こそ何をしてる？あの世界での破壊だけでなく、こんな真似をして……何が目的だ？』

ライドブッカーGモードの銃口を突き付けたまま謎の戦士の目的を問い詰めようとするデイケイド。しかし、それを見ても謎の戦士は軽くを鼻を鳴らすだけで身構えもせず……

『生憎だが、こちらはお前なんぞに構ってる暇はないのでな……お前









わざとらしく戯けるように小首を傾げるデイケイドに蘭丸と呼ばれた茶髪の少女が食ってかかるが、それを制するように蘭丸達の背後から声が聞こえて振り返ると、其処には赤いマントを靡かせこちらに歩み寄って来る黒髪の女性の姿があった。

蘭丸「姫様……！」

デイケイド（？蘭丸、つて……まさか、森蘭丸？この女が？……いや、それこそまさかだな）

森蘭丸と言えば、あの織田信長の側近であった有名な武将の名だ。それがまさか、こんな年端も行かぬ少女な訳がないと心の中でデイケイドが否定する中、黒髪の女性は兜を脱いで誰もが見惚れるような綺麗な黒髪を曝し、デイケイドと向き合っていく。

「助けてくれた事には素直に礼を言おう……だが、伊達家の武者ライダーであるハズのお前が、何故我等を手助けするのだ？武者デイケイドよ」

デイケイド（……？伊達家？武者デイケイド？）

黒髪の女性の質問の意図が分からずに思わず口を閉ざしてしまうデイケイドだが、黒髪の女性はそれを質問の拒否と受け取ったのか、一度瞼を伏せた後に再び口を開いた。

「答えられぬなら、質問を変えよう。伊達の奴は何処にいる？奴は生きているのか？無事なのか？何故今になって、お前が姿を現したのだ？」

デイケイド『おい……おいちよつと待てつ。さつきから何の質問をしているんだっ？伊達つて誰の事だっ？』

「？伊達は伊達家の伊達だ。『伊達政宗』……お前の主君だろうか？」

「デイケイド『伊達、政むっ……？』」

伊達政宗。戦国時代を駆け抜けた有名な武将の一人であるが、それが自身の主君と言われ一瞬困惑してしまうも、デイケイドはすぐに首を振った。

デイケイド『誰と勘違いしているのかは知らんが、俺は武者デイケイドでもなければ伊達政宗の武者ライダーでもない……通りすがりの仮面ライダーだ』

そう言っただけでサイドバックルを開くと、変身を解除して零に戻り、それを目にした兵達と蘭丸、黒髪の女性は目を見開いて驚愕を浮かべた。

「人間、だと……？」

零「ご覧の通りな。だからお前の言う伊達政宗の武者ライダーでもないし、その伊達政宗が何処にいるのかなんて俺には分からん」

「……そう、か……俄には信じがたい話だが、我等の勘違いだった……という事か……？」

零「そういう事だ……で、そういうお前こそ一体何者なんだ？人に質問ばかりしていないで、そろそろ名前ぐらい教えてくれてもいいんじゃないか？」

蘭丸「無礼者っ！貴様っ、姫様になんという口の聞き方を……！」

「構わんよ、蘭丸……確かにお主の言う通りだ。命を助けてもらって  
おいて恩人に勘違いで刃を向け、名も名乗らないとあつては末代まで  
の恥……無礼を詫びよう」

蘭丸を制止して素直に自分の非を詫び、謝罪の言葉を零に口にする  
黒髪の女性。そんな彼女の姿を見て蘭丸や他の兵達も互いに顔を見  
合わせると、おずおずと零に突き付けた刀を下ろして一歩退いてい  
き、それと入れ代わるように、未だ警戒を解かずジト目を向ける零の  
前に黒髪の女性が立ってマントを勢いよく翻し……

「うむ。では、名乗らせてもらおう。問うたからには簡単に忘れてく  
れるなよ？我こそ、この武者ツヴァイ軍の総大将にして、織田の当主  
……

……『織田信長』だッ!!!」

零

……。

零「はっ？」

堂々と、長く美しい黒髪を靡かせて天にまで届かんとばかりに高らかにそう叫ぶ黒髪の美女……”織田信長”と名乗る彼女の名乗りを耳にし、零は思わず間拔けな声を上げて唾然とした顔を浮かべてしまふのであった。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evoile デイ  
ケイドパート②

—安土城・謁見の間—

——安土城。現代の歴史では織田信長が建てた城として有名であり、本能寺の変で明智光秀に織田信長が討たれた後、その後を追うように焼かれて崩れ落ちたとされている。そうしてそんな有名な城で、あの謎の戦士についてと零自身についての説明を聞きたいと申し出た信長達に保護された零は、今現在城の謁見の間に通されている訳なのだが……

零（——想像していた城のイメージと随分掛け離れ過ぎてるな……おい……）

若干気落ちした様子で内心そう思いながら零が謁見の間の部屋中を見回していくと、先ず零の目に付いたのは、畳み18以上はあると思われる部屋の壁にこれでもかと言うぐらいに埋め込まれたモニターの数々。

次に、零の正面に腰を下ろしているこの城の主の信長の背後に掛けられた信長の刀……のすぐ隣の壁に立て掛けられてる、火繩銃よりも高性能なライフルやハンドガン等の様々な銃器。

……折角の立派な城の和のイメージが台無しである。

信長「——？どうした、デイクイドよ？何やら落ち込んでるよ  
うに見えるが」

零「……いや……なんか、一種のカルチャーショックみたいなものを受けている真っ最中というか……まあ気にするな……」

信長「？」

何気に歴史の教科書に書かれているような、日本の城というものに始めて訪れるとあって少なからず期待があったのだが、実物を目にして想像してたイメージと違い過ぎててあからさまにテンションが下がっている零。

因みに何故こんなモニターやらハンドガンなどの現代的な品物があるのかというと、どうやらこの戦国世界は科学技術が異常なまでに発達しているらしく、その技術力は現代に追い付くかそれ以上にまで匹敵するらしい。

それ故に釜は勿論、炊飯器に似たような機械とか普通にあるし、筆も使われるがペンに似た筆も普通に使われている。

戦場においても、ロケットランチャーや戦車までもが持ち出されているらしく、これらを始めとして若干の違いはある物の、この世界の歴史や文化は零達の知る日本の史実とは大きく掛け離れているらしい。

零(信長を始めとした武将が女だったり、武者ライダーがいたり、この戦国世界も平行世界の可能性の一つって訳か……最早なんでもありだな……)

信長「——ふむ……つまり今までの話を纏めると、こういう事か？お主やお主の仲間達は様々な世界を旅しており、その折に訪れたとある世界である敵と遭遇して戦いになり、奴がこの世界に逃げた際にお

主とその仲間達も巻き込まれてこの世界に飛ばされてしまった……と？」

零「……………ん？ああ……………一応はそんな感じ、だな」

少しばかり考え事をしてたせいで後半の部分しか聞き取れなかったが、取りあえず話を進める為に一応頷いておく零。そしてその話を今まで訝しげに聞いていた、蘭丸と信長の家臣の一人である白の甲冑を纏ったポニーテールの茶髪の女性、柴田勝家は戸惑いを覚えていた。

勝家「しかし、俄かには信じ難い話ですね。此処とは別に違う世界があるなど……………」

蘭丸「私は寧ろ一つも信じられません、そんな異世界などと突拍子もない……………。この男が虚言を吐いているだけなのでは？」

「そうかもしれませんね。ですが、彼の話が本当ならただ虚言と吐き捨てることも出来ないでしょう。実際あの敵は、我等と家康の軍の武者ライダーを二人も圧倒して取り込み、更に無数に怪物を生み出して戦場を掻き乱している……………それに私達の知る武者ライダーと違って、人間である彼そのものが、今までの話の信憑性を物語っていますし」

零に疑いの眼差しを向ける蘭丸にそう言って宥めるのは、温厚な雰囲気漂わせる赤み掛かった長髪の女性……………信長の家老の丹羽長秀であり、彼女の言葉に同意するように信長も静かに頷いた。

信長「武者ライダーはこの世界において、武の概念が守護者として具現化した、言わば守り神のような人間とは異なる存在だ。人間が変身して戦うなど聞いた事がない。……………最も、伊達家の武者ライダーが例外で、人間が変身していたとあらば話は別だが」

零「……伊達家、ねえ……そういえばさつき戦場でも気になる質問を幾つか受けたが、その伊達政宗に何かあったのか？無事なのかとか生きているのかとか、何やら随分穏やかじゃなかったが……」

武者デイクイドの主君……この世界の伊達政宗の身に何かあったのか。零がそう質問を投げ掛けると、信長は無言のまま長秀に目配りし、長秀も小さく頷き返し代わりに零に説明し始めた。

長秀「もう半年ほど前になるのですが……我々や他の陣営と同じように武者デイクイドを従え、天下取りの戦いに明け暮れていた伊達政宗率いる武者デイクイド軍が、突如何者かの襲撃を受けたのです」

零「襲撃……？他の陣営からか？」

長秀「分かりません。我々も散々調査を繰り返しましたが、武者デイクイド軍を襲撃した者の正体に繋がる手掛かりは何一つ得られませんでしたので」

信長「……その襲撃により、武者デイクイド軍は事実上の壊滅。伊達家の当主である伊達政宗は消息不明。奴に付き従った武者デイクイドも見付からず、恐らく襲撃を受けた際に何者かに倒されたのだと思われるが……」

零「……成る程……だから俺を見て、その武者デイクイドが現れたと勘違いしたって事か」

伊達政宗と共に行方知れずになってる武者デイクイドと寸分違わない外見をしたデイクイドがいきなり目の前に現れれば、伊達政宗が生きていて差し向けたか、そうでなくても武者ライダーが死んだ伊達政宗の弔い合戦で戦に乱入してきたと考えても無理はない。零がそ



う考え一人納得する中、信長が不意にニヤリとその顔に笑みを張り付けながら立ち上がった。

信長「しかしまあ、お主が武者デイクライドであろうがそうでなからうが、そんなのは我等にとつて些細な事だろう……寧ろ、運はまだ我等を見放していなかったと喜ぶべきか」

勝家「……え？」

蘭丸「姫様？それは、どういう……」

家臣である勝家や蘭丸でも信長が何を言っているのか分からないのか、二人揃って頭上に疑問符を浮かべているが、長秀は何か知っているのか両脛を伏せて何も言わず、信長は何処からか美しい扇子を取り出し零に突き付けて……

信長「デイクライド——いや、その姿では零だったか。お主は確か、お主と一緒にこちらの世界へ飛ばされた仲間達を探し、あの敵を見つけ出して倒そうと考えているのだろうか？」

零「？……ああ。あの二人、特に片方の力がないと元の世界に戻れんし、アイツの能力を考えると放置するのは危険だろうしな。なによりに奴には個人的な借りもあるから、それを返さないと気が済まん」

信長「ふむ、そうか。——では零よ、我等がその二人を探す手伝いをする代わりに、我が軍の武者ライダーにならぬか？」

零「………は？」

まるで不意を突くような、予想外な言葉を投げ掛けられた零は鳩が豆鉄砲を食ったような顔を浮かべて信長を見上げていき、零と同じよ

うに今の信長の言葉を聞いて唾然としていた勝家と蘭丸も我に返って慌てて声を荒げた。

勝家「ひ、姫様ツ！突然何をおっしゃるのですかッ?!」

蘭丸「そ、そうですよッ！そんな、何処の馬の骨かも分からぬ輩を武者ライダーにするなどッ！」

信長「突拍子もない事を口にして自覚はしておるよ。だがな、我が軍は先の戦でツヴァイを失ってしまっている……。戦国バトルロワイヤルの要である武者ライダーが無くては、この先の戦を戦い抜くなど到底不可能に近いのだ。それは、お主達とて分かっておるだろう?」

勝家「そ、それは……。そうかもしれませぬが……」

信長「……我はどうしても天下が欲しい。この手で、天下を取らねばならぬのだ。その為に武者ライダーが必要ならどんな手を使ってでも手に入れてみせる……。それが異世界人であろうとな」

蘭丸「し、しかしッ！長秀様も何とかおっしゃって下さいっ！」

長秀「?あら、私は姫様の意見に賛成ですよ?」

勝家「は、はあッ?!何を言っ……!」

長秀「止める理由こそ、それこそ私達にはないはずでしょ?姫様が今言った通り、我が軍が武者ライダーを損失したのは相当の痛手……。無論、例えこのまま武者ライダーを失った状態でも策を張り巡らせさえすれば、武者ライダーの一人や二人は倒せるかもしれないけれど、それは得策とは言えない。こちらの方が甚大な被害が出るのは目に

言えているし、そんな無茶な戦法でこの先も勝ち続けていくなんて、不可能よ」

蘭丸「それはっ……むうっ……」

零「……おい……勝手に話が盛り上がっているところ悪いが、俺はお前達の武者ライダーになる気なんてないぞ」

信長「ぬ？」

零を新たな武者ライダーとして迎えるか否か。それについて徐々に熱を帯び始めている武将達の会話を断ち切るかのように零が横から割って入ってそれを止め、信長達の視線が零に集まっっていく。

長秀「何故ですか？貴方が織田家の武者ライダーとなれば、貴方が探しているお仲間を広い範囲で探せますし、なにより此処で不自由なく過ごせる……悪い条件ではないと思いますけど？」

零「確かにそれは願ったり叶ったりだが……生憎俺は天下に興味はないし、戦の道具にされるのも御免だ。そもそもそんなに天下取りをやりたいうって言うなら、お前達だけでやればいいだろう」

蘭丸「なっ……貴様あつ！我等の戦への決死の想いを侮辱するつもりかっ?!」

零「だからこそだ。俺にはお前達が戦に掛けている覚悟なんぞ分からんし、興味も一切沸かない……そんな奴がお前達と肩を並べて戦つても、お前達のその想いとやらを汚すだけにしかならないだろ」

信長「ふむ……成る程……だから我等の武者ライダーになる気はない、と……お主の気持ちは分かった。

……しかし、お主に拒否権はないと思うぞ？」

零「……何？」

ヒュツと、零と信長の間には冷たい風が吹き抜けたような感覚がした。その意味深な言葉に場の空気が不穏な物へと変わり、零は険しげな目付きで悠然と佇む信長を見据えた。

零「どういう意味だ、それは……何が言いたい？」

信長「どうもこうもない、そのままの意味だ。お主には、我等の武者ライダーになる以外に道はないのではないかと知っている」

零「それがどういう意味かと聞いているんだ……まさか、従わなければ此処で俺を捕らえて、拷問でもするつもりか？」

信長「最初には必要とあらばそうせざるを得ないかとも考えはしたが、今のところそれもないだろ。そんな無粋な真似をせずとも、お主は今や我と共に戦うほか選択肢はないのだからな」

零「……意味が分からないな。俺にはお前に従う理由などない……その底抜けの自信は一体何処から来るんだ？」

例え此処で今さっき言ったように信長達が零を捕らえようとしても、ライダーに変身さえすれば此処を抜け出す事など簡単に出来る。だというのに、零には自分の意向に従うしかないなどと絶対の自信を持って言い切る信長に零は目を細めて思わず身構えていき、信長はそんな零にニツコリ、と天使のような悪魔の笑顔を向けて……

信長「自信ならあつて当然だろう？何せ、我とお主はもう『夫婦』なのだからな♪だから、『夫』が『妻』を裏切るなど出来るハズがないだろ？」

零

「……………  
はあ？」

何言つてんだコイツ？、とそう思うしかない戯言を口にしたのであつた。無論、そんな意味不明な言葉を向けられた零も頭の可笑しい人間を見るような目でニコニコと笑う信長を見上げ、勝家と蘭丸も間抜けな顔で呆然とそんな信長の背中を見つめているが、丁度そこへ城の廊下から一人の侍女が現れ、信長の傍に近づき頭を下げて一枚の文書を手渡した。

「姫様、こちら、先程届けられました」

信長「む、丁度いいところに来たな。よし、下がっていいぞ」

「はい、では」

信長と家臣達に深々とお辞儀をすると、役目を終えたからか侍女はそのまま謁見の間を後にして出ていき、信長は侍女に渡された文書に目を通しニヤリと不敵に笑った。

信長「よし、これでやっと思憂は全て晴れたな」

零「……………おい、こっちは杞憂どころか疑問一つも晴れていないぞ、さっきのはどういう意味だっ？」

信長「ん？ふむ、そうだな……………まっ、実際にその目で見てみるといい。百聞は一見に如かず、だ」

零「あ？」

にんまりと満足げな笑みも隠さずに文書を見せてくる信長に若干イラツと苛立ちを覚えつつも、零、ついでに勝家と蘭丸もその背後に回って怪訝な目付きで文書を覗き込んでいく。其処には……

婚姻届 【承認済み】

妻 【織田 信長】（拇印）

夫 【黒月 零】（拇印）

（中略）

以上、上記二名を『夫婦』と認め（略）



成さぬという事だな♪」

零「……………あつ……………な、がつ……………うあつ……………ふ、ふふつ、ふふふふふぎけるなアツ!!!何なんだこの婚姻届ってツ!!!俺はこんなモノを書いた身に覚えなぞないぞツ!!!さてはあれだなつ、でつちあげたなあツ?!!?!」

信長「ん?いやいや、此処に書かれているのは確かにお主がその手で書いたものだぞ?ほら、よく思い出してみろ、この城に入る時のこと」

零「な、につ……………?」



——数刻前……

零「——入門表?」

『ええ、城に入る人間には全員書いてもらっているんです。なにせこんな世の中ですから、怪しい輩が身分や姿を偽って姫様に近付こうなどど考えるやもしれませんので……』

零『……………ふむ……………ま、それぐらいなら別に構わんが……』

——カキカキカキツ——

零『……………?なんだ?おい、この筆、字が書けないぞ?』



『え？嗚呼、申し訳ありません。もしかしたらインクが切れ掛かっていたのかも……手元が変わりもありません故、お手数ですが、少し力を込めて強めに書いて頂けないでしょうか？そうすれば普通に書けるようになるかと……』

零『む……仕方ないな……えつと……黒、月……』

『あ、そこ、もうちよつと強めに力を込めて書いて頂ければ……そうそう、もう少し、グツと、そんな感じでグイツと——』



零「——ま……ま、まさか……あの時のっ……」

長秀「ええ、入門表の裏に感圧紙と婚姻届を仕込ませて頂きました。思ったより簡単に署名を頂き、助かりました♪」

零「何処の使い古された結婚詐欺だあツ!!!!というか、その声……まさかお前、あの時俺に入門表を書けって言ったっ……?!?!」

長秀「あら、漸く気付いてくれました？まあ、あの時は顔も隠していたのですが、気付かれるとは思いませんでしたけれど、少々鈍感過ぎるかと思えますよ?」

零「黙れ詐欺師めえええツ!!!」

今やもう、悪女の微笑みにしか見えないおっとりとした顔で優しくに笑いかける長秀に向け全力で叫びつつ、零はキツ！と信長を睨みつけて文書を指差した。



信長「決まつておろう？我が結婚して夫を迎え入れたという知らせはすぐにこの国に広まり、外にも流れ、他の陣営の武将達の耳にも届く事だろうさ。お主の顔が割れるのもそう時間も掛からん。そうなれば、お主は様々な陣営から狙われるようになるだろうよ。我の夫となれば、その首は我と同じ……とはいかなくとも、それなりに価値があるだろうからな」

零「……要するに、お前のせいで俺は余計な敵を作る羽目になった、つて事か……」

信長「理解が早くて助かるな。それでも構わぬのなら止めはしない。お主の仲間探しの旅の準備も手伝つて見送るが、我等もお主の代わりとしてその仲間二人を探し出し、今度こそ我等の陣営の武者ライダーとして招き入れてみせる。お主の知り合いだと言れば、お主と一緒に探すという条件で手を貸してくれぬとも限らないからな」

零「クツ……クソオツ……」

勝家「あ、あの、姫様……何も其処までしなくとも……」

蘭丸「そ、そうですよつ。大切な婚姻すら利用して、こんな男を繋ぎ止めなくても……」

流石に今の零が不敏に思えてきたのか、無礼を承知で信長に物申す勝家と蘭丸。それを聞いた信長も勝家と蘭丸を一瞥すると、静かに瞼を伏せて……

信長「——先程も言った筈だろう？我はどうしても天下を手に入れねばならぬ。その為なら手段は選ばぬさ。この先の戦を勝ち抜く為なら、我は外道とも畜生とも呼ばれる事も厭わぬし、女としての幸

せすらドブに棄てる覚悟だ」

蘭丸「し、しかし……」

信長「それにな。我が漸く夫を迎え入れたと国中に広まれば、織田家に乗っ取ろうなどと考え政略結婚を申し出て来る輩もいなくなつて、戦に専念出来るではないか。故に、愛のない婚約だろうと、我にも確かに得する物があるのだから問題なからうさ」

そう言つて肩を竦めてフツと笑う信長。しかしそんな彼女を見つめる家臣達の顔は何処となく寂しげであり、信長はそれに構わず黒い長髪を揺らして零の前に屈み、その黄金の瞳で零の目を見据えながら真剣に語る。

信長「……我を恨みたければ好きだけ恨め。殺意を覚えたなら、いつでも寝首を掻きに来るといい。例え千の怨恨だろうとこの身で甘んじて受けて、命はくれてやれぬが、片腕の一つは運が良ければくれてやる。お主には、それだけの事をしたと自覚はあるからな」

零（……？コイツ……）

そんな彼女の瞳を見て何かを感じ取ったのか、今まで崩れ落ちていた零は信長の目をジツと見つめ返すと、暫くして顔を逸らしながらチツと舌打ちし、徐に身を起こしていった。

零「……どつちにしろ、こうなつた以上は今の俺には選択肢なんて無いに等しいって事なんだろう……？　だったらなつてやるよ、武者ライダーって奴に」

信長「……いいのか？　本当に」

零「そうせざるを得ない状況にお前がさせたんだろうが……ただし、それに当たって一つか二つ条件がある」

信長「?条件?」

零「そうだ……先ず一つ、もしも戦に駆り出される事になっても、俺が戦うのは敵の武者ライダーだけだ。それ以外の兵や武将達は知らん、お前達でどうにかしろ」

信長「……分かった。次は?」

零「二つ。この先俺の仲間を見付けても、絶対にあの二人を武者ライダーとして取り込んだりするな。もしそうした場合、俺は仲間達と一緒にこの軍を離反させてもらう」

信長「ふむ……良いだろう。武者ライダーが一人いるなら、私も其処まで欲張りはしない。で、これで最後か?」

零「いいや、まだだ。次が重要だ……俺達がああ正体不明の敵を倒して元の世界に戻る事になったら、お前との婚姻は破棄してもらう。これが最後の条件だ」

信長「……婚姻破棄か……まあ我は別に構わないが、そうなるとお主はバツイチになるぞ? いいのか?」

零「だ・れ・の・せ・い・だ・と・お・も・っ・て・い・るっ?」

信長「ああ、分かった分かった。分かったからそんな視線だけで人を殺せそうな目で睨むな」

詐欺紛いというか、まんま結婚詐欺のせいでいらぬバツを背負う

事が決まってしまった為に、恨み辛みを込めた目で睨む零をどーどーと宥めると、信長は茶を啜る長秀に目を向ける。

信長「長秀、零もこうして我等の武者ライダーになつてくれると引き受けてくれたし、手筈通り、各陣営に使いを送つてくれ」

長秀「分かりました」

蘭丸「？使い、つて……」

勝家「姫様、一体何を？」

二人の会話の意図が読めず勝家が問い掛けると、信長は先程まで腰を下ろしてた場所にゆっくり戻りながら語り出す。

信長「武者ライダーを新たに手に入れ、このまま天下取りの戦に再戦することも可能だろう。しかし、あの正体不明の敵の力を考えると奴を放置するのは危険だ……。また戦場を掻き乱すだけならまだしも、民達にまで危害が及ばぬとも限らないからな。だから――」

パサツ！と、景気のいい音と共に扇子を勢いよく開き、腰に手を当てながら信長は堂々と告げる。

信長「各陣営に一時休戦を呼び掛けて、武将達を召集するのだ。あの正体不明の敵を倒すまでの間、戦国バトルロワイヤルを一時中断する……とな」

蘭丸「それは……しかし、それに応じる陣営がいるのでしょうか？」

信長「……まあ、各陣営の当主達の性分を考えれば、現実的に考えてそう簡単に応じてくれる者達は少ないだろうな。だが……」

長秀「ですが、決して皆無という訳でもありませんよ。私達の呼び掛けに応じてくれそうな方に、一人だけ心当たりがありますし」

零「……心当たり……？」

信長「そう……」

訝しげな顔で問い掛ける零に信長が小さく頷き返すと、もうすぐ夕日が沈もうとしてる窓の外を眺めながら……

信長「——武者キャンセラー軍の総大将、”豊臣秀吉”……戦国バトルロワイヤルから一線を引いたあやつなら、既に今回の異常についても何か掴んでいるやもしれん。アレは勘が鋭い上、博識な奴だからな……」

そう言っただけで武者キャンセラー軍の武将、豊臣秀吉の事を語る信長は表情は、何処か此処にはない遠い記憶に思い馳せているように見えた。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evoile デイ  
ケイドパート③

―安土城・庭―

あれから数時間後、夕日が完全に沈んで夜となった。謁見の間での話し合いの後、各陣営に使いを送る準備を進める為に一先ず解散となり、精神的にボロボロになりながら謁見の間を後にした零は城内を適当にぶらついていたところ、昼間に戦場で出会った武士の男と偶然にも再会し、昼間のお礼がしたいという事から彼の持ち場である城の庭に訪れ、今日の出来事について彼に愚痴を聞いてもらっていた。

「――あー……そ、そりやまた、旦那も随分苦勞なされたそうですねえっ……」

零「……本当にな……訳の分からん奴と戦っていきなり違う世界に飛ばされ仲間とはぐれ、会ったばかりの初対面の女に騙されて勝手に籍を入れられて夫婦にされた上、この戦いが終わったら離婚してバツイチにならなきゃならんとか……」

今日一日で起きた出来事を全てズラリと並べてみるが、たった一日で何故こんなことになってしまったのか。改めて今の現状を再確認すると頭痛がして思わず頭を抑えながら溜め息を吐き、武士はそんな零の様子に苦笑しながら焚火の火に牧を投げ込んだ。

「し、しっかしまあ、最初に話を聞いた時は驚きやしたよ。旦那がまさか別世界の人間で、しかもあつし等の軍の武者ライダーになった上に信長様の夫になるなんて、すげえ大出世じゃねーすか！」



零「こんなにも嬉しくない出世は生まれて初めてだけだな……それにその出世も一時的なものだし、俺達の用件が片付けば解消されるのは決まってる。長続きはせんさ……」

「あー……で、でも、一時とは言え、あの信長様の夫になれるなんざ貴重な経験だと思えますよっ？なんせあの方、この国でも指折りの美女なんですからあ！」

零「ほう、そうなのか。俺の中じゃ既に美女⇨危険という方程式が成り立って、あの女を魅力的とは思えんが……」

「だ、旦那あ……」

彼も彼なりに零を元気付けようとしているのだろうが、何分バツイチという重荷を背負う事になってるからか彼の言葉を聞き入れずに暗い影を落とし、そんな零に対し武士もオロオロしてしまう。そんな時……

—ズズズウ……—

シャドー『——まあ、今回は少々相手が上手だったという事もあるのだろうが、お主も迂闊が過ぎたという所もある。もう少し警戒心を持つべきだったでござろうな』

零「……………」

「……………」

やれやれと、首を横に振りながらいつの間にか零の隣に腰を下ろして呑気に茶を啜る一人の忍……滝の世界のダークライダーである筈の仮面ライダーシャドーがそう呟き、零と武士は突然現れたその忍を見て思わず固まってしまった。

「——って、な、ななななんじゃあああッ?! 忍者あッ?!」

零「……おい、なにちやつかり溶け込んでるんだお前……どっから沸いて出た?」

シャドー『むっ? 人間きの悪い事を言ってくれるな。我は影、影にして忍。ならば、何時何処に姿を現そうと不思議ではあるまい』

零「不思議だよ、寧ろ不思議しかなくて驚いたわ」

気配も音もなくいつの間にか二人の傍に現れたシャドーを見て武士が驚愕しながら飛び退いても気にも留めず、再び茶を啜って呑気に一息吐くシャドー。そして零もそんなシャドーにジト目を向けたまま、コートのポケットから僅かにディケイドライバーを取り出しつつ……

零「で、本当にこんなところで何してる……? まさか、滝の世界のシヨツカーはこの世界に介入する気か?」

シャドー『……ふむ……取りあえず、そのポケットの中のものには仕舞うがいい。そう警戒せずとも、拙者の世界のシヨツカーはこの件に関わる気も無し、拙者もこの世界で入らぬ介入をする気などない』

零「……う？だつたら、何でこの世界にいるんだお前？あれか？忍者だからって、戦国の風に吹かれにでも来たか？」

シャドー『……確かにこの世界に吹き抜ける風は嫌いではないが、此処に来たのは我が主の命故。少しばかり調べ事をしてる最中にお主を見掛けて、こうして邪魔をただけに過ぎぬでゴザルよ』

零「……何処まで本当だかな……」

悠然とした態度を崩さないまま語るシャドーに憎まれ口を叩く零だが、シャドーが嘘を口にしてる訳ではない事は感じ取れたのか、シャドーに向けていた警戒を解きバツクルを仕舞って焚火に牧を投げ込んでいくと、シャドーは再び茶を啜って零達が腰掛ける木材の上に茶を置き口を開いた。

シャドー『しかし、お主の愚痴を影ながら聞かせてもらっていたが、お主は女人を見る目がまだまだのようでゴザルな』

零「……何の話だ？」

シャドー『あの信長という女子の事でゴザルよ。無論散々な仕打ちを受けてお主があの子に対して恨みの念を抱くのも、魅力を感じぬと申するのも無理はないが……あの女、お主が思うほど悪人ではないと思うぞ』

零「……意外だな。お前がそんな事を言うなんて……ああいうのが好みか？」

シャドー『そういう訳ではないのだが、このままでは、お主もあの子との余計な確執で苦勞をするのではないかと気になって……』



―城下街・広場―

安土城の城下。其処は現代の歴史書に書かれてるような町並みが広がっているが、やはり科学技術の発達もあつてか、家や店等で普通に電気が使われていたり、武者ライダーが戦でマシンを走らせる事もあつて自動車やバイクが走つてる姿も見られる。

零「……思いつきり人の首を引つ張りおつて……お前あれか、事故と見せ掛けて俺の首をもぐ気かつ……？」

シャドー『強引だつたのは謝ろう。だが、どうしてもお主の見せておきたい物があつてな……そら、見えてきたぞ』

零「……？何が？」

そんな人気の多い町から少し離れた場所にシャドーに連れられて零が首元を摩りながらやつて来たのは、暗がりには包まれた広場……というよりは、遊具等がそれなりに設置された公園のような場所だった。昼間には子供達で賑わつていそうな遊び場だが、今は夜中の為に静かだ。こんな場所に連れてきてどうする気だと、零が訝しげに広場に視線を向けると……

―ヒユウウウウウツ……バアアアアアンツ!!!バアアアアンツ!!!―

零「ツ！あれは……花火？」

暗がりに包まれる公園から空に目掛けて不意に一発の狼煙が上がり、夜空に大輪の花が咲き開いたのである。その大輪の花……市販のものと思われる花火を見て不意を突かれた零は僅かに目を見開きながら狼煙が上がった公園に視線を戻すと、先程までは暗がりで見えなかったのだが、夜空に上がる花火の光によって公園に集まる複数の小さな人影、子供達の姿があり、その中に……

信長「——ほお。市販の売り物でも此処まで綺麗に上がるものなのか……本物には程遠くはあるが、期待以上だったなあ」

零「……アイツ……」

子供達の中に混じって夜空に次々と消えていく花火を見上げる女性……安土城にいなければならないハズの城主である信長の姿があり、そんな信長の下に子供達が各々違う花火を手にして集まってきた。

「殿様殿様！オレ、今度はこれやりたい！火い付けてー！」

「ダメだよ！次はコレやるってさつき決めたでしょう！」

「ねえ、殿様ー！」

信長「これ、分かったから少し待たぬか童共つ。そう急がんでも我也逃げはせぬわっ」

零「……何やってんだアイツ？こんな時間にこんな所で……城の主が抜け出したらずいんじゃないか？」

シャドー『自身が必要と思われる軍事は全て片付けてあるようだが、まあ、此処に君主がいるのは些か問題でござろうな。城の者達が主がいけないことに気付けば騒動は間違い無しだろうが……この国の人間にとつては、そんな事は何時もの事らしい』

零「?……アイツが城を抜け出すなんて日常茶飯事、という事か?」

子供達に花火に火を付けて欲しいとせがまれる信長を見て、何やら訳知りを浮かべるシャドーに怪訝な顔で問い掛けると、シャドーは腕を組んだままポツポツと語り出す。

シャドー『歴史上の織田 信長は、尾張の大うつけと呼ばれた有名な武将だったのはお主も知っておろう。それはこの世界でも例外でなく、あの織田信長も尾張のうつけ姫などと呼ばれているらしい』

零「うつけ姫、ね……ま、武者ライダーを新たに手に入れる為だけに自分の婚姻すら利用するぐらいだしな、そう呼ばれるのも無理もないだろ」

シャドー『……そうだな。だが逆に言えば、それだけ天下統一という名の夢に誰よりも真摯なのだろう。夢の為なら女の幸せすらも捨て、野望の為なら人間性すら切り捨てられる。アレはそういう、リアリストな思考と決断が出来る女だ。……何故そんな事が出来ると思う?』

零「……もしかして、あの子供達に関係してるのか?」

シャドー『正確には、あの子供達も……でゴザルよ』

シユボオオオーツ!!と、不意に火花が勢いよく噴出するような音が目の前から聞こえた。二人が目の前を見ると、どうやら子供達にせが

まれ折れたのか、子供達が持つ花火に忙しなく火を付ける信長の姿が見えた。

シャドー『あの女子は、昔からああやって自らの身分を問わずに、下々の民達と触れ合ってきたそうだ。今もああやって一日の仕事が終わった後も、睡眠時間を削って城をこつそり抜け出してな』

零「……………」

シャドー『自らが統べる国を、民の生活を己の目で見つめる……そうして己等が守るべきものを実感して、己の国や民達を『自分』という一つの勘定に入れてるようだ。民達や国、天下の為とは、延いては己の為に繋がる……そう考えているからこそ、『自分』の為にどんな卑劣な方法を使っても汚名を被れるし、それを阻む全てを自らの手で問答無用で切り捨てる事が出来る』

零「……だから、『自分』の為に自分を犠牲に出来るか？とんだ矛盾だな。理解に苦しむ自己犠牲精神だ」

シャドー『フム……だが、拙者の目から見ると、お主とあの女子……何処となく通ずる物があると思うぞ？』

零「はあ……？アイツと俺が？」

心外だ、と言わんばかりの目付きでシャドーを睨む零。だが、シャドーは不動のまま淡々と語り続けた。

シャドー『自分の命と同等のものの為に自己を犠牲にする……それだけならまだ、桜ノ神や本郷滝等とも通ずるが、お主等には決定的な共通点が一つ存在する』



零「……………共通……………？」

シャドー『……………自分を犠牲に出来るだけの物を失った時、”自壊する危うさ”、だ』

零「……………ツ！」

まるで、全てを見透かしているような鋭い眼光を向けそう語るシャドーの言葉に、零は思わず一瞬息を拒み目を見開いた。

シャドー『あの織田信長という女は、天下統一を果たしさえすれば己が大事な国や民の安泰が約束されると信じている。その為に自分との婚姻すら捨ててこの戦乱の世を生き抜くと覚悟してるようだが、結局その夢を掴めず、それらが全て無駄に終わればどうなるか……………恐らく自ずと脆く壊れ、水泡のように消え去るかもしれぬな』

零「……………大袈裟過ぎだろ。大体天下を取られなかったからといって、その国や民の事もあらず、案外特に気にした様子もなく何処ぞのお偉いさんの下で働くんじゃないのか？普通はそうやって妥協するものだ」

シャドー『……………妥協か……………確かにその可能性もなくはない……………だが黒月よ。仮にもし、万が一の話、お主が仲間達である高町なのは等を失ったその時、果たしてお主は今までの自分を保ちながら、新たな人生を歩む事が出来るか？』

零「ツ！……………何故そういう話になるんだっ……………？」

考えたくもない可能性の話をされたからか、零はあからさまに不快げな顔を浮かべるが、シャドーはそんな零を見据えながら”何処か遠

い未来”を見るように、僅かに顔を俯かせて言葉を続けた。

シャドー『あやつにとって天下を諦めるという事は、お主が考えたくもないというその可能性の話と同義の意味を成すのだ。夢を實現出来ず敗れるという事は、あやつにとって死も同然。常人からすれば、たかだが夢如きでと思うやもしれんが……それほどまでにあの女は、自分の夢に己の命と人生の全てを掛けているのでゴザルよ』

零「……やけにあの女の事に詳しいな……そもそも、何故そんな話を俺にする?」

シャドー『……フム。何故かと問われれば……実は、拙者自身も良くは分かっていない。ただ——』

と、其処で言葉を区切り、シャドーは静かに零に背中を向ける。もう先を行く、という意思表示なのだろう。

シャドー『——ただ、あの女に僅かばかり、我が主の影を見たせいかもしれない……己を捨て、本心を偽り、辛み苦しみを受け入れて、傷付きながらも前へ進もうとするその姿にな』

零「……? 何の話だ?」

シャドー『……さてな……黒月よ。騙され、不本意で形式上の夫婦にされたとは言え、今のお主があの子の夫である事に違いはないのだ。万が一の時、あの女の傍で手を差し延べられるのはお主しかないなという事を……忘れるなよ?』

そう言い残した次の瞬間、シュンツ!とシャドーの姿が零の視界から掻き消えてしまい、零が思わず視界をさ迷わせてシャドーの姿を探すと、遠くに見える建物の屋根を飛び越えて何処かに去っていく影の

ような物を僅かながら捉えることが出来た。

零「……何が忘れるなよだ、お節介忍者め……お前のそれで何処が  
ダークライダーなんだか……」

結局何しに来たのかはサツパリだったが、もしかして先程城で言っ  
ていた通り、本当に自分と信長が余計な確執で苦勞するのを見てられ  
ずに助言しに来ただけなのかと考えるが、すぐに首を横に振って否定  
した。

零「まさかな……そもそもアイツとは敵同士なんだし、わざわざ俺  
を助ける理由だつてないだろ」

……まあ確かに、アイツの話を聞いて幾分か信長への印象が柔らか  
くなったのは確かなのだが、それを素直に認めるのは妙に癪なので考  
えないようにしようと、拗ねるように口先を尖らせ零は信長達の方を  
見た。

零（……まあ、それほど悪人ではないって事は大体分かっていた事  
だし……一応、バツイチの件は許してやるか……）

気分は乗らないけどな、と付け足して溜め息を吐くと、零は首に掛  
けたカメラのレンズを信長達に向け写真を撮っていき、何枚か撮り終  
えたところで踵を返してそのまま城に戻ろうとした。が……

「あ、あぶなああああー……いっつ!!」

零「……………え？」

背後から突然悲鳴が響き、零は思わず足を止めて背後に振り返った。そしてすぐに、振り返ってしまったと後悔した。何故なら……

——信長達が火を付けたと思われる無数のロケット花火が、何故か零に目掛け一斉に飛来してくるといふ悪夢が広がっていたからだ……。



数十分後……

—信長家屋敷—

—ピチャツ……ピチャツ……—

長秀「——で？彼に燃え移った花火の火を急いで消そうと慌ててバケツで水を掛けたせいで、零はこんなずぶ濡れになり、その後の後始末で貴女は本来戻って来る筈だった時間に戻ってこれなかった、と？」

信長「ウ、ウム……」

零「」

安土城とは別に、信長が住まいとする大きな日本屋敷。その屋敷の

前では、城を抜け出した信長を探してた長秀が、所在無さげに視線をさ迷わせてしゅんとなる信長と、全身びしょびしょで前髪で顔が隠れてしまつてる零の前で仁王立ちしていた。

長秀「全く……勝手に城を抜け出すだけならまだ何時もの事で済みますが、君主がボヤ騒ぎを起こしたとなれば一大事じゃありませんか。零、貴方も傍で見ているながら何をやっていたので？」

零「……俺は悪くぬえ……悪いのは花火の扱いがなつてなかったコイツだ……」

長秀「武者ライダーなら、主君の傍にいつどんな時にも付き添つて主を守るものです。それが主の名や評判に関わる事なら尚更。貴方はそれでも姫様がお選びになった武者ライダーですか？」

零「……理不尽だ……」

俺とて被害者だろうよと声を大にして言いたかったが、そんな気力もないし、何より言い返したら倍にして言い返されそうなので口を閉ざす事にする零。そして長秀は気まずげにうなだれる信長と、目を逸らし深々と溜め息を漏らす零を交互に見て溜息すると……

長秀「まあ、姫様がきちんと事後処理をなさっているなら心配は入らないでしょう。幸い、火が燃え移ったのは零のみでしたようですし」

零「俺が火だるまになり掛けたのは幸いなのかよ……」

長秀「貴方は現にこうしてピンピンしているではありませんか。後私の方で他に問題がないか処理を済ませておきます。ですので、お二人は……」

と、其処で何故か、長秀の言葉が不自然に途切れた。どうした？と、零と信長の訝しげな視線が長秀に向けられると、長秀はポンツと掌に拳を落としてニッコリ笑い……

長秀「そうですねえ……お二人も服が汚れて濡れているようですし、このままお風呂に入って下さい……”一緒に”♪」

零& a m p ; 信長『……………は?』

……………などと、とんでもない事を口走ったのであった。

零「……………おい、待て、何だそれ? どういう意味だ??」

長秀「?何か変な事を言いましたか? お二人は夫婦なのですから、風呂で背中を流し合う事ぐらい可笑しくはないでしょう?」

信長「い、いや、そうかもしれぬが、我等はっ……………」

長秀「では問題ないでしょ? 着替えはこちらで用意しておきますから、このまま風呂場に直行して下さいな♪」

零「……………」

ニコツと、そう言つてあの城で見せた悪女にしか見えないおっとりとした笑みを向ける長秀。それを見た零は無表情のまま佇むと、小さく息を吐き、そして……

ダアアンツ!!と地を蹴り、屋敷とは反対方向の正門に向かって走り出す。が、それを予期してたかのように、長秀が大柄の武士二人を差



長秀「女の幸せというモノは、実は案外、その辺りに転がってるよ  
うなモノかもしれませぬよ？」

信長「……………？何を言ってる……………」

長秀「ただの戯れ事です、気になさらないで下さい。私はただ、家  
臣として主君の幸せを願ってるだけですから」

では、と信長に一礼して、長秀は今度こそ屋敷の中に入っていき、信  
長はそんな長秀の背中を納得出来ない顔で見送りながら溜め息を吐  
くと、自身も観念し屋敷の中に戻っていくのだった。



そして、同じ頃……………

ー ドツ ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ンツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ  
!!!|

『シユアアアアアツ!!』

「う、うわああああツ?!」

「ギャアアアアツ!!」

とある荒野にて激しい戦いを繰り広げていた、二つの武者ライダー  
軍。だがその二つの陣営の戦いは、突如現れた無数の怪人達の乱入に  
より混戦となり、無差別且つ無意味な破壊と殺戮が広がってるばかり



になっていた。そして……

—ガギイイイイツ!!—

武者エデン 『ぐわああああッ!!』

武者クロノス 『クツ?!何なんだ、奴は?!』

—ザッ、ザッ、ザッ……—

『……………』

二つの陣営の守護者である二人の武者ライダー……武者エデンと武者クロノスを相手に圧倒してジリジリと迫り来るのは、やはり昼間の戦いで武者リノベーションと武者ツヴァイを吸収した謎の戦士であり、謎の戦士は赤いライドブツカーを手に二人に斬り掛かっていく。

—ガギイイツ!!ガギイイイインツ!!ドグオオツ!!—

武者クロノス 『チイ!タイムクイックッ!』

武者エデン 『タイムクイックッ!』

『TIME QUICK!』

『TIME QUICK!』

このままでは追い込まれるばかりだと感じ取ったのか、二人は態勢を立て直しながらタイムクイックを発動させ、信じられぬスピードで動き出し謎の戦士へ反撃を開始するが……

『——タイムクイック』



二人に止めを刺そうとした謎の戦士の背後から、突如電子音声と共に一発の砲撃が飛来してきたのである。それに反応した謎の戦士は咄嗟に背後へと振り返って赤いライドブツカーで砲撃を打ち消し、砲撃が放たれてきた方に視線を向けると、其処には……

—シユウウウツ……—

冥王『——フツフツ……武者ライダー、やっと見付けたの。さあ、冥王の戦国大戦は此処から始まりなのツ!!』

『(……何だ、コイツ……?)』

……メイオウガツシヤアの先端を謎の戦士達に向け、今までのシリアスな空気をぶち壊す勢いで叫ぶ冥王の姿が何故か其処にあったのだった……。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolution デイ  
ケイドパート④

—織田家屋敷・風呂場—

—……チャプツ—

零（———どうしてこうなった……）

—ゴシゴシゴシゴシツ……—

信長「……………」

前髪から滴り落ちた水滴が湯舟の水面に落ちていく様を眺めながら、零は鼻の上まで湯舟の水の中に沈めて心の内でそう歎き、湯舟の外で身体を洗う信長を横目で見た。

この様子を見れば一目瞭然だが、あの後、結局抵抗も虚しく大の男二人組に服を強引にひん剥かれてしまい、零はそのまま湯舟の中に問答無用で叩き込まれた上に、零が逃げないようにと風呂場の窓の柵と左手に手錠（しかも趣味の悪い純金製）を繋がれてしまったのだった。

零（くそっ……ただの手錠ならまだ壊して逃げる事も出来るというのに、あの女っ……）

忌ま忌ましげに左手に繋がれた純金製の手錠を睨む。純金とあってどうやらこの金の手錠はかなり値が張るらしく、長秀にも「もし壊した場合は全額弁償してもらいますからね♪」と笑顔で念を押された

のは記憶新しい。

……恐らくというか、絶対その為だけに、わざわざ何の為に作ったのかも分からない純金製の手錠なんて物を選んで零に付けさせたのだろう。もし逃げた場合の時のリスクを更に増やす為に。

零（畜生めっ、何処までも意地の悪い女だな本当につ……！）

癩に障るが流石は織田信長の参謀というべきか、これでは絶対に逃げる事なんて出来ない。峯ろ、下手に削つたり傷を付けたりしたらそれだけで高額な金額を弁償させられ兼ねない為に、おちおち左手を動かす事も出来ない。最早逃げるのは諦めるべきかと、零は観念するように小さく溜め息を吐きつつ、未だ身体をゴシゴシと洗う信長に再び目を向けた。

零（……それにしても……何でコイツもわざわざ家臣の言う事に従って風呂場に来たんだ……？）

君主であれば「嫌」の一言でも口にすれば此処へ来る必要もなかっただろうに、何故にわざわざこの女は裸になって風呂に入ってきたんだろうかと、ジーーツと泡に包まれた信長の背中を睨んでいると、信長もその視線を感じ取ったのか僅かにビクツと身を縮こまらせ、顔を赤くしながら慌てて身体を隠し零を見た。

信長「な……なんだ？何をジツと見てるっ？」

零「……いや……特にこれとあつて見てる訳じゃないが……」

信長「だ、だったらこちらを向くな！私の裸は見世物ではないのだぞ！」

零「……………何でお前が怒るんだよ……………」

そんなに見られたくないなら最初から入って来なきや良かっただろう、と文句を言いたげなジト目で信長をムスツと睨む零。だが信長の方はそんな零の視線を受けて何やら余裕なさげに泡に覆われた身体を両腕で隠しながらオドオドして身体を洗い流せずにおり、その様子を見て流石に可哀相に思えてきて仕方ないと溜息しつつ零が湯舟の縁に頬杖を突いて視線を逸らすと、信長もそれを見て安堵するように一息吐いて桶に溜めていた水を被って泡を全て洗い落とし、布で前を隠しながら立ち上がって湯舟に怖ず怖ず近づく。

信長「……………入るぞ……………少し空けてくれ……………」

零「……………ん……………」

言われた通り、信長に背を向けたまま湯舟のスペースを空けるように湯舟の中で僅かに前へ進む。とは言え、湯舟のスペースも一般的に家庭の風呂とそう変わらないので、二人入れるか入れないか微妙なところだが、信長は湯舟の水面に片足を通してゆっくりとお湯に浸かっていくと、そのまま湯舟の湯に身体を沈ませ、自ずと零の背中と肌と肌を合わせピッタリくっついていく。

信長「は、あああ……………」

零「……………」

信長「……………」

零「……………」

信長「……………」

零「……………」

信長「……………」

零「……………」

信長「……………」

……………。

零（……………あれ？何だ、コレ……………？）

いや、本当……………何だコレ？と、零は信長と背中合わせになりながら内心ポツリと呟きを漏らした。今、何故自分は今日会ったばかりで形式上の夫婦となった女とこうして裸同士で風呂で背中合わせに湯舟に浸かって無言なってるんだ？と、今のシチュエーションに今更かよ！と思うが困惑を隠せない。

というか、何だろうか……………ほんとに今更ながら、この状況が途端にもの凄く恥ずかしくなってきた。信長が裸だからとかでなく、この不可解な状況に対してだが。

零（まずい……………なんだこのこっ恥ずかしい状況……………？目茶苦茶気まずい……………な、何かこの沈黙を崩す話題とか……………）

女心にはとことん疎いくせして、場の空気や雰囲気にはそれなりに敏感なのか。今の状況がとてつもなく気まずい上に目茶苦茶恥ずかしいと今更になって漸く気付き、何かこの沈黙を破る為の会話のネタがないかと内心そわそわしながら思案する零だが、その時……

信長「——すまなかった、な……」

零「……は……？」

先にこの沈黙を破ったのは零ではなく、背中に向こう側にいる信長が呟いた謝罪の言葉だった。余りに突然且つ不意打ちだった為に零も困惑を浮かべ思わず振り返りそうになるが、それを察したのか信長は零の背中に自分の背中を強く押し付けて振り向かせないようにした。裸を見られたくないからか、それとも何か別の理由があるのか……。

取りあえず零が振り向くのを諦めると、強張っていた信長の背中もだんだんと力が抜けていき、ポツポツと再び語り出した。

信長「お主を騙して婚姻届を書かせた事について、一応な……お主には戦場で命を救われた恩があるというのに、我はそれを仇で返すような真似をしてしまった……その事について、一度謝るべきかと……」

零「……今更だろうよ……大体、そうやって俺に謝るくらいなら最初から——」

信長「そうするべきではなかった、だろうな……だが、それでも我等は——いや……我にはどうしても、お主が必要だった。繋ぎ止めたかったのだ。天下を取る為にも……お主の力がどうしても欲し



かった……」

零「……………」

そう己の心の内を吐露する信長の声音は、戦場や城で零と話した堂々とした話し方と違い、何やら妙に女らしく感じる。肌を全て晒した開放感か何かから、彼女の本音が浮き彫りになっているのだろうか。ならば……

零「……どうして其処までして天下にこだわる？自分が憎まれると分かってて、恩を仇で返したり、自分の婚姻すらも利用して……何が お前を其処まで駆り立たせるんだ？」

信長「……………」

今なら、彼女の天下統一に対する本当の想いも聞き出せるのではな  
いか。そんな淡い期待から彼女の核心に迫る問いを投げ掛けると、や  
はり信長はすぐには受け答えず黙ってしまふ。振り向いてどんな様  
子なのか顔を見てみたいが、それだとまた拒否されるだけなので出来  
ない。やはり踏み込み過ぎたかと、零が半ば諦め掛けた時、信長の口  
からポツポツと言葉が紡がれた。

信長「——我が生まれた織田家は、元々大勢力に囲まれた弱小の  
家柄でな……。その家を父の命によって背負った時から、我よりも弱  
い者達の命を預けられる立場となったのだ」

零「……………」

信長「家督を背負った最初の頃から、国を背負うこととなって、民  
達全ての命を預かる身となって、今この国の命運は、明日は、民の生  
活は、我の一言や生死で変わるようなもの……だが我は、そんな不確

かな今の現状が許せぬのだ」

零「…………？」

さつきまでの弱々しい口調と違い、最後の語末の部分のみを力強く感情を込めて語る信長の言葉を聞き、零は信長に悟られないようにこっそりと信長の顔を覗き見る。其処には、何か強い決意のようなものを秘めた信長の凜とした横顔が僅かに見えた。

信長「人間ならば、国の主の命運によってその人生が左右される必要などない。己が思うままに、自らの欲のままに自分だけの人生を全うする…………それが、人としての本来の在り方なのではないか？」

零「…………程度にもよると思うがな。俺も沢山の世界を巡る中で自分の欲のまま、自分の為だけに好き勝手に命や世界を食い物にして、破壊していった奴らをこの目で沢山見てきたし…………」

信長「そんな非道は自由などとは程遠いだろう？例え心の何処かでそうしたいと思う心があつたとしても、実際にやるのとやらないのでは全然違う…………そんな理性のない自由は自由などではなく、ただの獣畜生に過ぎん。人間の自由というものは、不自由があるからこそ輝くのだから」

零「…………ほお…………もしや暴君的な思想でもあるんじゃないかと思わず身構えたが…………案外まともなんだな」

信長「…………からかつてるのか？」

零「いや、素直に見直したただけだ。気分を害したなら謝ろう…………で？その人間が自由に生きられる世界というのが、お前の目指すものなのか？」

信長「……ああ……だが、それだけが理由という訳でもない」

チャプツと、背後で信長が動く気配がした。零からはどうなっているのかは分からないが、信長は風呂場の窓の向こうに見える夜空の月を見つめて続きを語る。

信長「この混乱の世を治めたい。平定した世を築き、秩序が回復したこの世界で……ただの人として生きてみたい……そんな世界で、仲間達と共に我等が生きる世界をもつと見てみたい、知りたいと思うのだ。自分達が生きている世界なのだから、そう思うのは不自然ではあるまい？」

零「……まあな……」

信長とは事情が少し違うが、自分の世界を知りたいと思う気持ちは分からなくはない。自分も旅を続ける中で様々な事を知り、自分が生まれた世界を、家族がいる世界を知りたいと思う気持ちが芽生えたからだ。

……例え其処に、知りたくもない真実しかなかったとしても……。

信長「……そんな世を築く為にも、我はどうしても、天下を取らねばならぬのだ。家や身分も囚われず、誰もが自由に人間らしく生きられる世界を築く。他の者などに任せて実現出来る夢でもない。我自身の手で形にしなければならぬ……だからこそ、我は——」

零「……だから、その為に何もかも犠牲に出来るって言いたいのか？自分すらも……」

信長「……」

此処まで話してみても分かったが、この信長という女は確かに悪人ではない。寧ろ、その心根は優しくある。天下を取り、家や身分などに囚われずこの世界の人々が人間らしく自由に生きられる世を築く。それを真摯に目指す彼女なら、きっと彼等がそうして生きられる世を作れると思う。だが……

零「自分や、何かを犠牲にするっていう方法が、必ずしも間違っているとは俺も言わない。時と場合によつてはそうせざるを得ない場面もあるだろうし、それが道を切り開く時だつてある事は俺も知っている。だが……お前のソレはあまりにも程度を行き過ぎてる」

武者ライダーを新たに手に入れる為、天下統一の為に一族の系統に関わる大切な婚姻を簡単に策に組み込む。そんな事を平然とやって退ける信長に妙な危機感を覚えたのもまた事実であり、零が警告するようにそう告げると、信長は淡々とした声音で零に言い返すように語る。

信長「今この世は戦国乱世なのだぞ。何もかも失わずに天下を取れるほど、この戦国世界は安易くないのだ……戦とは程遠い生き方をしてきたお主に何が——」

零「——そうだな。今まで命のやり取りを散々してきたとは言え、戦のことまでは俺も分からんし、偉そうに言える立場でもない……ただ今は俺もその戦に巻き込まれている一人だし、分からないなりに恥を忍んで偉そうに言わせてもらおうが……」

—グイッ!—

信長「ツ?!なっ……!」

一拍置き、零は突然信長の左腕を強く掴んだかと思えばその腕を引つ張りながら振り返し、少々強引に信長を振り向かせた。零の視界に飛び込んできた信長は、彼の突然の行動に戸惑いと驚きを隠せないでいるようだが、それよりも彼に肌を見られてしまったという羞恥からか耳まで顔が赤く染まっており、豊艶な胸を必死に右腕で隠しながら身を縮こまらせ、恥ずかしさから潤んだ瞳でビクビクと零を見つめている。そんな彼女の目を、零は真つすぐ見つめ返し……

零「自分という代価を犠牲にして何かを得る……確かにそれも最良の選択の一つに違いない。だが、それは最良であつて最善じゃないんだ。そんな真似をし続けて天下を統一したところで、其処にあるのは既に今のお前じゃなく、民や国の為に今のお前を築き上げているもの全てを失つて、全く別人になった……お前だけだ」

信長「……！」

……例えばの話をしよう。

もし仮に、自分が世界を救う為だと割り切つて人間性を殺し、旅の過程でなのは達を切り捨てながら進んだその先で、果たして自分は今の自分のままでいられるか。

……答えはきつとNOだ。

恐らく何もかも捨てる事に慣れて、捨てる事に何の感情も抱かなくなつて、何を切り捨てたのかすら思い出させず、何故自分が其処までして戦つてきたのか理由すら忘れて疲弊し切つてるだろう。

そんなのはもう、自分ではない。他の人間だ。

先刻シャドーが言っていた、自分と信長が通ずる物があるという話

を信じるなら、恐らく彼女もこの先の未来でそうなる。

天下統一という夢の為に人間性を殺し、身内や仲間すら切り捨て、非常に徹し先を歩む。

その果てに天下を手に入れ彼女が語った世を築いたとしても、きっと信長はその世界で心の底から笑う事はない。

……”化け物同然の存在”となった、自分のように。

零「天下を統一した後で、お前はしたい事、やりたい事が沢山あるんだろう？」

信長「……ああ……」

零「だったら、その為にももう自分を犠牲にするような真似なんかするな。お前がその心に思い描く世界に抱く気持ち、移り変わらないうちにも、気付かない内に何処かへ捨ててしまわない為にも……そんな自由な世界で目にしたもの全てに対し感じたものを、素直に受け止められるようになる為にもだ……」

信長「……」

失ってしまった物、捨ててしまった物がどんなに尊い物だったか。後からその事に気付いても戻らない物があるのを知っているからこそ、彼女にもそうならないで欲しいという意味も込めて告げる零。そうして信長はそんな零の目と言葉と真つすぐ向き合い、暫くの間互いに視線を交錯させると、顔を俯かせ小さな笑みを浮かべた。

信長「可笑しな男だな……自分を騙した人間にそんな物言いをするとは」

零「……まあ、馬鹿げた事を口にしてるといふ自覚はある。俺とお前とじゃ事情が違うし、それでも——」

信長「いや、分かつてる。皆まで言わなくていい……何故かは知らないが、お主はお主なりに、我の身を案じてくれているのだろ？」

零「……別に、そんなんじゃ……」

妙な気恥ずかしさから、小さく微笑み掛ける信長の顔から目を背ける零。そんな零を見て信長もまた可笑しそうに笑いをこぼしていくが、ふとその表情が物憂い物へと変わる。

信長「その気持ちは素直に嬉しく思う……だが、我は——私は、この道を歩むと既に決めているのだ……天下統一を実現する為には、生半可な覚悟では果たせない。例えこの身が第六天魔王と化そうとも、頂への歩みは決して止めぬと……そう決心しておるのだ……」

零「……………」

やはり、自分の言葉なんかでは彼女の覚悟を止められはしない。何となく察しは付いていたが、改めてそれを実感させられた零は無言のまま渋い顔で瞼を伏せると、そんな零の頬をグニツと信長が指で摘んだ。

零「ツ?!な、何だっ？」

信長「いや……何だか変な気を使わせてしまったようだからな。すまない。それから……ありがとう……。お主と話したからか、少しばかり気が楽になった気がしてな」

零「……礼を言われるような事なんかしていないし、必要ないだろう。俺は一応お前の武者ライダーなんだし、武者ライダーとして主に進言しただけだ……」

信長「ん……？何だ、其処は夫じゃないのか？」

零「それはないっ！お前と夫婦関係って事だけは絶対認めんっ！」

信長「枯れてる奴だなあ。……一応、その、裸の女が隣にいるのに平然としてるし……」

零「………なら、此処で俺が手を出しても文句言わないのか、お前？」

信長「え？……い、いやっ、それは……っ」

零「……冗談に決まってるだろバカ。なに本気にしてるんだ」

信長「なっ！……も、もういいっ！知らんわっ！先に出るぞっ！」

呆れたような表情で横目で見つめる零を見てからかわれたのだと分かり、羞恥と怒りから顔を赤くしながらザパアアツ!!と勢いよく湯舟から立ち上がる信長。その様子を見て零も信長の裸を見ないようにはすかさず顔を逸らし、ズンズンツ！と風呂場から出て勢いよく扉を閉める信長の姿が完全に見えなくなっただけから、小さく安堵するように息を吐いた。

零「冗談に決まってるだろ……そういう事はちゃんと好きな奴として……」

本当に好き同士で結婚した夫婦ならばともかく、そうでない男と女



がいつまでも裸同士で風呂になぞ入っていい訳がない。……まあ、長々とした会話にのめり込んでたせいで追い出すのに時間が掛かったが。

零「……あ………そういえばアイツ、結局何で俺と一緒に風呂に入っただ……？」

結局その事を聞けず仕舞いで出ていかれてしまったが………もしや、自分に謝ろうと思つて一緒に風呂に入ると決めたとか……？

零（……まさかな………まあほとぼりが冷めてからまた聞き出せばいいだろうし、俺もそろそろ上が——）

—ガシヤツ！—

零「……え？」

これ以上湯舟に浸かってはのぼせてしまうと、零も風呂から上がろうとするが、左腕を何かに引つ張られ立ち上がる事が出来ない。

……その今まで忘れていた感覚に零は顔を青ざめさせ、ゆっくりと背後へと振り返ると……風呂場の窓の柵と自分の左腕を繋ぐ純金の手錠が、淡い輝きを放っている姿が其処にはあった。

零「………し、しまったあああああああああああああああああああああ————————ツ!!!お、おい信長あツ!戻つてこいツ!ちよ、これはどう外せばいいんだツ?!誰かツ!おいツ!誰かあああああああツ!!!」

のぼせる寸前になって漸く手錠の事を思い出し慌てて先に風呂を上がった信長を呼ぶ零だが、今さっきの件でお冠の信長がそれに応じ

る筈がなく、結局それから数十分、何も知らずに風呂に入ってきた蘭丸が悲鳴を上げるまでずっとそのまま放置されっぱなしになるのであった……。



—ガギギギギギギッ!!! バシユウウッ!!! ガギ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイインッ!!!!—

武者クロノス『グウツ!!ガハアツ!!』

一方その頃、武者クロノスと武者エデンの両軍を襲撃した謎の戦士達が戦う戦場に突如冥王は武者クロノスと武者エデン、そして謎の戦士に敵味方関係なく襲い掛かり乱戦となっていた。武者エデンの刀を腋で抑え込みながら、正面から斬り掛かってきた武者クロノスに前蹴りを打ち込んで吹っ飛ばし、右手に持つ薙刀で立ち回る謎の戦士に砲撃を放ち追撃していく。

冥王『あつははははははは!弱い弱い弱い弱い弱いのおツ!!この世界の武者ライダーはこんなものしかないのおツ?!』

—ズシヤアアツ!—

武者エデン『グハツ!』

—バゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!—

『(チツ!また面倒なのが……だが、こちらに狙いを絞って来ないのは

幸いか)』

一見して驚異的な戦闘力を備えているようだが、その狂気的な戦闘意欲から見境なく攻撃するのが欠点か、冥王は謎の戦士への追撃を中断して武者エデンに狙い絞って襲い掛かっていき、その隙に謎の戦士は態勢を立て直そうとしていた武者クロノスをすれ違い様に赤いライドブツカーで斬り裂いて怯ませ、首を掴み……

『これで、十三人目えッ!』

― バ シ ユ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ  
ウウウウウウウウウウウー——————ウウウッ  
!!!!!!ウ

武者クロノス『ぐ、ぐあああああッ?!!!』

首を掴まれもがく武者クロノスの全身から青い火花が噴き出した直後、武者クロノスの全身が捻れそのまま武者リノベーションや武者ツヴァイ同様、謎の戦士の腰に吸収されていってしまうのであった。

冥王『……!武者ライダーを取り込んだ?』

『はああああつ……来い、スペリオルウウウウウウウウツ!!!』

武者クロノスを取り込んでゆらりと幽霊のように冥王と武者エデンと向き直り、謎の戦士は両腕を広げ全身をまばゆい光を纏っている。そして光に包まれた謎の戦士は、徐々にその姿形を変化させながら巨大化していき、光が晴れたその姿は全身が赤黒く禍々しい形状をした巨大な翼竜……クロノスの形態の一つである漆黒のスペリオルフォームに変身したのであった。





劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evoile デイ  
ケイドパート⑤

—織田家屋敷—

零「——武者キャンセル軍との同盟が決まった……？」

翌日の朝。織田家の屋敷で朝食を終えた直後に信長と長秀が告げた言葉に、零と蘭丸と勝家は揃って頭上に疑問符を浮かべて訝しげな表情を浮かべた。その内容とは、昨日信長が宣言した戦国バトルロワイヤルの中断と他の陣営との一時休戦についてだった。

長秀「ええ。今朝に戻った使いの者が持ち帰った封書を先程確認した所、我が軍との同盟に賛同し、今後について話し合う為に昼過ぎにこちらへ訪れるとの事です。ただやはりと言うべきか、他の陣営からの返答は揃って拒否の一点張りでしたね。例えそやつが襲って来ようとも我等が返り討ちにしてくれるわ、と」

信長「他の陣営の武将達は、無駄に勇猛な連中が多いからな……まあ、そやつ等に関しては初めから大して期待はしていない。我等の本命は秀吉だからな」

長秀「天下取りの戦いから一線を引いた彼女ならば、こちらの一時休戦の申し出を断る確率は低いですから……それに何故彼女が急に天下取りから手を引いたのかも、個人的に気になっていましたし……」

信長「まあ、何にしても先ずは会って話をしなければな。支度が整

い次第、城へ向かい秀吉を迎える準備をするぞ」

一同にそれだけ言い渡すと、信長は座布団の上から腰を上げて立ち上がり、支度をする為に部屋を後にしていく。それを見送った他の一同もそれぞれ支度を始めようと部屋を出ていくが、零は部屋を後にしようとしていた勝家を呼び止めた。

零「なあ……一つ聞いてもいいか？この世界の豊臣秀吉って、アイツとどういう関係なんだ？何だかやけに親しげな感じだったが」

勝家「？どういう関係って……お二人はご幼少期からの昔馴染みだ。幼少の頃は家康公も交えて良く遊んでいられたそうだが、今の乱世になってからは敵同士となってしまい、戦場で顔を合わせるの常になってしまっただけ……」

零「……そうなのか（つまり、この戦国世界じゃ信長と秀吉と家康の関係も本来の史実とは大きく違う訳か……今更な感想だが、此処まで違ってくるものか？）」

本当に何処までも出鱈目な世界だと改めてそう感じる零だが、空間や時間や歴史や人間関係が違うのは並行世界では良くある事だし、とにかく今は自分も早めに支度した方が良いだろうと、零も勝家と別れ準備をしに昨夜自分が寝泊まりした部屋に戻っていくのだった。



―尾張国境近くの森林―

―……バチツ……バチバチバチバチツ……シユパ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!—

零が滞在する尾張の国境の近くに存在するとある森林の奥地。其処に突如、桜の花弁に酷似した無数の光の粒子を撒き散らして一つの光球が何処からともなく現れた。そして光球が弾けるように消え去ると、光球があつた場所に一人の人物……零の仲間である姫がその姿を現し、ゆっくりと身を起こしていく。

姫「——此処がああの三人の気配を感じる世界か……どうしてこの世界にいるのか知らないが、魚見が一緒なら零となのはも戻って来れる筈なのにな……やはりあの三人の身に何か起きたのか？」

周囲を見回してそう呟く姫の顔には、やはり零達から未だに連絡がなく戻って来ない事に不安を感じているのか、明らかに心配と焦りの色が浮かび上がっている。

姫（あちらの世界は怪人達も全て片付けて、優矢達に任せて来たから心配は入らないと思うが、またいつ怪人達が現れないとも限らないし……急いで彼等を見付けなければ……）

それに何故かは分からないが、妙な胸騒ぎを感じる……特に零に關しては。その言葉には表わし難い感情に突き動かされるように、姫は急いで三人を探しに向かおうと一歩前へ踏み出す。が……

『グルルルツ……』

姫「……ッ！誰だ？」

何処からか不気味な唸り声が響き、姫は真剣な表情に切り替わり警



戒心を露わに周囲を見回す。すると、森の木々の影から次々と無数の異形達……ドーパントやファンガイアを始めとした様々な怪人達が唸り声を上げて姿を現し、姫の四方を囲んでいたのである。

姫「また多種多様の怪人だと……？まさか、あちらの世界で暴れ回っていたのと同じ？」

『グルアアアッ!!』

熟考に入り始めた姫に問答無用で襲い掛かる怪人達。しかし姫も咄嗟に護身術の体さばきで怪人達の攻撃を次々と払い退けていくと、怪人達から一度距離を取り、後ろ腰からバツクル部の右側にカッツティングブレードが設置されてる黒いドライバー……戦極ドライバーを取り出して腹に当てるとドライバーの端からベルトが伸びて姫の腰に装着され、更にスカートに身に付けた装身具に繋がられている桃が中央カバーに描かれた錠前を取り外して構えた。

姫「いずれにせよ、コイツらを野放しにしておく訳にはいかないか……変身ッ！」

—ガチャッ!—

『PEACH!』

高らかに叫びながら中央のカバーに桃が描かれた錠前……ピーチロックシードの側面の解錠スイッチを押すと電子音声响起、それと同時に姫の頭上にチャックのような物が出現して丸い裂け目を開き、その裂け目の向こうに繋がってる違う世界から更に桃に酷似した巨大な果実が宙に浮きながら姫の真上に降りてきた。そして姫はそれに見向きもせずピーチロックシードを軽く投げて左手でキャッチし、戦極ドライバーのバツクル部に錠前をセットして固定する。

『Lock On!』

—ブオオオオオツ!!!ブオオオオオオツ!!!—

『ヌツ?!』

再度電子音声が鳴り響くと、法螺貝のような和風テイストの待機音声  
が戦極ドライバーから響き渡り怪人達を驚かせていく。そして姫  
はそんな怪人達を見据えたままバツクル右側に設置されたカツテイ  
ングブレードを倒し、バツクルにセットされたピーチロックシードの  
カバーを切った。

—スパアンツ!—

『Soiya!』

『PEACH ARMS!Gouka☆kenran!』

ピーチロックシードを切断してカバーの下の断面図が明らかにさ  
れると、高らかな電子音声と共に姫の頭上に待機していた巨大な桃の  
果実が落下し、姫の頭へとズツポリ収まっていったのだった。

そしてその直後、巨大な桃の果実から植物の根のように伸びたエネ  
ルギーが姫の全身を覆い銀色のアンダースーツに変化し、更に姫の頭  
に収まっていた桃の果実が徐々に花開くように開いて桜色の鎧と化し、  
姫に装着されて桃の果汁が飛び散り、露わになった姫の顔には戦国武  
将の兜をモチーフにしたような薄桃色のパルプアイと、鎧武と斬月の  
中間に近いデザインの銀と桃色の仮面が纏われていたのであった。

全ての変身が完了したその姿は、後ろ腰から袴に酷似した銀のコ  
ートを靡かせる銀色のアンダースーツと、桃の果実をモチーフにした桜



電子音声と共に膨大なエネルギーが蓄積された桜雪をインベスの腹から勢いよく抜き取ると同時に、天神はその勢いを利用して回転し桃の切り身の残像を描きながら周囲の怪人達を纏めて斬り裂き爆散させていったのだった。

天神『つ、ふう……これで一先ず片付いたか？』

桜雪を肩に添えながら軽く一息吐き、周辺に怪人達の姿が残っていないのを確認してから変身を解除しようとバツクルのピーチロツクシードに手を伸ばす天神だが、その時……

—ガサガサガサツ……—

『——シャアアアアアアツ……』

『ウウアアアアツ……』

天神『ツ！……やれやれ、まだ一休みには早いか……』

背後から茂みを掻き分けるような物音が聞こえ慌てて背後に振り返ると、其処には先程とは別の怪人の群れがゾロゾロとこちらに迫って来る光景があったのだ。それを見て天神もうんざりとした溜め息と共に桜雪を下ろしていくが、怪人達は構わずに天神に目掛けて獣の咆哮を上げながら駆け出し、天神も仕方なくそれに応戦しようと右腰のホルダーからサ克蘭ボのロツクシードを掴んだ。が……

—バツ！—

「デエエエヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ  
!!!」



「ねえちよつと、いい加減武者ライダーがいそうな場所とか教えてく  
れてもいいんじゃないの？アンタならナビの真似事とか余裕でしょ  
？」

『——確かに我ならばその程度のこと造作でもないが、これは貴様の  
修行の一環でもあるのだ。自らの敵は自らの目と足で見付けろ。我  
は一切それに関与せん』

天神（ツ！アレは……クロノスブレイド?!というか喋った?!）

「そうは言ってもつ、こっちに來てから一日経ってるのに全然噂の武  
者ライダーに会えてないじゃないツ！ほんとにそんなのいる……ん  
？」

見覚えのある剣……クロノスブレイドとナビゲートの役を拒否さ  
れても食い下がろうとする黒い少女だが、其処で彼女は背後で呆然と  
佇んでいる天神の気配に気付いて振り返った。

「……………」

天神『……………』

「……………誰？」

天神『いや、それ私の台詞なんだが』

今自分が言いたい質問を先に言われ思わずそう返してしまう天神。  
だが黒い少女は、其処で訝しげな様子で顎に手を添えながらジツと天  
神の姿を観察していく。

「んー……如何にも武者っぽい出で立ちと、仮面に、刀……もしかしてアンタ、武者ライダー?」

天神『?まあ、一応武者のライダーではあるが?』

「否定はしないのね?ふうん……じゃあ……」

ジャキツ!と、黒い少女はそう言いながら突然右手に握るクロノスブレイドの刃の切っ先を天神に突き付けた。

天神『!何の真似だ?!』

「ちよつとばかり手合わせを願っていたいのよ。私、修行でこの世界に武者ライダーとやり合いに来ただけで、正直今の自分の腕が何処まで通ずるか不安もあるの。だから先ず、貴方と手合わせして自分の力量がどれほどのものか確かめさせて欲しいのよ……貴方が武者ライダーじゃないなら悪いとは思うけど」

天神『この世界に来た……?武者ライダー……?ちよつと待て!一体何の話をしているんだ?もう少し詳しく事情を——!』

「事情なんて話したら、お互い戦い難くなるだけじゃない?勝手に悪いけれど、私もいい加減ライダーとの戦いの経験値が欲しいし、ちよつとばかり付き合って頂戴ツ!』

天神『君が子供という時点で私は既にやりにくいぞツ?!ええいつ、仕方ないッ!』

クロノスブレイドを構えて問答無用で斬り掛かって来る黒い少女を見て話し合いでの決着は無理だと悟ったのか、天神は半ばヤケクソで桜雪を左手に持ち替えながら左腰に装備した銃剣……無双セイ

バーを抜き取って二刀流となり、黒い少女の振りかざす斬撃を受け止めながら戦闘を開始していくのだった。だが……

『……………』

そのライダーバトルの開始を影から盗み見る怪しい影……謎の戦士が剣を交える二人の姿をジッと観察する姿があり、静かに足元の影から大量の怪人達を新たに生み出していたのだった。



―安土城・評定の間―

あれから数時間後。安土城にて武者キャンセラー軍を迎える準備を終えてから間もなくして武者キャンセラー軍の到着の知らせが届き、信長は武者キャンセラー軍の武将である秀吉と彼女の数人の家臣達を安土城の評定の間に通して対面していた。

零（……まあ、話を聞いた時から何となく分かってはいたが、やっぱり秀吉も女なのな……）

艶やかな金色の長い髪に、碧眼の瞳。その脇に自身が従える武者キャンセラーを控えさせ、背筋を伸ばして綺麗に正座を組んでるその姿から威厳と美しさが滲み出ている女性……豊臣秀吉を見て零がそう考える中、秀吉は信長を見つめ小さく微笑んだ。



秀吉「お久しぶりですね、信長公。暫く見ぬ間にまた美しさに研ぎが掛かっているように見られますが、結婚して夫が出来たからでしょうか？」

信長「下手な世辞はいい、それにそんな似合わぬ敬語を使わなくていいぞ。貴様と我の仲だろうよ？」

秀吉「……そうおつしやられましても、ね……私にも立場というものが……」

信長「デアルカ。ふむ……ならば我だけでもそうするぞ？無論貴様の呼び名も、昔のあだ名で『猿』と呼ぶが？」

秀吉「……ハア……分かった……だからその呼び名は止めて頂戴、ノブ……」

信長「うむ、そう呼ばれるのも久しいな、ヒデよ」

零（……なあ。あの秀吉は何で猿って呼ばれてるんだ？）

勝家（？ああ……幼少の頃の秀吉公はとてやんちゃな子で、良く木登りをして遊んだり木の上で昼寝する事が多かったらしくてな。その姿がまるで子猿のようで、それを見た姫様が秀吉公にそうあだ名をつけたのが発端らしい……まあ昔はともかく、今はその名で呼ばれるのは嫌なそうだが）

零（……まあ、だろうよな）

やんちゃっ子な昔ならともかく、成長し大人になってから猿呼ばわりされても女は嬉しくもないだろうしなと零が納得する中、秀吉が気

を取り直すように咳払いした。

秀吉「んんっ！……さて、それじゃあ早速本題に入らせてもらおうけど、貴方達の同の件についてはこちらも慎んで受けさせてもらおうわ……私達も、あの謎の敵の脅威については身に染みて理解しているし、このままアレを放置するのは危険だと思っているから」

長秀「……身に染みて理解してる、というと、秀吉公は既にあの敵と交戦した経験がお有りなのですか？」

秀吉「……ええ、そうよ。だからこそあの敵の脅威にいち早く気づき、天下取りをしている場合ではないと戦から一線を引き、我々は我々でアレの調査を独自に進めていたの。それで幾つか分かった事があるのだけど……キャンセル？」

武者キャンセラー『はっ』

脇に控える武者キャンセラーに秀吉が目配りすると、武者キャンセラーは秀吉と信長の間一枚の地図の絵を広げていく。そして一同がその地図を覗き込むと、どうやらその地図は各陣営の勢力が描かれた勢力地図らしいのだが、殆どの陣営がその上に赤い×が書かれてしまっている。

長秀「これは……」

秀吉「あの敵の動向を探ってその足取りを追ってみたのだけど、どうやらあの敵は他の陣営に積極的に攻め込み、その陣営を守護する武者ライダーを次々と倒し回っているそうなの……。しかも活動限界がないのか、奴は武者ライダーを倒してからまたすぐに別の陣営に攻め込んで武者ライダーを倒し、それを繰り返している……この×は、昨夜に奴の手によって武者ライダーを倒された勢力の数よ」

勝家「なっ?!こ、これが……これだけの数の勢力が、たった一晩で倒されたというのですかっ?!」

勝家が驚くのも無理はない。何せ勢力地図に付けられている赤い×の数は、既に十を軽く越えてしまってるのだ。これだけの数の陣営が既にたった一晩であの敵に倒されたというのならば、その脅威は零や信長達の予想を遥かに上回っているとしか言いようがない。

秀吉「奴のこの動向から既に予測は付いていると思うけど、十中八九敵の狙いは武者ライダーに違いないと思う。その目的は恐らく……武者ライダーを全て倒した際に手に入るといいう、天下を支配出来るほどの力だと思っわ」

長秀「……寧ろそうとしか考えられませんね……武者リノベーションとツヴァイを倒しておきながら、零を狙わなかったと聞いた時は怪訝に思い、まさかとは思いましたけれど……」

信長「奴もまた天下統一とその力を狙ってる、か……だが、何の為にだ?天下を手に入れ、力を手に入れ、その力で奴は何を成す気なのだ?」

同じ天下を目指す者としてか、何故あの戦士が天下の頂を手に入ようとしているのか理由が気になり秀吉に問い掛ける信長だが、秀吉はそれに対し無言のまま首を横に振った。

秀吉「残念ながら、奴が何を目的に天下を手に入れようとしているのかは私達も分かっていない……ただ、奴をこのまま放置しておくのが危険だという事は分かりきってる。無差別に破壊と殺戮を繰り返す奴が天下を、それも天下を支配するほどの力を手に入れてしまえばこの世界がどうなるか……」

零「……まあ、人間が無事に生きていられるか怪しいだろうな。最悪、皆殺しにされる可能性もなくはない……」

零の脳裏に過ぎるのは、この戦国世界に飛ばされる前の世界で起こった地獄絵図の光景。未だに何が目的であんな真似をしたのかは分からないが、あんな残酷に人間の命を簡単に奪う輩がまともな目的を持っているとは到底思えない。やはり何か良からぬことを企んでいるのかと思考に浸る中、評定の間の戸が不意に勢いよく開き、其処から蘭丸が血相を変えて現れた。

蘭丸「姫様ツ！一大事でございますツ！」

勝家「ツ！いきなり何事か蘭丸ツ！姫様と秀吉公の御前だぞツ！」

蘭丸「あつ……も、申し訳ありませんつ、ですが……」

信長「いや、構わぬ。……それでどうした、蘭丸？」

蘭丸「は、はいっ！実は今しがた、このようなものが……！」

そう言つて蘭丸は慌てて懐を漁ると、其処から一枚の白い封書……『決闘状』と書かれたソレを取り出し信長達に見せていく。

長秀「それは……？」

蘭丸「武者リノベーション軍の総大将、家康公から我々に宛てての決闘状ですっ！」

秀吉「ツ！家康から?!」

徳川家康から送られてきた決闘状。それを聞き一同の間にざわめきが広がる中、信長は蘭丸の手から封書を受け取って中身の紙を取り出し、其処に書かれている内容を目で追っていく内に徐々に洩い表情へと変わっていく。

信長「……成る程な。要約すると、今から正午、尾張国境の地にて武者ライダー同士による決闘を申し出る。こちら側が勝てば武者ツヴァイ軍の軍門に下るが、あちら側が勝った場合我の首を差し出してもらおう……だそうだ」

勝家「な、なんと無礼なっ……！決闘状を叩き付けてくるだけなら未だしもっ、姫様の首級を指してくるなどっ！」

零「……問題は其処じゃないか？」

決闘状の内容に憤り思わず立ち上がる勝家に零が冷静にそうツツコミを入れると、長秀は顎に手を添えつつ訝しげな顔を浮かべていた。

長秀「武者ライダー同士の決闘……まさかこんな状況でそれを申し出て来るとは……」

信長「家康らしいと言えば家康らしいがな……しかしあの阿呆、うつけっぷりと空気の読めなさが更に増長しておる……」

秀吉「今がどういう状況になっているのか、あちらもある程度情報を掴んでいるでしょうにね。……それにしても、武者ライダー同士の決闘なんて、彼女は一体どうするつもりなのかしら？」

秀吉の疑問も最もだ。秀吉の軍は既に、先の戦で武者リノベーションを損失してしまっている。故に、武者ライダー同士の決闘など、武

者リノベーション軍には出来ない筈なのだが……

長秀「……もしかしたら、私達のように向こうも武者ライダーを新たに召喚して引き入れた、という可能性はないでしょうか？それならば、向こうが武者ライダー同士の決闘を申し出てきた事についても合点が行きますし」

勝家「それは……しかし、それだと奴らは一体何処から武者ライダーを引き入れたというのだ？我等のような例外はともかくとして、そうポンポンと武者ライダーがそこらに転がっている訳でも無し……」

向こうが決闘に用意するという武者ライダーは何処で手に入れた者のか。それについて様々な可能性を挙げ議論を述べる一同。しかし……

信長「……零……」

零「……ああ。俺も多分、お前と同じ事を考えてると思うぞ……」

何かに気付いたのか、何処となく零を案じるように伏し目がちに小声で呼び掛けて来る信長にそう答えつつ、零もまたある予想が脳裏を掠めて思わず頭を抱えたくなり溜め息を吐いた。

武者リノベーションを損失した家康の軍が新たに武者ライダーを引き入れる事が出来るとしたら、考えれる限り二つしか方法はない。

一つは、今自分達と秀吉達が脅威と感じているあの謎の戦士を武者ライダーに仕立て上げるか。最初に零はその可能性を挙げて考えたが、あの敵は無差別に殺戮と破壊を撒き散らす危険な存在。そんな存在が何処かの武将に大人しく仕えるなど有り得ないだろう。

そうになると、残る可能性はあと一つ……

零「——なのはと市杵穴……捜索隊が見付けられていないあの二人が、恐らく向こうの軍に引き入れられている可能性が大きいだろうな……」

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evoile デイ  
ケイドパート⑥

—尾張国境・荒野—

—ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
!!!—

——それから更に数時間後。あの後秀吉を交えた評定の間での話し合いの末に、信長達は家康が新たに招き入れた武者ライダーの正体を確かめる為にも家康からの決闘の申し出を受け、念には念を入れてと戦の準備をしてから武者キャンセラー軍と共に町を後にした。そして家康が指定した尾張国境を目指して無数の馬と様々な銃火を積んだ戦闘車を走らせる中、零はデイケイダーを走らせ信長の馬と秀吉の馬と並走していた。

信長「——それで、お主は一体どうするつもりなのだ？零」

零「……どうもこうも、敵の武者ライダーの正体を確かめんとどうにもならないだろう？杞憂だったならそれでいいし、もしそうだったなら、話し合いでどうにか済ませるつもりだ……最も、両方のどつちかが人質にされて戦わざるを得ない状況にされていたら話は別だが……」

秀吉「家康に限ってそれはない、と言いたい所だけ……彼女も一度武者ライダーを失って余裕がない筈だからね。今は戦の真っ只中で敵同士である以上、そうしてこないとも限らないと思うわ」



零「……やっぱり、最悪の事態も想定しておいた方がいいか……」

信長「備えていて損はないだろうからな。……しかし、家康の奴は確かにうつけではあるが、アレはうつけなりに人並みの志は持っているし、無駄にプライドも高い。戦だからとは言え、人質などという下賤なやり方を進んで行い勝利を狙うような乏しい女ではないさ……そう信じたくある、という気持ちでもあるのだがな」

零「……だといいがな」

今は戦場で相見える敵同士とは言え、それ以前に秀吉と同じ昔馴染みである家康の人間性を信じたいと言う信長に零も少なからず同調する。人質を突き付けられて無理矢理戦わせられるという展開になれば最悪だが、そうでないなら幾らでも戦いを回避する方法があるはず。そう考えながら零が一同と共にデイケイダーを走らせると、暫く走り続けてた荒野の向こうに大群の姿を捉え一斉に足を止めていく。その大群とは……

家康「——ふーはっはっはっはっはっはっ!!!このこのこやって来たか信長めっ!!今日こそこの地を貴様の墓場にしてくれるぞっ!!覚悟しろおっ!!」

……大群の先頭の戦闘車両の上に様々な銃器を背負いながら仁王立ちし、お馬鹿丸出しで高笑いする一人の女性……武者リノベーシヨン軍の総大将である家康の姿があったのだった。

零「………なあおい。まさかとは思いたい、あの馬鹿っば

い女がもしかして……」

秀吉「……ええ。武者リノベーション軍の大將、徳川家康よ。間違  
いなく」

零「……………」

マジか、と零は直接声には出さずに左手で顔を覆ってしまふ。信長  
や秀吉が散々うつけなど空気の読めない奴などとこぼしていたから  
どんな人物かある程度想像しつつも、交渉次第では話し合いでケリが  
付けられるかもしれないと考えていたのだが目論みが甘かった。

ああいう如何にもノリとかそういうので生きてるような感じのタ  
イプが相手では、どう交渉を持ち掛けるべきか分からない。そうして  
いきなり出鼻を挫かれた零がどう策を練り直すかと頭を悩ます中、信  
長が家康に向けて叫んだ。

信長「貴様からの決闘の申し出に応えに来てやったぞ、家康。……  
だが、貴様は既に先の戦で武者ライダーを失っている筈だ。本当に武  
者ライダーを用意しておるのだろうか？」

家康「ふん、無論だとも。余は貴様のような大うつけみたく己の切  
り札を曝すような真似はせぬのだ。さあ、その目で刮目して見よッ！  
これが我が武者リノベーション軍の、新たな武者ライダーだッ!!」

バサッ!!と、家康がそう高らかに叫ぶと同時に彼女が佇む戦闘車両  
の脇に立て掛けられた武者リノベーション軍の旗が退けられ、その奥  
から二人の人物が姿を現す。それは……

なのは「——！零君！」

零「!なのは、市杵宍……!」

魚見「……やはり、そちら側の武者ライダーの正体は貴方でしたか」

旗の向こうから姿を現した二人……それは、この戦国世界に飛ばされた際に零と離れ離れになってしまったのはと魚見の二人であり、零もやっと二人の安否を確かめられて安堵するのも束の間。予想通り、これからあの二人とライダー同士による決闘を行わなければならないのだという事実を改めて突き付けられて渋い顔を浮かべ、信長は横目でそんな零の様子を見て僅かに険しげな表情をしながら家康に視線を戻す。

信長「驚いたな……まさか三日と経たずに二人も新たな武者ライダーを手に入れていようとは……。よほど運に恵まれているのだな、貴様」

家康「ふつ、当然よ!貴様との戦で我が守護者である武者リノベーションを失い敗走を強いられ、拳げ句の果てにあの物のけ共の追撃に遭い一時はこれまでかと思っただが、天はやはり余を見放さなかったさ!我等の危機に颯爽と現れたこやつ等に命救われ、更には武者リノベーションを失い意気消沈していた我等の新たな武者ライダーとなってくれたのだからなあ!」

零（……聞いてもいないのにベラベラと経緯を話してくれるな、あの女）

長秀（一度おだてると乗りやすいお方ですからね……長年の腐れ縁のおかげか、姫様も家康公の太鼓持ちが板に付いてますし……）

零（太鼓持ちというか……まあ、あの女のチョロさに付け込んで情報を引き出すのは確かに手慣れているな……）

おかげであの二人が家康の武者ライダーになった経緯も大体分かった。多分あの二人も自分と同じように、はぐれてしまった自分を探そうとした矢先に戦の光景を目の当たりにし、一先ずこの世界についての情報を集めようとしてたところに武者ライダーを失って逃走していた家康の軍が怪人達の追撃に遭っている場面にたまたま出くわして咄嗟に助けに入り、そのまま家康に保護されて武者ライダーに仕立て上げられたというところだろう。……当然だが、やはり詐欺で婚姻届は書かされてなどはないのだろうか。しかし……

秀吉「貴方が武者ライダーを新たに仕入れた経緯は何となく分かったわ……けれど解せないのよ。何故貴方はこの時機に信長に決闘を申し出てきたの？今の私達には、戦国バトルロワイヤルで鎧を削り合ってる場合ではない事ぐらい、貴方も重々承知してる筈でしょ？」

そう、秀吉の言う通りだ。幾ら武者ライダーを新しく手に入れたとは言え、今は戦国バトルロワイヤルの勢力図を大きく変える程の力を持つ謎の敵の出現により戦どころではない。なのにこのタイミングで信長を名指して決闘状を叩き付けたのは何の意図があるのか？それについて秀吉が問い詰めると、家康は愚問だと言わんばかりに鼻を鳴らした。

家康「決まっておろうが？この時機だからこそ、だ……今この日ノ本を騒がせるものけ共を一掃するには、陣地を更に広め、新たに武者ライダーを手に入れて力を付けねばなるまい。だから信長の首級と共に、そやつの武者ライダーを手に入れたのだ」

零「おいおい……」

秀吉「……それが解せないと言ってるの。貴方もあの敵を脅威に感じているなら、今は徒に戦火を広げるのは得策でない事ぐらい分かっ

ている筈でしょ？武者ライダーが必要ななら、同盟を組むという手も――」

家康「同盟？ふんつ、それこそ有り得ぬわ。……特に信長、貴様とならば尚の事なッ！」

信長「……………」

ビシッ！と、人差し指を突き付けてそう叫ぶ家康に信長は無表情のまま家康を見つめ返すが、家康は構わず信長を見据えて拳を握り締めた。

家康「貴様は確か以前言ったな？この天下を力で統一し、その果てに、今の体制を棄てて新たな世を築くのだから」

信長「……………うむ、言ったな……………で、それがどうしたというのだ？」

家康「貴様のうつけぶりも遂に自棄が回ったと言っているのだ。今の体制を棄て新たな世を築く？馬鹿めが……………この体制を棄て去ればこの国が一体どうなるか、本気で分かっているのか？我等が潰えれば民達は烏合の衆となり、この国は衰退していくのみ……………。貴様はこの国が今まで築き上げてきた物を棄て、今の暮らしを好み満足している者達の意志を無視して、民達を滅ぼすつもりか！」

高らかにそう叫び、信長が目指そうとしている天下を真っ向から否定する家康。しかしそれに対し、信長も落ち着き払った様子で首を横に振って応えた。

信長「確かにな……………我が目指そうとしている世界は、この国が今まで築き上げてきたしきたりや様式を棄て去る事になる。それを愚かだうつけだと思いう者も大勢いるだろう。……………だが家康よ、この世に移

り変わらぬものなどないのだ」

家康「……何？」

信長「人は飽く無き欲望を抱き、常に変化を求め進化し続ける生き物だ……それでも中には貴様の言う通り、今の生き方を維持したいと望む声もあるだろう……。だが、世の中にはそんな者達の意志とは関係無しに変化していくのが常なのだ」

家康「それを不変のものとするのが民の上に立つ我等の役目だろう！早急に全ての戦を納め、他国との同盟を結んで現状を維持する！それで十分だろうて！民達の今の生活と財産を守らずしてどうするか！」

信長「民達の事を思うなら尚の事だ……下克上が常のこの乱世、今の戦国世界は我や貴様のような様々な人間の野心や疑心から簡単に人を欺き、裏切り、奪い合う……ほんの少しのきっかけで簡単に戦が起きるのが今の現状だ……例えば貴様の言うように、早急に戦を納めて他国と同盟しようと、それで絶対に裏切りには遭わない、戦には繋がらぬという確かな確証があるのか？」

家康「確かな、確証だと……？」

信長「……人は決して強い生き物ではない。例えば、今まで憎み合い敵同士だった隣国同士が同盟して和平を結んだとしても、いつか裏切られやしないかという隣国への疑心と恐怖に耐え切れず、どちらかが先に裏切つて新たな戦に繋がり、新たな戦はその度に民達の財産や生活を奪い苦しめる……貴様が維持しようとしている現状とは正にそんな危ういもの、そんな惨状を我はこの目で何度も目にしてきたのだ。だから変えたいと思った。民達が二度と戦の影に怯えずに済む世界。そんな世界を築き上げるには、天下を統一し、今の現状を根本

から変える必要があるのだと」

家康「何を小綺麗事を……そう言いつつ、貴様も戦を起こして戦火を広げている武将の一人だろう！」

信長「貴様に言われずとも重々承知している……それでも誰かがやらねばそんな世を築けぬのなら、他の誰でもない、我の手でやる。この戦国乱世を納められる事が出来るなら、幾らでもこの身を堕とし、幾らでも憎まれようさ……その覚悟はとうに出来てる」

零「……………」

互いに睨み合い、問答する二人の姿を零や他の一同も無言のまま見守り続ける。今の体制を変える事に否定的で、早急に全ての戦を納め現状を維持するべきだという家康と、今の体制を根本から変える為に天下を取り、この国の民達が二度と戦の影に怯えずに済む世を築くという信長。相反する考えを持つそんな二人に零も思わず何かを口にしようとしたが、すぐに口を閉ざした。

零（いや……よそ者の俺が口出しする事は何もないか）

この世界の行く末は、この世界の住人である信長達が最終的に決める事だ。他所の世界の人間である自分が深く関与するべきではないと考えながら、零は家康陣の武者ライダーのなのはと魚見に呼び掛けた。

零「おい二人共、こつちに来い」

なのは「え？け、けど……………」

零「漸く合流出来たんだぞ？これ以上そつちにおいても何のメリット

もないだろ？あの敵の件もある以上、こんなところで決闘の真似事なんてしている余裕もないんだ」

魚見「それはそうですが……しかし、私達も家康さんには一宿一飯の恩義がありますから、彼女にその恩を返せないまま裏切るような真似は……」

零「む……」

零と違い根が真面目過ぎる二人だからか、一宿一飯の恩をまだ返せていない以上、このまま家康を裏切って信長側の零の下に戻る事は出来ないし、なのはと魚見はそう言っただけで零と家康の顔を交互に見ながら迷いを浮かべていき、そんな二人の性格を知っている零もそれ以上は強く言えずに押し黙ってしまったが……

零（だが、どうする……？このままじゃどちらにせよあの二人と戦う事に……）

しかも自分が負ければ信長の頸を家康に差し出せねばならない。だからといって二人と本気で戦う事も出来ない。二人と戦うべきか、それともそれを理由に決闘を放棄して信長の頸を差し出すか。どう決断するか心の中で迷い零が苦悶する中、その様子を今まで見ていた長秀が信長の傍に近付き耳打ちしていく。

長秀（姫様……やはりあの様子だと、零も本気で戦う事は出来なさそうです）

信長（だろうな……探していた仲間と望まぬ形で戦わされるのだ。あやつに本気である二人と戦うことなど出来はしないだろ……）

長秀（ええ。ですが、このまま決闘になったとしてもあの二人に圧



されて負けてしまう可能性の方が高いでしょう。そうなれば姫様の頸を差し出さねばならなくなる……ですから――)

ごによごによ、と長秀は小さな声で信長の耳に何かを耳打ちしていき、その内容を聞いた信長は目を見開き思わず長秀の顔を見た。

信長（それは……しかし、大丈夫なのか？）

長秀（あちらのお二方も、家康公に恩があると引けぬようですからね。このままあの三人に望まない陰惨な戦いをさせるよりかはマシかと思えます）

信長（……むう……分かった。今はそなたを信じよう。話はこちらで合わせる）

長秀（お願いします）

これも零達が今よりも辛い戦いに身を投じさせない為だと自分に言い聞かせて、信長は軽く咳ばらいした後に零に向け口を開いた。

信長「んんっ！……零よ、やはりあの二人と戦う事になりそうだが、大丈夫なのか？」

零「……どうだろうな……生憎本気で戦える相手ではないし、こっちが加減しながら戦うという手もあるが、それで勝てる相手でもないし……」

信長「うむ、確かにお主にとっては戦い難い相手この上ないだろうしな……だがそれでも、我は貴様が必ず勝つと信じているぞ？何せ、その……貴様は我の……最愛の『夫』、なのだしな……」

なのは「……………え？」

魚見「……………おっ、と？」

ヒュンツ…………と、その瞬間、この戦場に漂う空気が一段と冷たくなつたような気がした。が、肝心の零はそんな空気の变化には気付かず、あからさまに嫌そうな顔で信長の方に振り返つた。

零「だからっ、そのらしくもない台詞もその呼び方も止めろと言つただろうがっ。お前との夫婦関係なんて俺は一切認めてないぞっ」

信長「ん？貴様が認めまいと、事実上我等は夫婦関係なのだから仕方なからう？貴様は嬉しくないのか？こんな美人な妻を嫁に出来たというのに」

零「自分で言うなっ！大体あんな形で夫婦にされて、どう嬉しく思えと言うんだっ！」

信長「それはまあ…………あれだな、新妻らしく夫に色々と尽くすつもりでいるぞ？例えばこの決闘に勝つた暁には、そうさなあ…………うむ、今晚の夜伽は貴様の望む通り、我を好きにしてくれてもいいぞ？」

蘭丸「なっ、ひ、姫様っ！なんとはしたない事をつ！」

零「…………馬鹿にしているのかお前？そんな物で俺が本気出してアイツ等と戦うとも思つて——」

——……ゾワアアツツ——

零「……………え？」

その時だった。ぞくりと、絶対零度の冷たい視線が零の全身にべったり張り付いたのは。全身からブワツと冷や汗が噴き出し、額から一筋の汗が流れる。その冷たい視線に釣られるようにゆっくりと零が振り返ると、其処には……

魚見「——結婚、夫婦、新妻、夜伽……ほおう……少し離れていた間に、随分良いご身分になられていたようですね……零……？」

なのは「ほんとだねえー。私達が、零君一人で大丈夫かなってずっと気掛かりで昨日も一睡も寝付けられなかったのに……うつふふふつ……どういふことかなあ？」

零「……………は……………えつ

……………？」

……完全な無表情と冷たさしか感じない眼差しを零に向ける魚見と、凄く優しい笑顔を浮かべつつも絶対零度の凍気を放つなのは姿が其処にはあり、そんな二人の姿を見て零も何故か心の内から自然とある確信を得た。

——あ、これ死ぬな……と。

零「——あ……………あ、の……………ど、どうしたんだお前等……………？な、何故急にそんな怒り心頭になってるんだっ……………？さ、さつきまで全然普通に話してただろうっ？」

魚見「いいえ、別に……………ただ貴方の節操の無さにいい加減、つくっ！づくっ！呆れ果ているだけです……………」

なのは「私達も、ある程度は覚悟は決めてたよ？この世界の武将さん達って全員女の子みたいだから、ぜつつつつたいにまた零君が誰かにフラグ立ててふらっと帰ってくるんだろーなあーって……………なのに予想の斜め上を超えて結婚って……………ねえ、一体どうしたらそうなるのかなあ……………？」

零「……………い、いやあああ……………く、黒月さんもなんでこんな事になったのか全然分からないとかかなあ……………事故というかつ、うっかりとかつ、因果率が狂ったとかあ……………」

なのは「事故やうっかりでどうすれば織田信長さんの旦那さんになんかなれるのオオツ！！！！」

零「知らんわああツ！！寧ろ俺が聞きたいツ！！こつちだつて自分の女運の無さにつくづく嫌気が差している真っ最中なんだぞおおツ！！」

何が悲しくて結婚詐欺に引っ掛かった上に織田信長の夫にされねばならぬのか。最早号泣一步手間といった感じに叫ぶ零だが、信長は頬を紅くしながらモジモジと毛先を弄って拗ねるように口先を尖らせた。



『RIDER SOUL TRANS!』

『KAMENRIDE:TRANS!』

『gouka!now!』

『gou!gou!gou—gou—gou!』

どう見てもわざと焚き付けているようにしか見えない発言を繰り返す信長に零も思わず涙目になりながら怒鳴るが、直後に聞き慣れた電子音声が響き渡り慌てて振り返ると、其処には変身を完了してライドブツカーをガンモードに切り替えるトランスと、淡々と右手のリングを取り替える聖桜が背後からゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ……と、とてつもない威圧感を放ちながら佇む姿があった。

聖桜『——成る程、よく分かりました……どうやら貴方にはいい加減、『躰』という物を教え込んだ方が良さそうですね……』

『Explosion!Now!』

トランス『お父さんが勝手に結婚しただなんて、ヴィヴィオに一体なんて説明すればいいのっ……ほんつとにもうっ……いい加減、その頭の芯まで冷やそうか……?』

『ATTACKRIDE:DIVINE BUSTER!』

零「あ……だ、だ、だから待てと言っているだろうツ?!少しはこっちの言い分も聞けえツ!!!確かにちよつとした手違いで夫婦になんかされたが、アイツとはきつちり別れて離婚するんだツ!!!別にアイツの事は特別好きでもなんでもないんだぞツ?!」

トランス『なっ……あ、愛してもいないのに信長さんとの結婚を決めたっていうのツ?!最っ低ツ!!』

聖桜『しかもこんな大勢の前で離婚宣言するとは……ドン引きしました……デリカシーがないにも程があります……』

零「だからそうじゃないと言っているだろうがああッ!!!」

信長（……ふむ。長秀よ、こんな感じでどうか?）

長秀（上々です♪これで零も本気で戦うのは無理だとしても、彼に本気で応戦させる事は可能でしょうね。……まあ彼には気の毒ですが、嫌々仲間同士で戦わされるよりかはマシでしょう）

そのおかげか、仲間と戦わなければならないと沈んだ気持ちに就いた零からは既に悲壮感は漂っていない。……その代わり、なのはと魚見からの制裁を必死に回避しようと血相を変えて必死に弁解しているが。

家康「——き、貴様等、いつまで余を放って駄弁っているのだあッ!!!いい加減にしろッ!!!我等は決闘しに来ているのだぞッ!!!」

信長「むっ、言われずとも分かっておるわ」

秀吉「あら、私は別にもう少し続けてもらっても構わないんだけど?他所様の修羅場ほど見ていて飽きないものはないし」

家康「部外者は黙っておれ猿ッ!!大体信長あッ!!貴様は昔からそうやって余が気に入らぬ事ばかり——!!」

と、何処までもマイペースな信長と秀吉に家康が怒りを露わに怒鳴り散らし始め、両陣営の武者ライダーと武将達が勝手に言い争いを始めて決闘の雰囲気でなくなり掛けていた。そんな時だった……

—ガギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
ンッ!!!—

『グアアアアアアアアアアアッ!!』

「キヤアアアアアアアアアアッ!!」

『『『……ッ?!』』』

決闘の雰囲気がかうやむやになり掛けてたその時、突如その戦場に甲高い金属音と二つの悲鳴が響き、それと同時に二人の人物が何かに吹き飛ばされるようにその場に転がり込んできたのだ。そしてその悲鳴と金属音に驚き一同が振り返ると、其処には両者共に剣を支えに立ち上がるうとしている二人……ライダーバトルを繰り広げていたハズの仮面ライダーと黒い少女の姿があつたのだった。

天神 『グッ……!クソッ、なんて出鱈目な強さだっ……!』

「ッ……不意打ちとは言え、私が遅れを取るなんてっ……」

家康 「な、何だ、あやつらは……?」

零 「あれは……まさか、天神かッ?」

聖桜 『桜ノ神ッ?!』



天神『……ッ?!零ッ?!それに魚見、なのはもッ!無事だったのか!』

突然戦場に吹っ飛ばされてきた二人組の片方が天神と知って零達  
が驚愕する中、天神も身体が傷付いているにも関わらずに三人の姿を  
見付けて安堵の様子を浮かべていくが、其処へ……

—ザッ、ザッ、ザッ……—

『——邪魔物の掃除をしていたところに、まさか最後の一人を見付け  
ようとはな……これは運がいい』

天神と黒い少女が吹っ飛ばされてきた方からゆつくりと新たな参  
戦者……全身を覆う灰色のマントを纏い、右手には鮮血のように赤い  
ライドブツカーを手にした謎の戦士が姿を現し、零達は目を見開き驚  
愕を浮かべた。

零「アイツはっ……!」

トランス『あ、あの時のマント付きッ?!』

秀吉「そんな、どうして奴がこんな場所につ……!」

信長「っ……」

たった一晩で各陣営の武者ライダーを十人以上倒した謎の戦士の  
参戦。本来なら、入念な準備や各陣営との一致団結を持って戦わねば  
ならないほど危険な存在の予想外の登場に動揺してしまう一同だが、

そのことを知らない天神は右手に握り持つ無双セイバーの鍔の部分のスライドを引き……

天神『いつまでそうやって顔を隠してるつもりだっ? いい加減正体を現せっ!!』

―バシユウウツバシユウウツバシユウウツ!!―

『……!』

―ガギイイイイツ!!―

無双セイバーの鍔の部分の銃口を突き付けてトリガーを引き、数発の弾丸を謎の戦士に目掛けて素早く乱射したのである。それを目にした謎の戦士も咄嗟に赤いライドブッカーを盾に使い咄嗟に弾丸を防いでいくが、数発の弾丸を防ぎ切れずに幾つかがマントに直撃し、その内の一発がフードを払い退けてその下に隠されていた素顔を露わにしたのだった。その素顔とは……

『……!』

天神『ツ?! な、何……?』

聖桜『あ、あれは……?』

零「……デイケイド……」

そう、フードの下に隠されていた謎の戦士の素顔とは、血のように赤く染まった仮面と複眼以外デイケイドに全く酷似した外見をして

いたのであった。その予想外の正体にトランスと聖桜と天神は驚愕してしまい、前の世界での謎の戦士との戦闘で見たその武器から既にその正体がある程度予想が付いていた零は険しげな眼差しで赤いデイケイドを睨むが、信長達はその赤いデイケイドを見て信じられないものを見たような顔で驚愕していた。

家康「あ、あやつはっ?!」

秀吉「まさか……武者デイケイド……?!生きていたの?!」

零（ツ！武者デイケイド?……確か、伊達政宗の武者ライダーだったっていう?）

この世界の半年前に、突然何者かの襲撃によって伊達政宗と共に何処かへ消えてしまったという武者デイケイド。それがあの赤いデイケイドだという秀吉に零も訝しげな表情を浮かべてしまうが……

デイケイド? 『武者、だと?……否……断じて否!!我はそんな軟弱な存在などではない!!』

信長「……?武者ライダーではない?……なら貴様、一体何者だというのだ?」

自分は武者ライダーなどではないと否定する赤いデイケイドに対し、その正体を見極める為に一步も退かず鋭い眼光を向ける信長。するとそんな信長の問い掛けに対し、赤いデイケイドもマントを剥ぎ取って今まで隠していた姿を曝しながら両手を広げ……

デイケイド? 『良いだろう……知らぬならば聞かせてやる、心して聞けッ!!!我が名は”邪武者!!!邪武者デイケイド”ッ!!!この天下を手に入れる者為りッ!!!』









「邪魔よツ!!怪我したくなかったら下がってなさいツ!!ハアアツ!!」

—ズシヤアアツ!!—

『ギヤアアツ?!』

天神『チイツ!—一体何がどうなっているんだこの世界はツ?!ハツ!!』

そんな中、黒い少女は刀を振り上げて襲い掛かってきた家康軍の武士達にクロノスブレイドの峰の部分を叩き込んで吹っ飛ばしながら瞬時に刃を返して怪人達を切り捨てていき、その背後には家康軍の武士達を気絶させて戦場の外に放り投げつつ桜雪でファンガイアを切り裂き、無双セイバーで銃撃してグロンギを吹っ飛ばす天神の姿もあつた。更に……

家康「でえええあああああああああああツ!!」

信長「ハツ!!」

—ガギイイイイイイイイイイインツ!!!—

連合軍が武将の一人である信長、そして自身の愛馬に乗り換えた家康軍の大将の家康はお互いに馬を戦場に走らせ、すれ違い様に刀と刀をぶつけ合わせ激突している姿があつた。しかし、二人が振り下ろした互いの刀は二人の頸を落とすまでに至らず、信長の頬が切れて流血し、家康の白い髪がパラパラと落ちていく。

家康「ツ!いい加減にしろ信長ツ!貴様っ、いつまでそうやって手を抜くつもりだツ?!」



信長「……別に手を抜いているつもりはないのだがな。単に貴様が力み過ぎてるだけではないか？昔から刀の扱い方が下手だったろ、貴様？」

家康「喧しいわッ!!だったらこれでどうだッ?!

―ジャキッ!ズガガガガガガガガガッ!!―

信長「!チッ……!」

『グアッ?!』

『ヌアッ?!』

呆れ気味に溜め息を吐いた信長の言葉が癩に障ったのか、家康は背中に担ぐ火器の中からサブマシンガンを取り出して銃口を突き付け信長に向けて乱射し出したのである。それを目にした信長は咄嗟に愛馬を操って銃弾を避けていき、信長にかわされた銃弾はそのまま背後から信長に襲い掛かろうとした怪人達へと直撃し吹っ飛ばしていく。そして……

邪武者デイケイド『ヌウエアアッ!ハッ!』

―ガギイイイイツ!!ガギッ……グガアアアンツ!!―

デイケイド『グウウッ?!グッ、クソッ……!!』

戦場の中心では、秀吉の傍に付き従う武者キャンセラーを指す邪武者デイケイドを零が変身したデイケイドが食い止めようと試みていたが、邪武者デイケイドの圧倒的な戦闘力の前に圧されてしまい、赤いライドブツカー……ブラッドライドブツカーで何度もボデイを

切り刻まれ吹き飛ばされてしまっていた。

邪武者デイクイド『……………どうした？その程度の力しか持たぬ分際で我が前に立ち塞がったのか、貴様は？』

デイクイド『チツ……他の武者ライダーを散々喰らっておいでよく言うっ……………！』

強気な態度を崩さずライドブツカーを構え直しながら態勢を立て直し邪武者デイクイドを睨むデイクイドだが、その心中では焦りを浮かべていた。

邪武者デイクイドは確かに以前一度戦った時より遥かに力を増しており、単純な力押し勝負など正面からでは通じない。

それを感じ取り邪武者デイクイドと一定の距離を保ちつつどう戦うべきかとデイクイドが思考を駆け巡らせる中、邪武者デイクイドはジリジリとデイクイドへと迫りブラッドライドブツカーで再び斬り掛かろうとした、その時……

『Explosion!Now!』

邪武者デイクイド『——ツ!!』

——チュド オ オオ オオ オオ オオ オオ オオ オオ オオ オオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオンツツツツ!!!—

デイクイド『ツ?!これは……………?』

何処からか突然電子音声が響き、それと同時に邪武者デイクイドに

朱い魔法陣が浮かび上がり大爆発を巻き起こしたのだ。その見覚えのある爆発の中に吞まれた邪武者デイケイドを目にしデイケイドが驚いていると、武士達と怪人達が戦っている混戦の中からトランスと聖桜が飛び出してきた。

聖桜『無事ですか、零!』

デイケイド『!お前ら……。良いのかよ? 敵軍の武者ライダーを助けるような真似なんかして?』

トランス『皮肉なんか言ってる場合じゃないでしょうツ! いいから今の内に早く態勢を立て直して……。ブザアアアアアツ!!!。……ツ?!』

先の件で拗ねる様に皮肉を口にするデイケイドに態勢を立て直すように促すトランスだが、その時、邪武者デイケイドを飲み込んだ爆炎が内側から斬り裂かれて霞のように消え去ったのである。そして爆炎の中から、全身に炎の様に揺らめく赤黒いオーラを身に纏った無傷の邪武者デイケイドがその姿を現した。

聖桜『ツ! こちらの魔法が効いていない?!』

邪武者デイケイド『何人集まろうとも同じ事だ……。纏めて黄泉へと墜ちるがいいツ!!』

— シュブオオオオツ!! ブザアアアアツ!!! —

トランス『?! 速っ— ガギイイイイツ!!— ウアアツ?!』

デイケイド『ツ! なのはツ!!— ズシャアアツ!!!— グアアツ!!』

そう言いながら邪武者デイケイドは全身に身に纏った赤黒いオーラの能力なのか目にも留まらぬ速さで一瞬でデイケイド達の間を姿を現し、赤黒いオーラを刃に纏ったブラッドライドブツカーを振るってデイケイド達を次々と斬り飛ばしてしまったのだ。

そしてデイケイドが何とか反撃し邪武者デイケイドと鏝ぜり合いになる中、地面を転がりながら咄嗟に態勢を立て直したトランスはライドブツカーからカードを取り出しバツクルにセット、聖桜は左手の指輪を取り替えバツクルに翳していく。

『KAMENRIDE：SEE—O!』

『rekku now!』

『byuu! byuu—byuu—byuu—byuu!』

T聖王『ヤアアツ!!』

聖桜RS『ハツ!!』

—ガギイインツ!!ガギイイイイツ!!—

邪武者デイケイド『ヌウツ?!デエアアツ!!』

二つの電子音声が重なって響き渡ると共にトランスはホーリーフェアリスを手にした聖王、聖桜はレックウスタイルに姿を変えながら邪武者デイケイドへとそれぞれの武器で斬り掛かってデイケイドから引き離していき、デイケイドもそれを見て二人に続こうとライドブツカーを構え直す、その時……

『——零ツ!!』

デイケイド『……ツ?!』

不意に背後から名を呼ばれ、デイケイドは足を止めて背後へと振り返る。すると其処にはこちらに向かつて駆け寄ってくる二人組……天神と黒い少女の姿があった。

デイケイド『木ノ花……!』

天神『やつと見付けたぞっ……!説明してくれ!これは一体どういう状況なんだ?!』

デイケイド『は?ああ……この状況については色々と話が長くなるから追い追い説明する……というかそれより、何でお前が此処に?』

天神『何でって、君達を捜しに来たに決まっているだろう!急にいなくなるから心配して気配を頼りに来てみればこんな戦国みたいな世界に辿り着くし、着いたら着いたでいきなりこの娘に襲われるわ……!』

「だから、それに関してはごめんって……」

デイケイド『……?誰だ、そいつ?』

此処に至るまでの苦労話を語る天神の脇に立つ小さな少女の存在に漸く気が付き、怪訝な表情で問い掛けるデイケイド。だが黒い少女はそれに対して無言のままクロノスブレイドの切っ先をデイケイドの後ろに向け……

「私については取りあえず、今は敵じゃないって理解してくれれば十分よ。それより……アイツをどうにかする方が先じゃない?」

—ガギイイイイインツ!!!—

T聖王『キヤアアッ!』

聖桜RS『クッ!』

デイケイド『ツ?!二人共ッ!』

黒い少女が忠告した直後、邪武者デイケイドと戦っていたT聖王と聖桜が三人の前にまで地を転がるように吹っ飛ばされ、更にT聖王と聖桜はダメージで強制的に通常形態に戻ってしまったのだ。

そしてデイケイドと天神が慌てて二人へと駆け寄って身体を抱き起こしていくと、トランスと天神を吹っ飛ばした邪武者デイケイドがブラッドライドブツカーを振りかざし四人に再度斬り掛かろうとするが、それを阻むように黒い少女が飛び出し邪武者デイケイドの剣を受け止めた。

—ガギイツ!!—

邪武者デイケイド『ツ!貴様ッ……!』

「さっきは良くもやってくれたわね?借りは倍にして変えさせてもらうわッ!」

啖呵を切る様にそう叫ぶと共に、黒い少女はクロノスブレイドで邪武者デイケイドのブラッドライドブツカーを斬り払いながら巧みな剣技で斬り掛かっていき、その間にデイケイドと天神の手を借りて立ち上がったトランスと聖桜は邪武者デイケイドと戦う黒い少女を見て疑問符を浮かべた。

聖桜『あの子は一体……?』

天神『私も詳しくは判らん。ただこの世界に着いてからいきなり勝負を挑まれたんだが……君達は知らないのか？特に零、ロリは君の専門だろう？』

デイケイド『誰がだツ!! ったくツ……まあ武者ライダーには見えんし……どちらかと言えば、ツカサや翔子と同じライダー少女に似ているような……というかあの剣からして、クロノスじゃないか？』

トランス『あつ、言われてみるとそうかも……でも、それ以外に何か誰かに似てない？あの声とか金髪とか……』

デイケイド『お前もか？実は俺も何かさつきからそんな感じがしてな……しかも嫌な方向で——』

「くッ…ちよつと！…いつまで其処でボーツとしてんのよっ?! 観戦してる余裕があるなら手伝ってっ!」

デイケイド『ツ! あ、ああ分かってるツ! 取りあえずアイツについて考えるのは後にするぞ……!』

トランス『う、うん!』

今はあの黒い少女の疑問に関しては後回しだと、そう自分に言い聞かせるようにデイケイドはライドブツカーの刃を撫でてトランス達と共に邪武者デイケイドに突っ込んでいった。まずは聖桜がウィザーソードガンで黒い少女と切り結んでる邪武者デイケイドとの間に割って入り、その後にくるようにデイケイドと天神がライドブツカーSモードと桜雪で邪武者デイケイドに斬り掛かり、トランスがGモードに切り替えたライドブツカーを乱射させ邪武者デイケイドを怯ませた直後、黒い少女がすかさずクロノスブレイドで斬り付けて後

退りさせていく。

邪武者デイケイド 『ヌグツ?!クツ、小癩な……』

デイケイド 『五対一で悪いが、こつちとしては何度もお前を見逃す訳にはいかないんで……一気にケリを付けさせてもらおうぞッ!』

『『『ハアアツ!!』』』

デイケイドが勢いよく地を蹴って邪武者デイケイドに再び斬り掛かったと共に、聖桜、天神、黒い少女が三方向から同時に踏み込み、トランスもライドブツカーの銃口を邪武者デイケイドに狙い定めて引き金に指を掛けた。が……

邪武者デイケイド 『——来い、シノビラーツ!!』

—シユババババババババババババツ!!!—

「ッ?!」

デイケイド 『何?!』

四方から邪武者デイケイドに仕掛けようとした直後、邪武者デイケイドが高らかにそう叫んだと共に邪武者デイケイドの足元の影から無数の影が飛び出してきたのである。そして無数の影は五人の前で忍者の怪人達……嘗て拓斗と守が倒したシノビラーとなって現れ、素早い動きでデイケイド達に斬り掛かって来た。

天神 『グツ?!何なんだコイツ等はッ?!』



聖桜『忍者の怪物つ……？こんなものまで隠し持っていたなんてつ  
―ズバアアツ!!―ウアツ!』

トランス『クツ!う、動きが読み辛いつ、キャアアツ!』

如何にも忍者らしい素早さとトリツキーな動きにより攻撃を当て  
る事が出来ず、シノビラー達に翻弄されて苦戦を強いられてしまう  
デイケイド達。そして邪武者デイケイドはその隙にブラッドライド  
ブツカーを左腰に納めると、両手に二本の同じ剣を何処からともなく  
出現させる。それは……

デイケイド『……ツ!あれは、約束された勝利の剣(エクスカリ  
バー)ツ?!』

そう、邪武者デイケイドが両手に握り締めた剣の正体とは、仮面ラ  
イダーエクスが主要武器として使用する約束された勝利の剣(エクス  
カリバー)だったのだ。

しかしその外見はデイケイド達が見慣れている黄金の剣ではなく、  
禍々しい漆黒の色に染められた魔剣と化しており、邪武者デイケイド  
はその両手に握り締めた二本の魔剣をゆっくりと頭上に掲げて一つ  
にし、合わさつた二本の魔剣は漆黒の輝きを放ち圧倒的な魔力を放出  
し始めたのだった。

―ギユ イイイイイイイイイイイイイイイイイ

!!!!!!  
|  
イイイイイイイイイイイイイイイイイ  
|  
!!!!!!

デイケイド『……マズイ……周りの兵達を避難させろツ!!アレ”を  
撃たれたら一たまりもないぞツ!!』

その漆黒の光を目の当たりにして直感的に危険を感じ取り、デイケイドはライドブツカーでシノビラー達を退けながらトランス達や周りの兵達にも聞こえるように呼び掛けた。

ただでさえ高火力を誇るエクスカリバーがそれ単体でも十分脅威だというのに、それが二本となって合わさり、しかもこんな敵味方が入り乱れる戦場で撃ち込まれてしまえば大惨事となるのは目に見える。

それをデイケイド同様理解しているトランス達もそれぞれが戦うシノビラー達を払い退けて周りの兵達を慌てて避難させていき、デイケイドもすぐ近くの怪人を切り捨てて兵達を逃がしていく。

—ギユ イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
!!!!!!  
|

家康「……ッ?!な、何だあれは?!」

信長「……アレは……」

秀吉「黒い、光……?」

そして、戦場の各所にて邪武者デイケイドが放とうとしているエクスカリバーの漆黒の輝きを信長達も目の当たりにして思わず戦闘を止め、各陣営の兵達もその光に気づきザワザワとどよめきが広がっていた。そうして……

邪武者『デイケイド』——約束された(エクス)……』



劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evoile デイ  
ケイドパート⑧

……………ビユウウウウツ……………

邪武者デイクイドが放った漆黒の閃光に焼き尽された戦場。周囲を覆い隠す程の白煙が立ち込め、肉が焼き焦げた嫌な臭いが鼻に付く……………。そんな焼け野原と化した戦場一帯には、信長と秀吉の連合軍の兵達と家康軍の兵達が瀕死の状態で苦しみ悶えながら倒れる姿があり、その中には、変身が強制解除されたボロボロの零達の姿もあった。

零「……………ツ……………おいつ……………お、まえら……………無事かつ……………?」

魚見「……………う……………ええ、何とかつ……………」

姫「奴の周りに障壁を張って、どうにか威力を抑えたからな……………私達は平気だつ……………それよりも、君達は……………?」

零「こつちは何ともないつ……………俺よりもなのは、お前は……………なのは……………?」

なのはの安否を確かめようと彼女の姿を探す零だが、其処で気付いた。先程まで近くにいた筈のなのはの姿が何処にも見当たらない。それに気付き零達が慌ててなのはを捜し辺りを見回していく中、彼らから少し離れた場所では……………

「……………ん……………ツ……………?私……………?」

零達や他の兵達と同様に、エクスカリバーの光に巻き込まれた黒い少女も其処で漸く目を覚ました。意識が戻ったばかり故に未だうつらうつらとするが、何やらズキズキと後頭部に鈍痛が走って頭を抑えると、彼女の右手に握られたクロノスブレイドが声を発した。

CB 『漸く目を覚ましたか』

「ッ！クロノスブレイド？……私、確か……」

CB 『あの邪武者、デイケイドとやらが放った光の被害に巻き込まれ、意識を失っていたようだな。全く、まだまだ鍛え足りんようだ……取りあえず、其処の女を退かしてさっさと起き上がれ』

「……………え？」

——ドサツ…………—

何やら可笑しな発言をするクロノスブレイドの言葉に黒い少女が思わず上半身を起こそうとした瞬間、彼女の上から何かがずり落ちて真横に音を立てて転がった。それに驚いて黒い少女が振り返ると、其処には体中に傷を負った女性……変身が解けたなのはが気を失い倒れる姿があつたのだ。

「っ?!この人……………え……………なの、は……………?」

なのは「………………………………………………………………………………」

CB 『ふむ。どうやらお前があの光に飲み込まれる直前、咄嗟にお前を抱き留めて自分を盾にしたようだな。お前の見た目が子供だからと庇わずにはいられなかったのか……何にしてもお節介な奴だ』

「ツッそんなこと言ってる場合じゃないでしょツ?!ちよつと、しつかりしなさいよツ!ねえつてばツ!」

呆れるように溜め息を吐くクロノスブレイドにそう言いながら黒い少女はすぐになのはに大声で呼び掛けて、彼女の身体を必死に揺さぶっていく。そして、また別の場所では……

—ピチャツ……ピチャツ……—

家康「——貴様……何の真似だっ……?」

信長「……ツ……」

周りに重傷を負って苦しげに横たわる兵達の姿が見られる中、家康と信長の姿もその中にはあった。家康は服の所々が焦げてるぐらいで大した外傷はないようだが、それに対し信長はボロボロで、額から流れる血が家康の顔に滴り落ちていき、家康はそんな信長を睨み突き飛ばした。

信長「グッ……」

家康「何の真似かと聞いておるのだツ!貴様と余は敵同士だろうツ?!それなのに自らを傷付けて余を庇うなど……!貴様、余に情けを掛けるつもりかツ?!」

何処まで人に恥を搔かせれば気が済むのだと、倒れる信長を睨み付

けて叫ぶ家康。しかしそんな家康を見て、信長もけだるげに上体を起こすと……

信長「別に……貴様に情けを掛けた訳ではない……ただ、貴様を此処で失えば我が困るから、貴様を庇っただけだ……」

家康「……何？」

家康を失えば信長にとって都合が悪いから助けただけ。その意味が分からず家康が訝しげな顔で聞き返すと、信長はそんな家康の目を真つすぐ見つめ返しながら口を開いた。

信長「貴様は、確かに空気は読めぬし、阿呆な奴ではあるが……国を纏め上げるその手腕や統治力、その他の才は我も買っておるのだ……そんな貴様の能力を、我はずっと以前から欲しいと思っていたぐらいだしな……」

家康「ツ……！何を馬鹿なこと……！」

信長「冗談でこんなことは言わぬさ……寧ろ貴様程の逸材を、このような場所で失うことの方こそ愚の骨頂だろう……っ……」

自分が欲しいと思っていた高い能力を持つ家康を此処で失いたくなかったが為に、家康を助けただけに過ぎない。激痛の走る身体を抑えつつそう語る信長に家康は戸惑い浮かべずにはいらなかったが、信長は構わず家康を見据えて語り続ける。

信長「なあ、家康よ……確かに貴様の言う通り、我はこの国の古くからの様式や、しきたりを捨て去ろうとしている大うつけやもしれん……だがそれでも、我はもつと人間が進化していく様をこの目で見たいのだ……人の可能性が、この日ノ本という国を何処まで成長させ伸

ばしていくのか……それを見届けたい……我と貴様、それに秀吉が組めば、それを形に出来るかもしれんとは思わんか……？」

家康「ツ……そんなことを言つて、余が貴様の下に付くとも思っているのかっ？」

信長「思つておらん……。だから戦で貴様を下そうという打算もあつて、先の戦とこの決闘を受けたのだ……我が本気であることを示して、貴様を納得させ引き入れる……それまで貴様には、勝手に死なれては困るのだ……」

家康「ツ……貴様……」

本当に何処までうつけなのかと、家康がそう告げようと言い掛けた、その時……

「——キャンセルーッ!!しつかりしなさいッ!!」

信長& a m p ;家康『……?!』

不意に背後から張り詰めた悲鳴が響き、それを聞いた信長と家康が驚愕して振り返ると、其処には二人から離れた場所でボロボロの姿で倒れ、右腕と左足が消滅してしまつている武者キャンセルーを抱き抱えながら必死に呼び掛ける秀吉の姿があつた。

武者キャンセルー『ツ……姫様、お逃げ下さい……私の事など、お気になさらず……』





邪武者デイクイドが高らかに叫ぶと共に、武者キャンセラーは全身から青い火花が撒き散らしながら身体が捻れて邪武者デイクイドの腰に巻かれてる赤いデイクイドライバー……ブラッドデイクイドライバーに吸い込まれ、今までの武者ライダーと同様に吸収されてしまったのだった。

秀吉「ツ?!キャンセラアーツ!!」

邪武者デイクイド『……これでこの地上から、全ての武者ライダーが消え去った……天よオオツ!!天下はこの手に落ちたアアツ!!今こそ我が前に現せツ!!天下を支配する『力』をオオオオオオオツ!!!』

——……ゴゴゴゴツ……ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオツツツツ……!!!——

信長「ツ?!何だ……空が……?!」

両腕を広げ、天に向かって邪武者デイクイドが高らかに叫んだと共に、先程まで晴れ渡っていた筈の青空が何処からともなく出現した暗雲に覆い隠されてしまう。その天変地異を目にして信長達が戸惑う中、暗雲の向こうで一瞬何かが煌めき、其処から一本の赤黒い刀が回転しながら飛来して邪武者デイクイドの目の前に突き刺さった。

家康「ツ?!アレは?!」

邪武者デイクイド『天下人だけが持つ事を赦された刀、”天将刀”……これで天下は我が物に……!』

ズブリツと、地面に深々と突き刺さった歪な形をした刃の赤黒い刀……天将刀の柄を掴んで抜き取り、まるで己が天下人である事を示すように頭上に刀を掲げる邪武者ディケイド。その時……

—ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ……ドツツツゴオオオオオオ  
オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ  
オオオオオオオオオオオオオオオオ——  
オオオオオンツツツツツツツツ——  
!!!!!!!—

それに呼応するかのよう、突如地を揺るがす地響きと共に巨大な大地震が発生したのだ。その異常事態に周囲の兵達が恐れて尻込む中、遠方の山々が吹き飛び、その真下から巨大な物体……全長500mはあるだろう謎の大樹が姿を現したのであった。

秀吉「ツ……?!な、何、あれ……?」

邪武者ディケイド『フ……フフフツ……漸くその姿を現したか、『神樹カーラーン』ツ!!さあ、この世全てを我が手に治めさせるツ!!天下をこの手にイイイイイイイイイイイイ——ツツ!!』

—シユルルツ……ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオ——  
オオオンツツツツツ——  
!!!!!!!—

天将刀を頭上に掲げて謎の大樹……神樹カーラーンに邪武者ディ

ケイドがそう命じた瞬間、神樹カーラーンから無数の触手が伸長して大地を削りながら様々な方へ広がり始めたのだった。そうして、神樹カーラーンから伸びた無数の触手達は此処から離れた場所に位置する人里や村、更には信長達の町にまで拡大して建物を破壊し、人々を捕らえて取り込んでいってしまった。

蘭丸「そ、そんな、尾張が……私達の国がつ……！」

信長「ツ……！貴様あつ、止めろオオツ!!」

自分達の国までもが触手に覆われていく光景を遠目で目の当たりにし、信長は地に転がる刀を掴んで邪武者デイケイドに向かって斬り掛かった。しかし、邪武者デイケイドは振り向き様に天将刀で信長の刀を安易く切り払って叩き落としてしまい、そのまま信長の首を掴み上げてしまう。

長秀「ツ！姫様っ！ぐっ、ううっ……！」

邪武者デイケイド『さあ、最後の仕上げだ。貴様には、あの神樹の成長の促進を手伝ってもらおうぞ……』

信長「ウグウツ！クツ、な、何だどっ？ードゴオツ！ーグツ?!ア……ツ……」

神樹カーラーンの成長促進を信長に手伝わせる。その意味が理解出来ず、邪武者デイケイドの手から逃れようともがきながら苦しげに聞き返す信長だが、邪武者デイケイドはそれに何も答えず信長の腹を殴って意識を刈り取り、そのまま信長を肩に背負って神樹カーラーンへと跳び去って行ってしまったのだった。

家康「?!信長?!」

勝家「姫様あああああああッ!!」

「——勝家ッ！長秀ッ！秀吉ッ！」

信長を連れ去る邪武者デイケイドの後を追おうと勝家や長秀、蘭丸達が傷付いた身体を無理矢理動かして後を追おうとするもそれすら出来ぬ中、倒れる彼女達の下に零と姫と魚見、そして三人と合流したなのは黒い少女の肩を借りて駆け寄っていく。

長秀「ッ……！零……！」

零「おい、大丈夫か……！何なんだあの馬鹿でかい樹は?! 一体どういう状況だ?!」

秀吉「ッ……あの邪武者に、キャンセルを倒されたの……そしたら、空から突然刀が振ってきて、奴がそれを手にしたら……」

勝家「あの大樹が現れて、我々の国やこの先の人里や村を襲い始めて……姫様がそれを止めようとしたら、奴は姫様を連れ去ってしまった……！」

零「なっ……信長を?!」

信長が邪武者デイケイドに連れ去られた。それを聞き零が目を見開いて驚愕していると、姫と魚見、そしてクロノスブレイドは無数の触手を未だ伸ばし続けてる神樹カーラーンを見上げて険しげな様子を浮かべていた。

姫「あの大樹……まさか、神樹か?!」



あの神樹カーラーンが統一しようとしてる天下はこの戦国世界だけでなく、他の並行世界まで侵食しようとしている。その驚異を聞かされた零達は驚きを露わにするが、とにかく今は一刻も速くあの神樹をどうにかしなければならぬと我に返って秀吉達の前に立ち並んでいく。

零「要するにあの樹をどうにかして壊さないと大惨事になるって事だろっ、とにかく今はいアッレを『グウオアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』……ッ?!」

神樹カーラーンを止める為にデイケイドライバーを腰に巻き付けて変身しようとする零だが、前方から獣のような雄叫び声が聞こえてそちらに振り向くと、其処には神樹カーラーンが聳え立つ方向から無数の怪人達が迫り来る光景があった。

姫「ッ！また大量の怪人か……！」

零「チツ、あのデイケイドも中々容赦ないなっ……。魚見ッ！お前の治療魔法で負傷した兵達を治療して、連中を避難させろッ！奴らは俺達が相手するッ！」

魚見「分かりました……！」

秀吉「ちよ、ちよつと待ってっ、まさか貴方達だけでアイツ等と戦うつもりなの?!無謀よ！貴方達もボロボロなのに、その上あんな数を相手になんてっ……！」

零「他に戦える奴もいないんだから仕方がないだろっ！お前等も魚見を手伝って兵達を安全な場所まで誘導させろっ！変身ッ!!」

『変身ッ!!』

『KAMENRIDE：DECADE!』

『KAMENRIDE：TRANS!』

『Soiya!』

『PEACH ARMS!Gouka☆kenran!』

『Gouka!Now!』

『Gou!Gou!Gou—Gou—Gou!』

零達自身もボロボロなのにあんな数を相手にするなど無謀だと訴え掛ける秀吉の声を振り切り、零達はそれぞれ変身動作を行ってデイケイド、トランス、天神、聖桜へと変身していった。そして変身を完了した聖桜は右手のリングをヒーリングウイザードリングに取り替えて秀吉達や兵達の治療へと向かい、デイケイド、トランス、天神、黒い少女はそれぞれ武器を手にして神樹カーラーンから迫り来る怪人の大群に切り込んでいくのだった――。

—NEXT STAGE ZWEI—



劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolve ①

―戦国世界・尾張国境近くの森―

―……ピシツ……ピシツピシイイツ……バリ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイインツ!!!―

「どおおわあああああああああああああああああツ?!?!?!」

「クツ……!」

尾張国境近くに存在する森の中。その上空に突如巨大な亀裂が空  
間に走って硝子のように崩壊し、その向こう側から二人の青年が落下  
し地上に叩き付けられてしまっていた。

「ツ~~~~~!!イ、イツテエ〜ツ……!!クツソオツ、何なんだよ一体ツ  
!!何が起きたんだツ?!」

「ツ……俺が知るか」

余程打ち所が悪かったのか、尻餅を着いたまま後頭部を抑え涙目にな  
る青年……”鳴神恭司”を尻目にそう言いながら、もう一人の青年  
の”佐月影虎”は服の汚れを払いつつ立ち上がって辺りを見回して  
いく。

影虎「……それにしても、此処は一体何処だ?見た所、元いた場所  
とは違うようだが」



影虎「……?!」

恭司「ツ！な、何だ、今の音?!」

二人が元の場所に帰る方法を探しに行動を開始しようとした直後、突如耳の鼓膜にまで響くような轟音が何処からか響き渡り、二人は思わず動揺し忙しく辺りを見渡していく。そして、再度同じ轟音が鳴り響いて二人はその轟音が聞こえてきた方へと同時に駆け出し、森を抜けると、其処には……

影虎「……なっ……」

恭司「何だよ、コレ……」

森を出て恭司と影虎が真っ先に目にしたのは、有り得ないほど超巨大な謎の大樹の姿。そしてそのすぐ後に、その謎の大樹から伸びた無数の触手達が町や人里を襲い、その上空に自分達が落ちてきたのと同じ無数の裂け目を作り出してその向こう側へと根を張り巡らせ、その謎の大樹を止めようと無数の怪人達に挑むデイケイド達の姿を目の当たりし、二人は言葉を失い絶句してしまうのだった。

『デイケイド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolve』



―尾張国境・荒野―

『『グ ル ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア  
!!!!』』

長秀「クツ！第四波が来るわツ！！兵達の避難をもっと急がせてツ！！早くツ！！」

戦国世界に突如現れた謎の巨大樹・神樹カーラーンによる平行世界を含めた天下統一が開始され、更にその神樹カーラーンを操ってる邪武者<sup>デイクライド</sup>にさらわれた信長を助けに向かおうとする<sup>デイクライド</sup>だったが、迫り来る怪人の大群の襲来と負傷した兵達の避難が滞り、怪人達の足止めと撃退に足を止められてしまっていたのだった。

—ズシャアアツ！！—

『ギャアアアツ?!』

『ガアアアアアアアツ!!』

デイクライド『クソツ……！おいまだ兵達の避難は終わらんのかツ！これ以上は本当に持たないぞツ!!』

トランス『クツ！それでも持たせるしかないよツ！！コイツ等を止められるのは今は私達しかっ、キャアアツ?!』

デイクライド『?!なのはツ!!クツソツ、退けええツ!!』

ライドブッカーGモードを使った遠距離攻撃で<sup>デイクライド</sup>と天神を援護していたトランスの背後から、ドーパントが不意打ちですがみついて動きを封じてしまい、それを見た<sup>デイクライド</sup>も直ぐさまトラン

スの救援に向かおうとするが、その前にミラーモンスターとアンノウ  
ンが立ち塞がって邪魔してしまう。しかし、別の怪人を相手にしてい  
た天神がそれを見て直ぐさま無双セイバーを投擲し、トランスの背中  
にしがみつくドーパントに突き刺していった。

『ギャアアッ?!』

トランス『! 姫さん!』

天神『背後にも常に気を配っておくんだッ! 動きを止めた隙に大群  
で押し寄せられたら一たまりもないぞッ!』

トランス『はいつ! ヤアッ!』

桜雪で怪人達を纏めて斬り裂く天神に頷き返し、トランスもドーパ  
ントの背中に突き刺さった無双セイバーを抜き取って飛び掛かって  
きたグロンギを斬り捨てながらライドブッカーを乱射させていく。  
そして、デイケイドと黒い少女もライドブッカーとクロノスブレイド  
で怪人達を確実に撃破し数を減らしていくが、更に神樹カーラインの  
方向からまた新たな怪人達の大群が押し寄せてきてしまう。

「また増援ッ?! ほんつとにキリがないっ!」

デイケイド『ツ! このままじゃジリ貧にしかならないかっ! ……! お  
前等、此処を任せても大丈夫かッ?!』

トランス『任せてもって、どうするつもりなの?!』

デイケイド『あの樹の中に侵入するッ! コイツ等の出所の邪武者  
デイケイドを止めさえすれば、コイツ等の発生も止められる筈だッ!  
そうすれば……!』



—ジャリン！ジャリン！ジャリン！—

『——こちらの調子は上々か……予想外のアクセントでアマテラスのベルトは手に入らなかったが、神樹が落ちたならば問題は無さそうだな』

デイケイド『……ッ?!お前はっ……!!』

トランス『アルゴゾディアート……アルペジオッ!』

怪人の大群の中から、脇に玄武に酷似した一体の怪人を引き連れて杖に付いた鈴を鳴らしながら姿を現した一体の怪人……それは嘗て、零と祐輔達が戦って彼等を追い詰めた財団ケルベロスの第二位、“アルペジオ”が変身したアルゴゾディアートだったのだ。予想外の強敵の登場にデイケイド達が驚愕を隠せずに動揺する中、アルゴゾディアートはそんなデイケイド達に杖の先端を向け冷淡に告げる。

『悪いが、此処から先には通さんぞ破壊者よ。あの邪武者が天下統一を果たすまではな』

「ッ！何ですってっ?」

デイケイド『ッ……そうか……今回の件はやけに妙な部分が多いとは思ったが、お前達財団が一枚噛んでいたのか……!』

『好きなように解釈すればいい。どの道、貴様等にはもうあの神樹を止める事など出来ぬのだからな』







吹き飛ばしてしまったのだ。後方で兵達の治療に専念していた聖桜はその光景を見て慌てて四人の下に駆け寄っていき、そんな五人にアルゴゾディアートが杖を突き付けながら怪人達を従えてにじり寄って来る。

『最早、貴様ら如きにどうする事も出来ん……聞こえないか？全てを終わりへと誘う、このメロディーが』

—————  
~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

「……………な、何？この歌っ…………？」

アルゴゾディアートの言葉と共に、何処からともなく聞こえて来る歌声。普通の人間が聞けば誰もが魅了されてしまいそうなほど綺麗なメロディーだが、しかし、その歌声には何処か言葉では言い表せない危険を感じる。そんな歌声を聞いてディケイド達が歌の発信源を探して辺りを忙しく見回していくと、その時……

—————  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……………ドバアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアンツツツツツツツツツ  
!!!!!!  
—————

まるでその歌に感化されるかのように神樹カラーンが活性化し、先程よりも更に多くの無数の触手が神樹から伸びて次元の壁を次々と破壊していき、他の平行世界を目指して浸蝕の速度を速め出したのだった。

聖桜 『ツ?! 神樹が更に活性化した?!』





むの!!』

光秀「了解ツス姉御ツ!!いいかお前らツ?!負傷者がいたら回収して戦場から引き離せツ!!戦ってる奴がいたら援護しろツ!!」

幸村「何か面倒になってきてんなー……まあいいや、行くぞお前らツ!!」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおー――――  
!!!!!!』』』

……崖の上に立ち並ぶ無数の軍勢。其処には何故か、零がこの世界に来て最初に目にした武者シリウス軍のノーヴェ似の武将とウエンデイ似の武将を従えて先頭で仁王立ちする、冥王の姿があつたのだつた。

デイケイド『な、冥王?!何やってるんだアイツ?!』

長秀「ツ!あれは……まさか、武者シリウス軍の真田幸村?!」

勝家「あ、明智の奴まで?!何故奴らが此処に?!」

CB（……権の奴め……この世界に来てから薄々気配は感じ取ってはいたが、やはりまた祿でもない事をしていたようだな……）

他の武者ライダー軍を自分の軍門に下して従え、織田と豊臣の連合軍と家康軍の兵達の回収と援護に兵達を駆り出させ、自身は次元の向こうに触手を伸ばす神樹カーラーンの木の根の処理に向かう冥王。そんな予想外の乱入者にデイケイド達も戸惑う中、アルゴゾディア

トは苦虫を噛み潰したような顔で舌打ちした。

『あの狂神までこの世界に来ていたか……だが、幾ら冥王が現れたとは 言 え ま だ 想 定 な ー キュ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイツ!!——…ツ?!』

冥王の乱入に驚きつつも気を取り直してデイケイド達に視線を戻すアルゴゾデアートだが、背後から突如けたたましいスキル音が響き渡った。そしてその音に驚き一同が振り返ると、其処には何処から現れたのか無数の怪人達を跳ね飛ばしてこちらに向かつて来る巨大な戦車のマシンの姿があり、戦車のマシンはそのままデイケイド達とアルゴゾデアート達の間割って入るようにドリフトして停車していった。

トランス『ツ?!こ、このマシンって……!』

デイケイド『……ツヴァイギャリー……?』

『ま、まさか……!』

そう、その戦車のマシンの正体とは、デイケイド達の異世界の友人の一人である早瀬智大の愛車のツヴァイギャリーだったのだ。その見覚えのあるマシンをデイケイド達が呆然と見上げ、アルゴゾデアートが顔を引き攣らせて後退りする中、ツヴァイギャリーの上部ハッチが開き、其処から数人の男女が続々と姿を現した。それは……

大輝「——ふう、やれやれ。今度こそ目的地に着いたか」

霧之「皆……戻ってきたわよ……」

ヒビキ「と、刀夜君っ！手を貸して下さいっ！お尻がジンジンして  
上手く立てませえくんっ！」

刀夜「……何やってんだよお前は……」

智大「よお、零。暫くぶりだな」

デイケイド『！智大！海道?!』

零達とは別にアマテラスのベルトを巡って財団と戦い、シャドウ達  
によって連れ去られたカガミを助けにこの戦国世界へと飛び込んだ  
早瀬智大達だったのである――。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolution②

―尾張国境・荒野―

デイクイド達の絶体絶命の危機に、予想外の形で乱入してきた冥王軍と共にツヴァイギャリーに乗って駆け付けた早瀬智大達。そんな五人の参戦にデイクイド達も啞然となる中、アルゴゾディアートは忌まじまじげに智大達を睨み付け舌打ちした。

『貴様ら、まだ我等の邪魔をする気がッ!』

智大「当たり前だ。お前等の企みもそうだが、こちとら知り合いも誘拐されてんだからな。邪魔するなっつて方が無理だろ?」

デイクイド『……おい……なあ智大、何がどうなってるんだ? 何でお前や海道が一緒にいてこの世界にいる?』

智大「ん? あー、そうだな……簡潔に話すと――」

斯く斯く然々と、智大は手っ取り早く自分達の世界で起きた事件について簡単にデイクイド達に説明する。彼等の世界でアマテラスという神のライダーのベルトを巡る戦いがあり、ベルトの適合者である霧之の力を借りて財団の手の者を撃退するも、そのアマテラスの相棒の巫女さんであるカガミという少女がシャドウにさらわれてしまい、智大達はそのカガミを追ってこの戦国世界にやってきたのだと。

デイクイド『ああ……ああ成る程、大体分かった……要するにお前も知り合いを誘拐されて、ソイツを助けに来たって訳か』



智大「まあな。……うん？お前も、というと、お前も誰か知り合いが連れ去られたのか？」

デイケイド『……まあ……な……』

此処で信長について話すと後々面倒な事になりそうなので、取りあえずこの戦国世界や武者ライダーの事、そして邪武者デイケイドとあの神樹カーラーンの事を簡潔に纏め智大に説明するデイケイド。それで智大も大体の事情を理解し、目の前のアルゴゾディアートに目を向けてドライバーを腰に巻き付けていく。

智大「ま、財団の事だからどうせ祿なこと考えちゃいないだろうとは思ってたが、また随分と大胆な事してくれるじゃないの」

『……フン。今更気付いた所でどうする事も叶わん。既に神樹を落とした以上、あの樹は全ての平行世界を天下統一するまで決して止まる事などないのだからな』

刀夜「……んじゃあ、その前にあの樹をぶつ壊しちまえば止まるんじゃないのか？」

大輝「寧ろそれ以外に方法はないだろうね。あの樹を放置してても面倒な事にしかならないのは分かってるし、破壊する方が手っ取り早いさ」

そう言いながら大輝も何処からかデイエンドドライバーを回転させながら取り出し、刀夜と霧之もそれぞれ腰にアマツドライバーとアマテラスドライバーを装着しカード型の札を取り出して立ち並んでいく。

『正気か……？この軍勢とあの神樹を相手に、貴様等に勝機があるとでも？』

智大「あるから戦うに決まってるだろう？まあ例えなかったとしても、だからってこのままお前等の悪企みを黙って見過ごす理由にはならねえさ……ライトッ！」

『FANG!』

ライト『やっと出番？待ちくたびれたよ、智大』

『TORNADO!』

刀夜「めんどくせえが、やるしかなさそうだな。ヒビキ、少し離れてろ」

ヒビキ「はい！」

霧之（皆……今こそ仇を取るわ……）

智大がコートの内ポケットから取り出したファングメモリのスイッチ部分を人差し指で押すと、ツヴァイの世界の智大の事務所待機するライトもトルネードメモリを構えてスイッチ部分を押し電子音を鳴らす。そして大輝もデイエンドのカードをドライバーに装着してスライドさせ、刀夜と霧之もそれぞれのカード型の札を構え……

『変身ッ!』

『TORNADO!FANG!』

『KAMENRIDE:DI—END!』

『TEN—SHIN!AMATSU!』  
『TEN—SHIN!AMATERAS!』

それぞれが変身動作を行い重なって電子音声が響くと、智大はツヴァイ、大輝はデイエンドに。そして刀夜は陰陽師をイメージさせる白いアーマーを身に纏い、赤い複眼に響鬼などを連想させる和風の仮面を纏ったライダー……。『アマツ』に、霧之は黒いアンダースーツに真っ白な羽衣のような美しいアーマーとひらりと舞うマントを装備し、仮面ライダーファムに酷似した仮面を身に纏ったライダー……。『アマテラス』に変身し、変身を完了した四人はディケイド達と肩を並べてアルゴゾディアート達と対峙していく。

『チツ……ならば貴様等も纏めて滅するのみだ……掛かれえッ!!』

『『グ ル ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
!!!』』

杖の先端を突き付けアルゴゾディアートがそう命じると共に、怪人の軍勢が奇声と雄叫びを上げながら九人のライダーへと突っ込んでいく。そしてそれに対して九人のライダー達も一斉に身構え、押し寄せる怪人の軍勢を迎え撃って行くのであった。



—人里—

— バ ッ ゴ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ  
オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ

オオオンツツツツ!!!  
—

「う、うわああああッ!!」

「た、助けてくれえええええッ?!」

そしてその一方、突如出現した神樹カーラーンの付近に存在する人里にも神樹の触手が襲来し、人々に牙を剥いて襲い掛かっていた。民家に無数の触手が巻き付いてミシミシと音を立てて粉碎し、捕えられた人間はそのまま取り込まれ神樹の栄養にされてしまう。そんな阿鼻叫喚が響き渡る惨状の中、逃げ惑う人々の中に混じって逃げていた少年が足を引つ掛けて倒れてしまい、そんな少年へと無数の触手が襲い掛かった。

「ひっ……?!い、嫌だ、誰かぁ！誰かぁあああああああああああああ  
ああッ!!」

恐怖と絶望から誰かに助けを求めて泣き叫ぶ少年だが、既に触手は少年の両足を捉えてしまっている。彼を助けようとした人々もそれに気付いてもう間に合わない悟って足を止めてしまい、その間にも触手が少年を取り込もうとした。その時……

—フツ……ズババババババババババババババババババババババ  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンツ!!!—

「…………え…………?」

触手が少年を取り込もうとした瞬間、突如何処からか黒い影が現れ、少年の両足に絡み付く触手を目にも取らぬ速さで微塵に斬り裂い

ていったのだった。その光景を目の当たりにした少年や周りの人々は何が起きたのか理解が追いつかず唾然となるが、そんな少年の前に一人の黒いライダー……シャドーが両腕を組んで姿を現した。

シャドー『——ふむ……成る程……覇者共の夢を叶える願望機かと思いきや、その実……世界を喰らうもののけの類だったか……』

「あ……む、武者ライダー……？」

シャドー『……今の内に下がっている、童子よ。直にこの恐怖もあの者達の手で終わる。それまでは、この里とお主等は我が守り抜こう』

——バサアアツ——

そう言いながら、シャドーは何処からか数本の巻物を取り出して宙に放り投げ、巻物を一度に開く。それらの巻物には、『仮面兜』、『仮面桑形』、『仮面蜂』、『仮面蜻蛉』、『仮面蠍』、『仮面飛蝗・脚』、『仮面飛蝗・拳』の字がそれぞれの巻物に書かれており、シャドーは素早く両手で印を切り……

シャドー『いでよ、仮面を纏いし異世界の者達よツ！我が呼び掛けに応えろツ！口寄せの術ツ!!』

——ボシユウウンツ!!!——

高らかに叫ぶと共に、数本の巻物から次々と爆発するように白煙が発生しシャドーの周囲を煙が覆っていく。そして徐々に白煙が晴れ消え去っていくと、シャドーの目の前には彼が口寄せで召喚した数人の戦士達……仮面ライダーカブト、ガタツク、ザビー、ドレイク、サソード、キツクホツパー、パンチホツパーが立ち並ぶ姿があり、シャ

ドーも腰の刀を抜き取り戦闘態勢に入った。

シャドー『さて、では開幕と行こうか……此処から先へは一步も通  
さんぞ、もののけよ』

『CLOCK UP!』

シャドーが真剣な眼差しで迫り来る触手を見据えそう宣言すると  
共に電子音声が鳴り響き、直後にシャドーとカブト達の姿が掻き消  
え、様々な色の閃光が常人の肉眼では捉えられぬ速度で次々と触手達  
を薙ぎ払っていくのであった。更に……

——ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツ!!!——

『——ふむ……どうやら彼方は大丈夫ですね』

『こつちに怪人居ないけど、この人達守りきれるかな?』

『来たら相手になりますが、それまでは人々を守る剣になりますよ』

『お——!』

シャドー達が戦う人里とはまた別の違う町では、玲奈にねだられ戦  
国世界に来ていた運命優花が変身する仮面ライダーストーリームが同  
じく町の人々を守って触手を撃退する姿があり、神樹から飛来する無  
数の触手を水の盾を用いて触手を凌ぎ叩き切っていた。そして……

——ドツガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アンツ!!!——

『よし、これで撃破!』

『廻琴！神樹の方からまた怪物達が来るよ！数は50！』

『分かってる……！いくよ、三人共！』

人里から離れた場所に位置する草原では、デイケイドとツヴァイ達  
が取り零して町に向かおうとする怪人達を人知れず撃退する一人の  
ライダー……神樹カーラーンによって次元の壁を破壊され戦国世界  
に飛ばされてしまった”姫之音 廻琴”が変身する仮面ライダー『シ  
ンフォニー』の姿があり、シンフォニーは神樹の方角から更に迫り来  
る怪人達に向けて飛翔し撃退に向かっていったのだった。



—尾張国境・荒野—

—ズガガガガガガガガアツ!!バキイツ!!ズシャ  
アアツ!!—

アマツ『ラアアツ！ハツ！フンツ！邪魔だツ！』

—ドゴオオツ！—

『グルアアツ?!』

『Lock ON!』

『Ichi…Juu…hyaku…Sen…Man!』

『PEACH CHARGE!』





ツヴァイ『チツ、またお得意の幻術か。だが……』

『SNIPER!』

デイケイド『同じ手は二度も食わんっ!』

『ATTACKRIDE:I LLUSION!』

『TORNADO!SNIPER!』

デイケイドとツヴァイがバツクルにカードとメモリを装填すると共に電子音声が響き、デイケイドは十人にまで分身して円陣を組み、ツヴァイはスナイパートルネードへとハーフチェンジし、十人のデイケイド達とツヴァイとデイエンドはそれぞれの武器の銃口を周囲のアルゴゾディアート達に向けて引き金を引き、強烈な弾幕を撃ち放つて全てのアルゴゾディアートの分身を撃破していったのだった。

『ッ?!馬鹿な、私の幻術を……!』

—ダンッ!!—

ツヴァイ& a m p ;デイエンド『ハアアアアアアアッ!!』

—ドゴオオオッ!!!—

『グウッ!』

全ての分身達を掻き消され、白日の下に曝し出された本物のアルゴゾディアートにツヴァイとデイエンドのダブルキックが炸裂する。だがアルゴゾディアートも咄嗟に杖を盾に使って二人の足蹴を防ぎそのまま後方にまで後ずさるが、それを逃すまいとしてデイケイドが二人の頭上を飛び越えてアルゴゾディアートに上段からの斬撃を叩



アルゴゾディアートと戦闘を続行しようとしたその時、突如神樹カーラーンから無数の巨大な光弾が飛来しライダー達に襲い掛かって来たのだった。その圧倒的なまでの威力と攻撃範囲はライダー達だけではなく、後方で負傷兵の避難と援護を行っていた織田豊臣軍と家康軍と冥王軍にまで被害が及び、戦場を火の海と化してしまった。

「うあつ……ぐつ……な、何なの一体つ、今のつ……?!」

聖桜『神樹からの、攻撃つ……?どうして急に……!』

この戦国世界と他の世界を天下統一する為に見境なく触手を放っていた今までと違い、今のは明らかにライダー達を狙つての攻撃だった。何故急に?と、ライダー達が激痛で身を振らせながら今の光弾が放たれてきた神樹カーラーンに視線を向けると、なんと、神樹の木々に無数の果実が実り、巨大な花が開き始めていたのである。

ディエンド『ツ!神樹に花と果実が……?!』

『———どうやら、神樹の核の礎の設置が済んだようだな』

ジャリンツ!と、鈴の鳴る音と共に冷淡な声がある場に響き渡り、その声に釣られてライダー達が振り返ると、其処にはライダー達と同じく神樹からの攻撃に巻き込まれたハズのアルゴゾディアート達が無傷で立つ姿があった。

アマツ『なつ……なんで傷一つ付いていないんだよツ?!お前達もアレに巻き込まれた筈だろツ?!』

『……何故?愚問だな。私は散々口にしていた筈だぞ?あの神樹は既に我等と邪武者ディケイドの手に落ちたと……つまりあの神樹は我々の兵器と言っても過言ではない。邪武者に命じてあの神樹の概

念を変質させ、我々だけには害無き物にさせる事も安易いという事だ』

トランス『そ、そんな……そんな事が本当に可能なの……?!』

天神『……不可能ではないだろうな……あの神樹は文字通り神の樹。樹を掌握する者がいるなら、持ち主の望み通りに神樹の概念を変えざる事も出来る筈だ……』

つまりあの神樹は、自分達や人間達にとって致命傷になるが、怪人達が傷つく事は決してない攻撃を放つ事が可能になったという事。苦々しげにそう語る天神に一同も息を拒むが、その時、デイケイドは先程アルゴゾディアートが口にした言葉をふと思い出した。

デイケイド『待て……』礎』の設置が済んだ、と言ったか?……まさかっ』

『……察しが付いたなら隠すだけ無駄か……そうだ。邪武者がさらったこの世界の織田信長、そしてアマテラスの巫女が礎となった事で、神樹カーラーンに更なる成長を促したのだ。特に天下人の素質を持つ織田信長と神樹カーラーンの相性はこれ以上になく一致し、特殊な力を持つアマテラスの巫女は神樹を彼処まで一気に成長させてくれた……あの二人はこれ以上ない程の逸脱だったよ』

アマテラス『ツ……!』

ヒビキ「そんな、カガミを道具みたいにつ!!」

人を人とも見ていない発言をするアルゴゾディアートに怒りを露わにしてヒビキが叫ぶ。それは他の一同も同じで怒りを力に震える体に力を入れて立ち上がり、デイエンドも仮面の汚れを拭いながら

デイケイドとツヴァイに呼び掛けた。

デイエンド『零、智大、君達はあの神樹に向かいたまえ。アルゴ達は俺達が引き受けよう』

デイケイド『！引き受けるって、お前達だけでどうにかなる相手じゃっ……』

デイエンド『このまま頭の上を陣取られて一方的に攻撃され続けたら、全滅は免れない。とつととあの神樹の主を倒してくれないと、この怪人達もいつまでも増え続けるだけだろ？』

ツヴァイ『それが最良だな……行くぞ零ッ！』

『させると思うかッ！』

『ガ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!!  
!!!』

神樹カーラーンに向かい、大元の邪武者デイケイドを叩く。そうするしか神樹を止める方法はないと踏んで、アルゴゾディアート達の手を引き受けると告げるデイエンドとライダー達にアルゴゾディアートが再び怪人の大群を差し向けるが、デイエンド達はデイケイドとツヴァイに近付けさせまいと怪人達を抑え込んでいく。

トランス『早く言つて二人共ッ！アルペジオの言葉が本当なら、急いで信長さん達を助け出さないとッ！』

聖桜『こちらは冥王もいますから、私達だけで心配は入りませんッ！急いでッ！』

「デイケイド『ツ……すまん、頼む。智大ツ!』」

「ツヴァイ『ああ、もう準備してる!』」

そう言いつつ、ツヴァイは懐から取り出したビートルフォンを操作して、いつの間にかツヴァイギャリーに積んだ自身とデイケイドのマシンに飛行ユニットを装備させている。そしてデイエンド達と共に怪人の群れを撃退していたアマツはドーパントとファンガイアを蹴り飛ばし、離れた場所に立つカガミに向けて叫んだ。

アマツ『ヒビキ、こつちも戦絡線だ!カガミを助けに向かうぞ!』

ヒビキ「ツ!わ、分かりました!」

アマツに呼び掛けられ一瞬は驚くもすぐに頷き返し、ヒビキは素早く特殊な術式を組み上げていくと、完成された術式を前にして高らかに叫ぶ。

ヒビキ「式神展開——!来て、真月妃(マガツヒ) ツ!!!」

——シユウウウウウツ……バシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ——ツツツツ!!!——

彼女のその言葉に反応するかのように、術式からまばゆい閃光が放たれ、直後に巨大なカラクリが術式から飛び立った。てるてる坊主のような形でアームが腕のように2本装備され、宙に浮かぶ不思議なマシン……カガミの世界に伝わっていたカラクリ、戦絡線(いくさからくり)の出現を確認すると、アマツもは呼び出されたカラクリを背に『武』とかかれた札を取り出しベルトにスキヤンした。

『KARAKURI BUSOU! YOROI NO KATA!』

スキャンされた札にベルトに反応して電子音声が響き渡り、真月妃が分解するとアマツに合体し、アマツは真っ白な戦闘メカのような『鎧』を装備した巨大な剣を持つ『マガツヒフォーム』に転身していった。

「ッ?!ちよ、なにアレ、デカツ?!」

CB『ほおう……ライダーで言う所の支援マシンのようなモノか？  
中々興味深いな』

天神『おお、あのライダーも巨大マシン持ちだったか!ならばこちらも……!』

—ガチャッ!—

『SU・I・CA!』

マガツヒフォームへと姿を変えたアマツに触発されたのか、天神も右腰に下げたホルダーからスイカの錠前を取り出して解錠スイッチを押し、戦極ドライバーのバックルにセットされてるピーチロックシードと取り替えて錠前をセットすると、カッティングブレードを倒してロックシードを切断した。

—スパアンツ!—

『Soiya!』

『SUICA ARMS!』

『Oodama Big Bang!』

ー ド シャ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア  
!!!  
|

「ッ?!こ、今度はでっかいスイカツ?!なんなのよ一体ッ?!」

電子音声と共に天神の遙か後方の上空に開いた裂け目から巨大なスイカのような緑色の果実のマシンが轟音を響かせて落下し、それを確認した天神は今まで身に纏っていたピーチアームズを消しながら跳躍して緑色の巨大なスイカのマシン……スイカアームズへと乗り込むと、スイカアームズは徐々に変形して巨大な薙刀を手にした人型パワーローダー形態へとその姿を変えていった。

『YOROI MODE!』

天神SA『此処から先へは通れると思うなよッ!行け、三人共ッ!』

デイケイド『任せた……!智大、アマツ!』

ツヴァイ『あいよ!』

アマツMF『ヒビキ、しっかり掴まってるよ!』

ヒビキ「は、はい!」

スイカアームズにアームズチェンジした天神の援護を受け、飛行ユニットに換装したそれぞれのマシンに跨がったデイケイドとツヴァイ、そしてアマツはヒビキをマガツヒに乗せて一齐に神樹カーラーンに目掛けて飛び立っていき、それを目にした飛行能力を持つ怪人達は三人を引き止めようと翼を羽ばたかせ飛翔しようとした、その時……



―バツ!!―

「ウウオオラアツ!!」

「ハツ!!」

―ドグオオツ!―

『?!ギャツ?!』

『ガハツ?!』

デイエンド『?!』

トランス『な、何?!』

三人を追おうとした怪人達の背後から突如謎の二人が飛び出し、怪人達の背中に跳び蹴りを打ち込んでデイエンドとトランスの前まで吹っ飛ばしたのであった。それを見てデイエンド達も驚き怪人達が吹っ飛ばされてきた方へと振り返ると、其処には見慣れない二人の青年……腰にドライバーを装着した恭司と影虎が着地して佇む姿があった。

『?!貴様等は……!』

恭司「んー、なんか大事っぽいから駆け付けてみたけど……一体どういいう状況なんだ、コレ?」

影虎「さあな……しかし、財団の幹部が居るならろくでもない事に

なってるのは確かだろう……それだけで十分だ」

そう言っつて影虎はジャケットの内ポケットから翼竜が描かれた錠前を取り出し、恭司もそれを横目に見て仕方なさそうに溜息して朱雀に酷似した異形が描かれた錠前を取り出し、二人同時に解錠スイッチを押した。

—ガチャッ！—

『GARUDA!』

『BAHAMUT!』

天神SA『ロックシード?!いや……何か違う?』

聖桜『貴方達は、一体……?』

恭司「え、俺達?えーつと……俺は鳴神恭司!又の名を、仮面ライダー迅武!変身ッ!」

影虎「……佐月影虎、仮面ライダードラコだ。別に覚えなくてもいい……変身!」

『Lock On!』

デイエンド達に向けてそれぞれそう名乗りつつ高らかに叫び、恭司は錠前を戦刃ドライバーに、影虎はパイルドライバーに錠前をそれぞれセットして固定させると、カッティングブレードを倒して錠前を切断させていった。

『Soiya!』

『GARUDA ARMS! Samurai of Night!』

『Come on!』

『BAHAMUT ARMS! Dragon of Night』  
!』

二つの電子音声がり響くと共に恭司と影虎の上空に裂け目が出  
現し、其処から不死鳥に似た朱雀の異形と翼竜が現れてそれぞれ恭司  
と影虎に被さり、アンダースーツを形成して仮面と鎧に姿を変えてい  
く。そして恭司は白銀と赤のライダーの『迅武』、影虎は騎士の姿のラ  
イダーの『ドラコ』に変身し、二人はそれぞれの得物を手にして怪人  
達と対峙していく。

『チツ、またイレギュラーか……! 一体カンパネルラは何をして――  
!』

―ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ  
アアツ!!! ドツガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアンツツツツツツツツツツ!!!――

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ?!』

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!』

『ツ?!何だ?!今度は何が起きた?!』

新たに乱入してきた迅武とドラコを忌ま忌ましげに睨み付けて身  
構えようとしたアルゴゾディアートだが、その背後に突如、上空から  
無数の銃弾とロケット弾が飛来して爆発が巻き起こり怪人達を吹き  
飛ばしたのであった。突然のソレにアルゴゾディアートも再び驚愕  
を浮かべてると、遠方から不意に地を揺るがすような大喚声が響き渡

る。それは……

長秀「——邪武者デイケイド軍への全弾の着弾、確認しました！秀吉公！」

秀吉「戦える者は剣を取って我等に続けえッ!! 真の敵は神樹に有り  
りいいいいいいいいッ!!」

『『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!』』

家康「これ以上奴らにこの世界を好きにはさせんなッ!! 民達に牙を  
向ける者は我等の敵ッ!! 我等の守るべき者達を蹂躪する悪鬼共を、決  
して許すなあああああああああああッ!!」

『『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!』』

光秀「負傷者の避難も無事完了ツスツ!! 全軍ツ!! 姐御の教えはなん  
だッ!! 我々の目的はなんだッ!!」

『殺せッ!! 殺せッ!! 殺せッ!!』

光秀「お前たちの目標は何だッ!!」

『殺せッ!! 殺せッ!! 殺せッ!!』

光秀「お前たちは国を愛してるかッ!! 民を愛してるかッ!!」



トランス『……分かった♪一緒に頑張ろ、家康さん!』

そう言いながら家康に向けてガッツポーズを取るトランスだが、それに対し家康は「ふんっ……」とそっぽを向いて戦線に戻っていき、そんな家康を見てトランスと聖桜も互いに顔を見合わせて微笑しながら戦いに戻って行くのであった。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolution ③

―神樹カーラーン―

神樹カーラーン内部。其処は植物の外見をした外側と違い、神樹の内側はまるで日本の城に酷似した和風の作りとなっている。そんな神樹の内部の最上階に位置する広場の奥には、中央に巨大な赤い球体が備え付けられた祭壇のような場所があり、その球体の左右には”楔”として植物に捕われる信長とカガミ、そして二人を見つめる邪武者デイクイドの姿があった。

―バチバチバチバチバチバチバチバチイイイイイイツ!!!―

カガミ「うあああアツ!!う、あああああああアツ!!」

信長「グツ……!も、もう止めさせろ邪武者ツ!それ以上はその娘も持たないツ!このまま死なせるつもりかツ?!

何かを吸収されるかのように全身から火花を撒き散らすカガミの姿を見て、このままでは彼女の命が危ないと悟り邪武者デイクイドに叫ぶ信長だが、邪武者デイクイドはそれに対し淡々と告げる。

邪武者デイクイド『身体が残ってさえいればそれでも構わんさ。必要なはその女の持つ特別な力のみなのだから……それに、他人の身を案じる余裕がお前にあるのか?』

信長「貴様っ……!う……ぐっ……!」







アマツ『クツ！こいつつ……！』

邪武者デイケイド『無駄だ。最早あの女達を助けた所で神樹の成長も、天下統一も止まりはしない。どの道貴様等がやろうとしてる事は全て手遅れに過ぎん』

デイケイド『ツ……！それはお前が決める事じゃないだろうッ！』

啖呵を切るようにそう言って、左腰に納めたライドブツカーをSモードに切り替えながら引き抜いて邪武者デイケイドに勢いよく斬り掛かるデイケイド。しかし邪武者デイケイドも右手に持つ天将刀でそれを安易く弾きながら左手のブラッドライドブツカーでデイケイドを退け、すかさず華麗な回し蹴りを放って仕掛けてきたツヴァイの右足を払い退けながら双剣による斬撃で斬り飛ばし、更に同じく跳び蹴りを放って突っ込んできたアマツの攻撃を避けながら天将刀で突きを放つも、アマツはそれを脇に抱えて抑え込みながらヒビキに叫んだ。

アマツ『ヒビキッ！コイツは俺達が何とかするッ！お前は今の内にあの二人をッ！』

ヒビキ「ッ！は、はいッ！」

そう力強く頷き返すと共に、三人が邪武者デイケイドを抑え込んでる隙に信長とカガミの下にまで一目散に駆け出すヒビキ。それを見て邪武者デイケイドもすぐにアマツを斬り払いながらヒビキの後を追おうとするが、その前にツヴァイとデイケイドが立ち塞がった。

邪武者デイケイド『チッ！貴様等……！』

ツヴァイ『戦う相手を間違えるなよ、邪武者！』

「デイクライド『お前の相手はこっちだッ!』」

『LIGHTNING! GRAND!』

『KAMENRIDE: BLADE!』

ツヴァイは両方のバツクルのメモリを取り替えてライトニンググランドにメモリチェンジ、デイクライドはドライバーにカードを装填しDブレイドにカメンライドしてそれぞれ剣を抜き取り邪武者デイクライドへと斬り掛かると、アマツも参戦し邪武者デイクライドに得意の蹴り技をお見舞いしていく。そしてその隙に二人の下に辿り着いたヒビキは急ぎ植物に取り込まれるカガミを引き離そうとするが、どんなに力を込めて引引っ張ってもまるでビクともしない。

ヒビキ「だ、駄目っ!全然引き離せないっ!どうすればっ!……!」

「ガギイイインツ!!!」

Dブレイド『グウツ!おい、だったらコレ使えッ!』

邪武者デイクライドと剣撃を打ち合っていたDブレイドは左腰に戻していたライドブツカーをSモードに展開してそれをヒビキに目掛け投げ付けていき、地面に転がるライドブツカーを見たヒビキも「は、はいっ!」と慌ててライドブツカーを拾い、ソレを使ってカガミを捕らえる植物を引き裂き少しずつカガミを引き離していく。が……

邪武者デイクライド『——小童共が、何処までもっ……我が野望の邪魔立てをするなああああああああアッ!!!』

『ATTACKRIDE: ILLUSION!』





ガ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
ンツ!!!  
ギ

デイクイド 『グウウツ?! ツ……アツ……!!』

ヒビキ 「……ツ?! え?!」

信長 「ツ……!! 零ツ?!」

邪武者デイクイドの放った斬撃波がヒビキを襲おうとした直前、なんとヒビキの前にデイクイドが飛び出し彼女の身代わりになったのだ。そしてデイクイドは身体から白煙を立ててその場に跪いてしまうが、邪武者デイクイドはそんなデイクイドに容赦無く飛び掛かって何度も斬り掛かり、ブラッドライドブツカーの切っ先をデイクイドの右肩へと突き刺していった。

―ブザアアアアツ!!!―

デイクイド 『ウグアアアツ?! あっ、うああっ……!!』

邪武者デイクイド 『愚かな、一度拾った命を他人の為にわざわざドブに捨てるとはな……そんなに死に急ぎたいなら、此処で消えろ』

信長 「ツ?! や、やめ、止めろ邪武者アツ!!!」

冷酷にそう言い放つ邪武者デイクイドの言葉に絶望を垣間見て必死に叫ぶ信長。しかしそんな彼女の懇願にも耳を傾けず、邪武者デイクイドはデイクイドの右肩からブラッドライドブツカーを抜き取り



完全にデイケイドを吸収した邪武者、デイケイドはクツクツと肩を震わせた。

邪武者、デイケイド『他愛がない。別世界のデイケイドとやらもこの程度なのか？こんな力しか持たぬ分際でこの我を止めようなどと……全く、とんだうつけがいたものよなアツ！』

信長「っ……き、さまあつ……一度ならずっ、二度までも……っ!!!」

武者ツヴァイだけでなく、心通わせたデイケイドまで奪っておきながら嘲り笑う邪武者、デイケイドに無念と憎しみを込めた瞳で睨み付ける信長。しかし、邪武者、デイケイドはそんな信長の殺気の籠った視線すらどこ吹く風と言わんばかりに鼻を鳴らして構わず、アマツとツヴァイと向き直り両腕を広げていく。

邪武者、デイケイド『さあ、残るはお前達のみだ……あの愚か者のように、貴様等も我が血肉と化すがいいッ!!』

ツヴァイ『チィ……!!』

アマツ『上等だ……やってみろよ邪武者あッ!』

『TAKEMIKADUCHI!TEN—SHIN!』

デイケイドを倒された怒りから邪武者、デイケイドへと再度突っ込むツヴァイと、交わした言葉は少ないが、ヒビキを庇って散ったデイケイドを嘲笑う邪武者、デイケイドに対し憤りを抑えられず、アマツは『雷鎚』と書かれた札を取り出しバツクルにスキャンさせてその身に雷を纏い、黄色い分厚いアーマーと巨大なハンマーを手にしたタケミカツチフォームに姿を変え、鉄鎚を振り上げて邪武者、デイケイドへと突っ込んでいくのであった。



劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolve ④

―尾張国境・荒野―

聖桜『――?!』

天神『な、なんだ、これは……?魚見つ!』

聖桜『ええ……零の気配が、いきなり消えた……?』

その一方、助っ人に現れた迅武とドラコと連合軍を加えてアルゴゾ  
ディアート達と戦っていた聖桜と天神は、戦闘の最中に零の気配を感  
じ取れなくなり、互いに顔を見合わせて困惑の様子を浮かべていた。

聖桜『けれど、どうして急に……まさか、零の身に何かっ……?』

天神『ツ!馬鹿を言うな!智達も一緒なんだぞ?!彼がそんな簡単  
に『シヤアアツ!!』ウアツ?!』

不安げに呟く聖桜の不穏当な言葉を強く否定する様に叫ぶ天神だ  
が、そんな二人にライオンヤミー、クジラヤミー、ゴキブリヤミーが  
飛び掛かって襲い掛かり、更に迅武とドラコは互いの得物を用いてゲ  
ンブジャキに叩き込んでいたが、二人の武器はゲンブジャキの並外れ  
た身体の前に弾かれて一切通用していなかった。

―カアアアンツ!!―

ドラコ『クツ!硬いッ!』

迅武『ああああ、もうツ！何なんだよコイツツ！堅すぎにも程あんだろオツ！』

『グルアアツ!!』

―バキイイイイイツ!!―

迅武& a m p ;ドラコ『『ガハアアツ?!』』

―ドガアアツ!!―

トランス『きやああツ?!』

「ちよ、なにぶつかって来てんのよツ?!ってというか重つ、退いてつてばツ!!」

攻撃を弾かれ、逆にゲンブジャキに吹っ飛ばされてしまう迅武とドラコ。二人はそのまま吹っ飛ばされた先で怪人達と戦っていたトランスと黒い少女に衝突して二人を下敷きにしてしまい、そんな四人に向けてゲンブジャキが両腕を広げ再び襲い掛かっていき、時を同じくしてデイエンドも単身では流石に遅れを取るのか、アルゴゾディア―トに徐々に追い込まれ体力の消費と共に劣勢になりつつあった。

―ガギイイイイイイインツ!!―

デイエンド『グウウツ?!クソツ……!』

『フン、どうした盗っ人？先程までの威勢の良さは何処に行ったツ!』

デイケによる棒術を用い、ヒット&アウェイで仕掛けて来るデイエ

ンドの戦法を見破り反撃してデイエンドを吹き飛ばしてしまうアルゴゾディアート。そうして、デイエンドに追い撃ちを掛けようと杖を振りかざして再度襲い掛かるが、それを阻むように横合いから盾と日本刀が合体した銃盾剣・アマタテノツルギがアルゴゾディアートの杖を受け止めて弾き、デイエンドを庇うようにアマテラスが立ち塞がった。

『ッ！貴様……！』

アマテラス『貴方の相手は私がしてあげるわ……皆の仇、此処で討たせてもらう……！』

そう言い放つと共に力強く地を蹴り、銃盾剣を振りかざしてアルゴゾディアートに斬り掛かるアマテラス。しかしアルゴゾディアートも咄嗟に杖でアマテラスの銃盾剣を弾きながら距離を離すが、すかさず再度斬り掛かってきたアマテラスの剣を受け止めて鏝ぜり合いになる。

『死に損ないが、笑わせるなッ！部下を見捨て、我等から逃げ出す事しか出来なかつた分際でッ！』

アマテラス『……確かに、あの時の私にはそうする事しか出来なかつた……でも今は違う。この力で必ず、貴方達組織を潰してみせる！』

『戯言を！——ズガガガガガアンツ!!——ヌツ?!』

アマテラスの剣を払い退け、デイケを叩き込もうとしたアルゴゾディアートだが、二人の間に突如無数の銃弾が飛来してアマテラスからアルゴゾディアートを引き離し、アマテラスが銃弾が放たれてきた方を見ると、其処には態勢を立て直したデイエンドがドライバーを構

えてアマテラスの横へと歩み寄る姿があった。

アマテラス 『貴方……』

デイエンド 『一人で戦って勝てるほど簡単な相手じゃない。手を貸そう、不本意だけどね』

アマテラス 『……別に構わないわ。けれど、足は引つ張らないですよ』

デイエンド 『お互いに、ねえッ!!』

—バシユウウンツ!!—

『チィー!』

デイエンドが銃口を向けてアルゴゾディアートに発砲したと共に、アマテラスはアマタテノツルギを構えて一気に距離を詰めるようにアルゴゾディアートに目掛けて飛び出した。それに対してアルゴゾディアートも素早く杖で銃弾を叩き落としながらアマテラスの剣と打ち合い、格闘戦に持ち込んできたデイエンドも交えて戦闘を再開していくのであった。



—???

— 暗闇に覆われたとある空間。一筋の光すら射さないその場所は闇に覆われて何も見えず、一体何処まで広がっているのかも分からない。そんな場所の中心には、全身ズタロボで力無く横たわる青年

……邪武者デイケイドに倒され取り込まれた零が気を失って倒れる姿があつた。

——…ズキツ——

零「——…ウツ…ツ…?…ここ…は…」

先の戦いで邪武者デイケイドに貫かれた肩の激痛から、ゆつくりと瞼を開き漸く目覚める零。そして、意識が戻ったばかりではつきりとならない頭で呆然と辺りを見渡すと、ふらつきながら身を起こして頭を振る。

零「ツ…俺は…そうだ…確か、邪武者デイケイドと戦っていて、それで——」

一つ一つ、此処に至るまでに起きた出来事を思い出し意識がはつきりしない頭の中を整理していき、其処で漸く、自分が邪武者デイケイドに倒されて奴に吸収された事を思い出した。

零「…そうだったな…だとすると、此処は奴の中って事か…?」

冷静にそう考え再び辺りを見回すが、何処までも闇が広がるばかりでやはり何も見えない。此処が推測通り邪武者デイケイドの中なら長居など出来ないのだが、肝心の出口がなければ此処から出ることは出来ない。ならば無理矢理にでも作るしかないかと考えて、零は懐からデイケイドドライバーを取り出し変身しようと腰に巻き付ける。が…

—ギユイイイイイツ……バシユウウウウウウウウウウウウウ  
ウウウウウウウウウウウ——————————ウウウンツ  
!!!!!!

零「……ツ?!何つ、ウオオオオオオツ?!」

零が再びデイクイドに変身しようとしたその直後、突如闇ばかりが広がる暗闇の向こうから無数の黒い影が触手のように飛来し、零の身体に『蛇』の如く纏わり付き動きを封じてしまったのである。そして、身体に巻き付いた影に零が驚愕しながらも影を引き千切ろうと試みる中、零の両足にも影が侵食して地面に取り込まうとしていた。

零「ツ!この影、奴が怪人を生み出してたのと同じっ……!俺まで取り込まうとしているのかっ……?!」

まさか、今まで取り込んだ武者ライダー達もこうして吸収していたのかと考えると共に、自分も彼等と同じ末路を辿ろうとしているのだと理解して焦り、一層激しく抵抗する零。しかし、四方から更に飛来する無数の触手が零の全身に纏わり付いて完全に身動きが取れないようにしてしまい、遂に下半身までが地面に取り込まれようとしていた。

零（このままじゃっ……!クソツ、こうなればっ……!）

最早手段を選んではいられないと、零は額から汗を流しながら破壊の因子を使用して、この危機的状况から脱出しようとした。その時だった……



暗闇を照らす15の人の形をした淡い光。その正体は、戦国バトルロワイヤルにて邪武者デイケイドに取り込まれてしまった十五人の武者ライダー達だったのだ。自分を助けた光の正体が彼等だと知った零も驚きを浮かべ、武者ライダー達はそんな零を見つめて口を開いた。

武者エデン『黒い髪に、真紅の瞳……成る程。やはりお前が異世界を旅するデイケイドとやらで、間違いなさそうだな』

零「！俺の事を知ってるのか……？」

武者雷牙『ああ……数ヶ月ほど前、我々の前に預言者を名乗る男が警告を知らせに現れたんだ』

武者クロノス『何れこの世界に、君達を知るのとは別のデイケイドが現れる。奴はあらゆる世界を破壊する悪魔であり、君達には奴を倒す為に戦って欲しい』……とな』

零（……鳴滝の奴、こんな世界にまで俺の噂を広めに来てたのか……）

相変わらず自分を潰す為の余念の無さに最早感服すら覚えそうだと、零は何処かウンザリした様子で小さく溜め息を吐き、自分を見つめる武者ライダー達に再び目を向けた。

零「だが、何でお前達はその悪魔を助けるような真似をしたんだ？ 鳴滝の忠告を受けてるなら、俺なんぞ助けたところでお前達には何のメリットもないだろう？」

そもそも、彼等とまともに対面したのもこれが初めてだし、彼等に



は零を助ける義理などないハズだ。それなのに何故?と、零が怪訝な眼差しを武者ライダー達に向けると、彼等もそれに対し否定せず頷き返した。

武者シリウス『確かに。俺達にお前を助ける義理はない。だが……』

武者エグザム『それで俺達に利点がない訳じゃない。……お前を助けたのは、お前に邪武者を倒して欲しいからだ』

零「……?どういう事だ?」

零を救ったのは邪武者デイケイドを倒してもらう為。そう告げる武者ライダー達に零が訝しげに問い掛けると、武者デイライトが無言のまま何かを取り出し零に投げ渡した。それは……

零「これは……デイライトのケータッチ?」

そう、武者デイライトから渡されたのは、デイライトがコンプリートフォームへと変身する際に用いる強化ツールのケータッチだったのだ。何故コレを自分に?と、零がデイライトから手渡されたケータッチと武者ライダー達を交互に見つめ困惑気味な表情を浮かべていると、武者ライダー達の姿が残像のようにブレた。

零「ツ?!お、おい……!お前等?!」

武者リノベーション『……私達は既に、邪武者に完全に取り込まれ、身体を失ってしまっているの……』

武者デイジヨブド『今こうして君と話している僕達は、実体を持たない精神のみ存在……実質、死んでると言っても過言じゃないんだ』

零「ツ……！」

こうして自分と話している武者ライダー達は既にあの邪武者デイケイドに取り込まれ、実体を持たない死者同然の存在。そう言われて目を見開き息を拒む零だが、すぐにいつもの表情へと戻り、ケータツチを見つめながら口を開いた。

零「成る程……要するに、お前達の仇を取って欲しいから俺を助けたって事か？まあ、確かに夢半ばで敗れたお前達の無念も分からんでも『違う』……え？」

恐らくは天下統一への道のりを邪魔された無念を晴らして欲しいという理由かと推測する零の言葉を、武者ライダー達に遮られてしまい、零が呆然と振り向くと、武者firstが自分の胸に手を当てて答えた。

武者first『天下統一の夢も、俺達自身の事も、そんなのはどうだっていいんだ。今俺達が強く望むのは、ただ一つだけ……』

武者キャンセラー『秀吉様を……いや、僕達の主を、国を、民達を……この世界をどうか、僕達の代わりに守って欲しいんだ……君に……』

零「……俺に……？」

どうしてだと、零が言外に訝しげな表情でそう聞き返すと、武者ライダー達は互いに顔を見合わせた後に零に答えた。

武者デイジヨブド『僕達はずっと、此処から君達と邪武者の戦いを見ていたんだ。そうして、敵味方問わずに邪武者から皆を守ろうとし

た君を見て、思った……君になら任せられるって』

武者クラスト『それに今の俺達にはもう、此処を出て、それを果たすだけの力も身体も持たない。けれど……』

武者ストライク『俺達全員に残された力をお前に注ぎ込めば、お前一人だけでも此処から出す事は出来る。そうすれば……』

零「それは……いや待て、だがそうしたらお前達はどうなる?! 身体を失ったとは言え、まだお前達は此処にいるんだろう?! 邪武者を倒すという事は——!」

邪武者デイケイドと共に、彼等も消滅するという事ではないのか。最後までそう言い切る事が出来ず口を閉ざしてしまう零だが、零が言わんとしている事は伝わったのか、武者ライダー達はそれに対し徐に頷き返した。

武者デイライト『そんなのは覚悟の上だ……』

武者エクス『元々俺達が戦い合っていたのも、全ては主と国、民達の為……この身も力も全て、皆を守る為に捧げてある』

武者ロード『その俺達の力が、皆を苦しめる為に利用されているなんて、そんなのは我慢ならないんだ……』

武者ツヴァイ『勝手な申し出をしている事は百も承知だ……それでも、頼む……異世界のデイケイド。俺達が守りたかったものを……何よりも大切なものを……どうか……』

零「……ッ……」

自分達の主達や民達、この戦国世界を救えるのなら、この身が消えようとも構わない。強い決意を秘めた眼差しでそう語り、自分達の最後の願いを聞き入れて欲しいと頼む武者ライダー達のその言葉を聞いて、零もそれ以上は何も言えず顔を俯かせる。そうして、やがて無言のままライドブツカーから一枚のカードを取り出し、バックルに装填してスライドさせていった。

『KAMENRIDE：DECADE!』

デイケイド『——俺は破壊者、悪魔だ……お前達が壊せと望むなら、俺は容赦なく、後腐れが残らぬように徹底的にぶっ壊すぞ……お前達ごと、あの邪武者を』

武者エデン『……フツ……頼もしい限りだ』

武者リノベーション『ごめんなさい、貴方達に損な役割を背負わせる事になって……後は……』

武者クロノス『頼むぞ……別世界のデイケイド』

デイケイド『っ……本当に、何処の世界にもいるものだな……とんだ物好きが……!』

憎まれ口を叩きながら、託されたケータッチを掲げるデイケイド。すると、武者ライダー達はデイケイドが掲げるケータッチに向かって一斉に掌を翳していき、全身から淡い輝きを放ちながらケータッチに残された自分達のエネルギーを注ぎ込んでいく。そして……

— シュウウウウウツ……バシユウウウウウウウウウウ

ウ

ウウウウウウウウウウウウ

!!!!!!  
|

……デイケイドが掲げるケータッチからまばゆい輝きが放たれて  
一気に広がっていき、闇に包まれた空間を暖かな光が優しく包み込ん  
でいったのだった——。



— 神樹カーラーン —

— ガギイイイイイイイイイイインツ!!! —

アマツ 『グアアツ!!』

ツヴァイ 『グウウツ!』

そしてその頃、デイケイドを倒された怒りから邪武者デイケイドに  
果敢にも挑み続けてたツヴァイとアマツだったが、天将刀の力と今ま  
で取り込んだ武者ライダー達の力をフルに使用する邪武者デイケイ  
ドに苦戦を強いられてしまい、邪武者デイケイドはそんな二人に向  
かって嘲笑を込めて叫んだ。

邪武者デイケイド 『無駄だア！今の我は武者ライダー共と先程取り

込んでやったデイケイド、そして天下人の資格である天将刀の力を手にしている！貴様等がいくら束になって掛かろうとも、既に我が敵ではない！』

アマツ『ツ！勝手に決め付けてんじや、ねえよっ……！』

ツヴァイ『相手がどんなに強かろうがな、それでも、守るもんが後ろにある以上は引く事なんてないんだよ……仮面ライダー……ってのはなあッ！』

邪武者『デイケイド……そうやってまた自ら命を棄てに来るか……理解に苦しむ……ならば消えろ、今度こそなあッ!!!』

―ギユ イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
|イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
!!!!|

そう叫びながら邪武者『デイケイド』が天将刀を掲げると同時に、巨大な火花を撒き散らして真紅の光がうねりを上げながら天将刀から放出されていく。それで今度こそ、邪武者『デイケイド』が自分達を葬り去ろうとしているのだと悟ったアマツは最終奥義の札を取り出して迎え撃とうとし、ツヴァイも此処で切り札を切るべきかと考えて身構えようとした、その瞬間……

―……ピシツ、ビシイツバキイツ……シユバアアアアアアアアアア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
|アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!|

邪武者デイクイド『——ッ?! な、何ッ?!』

ツヴァイ『……?!』

アマツ『な、なんだッ?! 奴のベルトがッ?!』

邪武者デイクイドが天将刀から強力な一撃を放とうとした瞬間、邪武者デイクイドのブラッドデイクイドライバーに突如前触れもなく亀裂が走り、その隙間から凄まじい勢いで白い閃光が放出され始めたのであった。それを目にしたツヴァイとアマツ、そして当の本人である邪武者デイクイドも驚愕を露わにして白い閃光が溢れ出るバツクルを抑え込み、信長達も目を見開き戸惑っていた。

信長「な、何だ? 何が起きてるんだっ?」

邪武者デイクイド『ガアアアアッ!! グッ、何だコレはッ?! 何故こんな、グウウウウッ!!』

アマツ『おいおい……何がどうなってるんだ……』

ひび割れるバツクルを抑えながらもがき苦しむ邪武者デイクイドを見て何が起きているのか分からず、ただ突然の出来事に呆然と佇む一同だが、その時ツヴァイ（ライト）が大声を張り上げツヴァイに叫んだ。

ツヴァイ（ライト）『智大ッ！ ウィザードメモリだッ！』

ツヴァイ『ッ！ ライト?』

ツヴァイ（ライト）『あの邪武者デイクイドのベルト、どうやらあの中から“何か”が外へ出て来ようとしているようだッ！ 僕の推測が正

しければ、恐らく——!』

ツヴァイ『……!まさか!』

ツヴァイ(ライト)の言葉で何かに気が付いたのか、ツヴァイは直ぐさま右手を掲げる。すると、何処からともなく一体の鳥型の機械が飛来してツヴァイの右手に収まり、ツヴァイは鳥型の機械をバツクルに合体させて両翼部分を左右に開き、Wの形に展開していった。

『WIZARD!』

鳥型の機械……ウイザードメモリから電子音声で鳴り響いた次の瞬間、ツヴァイの身体がクリスタルのように輝く無数の虹色の粒子に包まれていく。そうしてツヴァイの身体中央から粒子が全て消え去っていくと、其処には緑の右半身と黒の右半身の間に透明な銀色のラインを大きく取り入れた三色の姿に、背中には黒いマントを背負い、”W”に形取られたシオルダーと複眼を持ったツヴァイ……最強フォームである『ツヴァイ・ウイザード』に強化変身したツヴァイの姿があつた。そして……

ツヴァイW『『パンドラビツカーツ!!』』

智大とライトが同時に叫ぶと共に、ツヴァイの身体の中央に入ったクリアシルバーの部分が一瞬淡い虹色の輝きを放ち、其処から剣と盾が合わさった武器……パンドラビツカーが出現してツヴァイの手に握られていき、ツヴァイは何処からかパンドラメモリを取り出し、スッチの部分の人差し指で押してからパンドラビツカーに収められた剣……パンドラソードの柄の末端に取り付けられたスロットへと装填し抜刀した。

『PANDORA!』





「デイケイド?」……………」

「アマツ?!アンタは……?!」

信長「れ……零ツ?!」

そう、赤い光の正体とは、邪武者デイケイドに倒され取り込まれてしまった筈のデイケイドだったのである。しかし、その姿は彼等が最後に見た時とは違って、全身がまるで鎧武者を模した姿をした真紅の鎧となり、腰のバックルには十五人の武者ライダー達の紋章が入ったコンプリートカードを装填したデイライトのケータツチ、胸には同じく十五人の武者ライダーのカードが並べられたヒステリーオーナメントを装備し、両手には日本刀のような形状の機械の双剣を握り締めた武者の姿……十五人の武者ライダーの力を借りて変身した『デイケイド・戦国コンプリートフォーム』へと変わっていたのだ。

邪武者デイケイド『ガアツ、クツ……!き、貴様つ、何故ツ?!どうやってあの空間から脱出したツ?!一度取り込まれれば、彼処から抜け出す事など……!!』

デイケイド戦国CP『——自分達の主や民、この世界を想うアイツ等の力を、侮り過ぎてたようだな……』

邪武者デイケイド『ツ!何だどつ……?』

何が起きたのか事態が理解出来ぬまま、デイケイドの言葉に思わずそう聞き返す邪武者デイケイド。するとデイケイドはゆっくりと身

を起こし、右手に握る機械の日本刀……戦国ブレードの切っ先を邪武者デイクイドに突き付けて力強く言い放った。

デイクイド戦国CP『俺と同じように、お前に取り込まれた武者ライダー達が、残された力を使って俺を外へ出してくれたのさ……この世界を、民達を、主達を自分達の代わりに守って欲しいと、俺にこの力を託してな』

信長「……！ツヴァイ達が……？」

邪武者デイクイド『馬鹿なっ……!!奴らは既に我が血肉と化したハズ……!!それにそのような真似をすれば、奴らの魂が我に取り込まれる時期が更に速まるばかりなのだぞっ……?!なのに何故っ?!』

ツヴァイW『——まだ分かんねえのかよ、邪武者』

理解が出来ない。そう訴え掛ける邪武者デイクイドにツヴァイが  
そう言い放ち、ゆっくりとデイクイドの横に立ち並ぶ。

ツヴァイW『ライダーつてのは、守るもんがあるから戦い抜く。例え身体一つになろうと、身体が消えようと、それでも食らい付いて大事なもん守る為に戦う……その心そのものがライダーなんだよ』

デイクイド戦国CP『それは仮面ライダーだろうと、武者ライダーだろうと変わらない……それを忘れ去ったお前の野望如きで、アイツらの想いや願い、何よりも守りたかった大切な物を、踏み躪れると思うなッ!!』

邪武者デイクイド『ッ……!!何なんだ……何なのだ貴様等はアツ  
?!』

苛立ちのあまり、天将刀を突き付けて喚き散らすように叫ぶ邪武者  
デイケイド。それに対してデイケイドは両手の戦国ブレードを、ツ  
ヴァイはパンドラソードを構え直し……

デイケイド戦国CP 『通りすがりの……』

ツヴァイW 『二人で一人の……』

『『仮面ライダーだッ！憶えておけえッ!!』』

邪武者デイケイド 『ッ!!ほぎけええええええええええッ!!』

同時に地を蹴って飛び掛かる二人に対し、邪武者デイケイドも怒号  
を飛ばして同じように飛び出し迎え撃つ。最初に斬り掛かってきた  
ツヴァイのパンドラソードを弾きながら、続けざまに仕掛けてきた  
デイケイドの戦国ブレードを天将刀で受け止め、そのまま鏝ぜり合い  
になりながら真横の壁を突き破り戦いの場を変えていったのだった。

ツヴァイW 『アマツッ！今の内にあの二人を助け出せッ！奴は俺達  
が引き受けるッ！』

アマツ 『……！あ、ああ、分かったッ！』

信長とカガミの救出を依頼するツヴァイの言葉に一瞬戸惑いなが  
らも頷き返して、アマツは信長とカガミの救出へと向かい、ツヴァイ  
もアマツの後ろ姿を見送りながらデイケイドと邪武者デイケイドが  
共に消えた壁へと飛び込んで二人を追い掛けていった。が……

……シヤララララッ……シヤララララッ……

アマツ達の遙か頭上。其処には、先程邪武者デイケイドのドライバーの亀裂から溢れ出た閃光の残滓が宙を漂う光景があつたのだつた。そして、光の残滓はそのまま天井の穴を抜けて、外の神樹の木々に実る果実へと吸い寄せられていき、そして……

—ギユイイイイイツ……バシユウウンツ—

光の残滓を吸い込んだ果実が突然淡い光を放ちながらその姿を変化させ、なんと、クロノス、ツヴァイの顔が描かれた二つの錠前……クロノスロックシード、ツヴァイロックシードに変化していったのだ。と、更に其処へ……

—ドツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオンツツツツツ!!!—

冥王『——これで53本目と……ん？これは……』

上空を縦横無尽に飛び回り、神樹カラーンから平行世界に目掛けて放出される触手を片っ端から撃破していた冥王が、偶然にもその二つの錠前を発見し、クロノスロックシードとツヴァイロックシードをもぎ取り二つのロックシードを眺めていく。

冥王『クロノスとツヴァイのロックシード……？どうしてこんな所にこんな……もしかして……？』

と、其処で何かに気付いたのか、冥王は適当に近くに実る果実へと手を伸ばして果実をもぎ取り、手にした果実に自身の神氣を僅かに注ぎ込んでいく。すると、冥王の神氣を帯びた果実が淡い光を放ち、冥王の顔がカバーに描かれたメイオウロックシードへと変化していった。

冥王『これはっ！……フ、フフフツ、木の根の相手ばかりで少し飽きてきた所だったけど、此処に来て面白い発見があったの！これは試さない手は無いの♪』

まるで新しい玩具を買ってもらった子供のようにウキウキしながらそう言うと、冥王は近くの触手達を一瞬で切り落としながらその場を離れてUターンし、トランス達が戦う戦場を目指し飛んでいったのだった。



ド シュ ウウ ウウ ウウ ウウ  
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
ツツツツツ  
!!!!!!  
|

『ヌツ!』

重なり合う二つの電子音声と共に、トランスはライドブツカーG  
モードの銃口から桜色の極太の砲撃を撃ち出し、聖桜は前方に出現さ  
せた朱い魔法陣から巨大な火炎放射をゲンブジャキに目掛けて放出  
した。しかしそれに気付いたゲンブジャキは咄嗟に両腕を広げてト  
ランスの砲撃と聖桜の火炎放射を真つ向から受け止め、そのまま砲撃  
と火炎放射を弾き返してしまう。

ドツ ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアンツツツツ  
!!!!!!  
|

トランス『クツ! やっぱりこっちの技が通じない……!』

迅武『クツツツ! おい、どうするんだツ?! このままじゃジリ貧だ  
ぞツ?!』

ドラコ『言われなくとも分かっているツ! 弱音を吐いてる暇がある  
なら、その足りない頭で打開策を考えろツ!』

迅武『それが分かんねえから聞いてんじやねえかツ! つてか足りな  
い頭言うなツ!』

「ああもうつ、こんな時に喧嘩なんかしてんじやないわよ鬱陶しいツ  
!!」





うに、上空から突如巨大な砲撃が降り注いで来たのだ。ゲンブジャキは直ぐさまその場から退き砲撃を回避したが、かわされた砲撃はそのまま連合軍の武者達に襲い掛かろうとした別の怪人達を飲み込んで蒸発させていき、それを見たライダー達と怪人達が砲撃が放たれてきた方へと振り返ると、其処には上空に浮遊しながらメイオウガツシャーの先端を突き付ける冥王の姿があった。

冥王『ふむ、どうやら良い具合に苦戦しているみたいなの』

天神『冥王?!』

トランス『ちよつ、神樹の木の根の方はどうしたの?!まだあんなに沢山残って……!』

冥王『言われなくて分かってるの。ただあの樹の方で何か面白そうな物を見付けたから、姫ちゃんと其処の二人に渡そうかと思って♪』

迅武『へ?俺、たち?』

天神はともかく、初対面である筈の自分達まで名指しされ困惑気味に顔を見合わせる迅武とドラコ。冥王はそんな二人と天神に後ろ腰から取り出した三つの錠前をポイントと投げ渡し、それを見た迅武は慌てて錠前……クロノスロックシードを、ドラコはツヴァイロックシードを、天神はメイオウロックシードを受け取っていく。

ドラコ『ッ?!これは……!』

天神『仮面ライダーのロックシード?!何故こんな物が……?!』

冥王『さあ?私はただソレを見付けただけだし、とにかく、苦戦してるならソレを使ってみたらどう?』

迅武『な、何か良く分かんねえけど……これであの亀野郎に対抗出来るなら!』

あのゲンブジャキの防御を突破出来るならばと、迅武はクロノスロックシードの解錠スイッチを押し、それを見たドラコと天神も決心してツヴァイロックシードとメイオウロックシードの解錠スイッチを押ししていく。

—ガチャツ!—

『CLONOS!』

『ZWEI!』

『MEI—O!』

解錠された三つのライダーロックシードから立て続けに電子音声が響き、直後に迅武、ドラコ、天神の頭上にジィツ!と、フアスナーが開くように裂け目が現れ、其処から果実や異形とも違うあるモノが出現する。それは……

トランス『え、な、何アレ?!』

「クロノスの……顔?！」

そう、裂け目から現れたモノの正体とは、クロノス、ツヴァイ、冥王の顔に酷似した三つの巨大なアームズだったのである。一見すると異様にしか見えないそのライダーアームズ達を見てトランス達や怪人達、当の本人達である迅武達も騒然としていたが、すぐに気を取り直してライダーロックシードをそれぞれのベルトのバックルにセットし、カッティングブレードでスライスさせていった。

—スパアアンツ—

『Soiya!』

『CLONOS ARMS!』

『GATE UP! Ijiri Taosuze!』

『Come on!』

『ZWEI ARMS!』

『TORNADO! FANG! HA・HA・HA!』

『Soiya!』

『MEI—O ARMS!』

『Saikyouno Orchestra♪』

それぞれのドライバーから電子音声が響き渡ると共に、迅武達の頭上に浮遊するライダーアームズが迅武、ドラコ、天神の頭に次々と落下していき、そのライダーをモチーフにした鎧へと変形してアームズチェンジしていったのだった。

迅武はクロノスをモチーフにした赤い瞳に漆黒の鎧、右手にクロノスブレイドを握り締めた『迅武・クロノスアームズ』に、ドラコはツヴァイをモチーフにした緑と黒のツートンカラーの鎧にスナイプトリガーを手にした『ドラコ・ツヴァイアームズ』、天神は冥王をモチーフにした純白の鎧にメイオウガッシャーを手にした『天神・メイオウアームズ』となり、アームズチェンジした三人はゲンブジャキ達と対峙していく。

迅武CA 『さあ、お前ら全員弄り倒すぜツ!!』

ドラコZA 『さあ、お前の罪を数えろツ!!』



『TIME QUICK!』

トランス、聖桜、ドラコはそれぞれの銃から銃弾の雨を振り撒いて  
怪人達を次々と薙ぎ倒していき、迅武と黒い少女はタイムクイックを  
用いて高速戦に突入し、怪人達の軍勢を目にも留まらぬ速さで斬り裂  
いて爆散させていく。そして二人がタイムクイックを解除した直後  
にゲンブジャキが迅武と黒い少女に襲い掛かり、咄嗟に反撃して斬撃  
を叩き込むも、やはり並外れた防御力の前に弾かれてしまう。

迅武CA 『クッ?!この錠前の力でもまだ通用しないのかッ?!』

「やっぱり、コイツの固い装甲をどうにかしないとっ。でもどうすれ  
ばっ……………!」

—ギユイイイイイツ……………ドツゴオオオオオオオオオオオオオオ  
オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ———  
オオオンツツツツツツツ——  
!!!!!!

『ッ?!又、又ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ?!』

『ッ?!?』

ゲンブジャキの装甲をどう打ち破るか再び躓き掛けたその時、トラ  
ンス達の背後から先程の様に一発の砲撃が放たれてゲンブジャキを  
飲み込み吹っ飛ばしたのであった。

ドラコZA 『今のは……………あの冥王とやらの砲撃か?』

トランス『え、でも冥王は……？』

そのさつきと同じ展開に、もしや冥王が手を貸してくれたのかと彼女の方に目を向けるが、冥王は神樹から伸びる木の根の処理で上空を飛び回っており、こちらに援護してくれたようには見えない。ならば誰が？と、トランス達が今の砲撃が撃たれてきた方向に視線を向けると……

天神M A『——フフ……フフ……フフ……フフ……』

其処には、身体を仰け反るような姿勢で佇み、薄気味悪い笑い声を漏らす天神がいた。しかしその姿は先程までと違い、まるで何かが壊れたかのような不気味な感じになっている。

聖桜『さ、桜ノ神……？』

天神M A『フフフ……駄目じゃないかア、彼の大事な宝物を、仲間を傷付けたら……彼が悲しんでしまうだろオ？そんな悪い事をするんだったら……少し、頭を冷やそうか……？』

何故か先程までと雰囲気が一変したただならぬ威圧感を放つ天神にゲンブジャキ達だけではなく、トランスや聖桜、迅武達も圧されてしまい後退りをしてしまうが、天神は構わずゆっくりと宙に浮きながらドライバーのカツティングブレードを一回倒した。

—カシユウツ！—







—チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!  
—

『ヌッ！何だ?!』

アマテラス『ッ！ちよつと、どうなってるのコレっ?!』

デイエンド（……………ああ……………何かまためんどくさい事になってるな、アレ……………）

—ドゴオオンツ!!!—

トランス『あうッ！こ、このままじゃ、家康さん達にまで被害がッ  
—ブオオンツ！—……………え?』

天神の砲撃を何とかかわしながら打開策を考えようとしたトランスだが、その時ライドブツカーが突然勝手に開いて中からシルエツトのみの三枚のカードが飛び出した。そしてトランスがそれを掴むと、シルエツトのみだった三枚のカードの絵柄が蘇り、トランスの隣に立つ黒い少女……………ライダー少女クロノスのカードに変化していったのだった。

トランス『ッ！これは……………ううん、一か八か、やるしかないッ！』

これを使えば更にこの状況が混沌と化するのではないかと一瞬迷うが、すぐに頭を振って迷いを払い、中央のカードを抜き取りながら黒い少女の背後に回り込み、ドライバーに装填しスライドさせていった。

『FINALFORMRIDE：C・C・C・CLONOS！』

トランス『ちよつとくすぐったいよ!』

クロノス「……え?ちよ、なに—ドンツ!—ひやあツ?!」

トランスの突然の言葉に戸惑い振り返ろうとした黒い少女……ライダー少女クロノスだったが、トランスは構わずにそんなクロノスの背中に両手を伸ばして背中を開いた。しかし、クロノスの身体は他のライダー達のように超絶変形はせず、クロノスの開いた背中からまるで赤ん坊のように小さな竜の足の爪先が生えていた。

トランス『あ、あれ?変形しない?あ、そっか、ライダー少女は変形しないんだっけ……!』

クロノス「ね、ねえ!ねえ何してるのツ?!っていうか私の身体に今何が起きてるのツ?!—ズプツ!—ヒイイツ?!」

トランス『ご、ごめんね!ちよつとだけ我慢してて!』

流石に自分の背中が開いているという状況に戸惑いと動揺を隠せないでいるクロノスだが、トランスはそんなクロノスの背中に両腕を突っ込んで彼女の中にある”ソレ”を取り出そうとする。が……

クロノス「いやあああああああアツ!!無理イツ!!こんな無理イツ!!死んじゃうツ!!死んじゃうってばあああああアツ!!」

トランス『りっ、かんじや駄目ツ!!力んだら引っ込んで取り出せないからツ!!ほらっ!ヒツヒツフーツ!ヒツヒツフーツ!』

クロノス「ひっ、ひいっ……ひい、ひい、ふううっ……ひい、ひい、ふううっ……!」

トランス『そ、そう！その調子ッ！ヒツヒツフーツ！ヒツヒツフーツ！あ、魚見さんッ！魚見さんも手伝ってッ！』

聖桜『クツ！はいっ？……………え、出産プレイ？』

トランス『違いますッ!!と、とにかくそっち持つてくださいッ!!もうちよつとで取り出せそうなんですからッ!!』

聖桜『は、はあ…………』

クロノス「ひっ……………ひい、ひい……………ふううっ……………」

トランス『ほら、頑張つてッ！もうちよつとだからッ！ハイ、ヒツヒツフーツ！ヒツヒツフーツ！』

CB（……………何だこの図）

混戦の横で、仮面ライダー二人が年端も行かぬライダー少女の背中に両腕を突っ込み、一緒にラマーズ法を繰り返すという何ともシュールな光景に、そんな感想をポツリと漏らすクロノスブレイド。で……

トランス『せえーのおっ!!』

—ポンッ！—

『……………ウウツ……………キュアアッ……………』

トランスの掛け声と共に、クロノスの背中から思いつ切り引っ張り出されたモノ。小さく欠伸をするそれは正に赤ん坊サイズの小さな黄金の竜……………クロノススペリオルドラゴンだったのであった。

トランス『や、やったッ！取り出せたあッ！』

聖桜『おおっ……！ほら、しっかり見て下さい……！生まれまして、元気な男の子ですよお母さん！』

クロノス「ぜえええッ……ぜえええッ……だ、誰がお母さんよおっ……！」

苦勞の末に取り出し、最早感動すら覚えてミニスペリオルドラゴン  
をクロノスに見せる聖桜だが、クロノスの方は無駄に体力を大幅に消  
費したせいで全身汗でびっしょりになって話す余裕もなく、取りあえ  
ず呼吸を整えてからトランスの手を借り立ち上がった。

クロノス「……んで、コレ一体なんなの……？」

トランス『あ、えつと……多分、コレが貴女のファイナルフォーム  
ライド、だと思っただけ……』

『キュアアアッ……』

トランス『……ちよつと小さい、よね』

聖桜『ちよつとどころか、かなり小さいと思いますが……コレ、ど  
う使えば……？』

取りあえず無事に取り出せたのはいいが……よくよく考えると、こ  
んなミニサイズのスペリオルドラゴンをどう戦闘に活かせば宜しい  
のか。冷静に改めて考えて再び悩み始めるトランス達だが、そんな彼  
女達の悩みなど露知らず、ミニスペリオルドラゴンは聖桜の手から飛  
び降りて地に降り立ち、そして……

ドツ  
シヤ  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ンツ!!!  
—

『グウウウウルウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!』

トランス『……え?ええええええええええええええええええええええツ?!!!』

クロノス「きゅ、急に巨大化したあツ?!」

そう、なんと、ミニスペリオルドラゴンは脈絡もなく突如巨大化を果たし、地面を爆発させながら竜の咆哮と共に戦場に降り立ったのだ。そして怪人達や連合軍も突如前触れもなく現れたその巨大な黄金の竜を見て騒然とする中、スペリオルドラゴンは口から強力な砲撃を撃ち出し怪人の軍勢を薙ぎ払っていくのだった。

「お、おいつ!何なんだよありやあツ?!」

「む、武者クロノスのスペリオルフォームか?!け、けど、何処から出て来たんだあツ?!」

トランス『……あー……うん、まあ、なんて言うかな……取りあえず、結果、オーライっ……?』

聖桜『……あつという間に成長期を終えて大人に仲間入りとは……子供の成長が早いとなるとこれから大変ですね、お母さん』

クロノス「だからお母さん言うなアーツ!!」

トランス『にやははは……と、とにかくこれで決めるよ！恭司さん！影虎さん！手伝って！』

迅武CA『ウオツ?!えっ?あ、ああ、分かったッ!』

ドラコZA『こつちもこれ以上付き合い切れんっ、さっさと決めるぞッ!』

突然現れたスペリオルドラゴンと砲撃をむやみやたらに撃ちまくる天神の暴走にこれ以上巻き込まれたくはないからと同意する二人。それに対してトランスも思わず苦笑いしながらライドブーツカーからカードをもう一枚取り出してバツクルに装填し、聖桜も左手の指輪を取り替えてバツクルへとタッチし、迅鎧とドラコもそれぞれのバツクルのカツティングブレードを操作していく。

『FINAL TACKRIDE: C・C・C・CLONOS!』

『Choo—iine!』

『Kick Strike! Saiko—!』

『Soiya!』

『TIME CRASH!』

『Come on!』

『MAXIMUM DRIVE!』

『!!ギユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

四人のベルトからそれぞれ鳴り響く電子音声と共に、スペリオルドラゴンは竜の咆哮を上げながら翼を羽ばたかせて飛び立つ。そしてトランス、クロノス、聖桜、迅武は同時に地を蹴って空高く飛び上がり、ドラコはゲンブジャキ達に向けてスナイプトリガーを構えながら銃口にエネルギーを収束させていき……

ドラゴンA 『オーバーヒートレーザーツツツ!!! ハアツ!!!』

ー チュド オオ オオ オオ オオ オオ オオ オオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ンツツツツツ!!!

『ヌウガアアツ?!』

『ギヤアアアアアアアツ?!』

スナイプトリガーから撃ち出された超高熱のレーザーが無数の怪人達を呑み込んで焼き尽くし、ゲンブジャキの動きを封じた。その隙にトランス達は上空で空中回転して跳び蹴りの態勢を取り、そして……

ト ラ ン ス 『ハ アアアツ …… セエ ヤ  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

ク ロ ノ ス 「デ エエ  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

「グ ル ルウツ、 ギユ オ  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

ー バ シ ユ ウウ ウウ ウウ ウウ ウウ ウウ ウウ  
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
!!!!!!

聖桜 『ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』





スとデイエンドも咄嗟に身構えていき、闇がアルゴゾディアートを飲み込もうとした。その時……

——…其処までだよ、アルペジオ。此処はまだ、君が全力を出す場所じゃない——

『……ッ！』

デイエンド『ッ?!何だ?声つ……?』

アルゴゾディアートが更なる力を行使しようとした瞬間、それを制止するように何処からか声が響いたのだ。その声の主を探してデイエンドとアマテラスが周囲を見渡すと、アルゴゾディアートの前にまるで幻影のように二人の人物……アルペジオと同じ財団と幹部であるカンパネルラ、そしてフードで全身を隠した謎の人物、ノアールが現れたのだった。

アマテラス『ッ!貴方達は……!』

カンパネルラ「やあ、こうしてお目に掛かるのは始めましてかな? デイエンド、それからアマテラス……。僕は財団の幹部が一人、カンパネルラ。そしてこっちは、僕とアルペジオと同じ幹部のノアールだ。以後、お見知り置きを」

ノアール「………」

突如現れたカンパネルラとノアールを見て警戒するアマテラスとデイエンドに対し、軽い調子で自分と隣に立つノアールについて自己

紹介をするカンパネルラ。すると、超新星の発動を邪魔されたアルゴゾディアートが軽く舌打ちしカンパネルラに食ってかかった。

『今更何しに出て来たカンパネルラ？冥王やイレギュラーの侵入を許しておきながら……』

カンパネルラ「その辺は別にいいじゃない。『クライアント』に渡す神樹と邪武者デイケイドのデータも一通り揃ったし、結果さえ出せば過程は問題じゃないよ」

『そういう問題ではっ……』

カンパネルラ「ハイハイ、小声なら後で幾らでも聞いてあげるって。それよりもほら、戻るよ。ノアール？」

デイエンド『ツ！逃がすと思うかッ！』

ノアールに目配りして撤退しようとするカンパネルラ達を引き止めようと、デイエンドはすぐさまドライバーを突き付けて銃撃する。だが、その前にノアールが何処からかトランペット型の武器を取り出してフードの下に隠された口に当て、そして……

—♪♪♪♪♪♪♪♪—

デイエンド『ツ?!なっ、グツ?!な、何だこの音ッ?!』

アマテラス『ツ……!この嫌な音色っ……戦国世界に戻ってきた時にも流れていたっ……?!』

トランペット型の武器から放たれたのは、美しい旋律の魅惑のメロデー。一度聞けば誰もが魅了されるような音色だが、デイエンドと

アマテラスにはその音色が不快且つ苦痛のメロディーに聞こえて耳を押さえながら悶え苦しみ、ノアールはその隙に自身とカンパネルラとアルゴゾディアートの周囲に音譜と楽譜を摸した転移術を使用し、三人はそのまま何処かへと消えてしまったのであった。

デイエンド『ツ！ハアツ、ハアツ……逃げられたっ……！』

アマテラス『……何だったの……あの楽器使い……』

カンパネルラ達に逃げられ悔しげに地団太を踏むデイエンド。その隣に立つアマテラスはカンパネルラ達と共に逃げたノアールの姿を思い出して険しげな表情を浮かべ、未だ遠くにそびえ立つ神樹をジツと見つめていくのであった。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evoile⑥

―神樹カーラーン―

ガッ

シヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアンツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ  
!!!|

デイクイド戦国CP『ゼエアアアツ!!!』

邪武者デイクイド『ヌウエアアアツ!!!』

―ガギイイイイツ!!|

トランス達がアルゴゾディアートを退けたその一方、神樹カーラーン内部では時を同じくして邪武者デイクイドとの最後の決戦が火蓋を切って落とされ、十五人の武者ライダーの力を借り戦国コンプリートフォームに強化変身したデイクイドと邪武者デイクイドは壁を突き破って別区域に戦いの場を変えながら、互いに目掛け戦国ブレードと天將刀を振るい鏝せり合いとなっていた。

―ギギギギギイツ!!|

邪武者デイクイド『破壊者ごときが、凶に乗るなよツ!!貴様等程度がいくら力を付けようが、天下人たる我には到底及ばんと知れえツ!!』

デイクイド戦国CP『知るのはお前の方だ……コイツに託されたア

イツ等の力、身を持って味わせてやるよツ!!』

邪武者デイクライド 『ほぎくなあアツ!!』

デイクライドの言葉を戯れ事と切り捨てながら天将刀とブラッドライドブツカーによる猛攻でデイクライドへと容赦なく斬り掛かる邪武者デイクライド。しかし、デイクライドも引けを取らず両手の戦国ブレードで邪武者の剣撃を弾きながら武者を連想させる立ち回りで邪武者デイクライドの双剣を背面受けで凌ぎ、もう片方の手で素早くバツクルにセツトされているケータツチを操作していく。

『RENOVATION! CLONOS! KAMENRIDE: MUSHAA!』

—ガギイイイツ!!—

邪武者デイクライド 『ヌウツ?!』

ケータツチから電子音声が響くと同時に、デイクライドが背面受けで止める邪武者デイクライドの双剣が不意に横合いから飛び出してきた二人のライダーによって弾かれたのであった。そして邪武者デイクライドも突然の乱入者に驚きながら咄嗟に距離を離してデイクライドを見据えると、デイクライドの左右に見覚えのある二人……邪武者デイクライドが今も体内に取り込んでいる筈の武者リノベーションと武者クロノスが立ち構える姿があった。

邪武者デイクライド 『なつ……武者ライダーだとツ?!』

武者クロノス 『ハアアツ!!』

武者リノベーション 『デエヤアツ!!』

何処からともなく出現した二人の武者ライダーを見て驚愕を隠せない邪武者ディケイドだが、ケータッチによって武者ライダーの力が具現化した存在である武者リノベーションと武者クロノスはそれぞれの剣をふりかざしてそんな邪武者ディケイドに斬り掛かり、ディケイドもそれに続き三人の剣舞へ参戦しながら左腰のライドブッカーから二枚のカードを取り出すと、右腰のバックルにセットし掌で押し込んだ。

『FINAL ATTACK RIDE・RE・RE・RE・RENOVATION! C・C・C・CLONOS!』

『TIME CRASH!』

武者リノベーション『ヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
418 ツツツ

!!!!!!  
』

武者クロノス『ゼエエエエエヤアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ツツツ

!!!!!!  
』

—ズシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!  
—

邪武者ディケイド『グウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
?!!グツ、キツサマアアア!!』

電子音声が響くと共に、邪武者ディケイドを挟み撃ちにした武者リノベーションと武者クロノスの必殺剣がすれ違い様に叩き込まれる。だが邪武者ディケイドもそれで簡単には膝を屈せず、必殺技を発動し消滅した二人の武者ライダーに目もくれずディケイドに目掛け天将刀から連続で斬撃波を飛ばした。だが……

—ズガガガガガガガガガガガガアアッ!!!ドガ  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンツ!!!

デイケイドに向け放たれた斬撃波に無数の銃弾が降り注いで直撃し、爆発を発生してデイケイドへの攻撃が阻止されたのだった。

邪武者デイケイド『ツ?!な、何ツ?!—ズバアアッ!—ヌウオオツ?!』

その思わぬ妨害に邪武者デイケイドも爆発から発生した爆風に耐えながら驚愕を浮かべる中、突然何者かが爆風に紛れて邪武者デイケイドに斬り掛かり吹き飛ばしたのだった。そしてデイケイドも吹き飛んだ邪武者デイケイドを見て、邪武者デイケイドが吹き飛んできた方へと振り返ると、其処には右手に笛の武器、パイドバイパーと、左手に銃型の武器のウィザードリボルバーを握り締めたツヴァイ・ウィザードの姿があった。

デイケイド戦国CP『智大……!』

ツヴァイW『あの二人はアマツとヒビキに任せてきた。それからさつき大輝から連絡があったが、どうやらアルペジオ達を無事に退けたらしい。残るは……』

ビュンツと、パイドバイパーを振り回して風を切り、笛の切っ先を邪武者デイケイドに突き付けるツヴァイ。

ツヴァイW『テメエとこの神樹を仕留めるだけだ……邪武者アツ!』



邪武者デイクイド『ツ……!!笑わせるな……貴様等ごときに我が野望っ、我が天下の夢想を滅ぼせるモノかアアアッ!!!』

『FINALFORMRIDE・E・E・E・EDDEN!S・S・S・  
STRIKER!LO・LO・LO・LOAD!』

邪武者デイクイドの怒号と共に、ブラッドデイクイドライダーから立て続けに発せられる電子音声。

それと同時に、邪武者デイクイドのベルトのバックルから漆黒の戦闘機、漆黒の巨大な剣、漆黒の巨大な刀……仮面ライダーエデンのファイナルフォームである『漆黒のエデンオーライザー』、仮面ライダーストライクのファイナルフォームの『マテリアル・ストライク』、仮面ライダーロードのファイナルフォームライドである『ロードブレイド』が飛び出し、邪武者デイクイドはそれらを背中と両手に装備して赤黒いオーラを身に纏っていく。

邪武者デイクイド『爆ぜろっ、滅せよッ!!我が創世せし世に貴様らは要らぬッ!!この世全ての世界から消え去るがいいッ!!!』

ツヴァイW『生憎だが、消えるのは……!』

『TORNADO!MAXIMUMDRIVE!』  
『LIGHTNING!MAXIMUMDRIVE!』  
『SHADOW!MAXIMUMDRIVE!』  
『BLAZE!MAXIMUMDRIVE!』  
『FANG!MAXIMUMDRIVE!』  
『GROUND!MAXIMUMDRIVE!』  
『SNIPER!MAXIMUMDRIVE!』

デイクイド戦国CP 『お前の方だ、邪武者あッ!!』

『ZWEI! KAMENRIDE: MUSH!』

邪悪なオーラを身に纏い、最大の一撃を放とうとしている邪武者デイクイドを迎え撃つべく、ツヴァイはツヴァイリボルバーに六つのガイアメモリを一度に装填し、デイクイドもベルトのケータッチを操作し自身の隣に再び一人の武者ライダーの残像……武者ツヴァイを召喚して実体化させ、更に左腰のライドブッカーから三枚のシルエツトのみのカードを取り出すと、絵柄が消えた三枚にツヴァイの力が宿り、その中から一枚のカードを抜き取って右腰のバツクルに装填する。

『FINAL FORMRIDE: Z・Z・Z・ZWEI!』

デイクイド戦国CP 『ちよつとくすぐつたいぞ……!』

ードンツ!ー

武者ツヴァイ 『ウツ!』

再度響く電子音声と共にそう言いながら武者ツヴァイの背後に回り込んで背中 hands を伸ばすと、なんと武者ツヴァイの右半身と左半身が割れ、存在しない半身を補って二人の存在へと分離していき、黒のツヴァイと緑のツヴァイ……『フアングフアング』と『トルネードトルネード』に超絶変形し、更にカードをもう一枚取り出して右腰のバツクルに装填した。

『FINAL ATTACKRIDE: Z・Z・Z・ZWEI!』

邪武者デイクイド 『何をしようとも無意味だアッ!!二人諸共つ、無

間奈落へと墮ちるがいい  
イイイイイイイイイイイイ  
イツツツツツ  
!!!!!!

— シュウウウウウツ……ドツツツバアアアアアアアアアアア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアンツツツツツツツツツツ  
!!!!!!—

ツヴァイW (ライト) 『智大ツ!!』

ツヴァイW 『ああツ!!』

漆黒のエデンオーライザーからの莫大なエネルギーと、自身の赤黒色のオーラをマテリアル・ストライクとロードブレイドの刃に注ぎ込み、五十メートルは軽く越える両手の漆黒の光刃を二人に目掛けて振りかざす邪武者デイクイド。

しかしそれに対しツヴァイも冷静さを崩さず、天井や壁を破壊しながら自分達に迫り来る漆黒の光刃を真つすぐ見据えたままツヴァイリボルバーの銃口に六つの光を収束させていき、漆黒の光刃の向こう側に立つ邪武者デイクイドに狙いを定め、そして……

ツヴァイW 『——ツヴァイシューティング……』

— バアアアアアンツツ!!! バリイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイインツツツツ  
!!!!!!—

邪武者デイクイド 『——ツ?!!? なんつ……—バキユウウツ!!!—ガアアアアアアアアアツ!!!?』



裂し、邪武者デイケイドはそれをかわす事も凌ぐ事も出来ず、悲痛な叫び声を上げながら後方の壁を突き破って吹き飛んでいったのだ。

—スタツ！—

デイケイド戦国CP『ツ……ふう……ふう……これで、終わった、か……？』

ツヴァイW『——ああ、多分な』

ポンツと、そう言いながら邪武者デイケイドが突き破った壁を険しげに見つめるデイケイドの肩を背後から軽く叩くツヴァイ。そしてデイケイドもそれでやつと終わったと実感したか、肩に張った緊張が解けたように溜め息を吐いてツヴァイの手を借りながら徐に立ち上がり、仮面に付いた汚れを拭って邪武者デイケイドが消えた暗闇ばかりが広がる穴の向こうをツヴァイと共に見つめていた。其処へ……

『——ツヴァイ!!』

「智大きあ——んツ!!」

ツヴァイW『……!』

背後からツヴァイを呼ぶ声が聞こえ、二人がそちらの方に振り返ると、其処には神樹の核として捕らえられていた信長とカガミを連れ駆け寄って来る、アマツとヒビキの姿があった。

ツヴァイW『カガミ……!無事だったか……』

カガミ「はい……!アマツとヒビキのおかげで、どうにか……!」

アマツ』……で、そつちは？もう終わったのか？』

ツヴァイW『一応な。後はこの神樹をどうにかすれば、この事件も漸く片が付く』

ヒビキ「こ、この樹をですか？それはちよつと、骨が折れそうというかつ……」

この神樹の馬鹿でかさを直に見てるからか、何となしにそう呟くツヴァイに思わず苦笑を浮かべるヒビキ。デイケイドもそんな四人の姿を横目に僅かに微笑すると、同じくツヴァイ達を見て何処か複雑げに笑う信長の下へと歩み寄っていく。

デイケイド戦国CP『信長……』

信長「……漸く、終わったな……お前が無事で、本当に良かった……」

デイケイド戦国CP『……すまない……俺はアイツごと……武者ツヴァイヤ、他の武者ライダー達を……』

信長「……」

この世界や、国や、民達、そして主達を守る為、残された力を自分に託し邪武者デイケイドと一緒に消えた武者ライダー達。信長達を助ける為とは言え、自分はこの手で奴ごと彼等を破壊してしまった。僅かに顔を伏せて謝罪するデイケイドに対し、信長は一度足元に視線を落とした後、顔を上げてデイケイドに告げた。

信長「……彼奴らは、最後の最後まで、我等に忠義を尽くしてくれ

た……お前という希望を託し、この戦国世界を救ってくれたのだぞ？  
そんなお前を、どうして我が責められる？」

『デイクイド戦国CP』……………』

信長「だから……彼奴らが希望を託したお前が、その姿で、彼奴らの代わりに受け取ってくれ……我等と、民達と、この世界への忠義……大儀であつた」

デイクイドと、デイクイドを通して、この戦国世界を救う力を託してくれた武者ライダー達に感謝の言葉を贈って微笑む信長。そんな彼女の顔を見てデイクイドもマスクの下で微かに息を呑むと、一瞬だけ口を閉ざし、信長から顔をそらして言葉を紡いだ。

『デイクイド戦国CP』『そんな大層な言葉、代わりとは言え、俺なんぞに贈る物じゃないだろ。俺はただアイツ等の願いを叶えてやっただけだし……』

信長「そうか？その割には、我を助けに此処まで来てくれたり、あの娘達を身を呈して庇ったりと、お主も負けず劣らず頑張っていたと思うが？」

『デイクイド戦国CP』『智大達に余計な負担や心配まで掛けさせたんだ、利口なやり方じゃなかったのは自覚してる。それに……』

スツ……と、徐に信長の顔に手を伸ばすデイクイド。あまりに突然だったために信長は驚いてビクツと肩を震わせるが、デイクイドは構わずそんな信長の頬に付いた汚れを出来るだけ優しく拭き取る。

『デイクイド戦国CP』……俺はただ、お前が無事だったならそれで十分だ。他には何もいらん……』

信長「ツ……！なつ……ふ、ふん……またそれっぽいことを言つて……また我をからかうつもりかっ？」

デイケイド戦国CP『そんなつもりはない。一応は……まあ、なんだ……散々認めないだの何だの言ってきたが、形式上だけとは言え、俺とお前は夫婦関係だし、俺だつてお前にはそれなりの情を抱いてるんだ……妻のお前が危険な目に遭えば、命掛けてでもお前を助ける責任が夫の俺にはあるし……単純な話、自分の女が無事で、喜ばない男がいる筈ないだろ……』

きつかけは確かに最悪ではあつたし、普通の夫婦がお互いに抱くであろう確かな愛情があるとは言いが、仮にもこんな自分の妻に初めてなつてくれた女性なのだ。

短い夫婦関係ではあるが、せめて夫として、離婚するその時まで彼女には幸せであつて欲しいという気持ちは確かにある。

だから彼女が無事である事は素直に嬉しいとその意味を込めて信長に伝えると、信長は面を喰らつたように耳まで顔を赤く染め上げていた。

信長「うつ……あ……な、なんなのだ貴様はツ！人を小馬鹿にする食えん奴かと思えばつ、そんな急にいじらしくなつてツ！こ、これでは、我もどう受け取ればよいか分からんではないかツ！／／／」

デイケイド戦国CP『はっ？いや、どう受け取ればいいかも何も、そのままの意味で捉えればいいだろう？俺は素直に思った事を口にしてるだけだし……』

信長「うつ、うううううう……だつたら尚更悪いわ馬鹿アツ！！／



／＼  
／

ツヴァイW『……零、お前って奴は、なんていうか……相変わらずだな……』

デイケイド戦国CP『……は？な、何がだっ？』

アマツ『おい……まさか、自覚も無しに言ってるのか？こりやまた、とんだ大物だなーオイ……』

ツヴァイW（ライト）『いいかい、二人共？ああいうのを全方位型フラグ建築士というらしい。君達も十分に気を付けるんだ。一般的にああいうのは一度気を許すと何処までも女性の女心を弄ぶ、危険で冷徹な人間だから』

カガミ「は……はい……」

ヒビキ（……）というか、刀夜君にもその片鱗がちよつと見られるよ  
うな気が……）

デイケイド戦国CP『だから一体何の話だツ?!というか其処オツ!!人を悪人かなんかみたく人様に吹き込むなアツ!!』

ツヴァイ（ライト）に失礼窮まりない事を吹き込まれたせいでビクビクと怯えた目で自分を見つめるカガミを見て、内心若干傷付きながらもツツコミを入れるデイケイド。信長も信長で耳元まで赤く染まった顔を両手で隠してデイケイドから顔を逸らしてしまっており、そんな一同の様子を苦笑いと共に楽しんで見ていたツヴァイは両手を叩いて一同の意識を自分に向けさせた。

ツヴァイW『ま、取りあえず続きはこの神樹を焼き払ってからだ。







に受けて天井を突き破りながら神樹の頂上を目指し吹っ飛んでしま  
い、それを追うようにスペリオルフォームも背中の翼を羽ばたかせて  
神樹の頂上に向かって飛び立っていったのだった。





その瞬間、不意に二人の足元から無数の蔓が伸びて二人の両足に絡み付いて動きを封じてしまい、更に荷葉座・邪武者デイケイドの身体からも無数の植物が飛来してツヴァイとアマツに巻き付き、完全に動きが取れなくなってしまったのだった。

一人だけどうにか無事だったデイケイドはそれを見てすぐさま二人を助け出そうと駆け出すが、それを阻むように荷葉座・邪武者デイケイドが素早く巨腕を伸ばしデイケイドを神樹の頂上から吹っ飛ばしてしまう。

デイケイド戦国CP 『しまっ……?!うおおおおおッ?!』

アマツ 『グツ！デイケイドッ！』

ツヴァイW 『まったく、何処までも手間を掛けさせるッ！』

頂上から投げ出され、地上に目掛け落下していくデイケイドを見てアマツが叫ぶ中、ツヴァイは拘束されたまま懐からビートルフォンを取り出して操作を行っていく。すると……

ー ガ シャ ンッ！ ウ

イイイイイイイイイイイイイイイイイインッ……いー

神樹の真下で停止していたツヴァイギャリーのボデイが左右に開き、ギャリーの中に収納されてある一つのユニット……デイケイダーの換装ユニットのウイングガードが独りでに起動して飛び出し、地上に向かって落下して来るデイケイドの下へと飛翔していったのであった。

デイケイド戦国CP 『ッ?!アレは……?!』



落下中のデイケイドも自分の下へ自動操縦で向かって来るウイングガードの姿に気付いて困惑の表情を受かべる中、ウイングガードはデイケイドと並走して背中に回り込み、なんと徐々にその形状を変形させてデイケイドの背中にドッキングしたのだった。

デイケイド戦国CP『なっ……?!コイツ、こんな機能まで備わったのか?!』

自身の背中にドッキングしたウイングガードを目にし驚愕するデイケイドだが、今は驚いてる場合ではないとすぐさま気を取り直してウイングガードのスラスターからバーニアを噴出させ、なんとか態勢を立て直し、自分が落ちてきた神樹の頂上に目掛けて猛スピードで飛翔していった。

—ギリギリギリギリギリギリイイイツ!!!—

アマツ『グアアアアアアアアアツ!!グッ、こい、つつ……!!!』

『次は貴様等だッ……!!!今度は塵も残さず消滅させてやるぞオオツ!!!』

ツヴァイW『チツ……』

そしてその一方、ツヴァイとアマツは未だ神樹の蔓に捕らえられて身動きひとつ取れない状態にあり、荷葉座・邪武者デイケイドはそんな二人にトドメを刺そうと額のポインターに膨大なエネルギーを凝縮させ巨大なエネルギー弾を形成していき、その万事休すの状況にツヴァイも思わず舌打ちしてしまうが、その時……

—ドシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

ウウウウウウウウウー………ツツツツツ  
チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ンツツツツ………!!!|

『ヌウオオツ?!?!?』

アマツ『?!な、何だっ?』

荷葉座・邪武者<sup>2</sup>デイクイドの額のポインターからエネルギー弾が撃ち出されようとした直前、上空から突如無数のミサイルが飛来して荷葉座・邪武者<sup>2</sup>デイクイドの顔面に直撃していったのであった。

荷葉座・邪武者<sup>2</sup>デイクイドも突然襲った爆発と黒煙に顔を覆われもがき苦しみ、アマツもその様を見て驚く中、上空から今度は二つの紅い閃光が降り注いで二人を拘束する蔓を焼き払い、その張本人……ウイングガードを装備したデイクイドは二人の間に降り立った。

アマツ『デイクイド?!』

ツヴァイW『よお、おかえり。どうだった?ウイングガードの新ギミックは』

デイクイド<sup>2</sup>戦国CP『悪趣味にも程があるだろうっ、改造を加えていたらどうしても先に言ってくれなかったんだっ』

ツヴァイW『そりや、そうした方が面白そうだからに決まってんだろう?土壇場でいきなりの変形!なんて感じになればお前が驚くかと思っただが、この目で直接反応を見られなかったのは残念だったなあ』

デイクイド<sup>2</sup>戦国CP『ハア……まあ、おかげで助かったのは確かだ』





アマツ 『真月妃?! そうか、ヒビキの奴が……よし、これならっ!』

『KARAKURI BUSOU! YOROI NO KATA!』

突然現れた真月妃に驚愕しつつも、コレを寄越したのがヒビキの仕業だとすぐに悟って武の札を取り出し、ベルトにスキャンさせる。そして電子音声と共に分解した真月妃と合体してマガツヒフォームへと轉身し、巨大な剣を振るって荷葉座・邪武者デイケイドの天将刀と激突していった。

—ガギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
インツ!!!—

『チイイイツ!!! 何処までも邪魔をする気かアアアツ!!!』

アマツMF 『つたりまえだろがツ!! カガミを利用した代償はキツチリと支払ってもらおうぜツ!!』

デイケイド戦国CP 『こっちも忘れてくれるなツ!!』

『CANCELA! RAIGA! SIRIUSU! KAMENRID  
E: MUSH A!』

アマツがマガツヒフォームのスペックをフルに活用し荷葉座・邪武者デイケイドと渡り合う中、デイケイドが空を駆け巡りながら再びケータツチを操作して武者キャンセラー、武者ライガ、武者シリウスを召喚し、三人の武者ライダーは呼び出されて瞬時に超高速移動を開始して荷葉座・邪武者デイケイドへと素早く切り込んでいった。

超高速移動を用いて、武者キャンセラーが無効化の力を宿した刀を荷葉座・邪武者デイケイドの全身に叩き込んで少しずつ弱体化させて





飛ばしてしまい、更にはデイケイドが召喚した武者ライダー達までもが打ち消されてしまうが、三人はどうか態勢を立て直して合流しエネルギー波に堪えながら荷葉座・邪武者デイケイドに再び視線を向けると、其処には荷葉座・邪武者デイケイドが天将刀を頭上に掲げ、その刃身に信じられない量のエネルギーを収束させていく姿があった。

『最早加減は無しだツツツツツツツツツツこの国土諸とも、貴様等を纏めて葬り去ってくれるわアアツツツ』

!!!!!!!

—ギユイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
!!!!!!!

最早手段は選ばぬと、神樹カラーンからも莫大な量のエネルギーをかき集めて天将刀へと収束させていく荷葉座・邪武者デイケイド。

そのあまりにも巨大な力は神樹だけでなく空をも揺れ動かし、空間を歪めていき、三人はその力の余波を肌で直接感じて全身の鳥肌が総立ちしていくのを感じながら、本能が叫んでいるのを感じていた。

アレを撃たれば、自分達はともかく、この国の全てが焼き尽くされてしまうと。

アマツMF『クツ……!ア、アイツ、正気か?!本気であんなのを撃つつもりかよっ?!』

ツヴァイW『寧ろ、良く今まで撃たなかったなと疑問だったがな。神樹を使った天下統一の惨状を見ても、アイツにとっちゃこの世界の人間や国がどうなろうが知ったこっちゃないのは一目瞭然だったし』

ツヴァイW(ライト)『最初からアレを使っておけば、一気に勝負も





ツヴァイW『……?!』

アマツMF『な……なんだ、急に……?』

デイケイド戦国CP『邪武者の胸に……風穴が……?』

そう、真紅に光輝く天将刀を振り下ろそうとした瞬間、突然荷葉座・邪武者デイケイドの胸に前触れもなく巨大な穴が開き、其処から無数の赤い粒子が勢いよく噴き出したのである。

まるで鮮血のように胸から粒子を撒き散らす荷葉座・邪武者デイケイドのその姿を見て、三人もいきなりの事に呆然となり、荷葉座・邪武者デイケイドも自身の身に起きたアクシデントに驚愕を隠せずにしたのだった。

◇◇◇

―神樹カーラーン内部―

―ガギイイイイツ―

信長「ぐううっ!!」

ヒビキ「の、信長さん?!」

カガミ「大丈夫ですか?!」

信長「っ……心配するな、少し弾かされただけだからな……それに、ど

うやら傷はちゃんと付けられたようだぞ?」

同じ頃、カーラーン内部。其処には、デイケイド達が頂上に吹き飛ばされて取り残された信長達三人の姿があり、彼女達は今、信長とカガミが捕らえられていた神樹の核が存在する広場にまで戻ってきていた。

そして信長は、何故か片膝を付いて苦悶の顔を浮かべ、その手にはデイケイドとツヴァイに倒された時に邪武者デイケイドが落としたブラッドライドブツカーSモードを握り締めてふらつきながら身を起こし、正面……中央に大きな亀裂が走る神樹の核を見据えながら、ゆっくりと剣を構えた。

信長「やはり一撃程度では、簡単には壊ぬか……だがこいつを壊せば、少なからず零達に戦況が傾く筈……二人共!もう一度だ!頼むぞ!」

ヒビキ「は、はいっ!」

カガミ「智大さん達を助けられるなら、幾らでも手を貸しますっ!」

ブラッドライドブツカーを中段に構える信長の背中に回り込み、それぞれ両手を信長の左右の肩の上へと置き、何かを念じるように瞼を閉じるヒビキとカガミ。

すると、二人の身体から念のようなオーラが浮かび上がり、オーラはゆっくりと信長の身体へ、其処から更にブラッドライドブツカーに流れ込んでいき、剣の刃が極光を身に纏って眩い光を放っていく。

信長「よし……十分に離れておれよ?今度、こそっ!」

ダアンツ！と、力強く足の裏で地面を蹴り付けて勢いよく飛び出し、核に目掛けブラッドライドブツカーを振りかざし、そして……

信長 「破あ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ  
あああああああああ————————————————————  
ぜえあああツ!!!」

——バ  
リイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイインツツツツツ——  
!!!!!!——

気合一刀。上段から振り下ろされた光の刃は真つすぐと神樹の核に打ち込まれ、無数の結晶を撒き散らして粉々に砕け散っていったのだった。



——神樹カーラーン頂上——

——バ  
シユウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ——  
!!!!!!——  
ツツツツツツ

『ウ……ウウグアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアア——————————  
!!!!!!?』  
『な、何だツツツ——  
!!!!!!?』  
『!!!!!!?』  
!!!!!!?』

そして場所は戻り、荷葉座・邪武者テイケイドの胸に開いた風穴が更に大きく開かれ、荷葉座・邪武者テイケイドは胸の風穴から真紅の

粒子を噴き散らしながら悲痛な悲鳴を上げて苦しみ続けていた。

アマツMF 『な、何なんだ？何が起きてんだよ、アレ？』

ツヴァイW（ライト）『……あれは……まさか、神樹の力が暴走しているのか……？』

ツヴァイW 『？何か分かるのか、ライト？』

ツヴァイW（ライト）『あくまで推論だけだね。だが、現に今の彼は今まで使い熟していたハズの神樹の力を御し切れず、苦しんでいる。理由は今一つ分からないが、一つ確かなのは——』

デイケイド戦国CP 『ああ、大体分かった……要するに今が、千載一遇のチャンスって事だろうッ!!』

何故かは知らないが、今の邪武者は神樹の力を完全に発揮出来なくなつて暴走を引き起こし、先の一撃が放てない状態にある。

つまり今以上の好機はないのだと直ぐに悟り、デイケイドは戦国ブレードを投げ捨てて左腰のライドブッカーから一枚のカードを取り出して右腰のドライバーに装填し、アマツも同じくカード状の札を取り出してベルトにスキヤン、ツヴァイはバックルのウイザードメモリの翼を一度閉じ、再び左右に開くように展開していった。

『FINALATTACKRIDE・DE・DE・DE・DE・DECADE  
!』

『SAISHUU OUGI!』

『WIZARD! MAXIMUM DRIVE!』

『『ハアアッ!!!』』



ムが耳の鼓膜を裂くような轟音と衝撃波を発生させながら激突し、三人の右足と荷葉座・邪武者アイケイドの刀の間からまばゆい閃光と青色のスパークが巻き起こったのであった。

——バチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

イイイイイイイイイイイイイイイイ

!!!!!!

!!!!!!

アマツ『グツ！コイツつ、暴走してるのにまだこんな力がつ?!』

『言った筈だアツ!!!』『我等の夢』はこの程度では終わらせんとツ!!! 貴様ら如きにつ……貴様ら如きになどオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツ!!!』

ツヴァイW『……てめえが一体、何に対して其処までの執念を抱いているのかは知らねえ……だがなあツ!』

『FINAL ATTACK RIDER: MU・MU・MU・MUSHA RIDER!』

ツヴァイの言葉に続くように、アイケイドが天将刀にキックを打ち込んだまま更にカードを取り出して右腰のドライバーにセットする。そして次の瞬間、アイケイドの周囲に十五の残像達……三人と同じく跳び蹴りの態勢を取る武者ライダー達の残像が次々と出現し、荷葉座・邪武者アイケイドの天将刀を徐々に押し返していく。

『!!!?』  
『!!!?』

アイケイド戦国CP『——お前に譲れない何かがあるように……こつちにも退けない理由があるんだよオツ!!!』





天将刀を目の前で折られ、信じられないと驚愕し動揺する荷葉座・邪武者デイケイドの巨体をデイケイド、アマツ、ツヴアイ、そして十五の武者ライダーの残像達のライダーキックが続け様に貫いていき、荷葉座・邪武者デイケイドは悲痛な悲鳴と共に巨大な大爆発を起こし、全身が激しい炎に包まれて炎上していったのだった。

— ボオ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!  
|

『ガツ……………ウアツ……………く、朽ちるっ……………神樹がっ……………我等の夢』がっ……………シャドウ様、たちのっ———』

—……………ふふっ、流石は我等の武者ライダーだな。忠義、大儀であった……………

『ア———……………違う……………『あの方』の……………『皆』の……………ゆ、め……………が……………』

デイケイド戦国CP『……………?あの方……………?』

全身が業火に焼かれながら、謔言のように何かを呟き虚空に手を伸ばしていく邪武者デイケイドの声が微かに聞こえて、デイケイドが思



まっつて業火に焼かれていく邪武者デイケイドをジツと見つめていた。

ツヴァイW 『……………？零？何やってる！急げ！』

デイケイド戦国CP 『……………ああ』

三人が吹き飛ばされた際に突き破った穴から飛び降りようとした直前のツヴァイに呼び掛けられ、デイケイドは短く答えながら最後にもう一度邪武者デイケイドを一瞥してツヴァイの下に駆け出し、そのまま穴から飛び降りて元の場所にまで戻っていった。其処へ…………

信長「零！」

ヒビキ「皆さん！無事ですか?!」

同じタイミングで神樹の核を破壊した信長達もその場に駆け付け、三人の下へと駆け寄ってきた。

ツヴァイW 『何とかな……………お前達も無事だったか?』

カガミ「はいっ。だけど、この揺れと遠くから聞こえてくる爆発音は一体……………?」

アマツ『詳しい話は後だ！とにかく今はこっから脱出するぞ！』

そう言いながら、アマツとツヴァイは先程の戦闘でも使用した真月妃とマシンを呼び寄せてヒビキとカガミを乗せていく。そしてデイケイドも信長を抱えようと手を広げる、のだが…………

デイケイド戦国CP 『……………おい……………おい信長……………』

信長「な、なんだ……?」

デイケイド戦国CP『なんだじゃないだろッ! 何で俺が近づく度に離れるんだッ! さっさとこっち来て掴まれッ! なに恥ずかしかつてるんだッ?!』

信長「は、恥ずかしかつてなどおらんわッ! だ、ただ、あの、だからっ、ど、どどど何処に掴まればいいのか分からなくて……!」

デイケイド戦国CP『普通に首にでもしがみつけばいいだろうがッ! とにかく急げッ! 時間ないんだぞッ!』

信長「あ、うう……デアルカ……じゃ、じゃあ……」

ツヴァイW『気を付けろよ! 信長ちゃん? 零の奴は別名歩く生殖器とも呼ばれてるから、触れただけでも妊娠しちゃうぞー?』

信長「にんツ……!!?」

デイケイド戦国CP『こんな状況でタチの悪いジョークかますなッ!! あとお前も真に受けて離れようとするなァッ!!』

お前らは揃いも揃って俺をなんだと思ってたんだと心外に思いつつ、とにかく何故か自分に近づく事にわたわたしてる信長を半ば強引に抱き抱え、三人は崩壊していく神樹カーラーンからの脱出を開始していくのであった。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー　デイケ  
イド&ツヴァイ　NOVEL大戦Evoile⑧

—尾張国境・荒野—

—ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ—  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——  
オオオンツツ……ドツガアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアア——  
アアアンツツツツ——  
!!!!—

家康「……ツ?! 神樹が！」

アルゴゾディアートがカンパネルラとノールと共に撤退し、残る  
は有象無象に湧き出る怪人の大群を撃退し続けていたライダー達と  
連合軍。その最中、遠方にそびえ立つ神樹カーランが樹の全体から  
無数の爆発を起こしながら崩れ落ち、崩壊していくのが皆の視界の端  
に見え振り返っていく。そして……

『ツ!!ウツ……アガ……ウウアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアア——  
アアアアアアアアアアアアアアアアアア——  
!!!!?』

—シユウウウウウツ……—

ライダー達と連合軍が食い止めていた怪人達が一斉に突如苦しみ  
出し、まるで樹と共に消え去るかのように露となって消滅していっ  
たのだった。

トランス『！怪人達が……消えていく？』

……』  
『ダイエンド』どうやら、零と智大達が上手くやってくれたようだね

その光景を前にトランス達も肩で息をしながら愕然とした様子で佇み、同じく怪人と戦っていたダイエンドはその原因が零達によって邪武者ダイケイドが倒されたのだと直ぐに悟り、一息吐きながら爆発と共に崩壊していく神樹カラーンに目を向けると、神樹の方角からこちらに飛来してくる三つの影……信長達を抱えたダイケイド、ツヴァイ、アマツの姿があった。

聖桜『ツ！零、早瀬さん……！』

蘭丸「姫様っ!!」

長秀「姫様……！ご無事で……！」

信長「蘭丸……長秀、勝家……心配を掛けたな」

ゆっくりと、上空から地上に下り立つダイケイド達の下に駆け寄ってくる仲間達と連合軍。ダイケイドの腕から降りた信長も、よほど心配していたのか各々涙を浮かべる家臣達に柔らかい笑みを向けていくと、その後ろから秀吉と共に静かに歩み寄って来る光秀と幸村、そして家康の顔に気付き驚きを浮かべた。

信長「明智に真田……それに家康、お前まで……？」

家康「……ふん、別に貴様を助けた訳ではない。余はただ、貴様に請けた借りを返しただけに過ぎぬわ」

秀吉「……ハア……貴女も素直じゃないわね……いい加減、自分の気持ちに正直になつたらどうなの？」

幸村「あんま無茶言つてやんなよ、豊臣の大将さん。徳川の大將は東海一の石頭とも呼ばれてんだから、そう簡単に自分の本音開かすほど人間出来ちやいねーだろうさ」

光秀「まー、石頭というか、単なる典型的なツンデレにしか見えなくてこつちが恥ずかしくなるツスけどねー。その辺ちやんと自覚があるんスカね、この人？」

家康「ぴーちくぱーちく五月蠅いわ塵芥共ツ!!喧嘩売つとるのか貴様らツ!!」

やれやれと呆れる秀吉達に憤慨して食つてかかる家康。そんな彼女達の様子に目を見張つて驚いていた信長も、徐々に穏やかな笑みを浮かべていく。

邪武者デイケイドと神樹という、この戦国世界を脅かす共通の敵の存在があつたおかげとはいえ、本来なら戦国バトルロワイヤルで鎬を削る敵同士である武將達が集まり、談笑している。

恐らくその光景に、自分が夢見る天下統一の未来の姿を垣間見ているのかもしれないと、デイケイドはそう考えながら少し離れた場所からジツと信長の後ろ姿を見つめていた。

デイケイド戦国CP（まあ、武者ライダー達も神樹もなくなった以上、必然的に戦国バトルロワイヤルもなくなった訳だしな。……其処から先、アイツ等がどうするかは――）

武者ライダーがいなくなっても天下取りの戦を続けるか、或いはそ

れ以外の道を模索するのか……。それは当人達が決める事だが、願わくば消えていった彼等の意志を汲んだ選択がされることを切に願いたいと思うデイケイド。と、その時……

——……シユウウウウウツ……—

デイケイド戦国CP『……！ケータツチが……？』

突然デイケイドのバツクルにセットされたケータツチから、前触れもなく無数の粒子が立ち上り始めたのである。恐らく、邪武者デイケイドに取り込まれた武者ライダー達が消えた影響でその役目を終えたのだらう。デイライトのケータツチはそのまま完全に粒子と化して消滅し、それに伴って零も変身が解除された。

零（……すまん……だが、有り難う……お前達の力で、俺もコイツ等も、助けられた……）

直接言葉には出さず、瞼を臥せて胸の内では消えた武者ライダー達に礼の言葉を口にする。が、怪我と疲労も相まってそのままふらつき膝から崩れ落ちそうになるが、同じく既に変身を解除してたなのはが咄嗟に抱き留めた。

なのは「ちよつとつ！もおつ、またこんな傷だらけになって……！また無茶な真似したんでしょっ?!」

零「つ……仕方ないだろつ……人命に関わる事だったし……ああしなきや、信長も智大の知り合いも助けられんかった訳だし……」

魚見「言い訳は聞きませんよ。……だから貴方が女性絡みの事件に関わると、ロクな事にならないんです」



零「あ？別にいいだろ……どうせロクな目に合わんのは俺なんだし……」

なのは「だからだよッ！」

魚見「だからでしょう」

零「……なんで其処で嫌に息が合うんだよ……というか——」

妙に息ピツタリにハモリながら怒鳴る二人から視線を逸らしながらなのはから離れると、零は先程から気になっていた、魚見の前に仰向けに倒れる人物に目を向けた。それは……

姫「うううう……きもちワルーイっ……うっぷうっ……」

魚見が翳すヒーリングウイザードリングの治療を受けながら、額にタオルを乗せてグツタリ仰向けに倒れる人物……グロッキー状態の姫に目を向け、怪訝な表情で二人に視線を戻した。

零「……何があつたんだ、コイツ……」

なのは「あ、えーつと……なんていうかあ……」

魚見「あまり気にしないであげてください。ただ冥王の毒に当てられただけなので」

零「……毒……？」

言葉の意味が分からず小首を傾げる零だが、二人からすればあのメイオウロクシードによる暴走はあまり思い出したい記憶ではない

ので詳細は伝えず、なのはは苦笑いを、魚見は無言のまま姫の治療を続けていくと、そんな零の背後から、変身を解いた智大がライトと共に歩み寄ってきた。

零「智大、ライト……」

智大「よっ。お互い、どうにか無事に人質助けて生き延びれたな」

零「……そうだな。まあ、脱出直前にいらん煽りさえなきや、もつとスムーズに脱出出来たんだが」

智大「固いこと言うな言うな、思いの他スリルあつて良かっただろ？」

零「全然良くないッ！」

またカガミには怯えた目で見られるわ、信長は余計に自分に寄り付かなくなつて脱出に手こずるわで散々な目にあつたと文句を言う零。それに対して智大も飄々とした笑みで受け流すが、不意にその表情が真剣味を帯びた顔に切り替わつた。

智大「けどまあ、何もかも平穩無事に終わったとは言い難いよな。今回の事件も一先ず片付きはしたが……大輝の話じゃ、財団の幹部連中は取り逃がしちまつたようだし」

零「……確かに、黒幕をふん捕まえられなかったのは痛いな……だが連中、今回は一体何が狙いで仕込んだんだ？」

ライト「……幹部達と直接対峙した彼等の証言から察するに、恐らく、邪武者と神樹のデータを集めて何者か……財団に協力を依頼したクライアントに渡す事が彼等の目的だったのだろうね。退く際、カン

パネルラがそんな発言をしてたようだし」

零「クライアント、な……黒幕は一人だけじゃないってわけか……財団だけでも厄介なものを……」

智大「ま、その辺も戻ってから調査を続けるつもりだから安心しろ。俺達もこれ以上、連中の好きにさせるつもりはねえさ」

零「そうしてもらえらるなら助かる……何か分かった時は、俺にも知らせてくれ。その時は手を貸す。今回、連中にはまた借りが出来たかな」

智大「ああ、武者ライダーや信長ちゃん……いや……邪武者の件も含めて、か？」

零「……！」

智大にそう指摘され、零は僅かに息を拒み智大の顔を見た。どうして分かる？と、そんな表情を浮かべて。

智大「神樹から脱出する際、お前、妙に神妙な様子で邪武者を見てからな。何となく察しは付いてたさ……何か感じ入る物があったのか？ 奴に」

零「……さあな。ただ最期の瞬間、奴の――」

―ドシャアアアツ!!!―

『……ッ!!!?』

零が智大の質問に対し言葉を紡ごうとした、その時であった。零と智大達の背後に突如凄まじい音が響き、零と智大達、お互いの無事を喜び合っていた信長達もその音がした方へと一斉に振り返ると、其処には……

邪武者デイケイド『……………ツ……………うつ……………』

智大「！お前は……………！」

秀吉「邪武者デイケイドつ……………!!」

そう、音の正体とは、崩壊した神樹カーラーンと運命を共にして消滅したと思われた今回の事件の元凶……………零と智大と刀夜達に敗れ、上半身のみとなり、今にも消滅寸前となっている邪武者デイケイドが落下した音だったのだ。それを見た零達もまさか邪武者デイケイドが生きてたとは思わず驚愕する中、連合軍が零達の前に出てそれぞれの腰から刀を抜き取った。

幸村「コイツつ、まだしぶとく生きてやがったのかつ……………！」

家康「ならば今度こそ、我等の手で引導を渡して息の根を止められるわっ!!」

「おおっ!!!」

「殺された連中の仇だっ!!!」

「頸を跳ね飛ばしてやれえっ!!!」

クロノス「え、ちよつと……」

零「おいつ、おい待てっ！ソイツは——！」

仲間達と武者ライダー達の仇である邪武者デイケイドに自ら引導を与えんとし、次々と刀を抜き取っていく連合軍。そんな頭に血を上らせる彼等の姿を見て、零が連合軍の兵達を引き止めようとした。その時……

『——止めろ』

『……!!?』

ピシヤリツと、不意に突然、緊迫した空気になりつつあったその場に冷たい声が響き渡ったのだった。まるで、仲間達の仇の為に熱くなる彼等の頭を冷やす冷や水のように放たれたその一言を聞き、連合軍も思わず背筋が凍り付くような感覚に襲われて恐怖し、その声が放たれた方へ振り返っていく。其処には……

アマテラス『……………』

刀夜「…………お前…………？」

カガミ「き、霧之、さん？」

其処には、未だに変身した姿のまま、連合軍の兵達の後ろに空手で静かに佇むアマテラスの姿があったのだ。しかしその雰囲気は先程までトランス達と共に戦っていた時とは違い、何処か研ぎ澄まされた刃のような冷たさ、そして見た者を圧倒するようなとてつもない威圧感が放たれており、彼女と顔見知りである刀夜達も身に纏う雰囲気が一変してているアマテラスを見て目を見張る中、アマテラスが無言のまま変身を解いて霧之の姿に戻ると、彼女の顔を見た信長達の間にざわめきが広がった。

家康「き、貴様は?!」

幸村「え、ちよ、ま、まじッスか?!アンタ…………!」

秀吉「——伊達…………?伊達政宗公?!貴女なの?!」

ヒビキ「え?……………ええええええええええええええええッ?!?!」

なのは「だ、伊達政宗って、確か…………!」

零「武者デイクイド軍の、武将だったって言う…………?」

霧之「……………」

霧之の顔を見て、秀吉の口から飛び出た予想外の名前。それは、嘗

て謎の襲撃によって壊滅したという武者、デイケイド軍の武将であり、武者、デイケイドの主君であった者の名……伊達政宗であると、霧之の顔を見てそう言い放たれ、それを聞いた零達も驚愕を露わに霧之を見た。

信長「伊達……貴様、生きて……」

霧之「……………」

半年前の武者、デイケイド軍の壊滅から消息不明で、今の今まで死んでいたのだと思われた伊達政宗の生存に信長も愕然とした顔で霧之を見つめるが、霧之は周りの好奇の視線に目もくれず兵達を押し退けながら進み、瀕死の邪武者、デイケイドの前に立ち、視線を合わすように腰を屈めた。

邪武者、デイケイド『……………ッ!!? あ……………ひ……………姫、さま……………?』

そして、邪武者、デイケイドも漸く霧之の顔を見て彼女の正体に気が付いたのか、驚きのあまり息を拒んでいる。その様子から、霧之が本当に伊達政宗であるのだと一同が認識させられる中、霧之は無言のまま邪武者、デイケイドの手を静かに手に取った。

霧之「……………すまん……………すまぬ、我が武者よ……………私が……………私がつと早く、この力を手に入れてさえいれば……………お主に、こんな真似をさせずに済んだのに……………」

ポツポツと、静かにそう語り始めた霧之の口調は先程までと違い、一個の武将としてのモノだった。

邪武者、デイケイド『ひめ、さま……………』

霧之「……いいや、違うな……そもそも私自身に力が足りなかったから……皆を失い、お主を邪武者になど墮として……お主達を置き去りにして、ただ逃げる事しか叶わず……お主に向ける顔がなかったとは言え、今更、のこのこ顔を出した私を……赦してくれ……」

詫びるように、前髪で顔を隠して邪武者デイケイドに謝罪する霧之。だがそんな彼女に対して、邪武者デイケイドは首を振り、霧之の手を力無く握り返した。

邪武者デイケイド『いいえ……いいえ……赦しを乞わねばならぬのは、私の方です……外道に身を墮とし、貴女だけと心に決めていた……ただ一人の主君の事さえ忘れ……あまつさえ……貴女と、殺された皆と共に追い求めた『夢』を汚した、この不忠義者を……どうか、お許し下さい……』

霧之「違う……違う！お主は決して不忠義者などではないっ！あの夜、お主や皆が身を呈して守ってくれたから今の私があるっ！お主や皆には感謝しても足らぬのだっ！なのになのに私はお主達に、何も——！」

ライト「……そうか、そういう事か……漸く分かったよ。最後の最後の瞬間まで、邪武者デイケイドが自らこの世界に手を下せなかったワケが」

零「……どういう事だ？」

顎に手を添えながら何かを推理するライトにそう問い掛けると、ライトは親指を立ててこう説明した。

ライト「少しばかり憶測も混じってはいるが、恐らく財団は、武者



デイケイドの伊達政宗への忠義心をそのままに利用したんだと思うよ。多分、邪武者としての力を与えたと共に、高度な記憶の改竄も行ったんだ。そして彼の記憶の中の伊達政宗を何者か……この場合、シヤドウか例のクライアントに置き換える事で、それ以外の記憶はそのままに武者デイケイドは、本来伊達政宗に向けるべきであるハズの忠義心をその人物に向けて動いていた……」

智大「分かりやすく言えば邪武者デイケイド……いや、武者デイケイドは記憶を改竄された後に自身の主君を伊達政宗からシヤドウ達にすり替えられてたつて事か。だから、伊達政宗の夢だった天下統一の為に戦うのに疑問も抱かなかつた……だが、もしかするとその辺りの境界線はアイツ自身も分かっていなかったのかもしれない。シヤドウ達の企みの為に神樹の力を使っても、伊達政宗達が愛したこの世界を自分の手で壊す事は出来なかつた、とかな。……何にせよ、色々な意味で不完全だった訳だ」

ライト「だが、その不完全のおかげで救われた部分もあるのは事実さ。そうじゃなきゃ邪武者はもつと早い段階、神樹の力を手に入れた時点でこの国土を焼き尽くしてた可能性もある……最も、財団の目的はデータ収集のようだったし、今回の件が成功しようが失敗しようがどうでもいいんだろうけどね」

零「……………」

つまり、邪武者デイケイドの政宗への忠義心を利用して神樹を手に入れ、それでも天下統一を果たせずとも財団には何の痛手もないという事。

そんな財団の非道を聞かされて零もなのは達も怒りで険しい表情を浮かべる中、邪武者デイケイドは霧之の顔を見上げ……

邪武者、デイケイド『姫さま……………もし……………もし一つだけ、こんな汚れ切った私の望みを聞き入れて頂けるのなら……………一つだけ……………口にしてもよろしいですか……………?』

霧之「っ……………?望み……………?」

邪武者、デイケイド『はい……………』

そう言つて頷くと、邪武者、デイケイドは握り締めてた霧之の手を放し、ゆつくりと霧之の頬に、粒子となつて消え掛けている手を伸ばす。

邪武者、デイケイド『どうか……………御身を責めず、幸せになつて下さい……………私は、貴女の武者ライダーとして、共に戦場を駆け抜けた日々……………一片の、悔いもない……………ただ一つの心残りであった、貴女の健やかなお姿を見られた……………それだけで……………もう、思い残す事はない……………』

霧之「……………デイケイド……………」

邪武者、デイケイド『……………犯した大罪は、外道の私自ら、地獄に堕ちて償います……………例えその先に、永久に終わらぬ地獄廻りが待ち受けてようとも……………』

——バリーイイイインツ——

霧之「!デイケイドッ!」

霧之の頬に触れていた邪武者、デイケイドの手が、硝子のように砕け散つた。それと共に、グラリと倒れそうになる邪武者、デイケイドの体を慌てて抱き留めようとするが……………

邪武者デイケイド』——貴女の未来に、幸ある限り……  
それだけ……で……わたし、は……』

——バシユウウンツ……—

霧之「ツ!!あ………」

霧之の両手が、邪武者デイケイドを抱き留める前に、邪武者デイケイドは霞みとなって呆気なく消え去ったのであった……。

財団に利用するだけ利用され、何よりも大切な主君達と共に追い求めた『夢』を自らの手で汚し、最期には世界の敵として消えた。

そんな望まぬ最期を遂げさせられた自身の武者ライダーの死の前に、霧之は何も掴めなかった両手を見下ろし、ただ悔しげに拳を握り締めていく。

信長「……伊達……貴様は……」

霧之「——違う」

そんな彼女の背中に向けて、信長が何かを告げようとするのを遮るかのように口を開き、霧之は静かに立ち上がった。

霧之「戦国世界の伊達政宗は、あの夜に死んだ。……武者デイケイドと、皆と共に……」

信長「……………。ならば、貴様は何者だ？」

その言葉から何か強い意志を感じ取ったのか、信長は敢えてそう問  
い掛け、霧之はアマテラスドライバーを手に握り締めて静かに振り返  
る。

霧之「霧之……草薙霧之。それ以上でも、それ以下でもないわ」

まるで、この世界と完全に決別するかのようになり、嘗て鎧を削り合っ  
た武将達を見据えてそう言い放ったのであった。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolve ⑨

——そしてその後、神樹カラーラインの消滅によって戦国世界と全ての平行世界への天下統一という名の侵略は収まり、神樹の触手に取り込まれた人々も死人が出ることもなく解放されたらしい。

他の平行世界も似たような状況らしく、被害も思ったほど広がらずに済んだようだったが、それでも神樹の発生源であった戦国世界の各国は壊滅的な打撃を受け、武者ライダー達と神樹の消滅もあって戦国バトルロワイヤルのこれ以上の続行は不可、不毛であると断定された。

今後一体どうするべきか、それについて一度腰を据え話し合う必要があると考え、連合軍は一先ず一時休戦、各国を治める他の武将達にも休戦協定を持ち掛ける方針を決め、それまでの間は神樹の被害に遭った民達の救護と壊された町の修繕に力を入れる事を決めた。

そんな中……



—城下町・公園—

零「——何故に俺だけ絶対安静で留守番なんだよ……」

事件から翌日が経ち、仲間と共に信長等の国に戻ってきた零は包帯

だらけの格好で以前信長と子供達が花火をして遊んでた公園の滑り台に腰を下ろし、不満げに頬杖を突きながら溜め息を吐き、首に掛けたカメラで修繕が進む町の光景を撮影する姿があった。

零「もうこの程度なんでもないっていうのに、過保護にも程があるだろアイツ等……」

袖をめくり包帯が巻かれた腕を眺めてそう呟き、そのままふと遠くを見つめると、此処から見える町の一角にある巨大な瓦礫を纏めてツヴァイギヤリーで何処かへと引っ張っていく光景が目に入り、それを見て更に溜息してしまう零。

因みに何故彼がこんな場所にいるのかと言うと、先の神樹カーラーン事変の際に邪武者ディケイドとの戦いでまた無茶をやったことをなのは達に咎められ、安静にして休んでろと言ひ渡されたのである。

だが今はもう動き回っても特に痛みを感じぬし、大人しくしているのは性に合わないから、町の修繕や瓦礫の処理を手伝うと信長達に申し出たというなのは達に付いていこうとしたのだが……

『良いから大人しくしてるっ！』

『無茶した後の君の”大丈夫”は絶対信じないようにすると決めているんだっ！』

『そもそもこれだけの人数が揃っているんですから、貴方がいなくても問題はありませんし』

『というか必要ない』

『つてか頼むからジツとしててくれ、作業中に倒れられても迷惑だから』

『邪魔』

……若干凹んで泣きそうになったのは秘密だ。

しかも治ったら治ったで、『信長さんとの結婚の話はその時に改めて問いたせて頂きます』などと笑顔で言われるものだから、気分はもう処刑執行を持つ罪人のソレである。

まあそんなこんなで智大達が町の人達の手助けをしている間、零は信長の屋敷で言われた通りに今まで安静にして休んでいた訳なのだが、屋敷の中でも町の修繕や被害報告などでバタバタと走り回る声や足音が絶え間なく聞こえてくるため、とてもじゃないがああ屋敷でも気にせず安静に休むなど到底無理だった。

なのでこっそり屋敷を抜け出し、町の様子を一通り見てからこの公園にまで足を運んだ訳だが……

零「やる事が何もないな……これだったら、アイツ等に無理言っても何か作業をさせてもらった方がまだマシだったか……」

信長「——成る程。そうやっていつもあの娘達を困らせている訳か。貴様も罪な男だな」

零「怪我が治ってる後まで心配する必要ないだろう？別に今から働いたところで死ぬ訳じゃ、な——うおおおおおおおッ!!!?」

と、其処で零は漸く自身が誰かと話をしている事に気付いて驚愕

し、勢いよく飛び退き自分が今まで座っていた滑り台の横を見てみれば、其処には何故か秀吉や家康などの大名達が集まる城の評定に出席している筈の信長が、町娘の格好で頬を膨らませながら佇む姿があった。

信長「なんだその反応は？まるで人をもののけみたいにな、失敬な奴だな」

零「前触れもなくいきなり現れば驚くに決まってるだろうがッ！こっちは右目に包帯を巻いてる上に気を抜いてたんだぞッ?!死角から声掛けんなッ！」

ビシイッ！と、頭から右目に掛けて巻かれた白い包帯を指差し、バクバクと早鐘を打つ心臓を押さえながらまくし立てるように文句を叫ぶ零。だが……

信長「ああ……そうだったのか……すまなかった……我もまだ、貴様の怪我の具合を知らなかったものでな……」

零「……は……？」

「気を抜いてた貴様が悪い」などの皮肉や意趣返しという言葉などが返ってくるかと思いきや、髪を掻き分ける彼女から返ってきたのは、妙にしおらしい謝罪の言葉だった。そんな反応に対し零も流石に予想外で目を白黒させ、信長はそんな零の様子に気づかず、彼が座っていた滑り台に無言のまま腰を下ろすが、零の様子を見て訝しげに眉を寄せた。

信長「どうした？そんな珍妙な顔をして、腹でも下したか？」

零「……いや、別になんでも……」



また直ぐにいつもの態度に戻った信長にそう言われ、ただの気のせいか？と小首を傾げながら、取りあえず信長のすぐ隣のもう片方の滑り台の台に腰掛ける零。

零「……というか、こんな所で何やってんだお前？確か暫くは秀吉達と城での話し合いで屋敷にも顔を見せられなかったんじゃないか？たか……？」

信長「ん？ああ……今日の評定は確認と顔見せぐらいだったから、早く終わってな。まあ、また何かあれば向こうから知らせが来て呼びに来るだろうし、屋敷に戻っても仕事が待っているだろうから、今の内に息抜きをな」

零「……流石にお忙しいな……大丈夫なのか？あの事変からすぐに連日で働き詰めで、身体が持つか？」

信長「ふ、なんだ？らしくもない心配をしてくれるのか？」

零「……別に……ただこつちがあれだけ苦労して助けたつてのに、過労なんかでぶっ倒れられておっ死されたらやり切れんからな」

信長「……相変わらず意地の悪い物言いだな。神樹の中で助けに来た時はあんなに優しくかったというのに」

両手で抱いた膝に口元を埋め、不満げに「むう……」と唸りながら零を睨む信長。しかし零も其処を突かれると都合が悪いのか口を閉ざしてそっぽを向いてしまい、信長はそんな零の横顔を見て軽く溜め息を吐くと、懐から紙包みを取り出し、紙包みを開いて様々な色が綺麗に付いた粒状の菓子を露わにさせた。

零「……………？何だ、それ？」

信長「私の好物の金平糖だ。此処へ来る前に我が鼻屑にしている店に寄ってな。幸運にも彼処は無事だったから、一つ買って来た」

零「ほう……………随分洒落た物を好むんだな……………」

信長「……………む。何だ、何か可笑しいか？」

零「いいや。俺もそういう菓子は結構好む方だが、俺がいた世界や今まで巡った世界でも、其処まで綺麗な金平糖はあまり見た事ないんでな。物珍しく思ってる所だ」

信長「……………なら……………食べる、か？」

零「ん……………じゃ、何粒か」

おずおずと問い掛ける信長にそう言って手の平を差し出すと、その上に金平糖を何粒か乗せてもらい、一粒摘んで口に運んだ途端、目を僅かに見開いた。

零「美味しいな……………」

信長「ふふん、だろう？私も初めて食した時は一発で惚れ込んでしまったてな……………だから、お主達や武者ライダー達のお陰で、またこの味を噛み締める事が出来て、嬉しく思っておる」

零「……………そう、か」

ポツリとそう呟いた信長にそう短く返し、再び金平糖を口の中へと放り込んで舌の上で転がすと、ほんのりとした甘みが口の中に広がっ

ていくのを感じながら、晴れ晴れとした青空を無言のまま見上げていく。

零「……………」

信長「……………」

閑寂。互いに目を合わせず無言となる二人の間に響くのは、遠くから聞こえて来る修繕作業や人々の声と、二人が口にする金平糖を口の中に転がす音だけ。そうして暫く時間ばかりが過ぎてゆく中……

零「……………なあ」

信長「あの……………」

零& a m p ; 信長『……………え?』

二人ほぼ同じタイミングに声を発して重なり、思わず顔を見合わせる二人。

零「……………そつちから話していいぞ」

信長「い、いや、我は別に……………貴様から話せ……………我もまだ、心の準備が足りていなくてだな……………」

零「?……………そうか」

物憂い様子で髪を弄る信長に少し疑問を抱きはするも、こちらも彼

女に聞きたいことがあるのは確かなので、お言葉に甘えて先に質問させてもらおうと、零は手の平の上の最後の一粒を摘み口の中に放り込んだ。

零「——お前、これから一体どうする気なんだ？」

信長「?どう、とは……………」

零「…………武者ライダー達も神樹も、俺達が潰して消えたから戦国バトルロワイヤルもなくなった…………同時にそれは…………お前が目指していた天下統一の夢もなくなった、って意味だろうか？」

信長「……………」

零「ずっと追い求めていた夢を失った…………今の現状が回復した後…………そんなお前は、これから一体どうする気なんだ…………？」

先程と同じ問いを投げ掛けながら、零は脳裏に以前、この公園の影でシャドーと交わした会話を思い出していく。

シャドーはあの時、信長は自分に似ていると言った。

国や民達の事を自分という勘定に入れ、夢の為に自身の幸福や身を削る事も厭わない矛盾した自己犠牲の精神を持った女だと。

だが、その自分自身を犠牲に出来るだけの物を失った時、信長は自ずと自壊していく脆さを持った人間でもあると。

その自身を犠牲にしても追い求めた夢を失った今、彼女はどうするつもりなのか…………。

一抹の不安を胸に隣に座る信長の横顔を見つめると、信長は金平糖を一粒頬張りながら……

信長「さて、どうしたものか……町の再建が片付いた後、同盟国の浅井と私の妹にでも国を任せて風来坊にでもなるかどうか……」

零「茶化すなっ……ん？というかお前、妹なんていたのか？」

信長「ああ、そういえば話してなかったか？まあ今は浅井の下に嫁いでこの国にはいないのだが、我に似てお転婆な娘だ。それ以上に可愛い奴でもあるがな」

零「ほおう……お前に似たお転婆となると、その浅井って男も夫として苦労が絶えんだらうなあ」

信長「どういう意味だつ。あと、長政を勝手に男にするな。彼奴はれっきとした女子だぞ？」

零「………は？いや……長政の下に嫁いだとか……まさか、女同士で……？」

信長「？同性でも、大事な親友同士でならそれくらい普通ではないか？」

零（………この世界の結婚の定義は一体どうなっとなるんだ……）

此処に来てどうでもいい新たな謎が増えて頭を思わず押さえてしまふ零。信長はそんな零を見て不思議そうに小首を傾げつつも、ふとその顔に複雑げな笑みを浮かべ前を向いた。

信長「まあ確かに……武者ライダー達も消え、神樹による被害の爪

痕で我等の国を含むこの世界は、最早戦などしていられる状況ではないだろうな。貴様の言う通り、我の悲願である天下統一を果たすのはほぼ無理と言っている」

零「……と言う割りには、お前もいつも通りに見えるが？」

信長「まさか……正直、これでも落ち込んではいるので……邪武者デイケイドに天下を取られ、天下を支配するほどの力であると言いつたえられていた神樹があんな邪悪なモノだったと知った時には、愕然とした……我等はこんな植物如きの為に戦っていたのかと、自分を見失い掛けた……だが……」

膝に口元を埋め、瞼を伏せながらポツポツと話の続きを紡ぐ。

信長「それ以上に……このままでは、長秀達や秀吉や家康、あの場にいた皆も、我らの国も民も、この世界も、あの樹に全て呑み込まれてしまう。そう思った時には落ち込むよりも先に、皆を守らねばという気持ちから邪武者デイケイドに挑んでた……それに、貴様達や武者ライダー達が我らとこの戦国世界を守ってくれなければ、きつと我は本当に、今まで戦ってきた意味を失って生きる事すら諦めていたと思う……だから、我は感謝している。貴様達にな」

零「……財団を追ってきた智大達はともかく、俺達の方は殆ど成り行きみたいなものだな。それが結果的に、お前達を助けたっただけだ」

信長「例えそうであっても、我等が助けられた事に違いはなからう？……貴様達には確かに感謝しておるのだ。おかげで我も、新しい目的を得られたのだからな」

零「……新しい目的？」

零が訝しげに聞き返すと、信長は「うむ」と頷き返しながら滑り台から腰を上げて立ち上がり、遙か頭上の太陽に向けて掌を伸ばした。

信長「天下統一という夢を果たすことは今や不可能になってしまったが、我が目指すのは、この日ノ本の民達が二度と戦の影に怯えずに済む世を築く事。その出発点として天下統一を目指したのであり、天下統一が到達点という訳ではないのだ。だから我は……戦国バトルロワイヤルとは別の道で、この日ノ本中の民達を平穩の世へと導いてみせる……秀吉や家康達と共にな」

零「戦以外の別の方法で、か……それはいいが、秀吉はともかくとして、家康がそう簡単にお前に協力してくれるのか？アイツ、お前の事やけに目の敵にしてただろう？」

信長「ふふつ、確かに……しかし彼奴も悪い人間ではない。例え今は無理でも、真摯に向き合い、言を重ねていけば、いずれ納得して力を貸してくれるやもしれんしな」

零「そう上手くいくものかね……」

信長「なに、もしもの時は彼奴が飛び付いてきそうな取引を幾つか用意しておるから心配はしとらんさ。家康の扱い方を昔から誰よりも理解しておるのは、我だと自負しているぐらいだしな♪」

零「……………俺の時もそうだったが、お前大概腹の内が真っ黒だよな……………」

信長「それぐらいの強引さが、時には国を引っ張ってゆくのに必要な時もあるからな。……………それとも貴様は、綺麗事を述べる大名の方が好きか？」

零「……いや。少なくとも俺は、そういう駆け引きも出来る奴でない  
いと安心して国を任せられない方だな」

おどけるように肩を竦めてそう言えば、信長は小さく微笑し「そう  
か」と呟き、そんな彼女の顔を見て零も胸の内の不安が消えていくの  
を感じていた。

彼女の選択が正しいのか、間違いなのかはわからないが、それでも  
何かの為に前に進む事を諦めない気概がある限り、彼女はきっと大丈  
夫なのだろうと確信させられる何かを感じる。

それが彼の織田信長だからか、それとも彼女の本質からなのかと考  
えるが……これ以上は蛇足だなと考えるのを止め、同時に先程信長が  
何かを言い掛けてたのを思い出す。

零「そういえば、お前からも何か話があるんだったよな？何だった  
んだ？」

信長「む？………ああ………それ、は………」

思い出したように零がそう問い掛ければ、途端に信長は先程まで饒  
舌に話してた時と打って変わってあからさまに口数が少なくなつて  
いき、そんな信長の様子の変化に零が訝しげな視線を向けると、信長  
は妙に落ち着かない表情でそわそわしながら……

信長「あ………その、な………以前、貴様と城で話した、離婚  
の話………なんだが………」

零「ああ、その話か。離婚届が届いたのか？」



この世界に来たばかりの頃、詐欺紛いというか、まんま詐欺行為で信長と結婚させられた日に彼女と取り交わした条件である離婚の話。その為の用紙が漸く届いたのかと零が聞くと、信長は小さく頷き返した。

信長「昨日の夜に届いてな……………後は、貴様と我が必要な署名をして、届けを出せば離婚は成立する……………らしい……………」

零「で、晴れて俺とお前はバツイチか……………最初の頃はそうなると思った時は鬱々とした気分にはかりなつたが、此処まで来ると不思議とそうでもなくなるものだな……………お前はもう署名したのか？」

信長「いや……………まだ……………」

零「そうか……………まあお前も昨日はそんな事してる余裕もないぐらい忙しかっただろうしな。何なら、今から行つて一緒に署名するか？何処にある？……………信長？」

信長「……………」

顔を覗き込んで声を掛けてみるが、信長は両手を前の方で組んで俯いたまま何も答えない。

……………可笑しい。先程まではあんなに自分達のこれからについて生き生きと話していたのに、何故か離婚の話になった途端あからさまに元気を無くしてしまつてる。

零「信長……………？おい、どうしたんだ？」

信長「……………なあ、零……………その……………一つ、貴様に聞いてもいいか……………？」

零「……………？別に構わんが……………何だ？」

信長「……………あ……………あ、の……………その、な……………」

聞いてもいいかと言いつつも、所在無さげに視線をさ迷わせたり、腹部の下で組んだ両手をジッと見つめたりなどして中々本題に移れないでいる。よほど言いにくい事なのか、時折思案するように物憂いげに瞼を伏せたり、溜息にも似た深呼吸を繰り返し、やがて……………

信長「あの……………も、もし、我——私、が……………結婚をなかつたことにするのを、なかつたことにして欲しいと言ったら……………貴様、どうする……………？」

零「……………？なかつたことにするのを、なかつたことにして欲しいって……………」

それはつまり……………要するに、離婚の話をなかつた事に出来ないか、という……………？

零「いや、何言ってるんだお前っ？邪武者ディケイドを倒して、俺達が元の世界に戻る事になったら婚姻破棄するって約束だった筈だろうっ？」

信長「わ、分かかっておるわ！言われずとも忘れてなどおらん！だから昨日の夜も長秀が持ってきた離婚届けに署名しようとしてっ、の、だが……………出来なく、て……………分からなくて……………長秀に相談したら、その……………だからっ……………だから……………」

零「……………っ？」

徐々に言葉尻が小さくなる信長が何を伝えたいのか分からず余計に訝しげに眉を寄せる零だが、信長は何故分からののだと言うようにそんな零の顔を見上げて不満げに視線を投げ掛けるも途端に顔を紅くし、目尻に涙を浮かべながら地面に目を落として……

信長「離婚、したくないんだ……夫婦のままでもいい……だって——本気で私は、貴様を……好きになってしまったのだから……」

零「……………はい？」

先程よりも数段頬を赤くし、突然愛の告白を口にしたのであった。

零「……………」

信長「……………／／／」

零「……………あー……………つと……………それは……………なんだ……………友達とかそういうのでなく……………男女的な意味、で？」

信長「……………ん……………／／／」

コクツと、面食らう零からの質問に対し控えめに頷き返す信長。その様子はまるで借りてきた猫のようで、彼女が嘘や冗談などの類を口に出しているようには見えない。

零「……………」

……え、なにこの超展開？予想外DEATH。

零「いや……いやいやいやいや……待てっ……は？コイツが、俺を……え？どういう事だ？何故こうなったっ?!何がどうしてこうなったっ?!」

「あまりに予想外過ぎる展開に理解が追いつかず、零も困惑して言葉を失い、内心動揺しまくっている。だがそんな零の心境など露知らず、信長は耳まで顔を真っ赤に染まりながらボソボソと語り出した。

信長「わ、私だって、最初からそんなつもりなんてなかったし、こうなるなんて予想もしてなかった……貴様と婚姻を決めた時から、女としての幸せなど捨て去ると覚悟を決めていたし……なのに……」

自分でも未だに気持ちの整理が付いていないのか、目を泳がせながらも一つ一つ自分の心の内を絞り出すように語り、おずおずと顔を上げた。その顔はこちらが心配してしまいそうなほど真っ赤で、瞳を潤ませ、思わず零もたじろいでしまうほどの女らしい艶っぽさがあった。

信長「全部……全部貴様のせいだっ……こんな気持ち、知る必要などなかったのに……一度知ってしまったせいで、手放したくない、もつと貴様に……なんて、自分でも似合いもしない事を思うようになってっ……全部、貴様のせいだ……」

零「ツ……いや……だが、なんで俺なんだっ？自分で言うのもなんだが、正直、俺を好きになる要素なんて何処にもないだろうっ？」

信長「それは、まあ……確かに貴様は、意地が悪いし、無愛想だし、女心は分かんし、デリカシーもないし、正直貴様よりも中身が整った男なぞその辺を探せば腐るほどいるだろうが」

零「おう、喧嘩売ってんのかお前」

自分の欠点はそれなりに自覚してるつもりだが、此処までボロクソに言われると流石にカチンと来る。顔を引き攣らせてそんな文句を思わず口にしてしまうが、信長は俯いて両手を忙しなく組み直しながら……

信長「だが、な……それでも私は、貴様がいい……どんなに貴様よりも、性格が良くて……頭が良くて……容姿が良くとも……貴様でなければ、意味がないんだ……だから……だから、な？」

躊躇いがちに顔を上げて、上目遣いで零を見つめる。

信長「貴様に……その……す、好きになってももらえるように、私なりに頑張るから……努力する、から……だから……貴様の、嫁のまま……いさせてはもらえない……かつ……？／＼／＼」

零「あ……う、ぐっ……」

恥ずかしさを必死に押し殺し、そんな殺し文句を口をする信長の飾りのない告白に流石の零も勘違いのしようもなくたじろぎ、目を泳がせてしまう。

……正直に言えば、信長の気持ちは物凄く嬉しい。

女心にも疎く、デリカシーも致命的にないとは言え、自分とて男だし、信長のような美女に告白されて喜ばない筈がない。しかし……

零（……いや、駄目だ……俺には、コイツの気持ちに応える資格なんて……）

自分は世界を破壊する存在……悪魔、破壊者だ。

——自分に関わる人達が自分のせいで何人も傷付けてきたし、その中には何かの介入がなければ取り返しの付かない事態になってたものだって沢山あった。だから、自分が傍にいれば、彼女もいずれそうなって傷付けてしまうかもしれない。

それに、結婚なんてものもっと大事な契約だ。

苦楽を共にして一緒に生き、何物に代えてでもその人だけを守り抜くという誓いなのだ。

だが、死が二人を別つまでその人の傍にいられるかと問われれば、今の自分にはもうそれを誓う事すら出来ないし、仮に仲間達が信長かどうかが大事故かと問われれば、自分はすぐに信長を選ぶ事は出来ないと思う。

……そんな不純な気持ちのまま、こんな汚れ切った醜い手で、信長の真摯の気持ちを受け止める事などしていい筈がない。

自分なんかよりももっと、彼女の傍に相応しい人間が、きっと何処かにいるハズなのだ。だから……

零「——信長……お前の気持ちは、正直に言えば、素直に嬉しく思う」

信長「……………」

零「けど、な……俺はお前にそんな気持ちを向けられてもらえるよ  
うな人間ではないし……結婚なんてものは、互いが互いを一番に想え

てから初めて成立するものだとも思う。俺はお前をそういう風には  
想えないし、こんな中途半端な気持ちのままお前の夫で有り続けるだ  
なんて、お前の真つすぐな気持ちをただ侮辱するだけだ……」

信長「……っ……」

零「だから、俺は……お前の気持ちに応え——」

—ダアアンツ!!—

なのは「ちえええええりい おお おお おお おお

!!!!!  
おお おお おお おお おお ————— つつ

零「……は?—ドゴオオオオンツ!!!—ごはあああああ

!!!!!  
あああああああああ—————

—ビュンツ! チュドオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオオオオオオオオオオ—————オ  
オオンツツツ!!!—

信長「ツ!!? な、何だっ? 零っ?!」

零が信長に自身の気持ちをそのままに伝えようとしたその瞬間、公  
園の入口から突如一人の人物……何故か修繕作業を手伝いに行つて  
いる筈の作業服のなのはが高らかにジャンプしながら現れ、ライダー  
も顔負けの跳び蹴りを零の横っ腹に打ち噛まして公園の一角にまで





信長「うあつ……うう……うう……／＼／＼」

つまりあのやり取りも全部見られていたという訳で。信長は恥ずかしさのあまり湯気が立ちそうなほど真っ赤になりながら涙目になって俯いてしまうが、そんな信長の両手を突然なのはが掴んで握り締めた。

なのは「信長さんっ！私、信長さんの勇気に感動したよっ！女を感じたっ！」

信長「……え……？」

姫「ああ、あの朴念仁の塊みたいな彼に彼処まで真っすぐに自分の気持ちを打ち明けるとは……：武将にはあまり良い印象は持っていなかったが、あっぱれだ、別世界の織田信長……！」

なのは「グスツ……私なんてっ、私なんてねっ……？『家族』っていう他の皆より身近な立場のせいであっ、しかも超がいくつあっても足りないくらいありえない鈍感だっ嫌ってほど知ってるから、自分の気持ちを打ち明けても『家族として好き』みたいに受け取られんじやないかって、怖くて怖くて告白も出来なくてっ……！」

魚見「心中お察しします、高町さん……。私もあの人と契約した際にここ十年の記憶の一端を垣間見ましたけれど、アレは確かに酷い。酷すぎる」

零「……あの……さつきから一体何の話して……」

『ちよっと静かにしてて（）していろ（）してて下さい（）!!!』

零「」

会話を割り込もうとしたら一喝されて、無理矢理押し黙されてしま  
う零。そんな朴念仁を尻目に、なのはは信長の手を握ったまま……

なのは「大丈夫、諦めないで信長さんっ！零君は確かに愛想もない  
しふてぶてしいしマイペースで、変な所でマイナス思考だからあんな  
事も言っちゃうけれど、此処からいくらだつて巻き返しも出来るハズ  
だから！一緒に頑張ろっ!!」

信長「は……え……あ……ああっ……?」

と、涙ながらそんな応援をするのはに同意するように姫と魚見も  
領き、信長は状況が未だに飲み込めず困惑したままだったが、何とか  
戸惑いがちに三人に領き返していったのだった。

零「……なあ、早瀬探偵……」

智大「なんだい、色男」

零「俺……何か、間違ったこと言っただろうか……?結婚って、  
もつとこう、互いの真摯な気持ちが大それたと思う訳で……俺なりに正  
論を言っただつもりなんだが……」

智大「ふむ……まあ確かに、お前が言っただ事は正論っちゃあ正論  
だが」

ライト「正論が時に必ずしも正しく機能するとは限らない。今回はそ  
ういうケースだったと、諦めるべきじゃないかい?」

零「……理不尽だ……」



結局茶化するのが目的じゃねーか!!と、H A H A H A H A H Aと爽やかに笑う智大にチラシを突っ返しつて怒鳴る零。その後も智大にしつこく冷やかされるわ、信長と団結したなのは達に説教されるわと散々な目にばかり遭い、最終的には逃走を謀ってなのは達に町中を追いかけて回されると心身共にボロボロになったのであった……。

劇場版小説／仮面ライダー×仮面ライダー デイク  
イド&ツヴァイ NOVEL大戦Evolve ⑩（完）

―アマツの世界・神社―

ヒビキ「カガミー！こっちの葉っぱも掃き終わりましたから、塵取りお願いしまーす！」

カガミ「分かったー！」

その一方。アマツの世界のとある古い神社の境内では二人の巫女……ヒビキとカガミが庭の掃除に勤しむ姿があり、そんな彼女達の姿を尻目に本殿の手間の階段に横になる刀夜と、その脇に腕を組んで立つ大輝の姿があった。

刀夜「ふあああ……あー、カガミが来てくれたおかげか、神社の掃除も楽出来て助かるなあ……」

大輝「とんだ怠け者だな、君は。まるで何処その知り合いでも見ている気分だよ」

刀夜「いいだろー、この前でつかい戦いがあつたばかりなんだ。少しくらい怠けたって罰は当たんねえよ」

大輝「だからといって本殿の前でねっころがるのはどうかと思うが……まあ今更か」

刀夜という男がどんな人物か良く分かっているからか、それ以上の小言は口にはせず溜め息を吐く大輝。

大輝「で、アマテラスドライバーに選ばれた彼女……元伊達政宗君は何処に行ったんだい？」

刀夜「ん？あー……何か、この世界を見て回って来るとか言っつてさつき出でつたな。なんでも「戦いやすい場所、戦い難そうな場所を事前に下見しておく必要がある」とか何とか……」

大輝「……流石は元武将か……君も少しは彼女を見習って、ベルトの後継者としてもっと自覚したらどうだい？」

刀夜「俺はこれでいいんだよ。アイツみたく常時気を張っていると、いざって時に使いもんにならなくなるからな……っつか、お前もいつまでいる気だよ？言っとくが、アマテラスドライバーはもう霧之のもんだから掠め取っても意味ねえぞ」

大輝「そんなつもりは毛頭ないよ、アレは財団に対抗するのに貴重な力だからね……だからこそ、彼女にはきちんと使いこなしてもらわなければ困る」

肩を竦めながらそう言うと、大輝は腕時計の時間を確かめ、壁から背を離してゆっくりと歩き出した。

大輝「じゃ、そろそろ師匠達が別件から戻って来る頃だし、俺はそろそろ行くよ。……また機会があれば会おう、アマツ君？」

刀夜「出来ればそんな日が来ない事を祈りたいが……お前さんも達者でな、怪盗」

気怠げに手を上げる刀夜を背に、目の前に現れた歪みの壁を通ってまた次の世界を越える大輝。そしてそれを気配で感じ取りながら、刀

夜はヒビキが呼びに来るまで二度寝を決め込む事にするのだった。



―アマツの世界・森―

同時刻、アマツの世界の町を一望出来る程の高台の森。其処には、町を下見して回っていた霧之が風で髪を揺らしながら町を見下ろす姿があった。

霧之（……此処が……私が戦う場所……私の、新しい世界……）

ポケットに手をつ突っ込み、取り出したのは固まった血がこびりついたデイケイドのカード。財団が襲撃したあの夜、武者デイケイドが自分を逃がす際に手渡した形見であり、霧之はそれを手に握り締めて瞼を伏せる。

霧之（この世界で、私は戦い続ける……草薙霧之として、アマテラスとして……皆……デイケイド……どうか、見守っていて……）

カードを胸に当て、心の内で死んだ皆にそう決意して瞼を開き、霧之は踵を返して歩き出す。

新しい世界、新たな戦場で、財団を討つその日まで、戦い続ける事を誓って……。



オマケ

— 光写真館 —

零「——おい、シャドー……」

シャドー『む、何だ?』

零「何だ、じゃない……何だ、この馬鹿みたいに山のような本が入った段ボールの数々は……?」

シャドー『うむ、戦国世界の長秀殿からお主に届けて欲しいと頼まれたものでな。軍略や政略、礼式に戦国世界の歴史、家系図……織田信長の旦那として恥ずかしくないように覚えて頂く、資料の一式らしい』

零「……十……三十……五十……百……え……え?こんな、につ……?」

シャドー『これでも一部だそうだ。これ全てを覚えたら、また次を送るとのコトでゴザル』

「……………」

零

後日、シャドーの手により戦国世界の長秀から百冊を超える古文書が段ボールの山で届けられ、その絶望的な数に零は言葉を失いテーブルにダンツ!と頭を打ち付けていたのであった。



仮面ライダー×仮面ライダー  
デイクライド&ツヴァイ  
NOVE  
L大戦E v o l e E N D